

〔表紙〕

齊彬公史料

嘉永四年

〔扉に表紙の文字の外に、「元国事鞅掌史料(紙数二十六枚)」の記載あり〕

目録

常平倉創設並御書取付事実

貧窮ノ輩江金子恵与シ玉ヒシ事実

風俗矯正酒会勝負事等ヲ禁シ玉フ

質素節儉並衣服ノ制度ヲ立ラル

以上四条

二三三 常平倉創設並御書取付事実

常平倉御創設之発令ハ、嘉永四年辛亥十月二十日ヲ以布達セラレタリ、左ノ如シ、

近年天災旁ニテ凶作打続き、諸人及困窮、当夏ニ至リ候てハ、米穀格外高直之上払底ニ及候処より、御救米並拝借米等を以て七八月中旬御度、当難相凌候儀は一統承知之通ニ候、然る処当年ハ諸作共豊熟致し、ケ様之年柄打続候儀も無之候ニ付、以後凶作等之節為御救助、給地高等より御買入米被仰付御困置、凶年之節下料ニ申受可被仰付則常、乍去当年迄ニテハ引足兼候ニ付、以来豊作之節は同様ニテ、御困米可被仰付旨、御沙汰被為在、誠ニ以 御仁恵之 御趣意、一統難有謹て可奉承知候、左候て仕向之儀左之通被仰付候、

一 御買上ケ米之儀、給地高現取納米拾石以上相受取候者ハ、御城下諸郷迄も、現米壹石ニ付真米真米トハ安米ノ方前則糴米ナリ式升宛、拾石ニハ真米式斗之割を以取納、石高二応し困置、其届当十二月二十日辛亥十二月二十日限高奉行江可申出候、
高奉行ノ職掌ハ、給地高則チ御一門四家ヲ初メ、大身分及ヒ密合・小藩・新藩・御小姓組与方及神社・仏寺等ノ所領高四拾九万余石ニ糴ル出米ノ納取ヲ掌リ、而シテ納取後出納ノ一切ニ關シタル事ヲ担任ス、○出米又ハ概合万トモ唱ヘタリ、今ニシテ文字ヲ付スレハ、協有米ト唱フル性質ニシテ、之ヲ任用スルニハ、第一軍役ニ糴ル資トシ、或ハ江戸・大坂・京都其他出役ノ旅費・賄料等ニ仕付セリ、茲ヲ以テ役人ノ旅行等ニ区分アリ、協同ノ性質ナル者ニハ、高奉行カ券書ヲ以テ

仕払、或ハ御物方ノ仕払ト唱フルモノハ、藩庫收納ノ三拾余万石ノ内ヨリ仕払ス、之ヲ御物方トス、又御手許ニ關スル事ハ、物奉行ヲ券書以テ支出シ、而シテ後返米銀現結ト唱へ、御手許御料給式万石内ヨリ出入ノ計算ヲナセリ、詳ナルハ旧邦秘録ニ配ス

一 現米拾石以下取納之者、壹石ニ付真米壹升五合宛困置、其届前条同断可申出候、但現米壹石以下取納之者ハ不及卍米候、

一 御役料高之儀も、給地高同様に仰付候、御役料高トハ、御城代奉職中ノ役糧ナリ、御城代ハ貳千石、御家老十石、若年寄三百石、大自附二百石、寺社奉行・御勘定奉行・大番頭百九十石、御小姓百番頭百拾石、御御用人・表御用人・御軍役奉行百二十石、御御役、町奉行九十石ノ定規ナリ、納額ハ給地高ト同シク、軍役出米等モ異ナルコトナシ、納額ハ、草高壹石凡ノ三物成リノ定規ナリト雖トモ、出米ヲ引去レハ四ツ物成リニ当ル、○石高納額ノ制度ハ旧邦秘録ニ詳記ス

一 諸郷一統作得米、作得米トハ、諸郷土著土ノ郷有高、一名自作高ト唱へ、出来ト唱フル課出米ハ、城上土所有高ト同額ナリ、然レトモ自耕ノ性質ナル、カ故作得ハ城下土所有高ヨリ多額ナリ、自耕高ナル故之ヲ作得米ト通唱セリ之儀も、壹石ニ付真米壹升宛、右同断困置、其届前条同断可申出候、

一 定代出米外過米申受分を以て置付、亦は知行場所最寄御蔵江相納、右を以て困ひ度存候者ハ、其通可被仰付候間、成行届可申出候、出米トハ、給地高納石三十九升五合宛、高場所

壹合ハ、軍役又ハ江戸其外ハ旅費、或ハ兵器薬製造等ノ用ニシテ課出シ、壹升壹合ハ給地高地ノ水利修繕費等ナリ、之ヲ概シテ出米又カナリ、右ノ内ハ所々高額ト納分トノ總計ヲ高奉行ニ於テ計算シ、過額ハ高主へ返戻スルノ規則ナリ、因テ高主ト義人ト儀シ、遠隔ノ高地ハ農人ノ便宜ヲ謀リ、高主へ納分共悉皆出物蔵ハ納メ、而シテ高奉行へ計算返戻ヲ乞フ者モアリナリ、之レヲ此ノ冊米分ヲ置キ付云々ト合セララル者ナリ

一 御蔵取納之儀、厚 思召を以て御買上之事候間、御趣

意之程下代蔵役人分て奉汲受、人々迷惑不相成様致取扱、掛役々ニも精々氣を付可致下知候、且米直段之儀、

掛役々相当之所深く致吟味、御趣法掛御用人江可申出候、且払渡之儀も、困窮小高之者は、可成早目ニ代料可被相渡候間、其通可致取扱候、錢等出入ヨ當ル役人ヨ云フ、下代

ノ名唱ハ其罷談ノ内テ起リシテ詳ニセス、此役職ハ毎年八月朔日ヲ以テ、新古交替ノ規定ナリ、或保ノ末年ヨリ附屬ト唱へ、其役職ヲ充實スルコト、ナリテヨリ、其弊害種々百端奉テ謂ヒ難シク、罪辟ニ罹リシモノモ往々弊カラス、故ニ其弊ヲ戒メラレシモノナリ

一 以来豊熟之年柄御買上米被仰付候節は、前文之振合を以て、御買上ケ之上御困被仰付候、尤も豊凶之形行ハ初秋より相分る事候半も、取収方之儀重出米之向を以て、御蔵取納被仰付候、重出米トハ、前記ノ如ク草高壹石ニ付九升式合リナリ、是ハ任命ニアラス、御蔵方ニ於テ非常ノ經費アルニ當リテ、高持中ヨリ懇請シテ、課出セシモノナリ、近クハ天保九年戊辰年江戸丸焼亡ノ節、拾万兩ノ際ハ五万兩余ヲ献セラレタリ、其節度高持中重出米ヲ納メ、御補充請願シタリ、三升宛ヲ課納セリ、旧邦秘録ニ詳記ス、其後ノ二回ハ

右之通被仰付候条、此旨可承向々江不洩様早々申渡、諸郷・私領江も可申渡候、

十月廿

豊後島津

石見尾津

伊織樺山

近江米川
久辛

此ノ布令ヲ常平倉御創設ノ初トス、素ヨリ一統ノ困弊救
助ノ仁恤ニ出タルヲ以テ、一般御恩徳感佩セルコトタト
ヨルニモノナシ、○新古米年々囲替ノ布令左ノ如シ、

御買上ケ米之儀、御蔵米御蔵米トハ藩庫
收入米ヲ云フとハ相替候ニ付、

御買上ケ之上は諸弘米ニ振向、右石数丈御蔵米を以て
繰替囲置、年々新米を以て囲替被仰付候、尤作得米も

同様被仰付候条、可承向々へ可申渡候、

十月

豊後天香頭兼用心
取次嶋津要人

御蔵米トハ、軍高三拾余万石ノ納額ニシテ、
現米凡ノ八万石余ヲ云フ此ノ令ハ便宜ヲ計
リテ凡ノ特ナレハナリ

右通布達セラレ、則チ嘉永四年辛亥ノ秋納ヨリ買上ケヲ

初メラレタリ、其米額凡ソ八千石ニ余レリト云フ、代金

ハ別途御手許御内用金ヨリ出サレ、壹石代拾五貫文宛ノ

御買上ニデ、時価ヨリ凡ソ壹貫四五百文ノ高価ナリシ故、

衆人恩恵ヲ蒙レリ、○常平倉設置ノ御趣意御親書、嘉永

五壬子正月四日発布セラレタリ、左ノ如シ、

去秋より給地高米等御買入ニテ、御囲米被 仰付候

御趣意、専常平倉之意味合を以、右通被 仰付置候儀ニ

付、御趣意分明奉承知候様、御別冊之通御書取被遊、

御下ケ候条、掛役々初一統致拜見、御深慮之趣可奉承

知、勿論御趣法掛御側御用人並郡奉行ニは受持之御役
場ニ候間、猶又 御趣意ニ基キ無手拔取計候様被 仰
出候、

但御別冊之儀は写取、下々之者たり共拜見不苦候、

右之通段々被 仰出候 御深慮之趣、誠以難有御事共

ニ候条、一統謹て可奉承知候、於諸向も何篇懸心頭、

御仁恵之 御趣意ニ基キ廉直ニ致取扱、聊取違之儀有

之間敷候、末々迄も一統不洩様手堅可被申渡候、此旨

向々江致通達、諸郷・私領江も可申渡候、

正月四日

豊後 久

多門 通久

石見 浮久

伊織 成久

近江 平久

常平倉大意並愚考

一常平の法は、前漢の宣帝のとき、耿壽昌と云へる人、

建議せしより始りし事にて、其仕向は、穀賤キ時ハ増

価而糶シ、貴キ時ハ減価而糶スとて、豊熟のとし、米

価下直なれば、諸士農民の米穀を以て世を渡るもの、

不勝手なる時直段を増して倉に買入置き、また高直な

るときは、無祿の諸士或は職人市中浦々の面々困窮を
 ます異本、ヲ、其時前に買入置たる米を、時の相場より
 引下げ、売出して万人都合よき程の価になす、是を常
 平法と云ひ、困置く倉を常平倉と名付しなり、其後も
 晋・唐・宋其外代々の天子、此法に基き常平の法を用
 ひ、諸人の便利なりし由、然るにいつも世の末に至り
 ては、宋の王安石といへる人の考にて、青苗の法とい
 へるを立しごとく、当座の便利よきとて深き遠慮もな
 く常平の法を止め、利口にまかせて法を立しより、天
 下の争乱を引出したる事数々有しと見得たり、又
 我朝にても、常平倉を置れしこと国史の中ニ毎々見得
 たり、是も中頃より藤原氏天下の権を専らにして、上
 奢り下苦て自然と其法もすたれ、終には保元・平治の
 逆乱にも及び、

王室衰へたり、且また右の仕向を常平と名付しハ、漢
 よりはしまりたれと、其以前も同様の法有りしとみえ
 て、管子といへる書に、米価高き時には上より売弘め
 て価の下る様になし、下直に過れハ上に買しめて直段
 を増すといふことあり、又戦國の時、魏の李悝か説に
 ハ、豊年に大中小の差別を定めて買入米の多少を分ち、

又凶年にも大中小ありて売米の多少あり、たとへは大
 凶年の時に、大豊年に買入たる斛數程を売出すと也、
 されハ耿壽昌か常平倉は、これらの説に基たるもの
 で大抵同じ意なり、此法よく行ふときは、上下の便利
 よく、諸人の大幸となるべき也、

常平の起本は、大凡前文之通なれとも、只今にても取
 起すにハ國の高頭人体に応し、売買の斛數、米価の高
 下迄も時と位を考へ定むべき事にて、右体之事は何に
 よらす能々古法の意味を汲取、其成法に拘ハるべから
 ざること勿論にて、此事にあつかる人々、能々前文之
 訳を會得して、其風土時節相応の処を評議の上、手拔
 なく取あつかハざれハ、死物となりて折角の良法もか
 へつて害となるべきなり、夫に反して、能く常平の法
 行はるゝときは、國中の便利たること疑ふべからず、
 されは米価の位は、当務の人々の吟味すべきことにて、
 委しく記すに及はねとも、常平の仕向増減、売買の次
 第を知りやすからしめむか為に、例を挙ること左のと
 し、

先つ中年、世上の米価を一石にて十貫文と定めたる賦
 にて、

納米十石 代錢百貫文

同 百石 同 千貫文

右之通に、中年ならば此度のことく辛亥年初テ御買入ヲ云フ少しの割を加へ、中年の価相應に買入置き、引つゝき毎年同様の出来ならば、幾年も其通りにて、年々に斛数かさみ貯へ置へし、尤新古米入替等は見計ふべし、其うち格別の豊熟にて直段相減し、

納米十石 代錢八十貫文

同 百石 同 八百貫文

右之通り下直になりて、小知行または糴計の作得にて渡世するもの共、難渋する事もあらは、中年買入の斛数は勿論、別段相嵩み買入るべし、其直段を増すの次第左のことし、

納米十石 代錢八十五貫文より九十貫文位迄

同 百石 同 八百五十貫文より九百貫文位迄

右之通仕向にて、増価而糴といふ本文の意味に合ふべきなり、是又引続き豊熟にて米価下落し、諸人困窮之節は、買入之穀数を増し、上下よき程の米価に相成候様、幾年も右之通の仕向たるべし、万一^一天災かた〜にて、年からあしく米価高くして、

納米十石 代錢百二十貫文

同 百石 同 千二百貫文

右之通高直にして、諸人困窮する時は、貯へ置たる米穀を下直に売出して窮民を救べし、

納米十石 代錢九十貫文より百貫文位迄

同 百石 同 九百貫文より千貫文位迄

右之仕向にて、減価而糴といへる本文に叶ふべし、但し増減の次第、豊年・凶年共に、中年の価に売買を定めたる時に平等の様なれと、豊年に不勝手と云ふハ、知行にても作得にても所持する者にて、凶年に困窮する衣食住不如意のものには競へかたけれハ、其心得にて増すことは少く、減することは多くすべき事当然たるべし、

一前文に述ることく、^一米の斛数は、国々の高頭人体に^一応する事なれとも、^一是また大略の員数を定めて、年々に相かさむべき例を挙ること左のことし、

一現米十萬石之高頭にて、一石ニ付二升宛買入、凡二千石の^一米に相成候、

初年^一米 二千石

二年^一同 四千石

三年同 六千石

四年同 八千石

五年同 一万石

右を中年大概之賦にして、此外ニも其時之都合にて、買入れを望む人あらは、作得米をも分限に応し買入れ遣ベシ、尤豊熟の年には、猶更斛数を増し買入べし、其内不幸にして凶年ありとも、掛りの役々心を尽し、困窮を恤む心しんせつならは、仮令右の冊米にて、食を足すまでには至らずとも、米価のみたりに増長する勢ひを抑ふるにはたりぬべきか、いつれの筋にても、能々古の法に基き、当時の時せいを考へ、斟酌して此善政を成就なすへき也、行はるゝも行はれざるも、役々の心を用ゆると用ひざるによるべし、

一 歴代の常平倉、辺郡諸方ニ造立せしと見得たり、是また人夫の費勞をはぶく専要の事なるべし、何国にても此仕向專一なり、譬へは、大村は一村ニ一ヶ所、小村は一ニヶ村組合たるべし、諸郷蔵々出物蔵等之うちに、株分けにて冊置も然るべきか、さてまた城下を離るゝ遠き諸郷に至りては、事の弁利よからず、冊米買入等聚斂の様に思ふ人々も有べきなれば、地頭・郡奉行其

外より幾重にも申論し、此常平の法は全く諸人の難儀を救ふためにて、聊も聚斂の意には有らずといふ事をしらしめて、未々まで承知いたさせ買入へし、左もなくて掛りの下役等、若も心得違ひ、作得米など無理に催促する如きことありては、大に諸民の苦となるべきなり、城下にては同様、万々一役人中心得薄き族ありて、右の冊米して常平の取扱するまでと心得違ひ、諸色売買の高下等、取締向等閑にいたし置く事あらは、諸人の難儀は勿論、豪富の面々并奸商の輩は、手数を尽し諸方より買集め、万人の困窮をかへり見す、利潤をのみ考へる習俗終に一変すべき様なし、されは常平の良法は企置とも、冊米相當み、直段等の増減心の俥に取捌く事は、数年の後にあらざれハ十分には叶たきことなれば、夫までのうちに少々の水旱などにて、格別に米価を増さんもはかるべからず、然る時は折角の仁政の条目は定りながら、国民実に恩恵を蒙るには至るべからず、惜むべき事ならずや、仍て常平の一儀規定の上は、役人中別して正路を守り、油断なく商賈（與本売ノ字ニ作ル）奸計を察し、嚴重に憲法の仕向を設くべき事第一の専務なり、

一前文に述たる奸商を禁絶する事ハ、今の時にては常平法第一の急務なり、彼等は本より金錢の利のみを謀る事なれハ、上より憲法を設るときハ、猶また臨機応変に邪智を廻し、権家に取入り、奸計を逞ふする事、昔よりためし多ければハ、既にニ微シテ罰せラルベシナリ、其既住ノ事ニ就テニテヲ等シ、文化文政ノ傾一般ノ風潮ト共ニ翻覆ニ流レ、衣食住ハ素ヨリ花美ニシテ、経費夥シキカ故、藩庫ハ非常ノ困弊ニ墮ルベシナリ、モスルコト能ハサルニ迫リタル故、國老川上久馬、尋テ國所笑左衛門ナル者カ収斂ノ施設ナリシハ、恐ナク人ノ知ルカ如シ、從テ奸商等ハ其弊ニ付ケ込シテ、賄賂苞苴公然トシテ至リ、御將筋トカ御利益トカ種々様々ノ口實ヲ設ケ、私利ヲ謀リタルカ故、遂ニ民怒トナリタリ、公ハ是等ノ事ヲ御部屋柄ノ内ヨリ探知セラレタル故、茲ニ斯ク罰誅、役人中油断の事ありてハ、常平倉も有て無かことくなるべし、扱また米穀は他物と違ひ、人力馬足又は船を借らすしては運ハるゝものにあらず、それを米価下直に過れハ、他國に抜米の掛念有るなど云ふ事、船改の行とゞかざる故か、又は奸商ともにたぶらかされ、不束の取締して、抜米有ての事か、いづれにも尤の議論とは思はれぬなり、是も商人共の奸計にて、右様當時米商等類リニ流弊ヲナシ、抜米アリナト、の虚説言ふらしめ、米価を下げざる様ニと計りもししれず、若また是迄抜米ナラ故、年々四五六、三ヶ月間ニハ八底、人民困乏スルカ故、西肥筑三四國ヨリ商人等カ輸入シテ國用充ルノ留價ナリ、從テ高価トナルハ、毎艘稍高シ故ニ、三月比ヨリ高價ノ声ヲ呼ビ、三月高價、四五六底ト通稱セリ、如此ノ留價ナル故、奸商等ハ恣更ト意ヲ通シ、藏米拵下ヲナシ、國因又ハ天章辺ニ売出シテ大利ヲ得タル者住タシカラス、中ニモ流弊殊妙難言先ヲ開キシヨリ、買

上ケノ代價ハ専ラ米・大豆等ナリ、故ニ官立ニ關係ノ商人ヲ肥筑又ハ下ノ關辺ニ派遣シ、買取ラシメ輸入セリ、如此ノ專賣ナル故、邦内下直或ハ故ニ藩庫ハ其奸商等ハ却テ國内ニ輸出シテ、邦内ノ高價ヲ謀ルコトアリタリ、故ニ藩庫ハ其取締ヲナセリ、之レヲ抜米取締ト唱へ、他領近接ノ各所ニ積目役ヲ派遣シテ監査セリ、其弊ヲ懲戒シ玉ヒ斯ノ如ク記サレタル者ナリ、其弊ヲ懲戒シ玉ヒ斯ノ如ク記サレタル者ナリ、の事實ならハ、役々の無念通例の事にあらず、しかし今更論して益なき事なれば、以後の処能々吟味に及ふべし、固より奸計の工ミは時々品もかはるなれば、初めより定め置べきことハなししかたけれど、第一常平の仕向は、仁政にて、無執訳合なる事を委細に書記し、扱城下は諸番頭・諸物頭、市中は町奉行、諸郷は地頭・郡奉行・郷士年寄より津々浦々まで、抜めなく町噂に申聞候上、不正の手筋致すものは嚴科に行ふべき旨、得と言ひ諭さは、假令愚民奸商たりとも、十に八九は承服すべし、其うち不屈のものを犯さは、早く嚴科に行ふべし、小を殺して大を救ふの訳なれハ、少しも宥免の沙汰有べからず、たとへは扱売は極罪、直段の高下を成さんと不正をはかるものは其次、密々罫置は又次といふことと、明白にしめし置たきものなり、茲ニ嚴科ニ行フハシ小ヲ殺シテ大ヲ救フ云々、譬ヘハハ其次云々等ノ文ハ、甚タ嚴酷ニ過タルカ如シト雖、斯ク配サレタルハ抑モ深キ故アリテナリ、其概要ヲ記サムニ、文化・文政・天保ノ頃ハ世ノ風潮ト共ニ都鄙ノ別ナク花移ニ流レ、中ニモ諸大名ノ如キハ幕府ノ顯著ニ傲ヒタル故、經費夥多薄庫空乏負債積堆、三都債主ニ利私私ノ關ハサルニ立到リ、如何ントモスルコト能ワザリシ故、重豪公文化四五年御政事御介助トナリ、川上久馬ハ久秀ヲ登庸セラレ、理財ノ道ヲ謀リ玉ヒシニ、久馬ナル者ハ目前ノコトニ抱泥シ、遂ニ収斂ノ

掛圖ニ流シ民怒ヲ重シ退散シ、尋テ調所笑左衛門(広郷)因老ニ抜扱セラレ、財政委任ノ重キニ當リ、益収散ノ施行ニ陥リ、種々頓挫ノ行爲ヲ以テ迷ニハ売官ノ卑劣ヲモ行ヒ、從テ奸商等ハ藩吏ニ同類シ、或ハ俱ニ惡リテ利ヲ奸策ニ云フニ忍ビサルノ弊者ヲ顯出シ、士氣漸靡民怨シ、備スルニ忍ビサルヲ以テ、其弊者擧業ノ間ニ公卿家督アラセラルルニ、寛猛ノ御措置ナクハ、適々ノ良法善政モ行レル事慎アルカ故、斯ク爾輩ナル文字ヲ用ヒ玉ヒ、若シ前弊ヲ革メサルモノアレハ、小ヲ救シテ大ヲ救フノ文下サレタルニシテ、商賈ニ對シタル文下リ雖モ、其大小吏員ヲ嚴誡シ玉ヒシナリ、如此人心ノ驚散シタル実況ヲ知ラスシテ、單ニ此文章ヲ以テ見ルトキハ、甚タ陸ニ過キタル評ヲナス者アルヤ必セリ、當時有志者中ハ、至当ノ文下サレタリト實賞ニタルコトナリキ、是ヨリシテ姦吏奸商モ恐懼振刷シテ、惡策ヲ施スコト能ワス、民怒減チニ風散シ、尋常ノ良法モ能ク行ワレ、米價平準ヲ得、從テ物價モ安値トナリテ上下嚴戾人心種種、御政徳日二月ニ輝キタリ、○却説注陸廣當時二十年ノ節ニシテ、御城内御物館ニ事職中ナル故、日々公ノ御奉勅ヲモ察セ知ル処ナリ、又這ノ常平法ヲ調査シ玉フハ、二ノ丸構内浩然亭ト稱フル一細小茶平アリ、這所ニ備置タル安之亦云云ハ、者ヲ數十日間召出サル、和漢ノ書ニ換リテ調査セシメ玉ヘリ、公モ毎々親臨セラレ、横山ニ指揮セラレタルハ、広實等モ親シク見聞セル事実ナリ、這ノ浩然亭ト広實等カ勤務所トハ、僅ニ三十間モ隔タル一郭ナリキ

さてまた罪の軽重等、委細の吟味は大目付の任たるべし
 一 法度行はるゝ時にいたりて、大奸の輩は却て時をハ取締ハ取締敵ルトキハ、却テ密商シ易シト云ヘルコトアリ、唐物密売ハ殊更敵ナル時ヲ好機トセリ得て、奸計をめぐらし大利を考ふへけれハ、取しまりの手数は猶々嚴密たるべし、其仕向は津々浦々第一たるべし、番所をはしめ浦役のものとも、船出入の折々は穀物之員数逐一に改め、

國中往來の船も、双方より役々の改し証書引合せても然るべし、又他國への通船は出帆の節は勿論、帰國の節も改めて、船中の人数飯料算し見て、出帆のときあらためたる員数に引合せなば、抜米のことまづは叶ふ

ましきなり、又大船の中には、尋常の荷物飯料積込て、番所の改済の上、沖中又は夜中なとに小船にて密々に運漕して、他國へ売出もあるとニ、夜中小船ニテ積入ルノ悪計アル、之レヲ抑シ聞得たれハ、是また取締りの為壯年無役の郷士無役郷士云々、各郷士ノ長ニ二三男等、其郷内ノ諸役ニ就カサルヲなど、云フ。從來各郷ノ警戒、或ハ本文ノ如キ場合ニ仕役ニ例規ナリキ五人十人宛輪番にして、見廻りいたさせ、小船なりとも他村へ乗廻すにハ、浦役へ届出る様に定め、又船所持の者は最寄にて四五人宛組合を極め置き、万一抜米其外不正之手筋あらは、組中までも輕重の咎め申付然るべし、且また浦人末々のものゝ中にて正道成もの撰ひ置き、自然不正の手筋見及ひたるときハ、役々までも申出る様に命し、訴人へハ相應の褒美の品遣しても然るべし、先つ海辺浦々之取締りは、右のことく規定を成し、其上は役々吟味して取締りを成すべきなり、

將また城下は別して大商の集り居る処なれば、一入嚴密たるべし、表向改方大凡前文の振合にて、市中蔵々収置たる米穀は、凡の斛数調置事も然るべし、扱米価相増すべき様子の折々は、不意の改もすべし、其上時節定置き、春夏の比、武家市中有米困米の斛数武家市中米數數云々、武家トハ御一門四家ヲ初御目見以上ノ士分ヲ云フ、這ノ敵カ所有種高ノ収納米ハ、十月末ヨリ十二月初頃迄ニ下作人ヨリ納收シ、自己ノ倉庫ニ貯蓄

シ、價格ノ高直ヲ待テ売出シ、又市中在米トハ米商等カ秋末或ハ年末ニ例年米価下落ノ候ナル故、買占メテ高価ノ候ニ売出シ利ヲ得ムトス、故ニ貯蓄ノ米多シ、之ヲ調査セシメ申出させ然るべし、左あるときは常平倉直

段高下の考にも相成べし、さてまた米価高下の為、常

平米出入の節、一手に申請手廻シ能キ商人等一手払下ケ等ヲナシ、如ク致シ年来ノ積弊甚シカラン故、森吏好商ト結合シ一手ニ払下ケ、或ハ買上ケ等ノ愚弊アラムコトヲ予メ諷メ玉ヘルモノナリ數十年來如此ノ弊アリシハ枚舉ニ遍アラ、并ニ売上いたさずする事、奸商の悪計の媒なれ

ハ、平等に取計ふべし、申に及さる事ながら、此事に預る頭役は勿論、下役末々迄、人に先たち万事正路を心かけ、制令を守らざれば、何の法も行れかたきものなれハ能々心得べし、

右之通困米申付、常平の法取建候趣意は、近年追々諸色高直相成、城外并田舎迄も田舎迄モ云々、隣國日各郡鄉村、城下以外ヲ云フ及困窮候趣相見得、只今之内急度取救之趣法不取建候ては、

後年益困窮ニおよひ、凶年等之節、如何之困難到来も難計、且は文武之学問并風俗容貌に至るまで、困窮ニては志有之者も、今日の飢渴ニ被追、其儀も不相叶儀は眼前之事ニ候間、先ツ人命之為、第一此常平之法を設け、自然ニ万人之困窮を救候致根本度候間、前文之趣申聞候条、此上細事は役人中可及吟味、法は至て易候得共、其法を能取扱候人物は少きもの、由、古来よ

り申候間、折角入念候て、常平之可為常平様、取計專ニ一候、且又是迄万端申渡等、毎々有之候得共、兎

角最通兼候是迄万端ノ申渡等毎々有之云々、兎角最通兼云々、以前ヨリ種々ノ布令・訓諭等ノ類初メハ嚴ナルモ、後ニハ雲消霧散トモ云ヘクシテ永続セサルハ、畢竟國老ヲ初メ大小吏ニ其人ヲ得サルニ依レリ儀も有之哉とも聞得候二付、

此節は永久連続いたし候様急度申付候、掛り役々の儀も、人柄能々吟味之上、常平法取扱は勿論、遠郷迄も

趣意叮嚀に申論方行届候様有之度、將又拔米之儀は、前文ニも申述候ことく、以来嚴重取締勿論之事ニ候、

乍併心得違ひ之者有之、權威ニつものり、非道の取締いたし候ては、却て諸人之迷惑ニも相成候間、遠郷等取締申付候人柄は、別て能々吟味可有之候、此段掛り役

々末々迄、心得違無之様可申達候、以上、
嘉永五年正月しるす、

此御親書ハ、嘉永五年壬子正月四日御家老中へ渡シ玉ヒ、諸士其外一般へ布達セラレシニ、御仁恤ノ厚ヲ感戴シ、

僉人争フテ拜写セリ、而シテ正月月中旬ヨリ御買入ヲ開カレ、諸郷・私領へモ役々派出シ、榭目儀數ヲ改メ、御蔵々出物蔵等ニ納メタリ、御城下ハ出物蔵之郭内ニ板蔵ヲ新築シ、田込トナレリ、是ヨリシテ風旱・蝗ノ災アルモ飢餓ノ憂ナキノミナラス、非常ノ高価ニ騰ルノ患ナシト

安心シテ職掌稼業ヲ励ムニ至レリ、○本年ノ御買上米凡
 ツ八千五百余斛、其代価ハ御手元積金、又ハ大坂産物代
 ノ内ヨリ出サレタリ、実ニ前代未聞、至仁至恤ノ法方ナ
 リト衆人感戴セリ、○右ノ如ク辛亥ノ秋ヨリ癸丑ノ秋迄
 三ヶ年ハ、作得米ノ内ヨリモ買上トナレリ、幸ニシテ豊
 稔相応ノ石高蓄積トナリ、同七年甲寅ノ秋ヨリ、作得米
 ノ内ヨリノ買上ハ停メラレタリ、布達左ノ如シ、
 常平倉御買上米之儀、去年迄ニテ三ヶ年ノ間ハ、給地
 並作得米迄モ御買上被仰付候得共、当寅秋ヨリハ、給
 地ノ方計リ御買上、作得米ノ分は相止メ候様、尤モ此
 後不作等ニテ常平米払出シ乏シキ節は、又候様子ニヨ
 リ作得米御買上モ可被仰付候、左候テ作得米御買上望
 候テ願出候者有之分は、来卯年迄は御買入可被仰付段
 被 仰出候条、此旨向々へ不洩様申渡、諸郷・私領へ
 モ可申渡候、

五月十一日

豊後

右布達之如ク、三ヶ年間買上米ノ惣額三万余斛ニ及ヘリ、
 因テ給地高ノミノ買上ニ減セラレタリ、是ヨリシテ米価
 下落セシノミナラス、欠乏ノ患モナク、一般鼓腹ノ有様
 トハナレリ、其後安政四年丁巳ノ秋迄連々買上ラレ、同

五年戊午七月御逝去後停止セラレ、剩へ常平倉ノ設サへ
 廃弛トナレリ、実ニ其人存セサレハ其事亡ト、宜ナル哉、

二三 貧窮ノ輩江金子恵与シ玉ヒシ事実

嘉永四年辛亥十二月、貧困ノ輩へ金子彦両宛恵与セラレ
 タリ、御達書之趣ニ、当春以来米価高直困窮ノ者共難渋
 致シ、殊ニ寒冷ノ砌、且年末旁御不憫ニ被 思召、不取
 致金彦両宛御手許金ヨリ頂戴被 仰付候トノ趣ナリキ、
 而シテ廿八九兩日間ニ小組頭ヨリ各拝受セリ、何レモ思
 ヒ寄ラサル事ニテ、愕然感戴セリ、其人員凡ソ二千余戸
 ニ及ヒタリ、夏分ニハ米穀ノ御恩恤アリ配前ニ、加之年末
 又ハ寒冷ノ苦困ヲ憫察シ玉ヒタル御仁慈之程、一般感戴
 ノ声街衢ニ喧シト云フモ誣言ニアラサリキ、

二三四 風俗矯正酒会勝負事等ヲ禁シ玉フ

大小身共、夫々分限ニ応シ勸弁を加へ、質素節儉を用
 ひ、就中小身小祿之者共は、程々之心得を以致省略、
 無益之酒会等致間敷、譬無拋祝事たりとも、勝負事は

堅被差留候旨、去る申年

(青奥)

宰相様被仰出候通、兎角程

過候得は為緩成立、至此頃間には無益之酒会相企、勝負事取はやし候哉に相聞得、右通にては厚恩召之程も令忘却、不埒之至候、右に付ては、夫々可被為在御沙

汰事に候得共、此節迄は御宥免被召加候に付、向後無益之酒会取企、勝負事等屹と被差留候条、乍此上不埒之族も候は、御取扱可被仰付候間、取締向大目附専ら氣を付候様、分て可申渡旨被仰出候、

右通被仰出、誠に以奉恐入事共に候、此上万一も取違之儀共有之候ては、我々不取締之筋にも相当り、申訳も無之事候条被仰出之御趣意、難有奉承知堅可相守候、見聞をも掛置候に付、不守之者は屹度可及迷惑候、

十一月^日

豊後

文化・文政・天保ノ頃ハ、極盛至治ノ世ニシテ、上下共ニ花美驕耽ニ耽リ、風俗頹敗阿媚面諛シテ、権門ニ出入スルヲ以テ榮トスルカ如キ風習ナリシ故、齊興公厚ク訓誡セラレタリ、中ニモ酒食ノ会ヲ禁シ、或ハ勝負事ヲ禁絶セラレタリ、勝負事トハ則チ方言ナシ、或ハケン等ノ勝敗ヲ以テ暴飲スルヲ云フ、実ニ野蕃ノ風習ニシテ、是カ為メ遂ニハ身体衰弱、命ヲ殞スルモノ往々寡カラス、

中ニモ御家老座筆者ノ如キハ、諺ニ酒吞ノ稽古ヲ第一トスト云フ程ノ風習ナリキ、從テ各局モ之レニ習テ暴飲ヲ榮トシ、誰某ハ幾干ヲ呑ムト互ニ誇ルニ至レリ、茲ヲ以テ如此嚴禁セラレタリ、

二二五 質素節儉並衣服ノ制度ヲ立ラル

一弘化之度、

(青奥)

宰相様より分て被仰渡候奥向出入奥トハ御并酒会等之儀

程過候得は緩セニ成立候間、以後急度可相守、奥向中も用向之外無用之参会可相慎候、万事弘化之度被

仰出候御規定通可相守候、

一天明之度被

仰出候重葦、弓鉄炮稽古之節勝負取企候儀、第一風俗

ニ相拘候間可相慎候、近頃鉄炮玉取等相企、其中ニは当日不参之者、過玉とか過玉トハ、出席不参ノ儀ニ鉛彈幾干ヲ出スラ云フ名付差出候

向も有之哉ニ相聞得候、稽古勸之為ニは候得共、心得違之者は、右之為ニ致出席、射前等は不及吟味、中りをのみ好ミ候風俗ニ相成候ては、修行之本意を失ひ、第一風俗ニ障り候条、屹と可相慎候、向後は文武之修

行真実ニ可心得候異本心掛トアリ

一衣裳之品、折角節儉可相用、縮緬・羽二重等は、先つ

ハ可為無用、紬太織・西洋布西洋布一名金ナ巾、近年長崎又ハ薩球國ヨリ輸入多シ、中ニモ琉入カ持

致ノ品、一着分ノ代価五六匁内外ナリ、今ノ金價ニシテ凡五六拾銭ニ相当ス、貴賤共ニ服料ニ用ヒタリ

木綿類之内、成丈麩服可相用候、尤是迄相

用候分無用ニ相成候ては可為迷惑候間、平日は何品ニ

ても持合之品着用不苦、朔・望・二十八日朔・望・二十八日ト通

日ト通、其外急度立候節は麩服可相用候、江戸ニ於ても同

様、客来等之節も、麩服可相用、肩衣・袴等も右ニ準

し麩品可相用、尤拜領紋服は拜領紋服トハ御領向ノ人々へ別段

之事ニ候、

右之通心得違無之様可相守、奥向勤之儀は、表方見当

ニも相成候間、猶更可相慎候、且又衣裳之儀、夏冬共

同断ニて、夏服も冬服ニ準し着用可有之候、絹服平日

着用之儀も、来る寅年十二月限り可相心得にて、以

來可致出来候、將又此度麩服之儀分て申達候付ては、迷

惑之面々も可有之候間、服用之品、奥向之者江遣候間、

趣意厚汲受、心得違無之様可申付候事、

(嘉永五年) 四月七日

豊後

御家老添書同文意故ニ略ス、

役員ニ奥表ノ區別シタルハ、其年月ヲ詳ニセスト雖トモ、

蓋シ安永ノ中頃ナラム、奥向トハ御近習ヲ云フ、中ニモ

文化五六年ノ頃、秩父某等カ事件後、殊ニ其區別嚴ナル

ニ至レリ秩父某等カ明鏡ノ始末ハ別巻ニ記ス

近代上下共ニ花奢ノ風漸ク甚シク、中ニモ御近習奉職ノ

者ハ不相応ノ美服ヲ用ヒ、百事驕侈ニ募リ、夫レカ為身

代衰へ、遂ニハ廉恥ヲ破リシ者モ少カラス、其余弊一般

ニ及ホシタルカ故、如此嚴令ヲ下サレタル者ナリ、右通

年限ヲ定メラレタルカ故、持合ノ人ハ羽二重・縮緬服ヲ

平日着シ、或ハ宅内ノ常服ニ用ルコトナリタリ、登城

又ハ礼服ニハ御家老ヲ初メ棉服ヲ用ヒ、御自ラモ棉衣ヲ

召サレ、如何ニモ質朴儉素ノ風ニ変シタリ、偏ニ御自

ラ勤儉ヲ守ラレタルカ故、貴賤男女麩服セルヲ貴フノ風

習トハナレリ、

〔表紙〕

齊彬公史料

市來四郎編

嘉永五年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料（紙数六十枚）」の記載あり〕

嘉永五年壬子清曆咸豐二年
西曆千八百五十二年

神武天皇御即位紀元二千五百十二年

孝明天皇統仁第百二十代御即位弘化四年
未九月六年二十

將軍家慶公第十襲職
天保八年西九月十四年十五

藩主齊彬公第二十八世當時
薩摩守ト称ス知政嘉永四年
辛亥二月二年実四十三
八十四

藩祖忠久公繼嗣日三州及薩球國受封（人皇八十二代
後鳥羽天皇壽永五年即チ文治二年）六百六十七年

関白太政大臣

鷹司政通公

左大臣 九條尚忠公

右大臣 近衛忠熙公

内大臣 鷹司輔熙公〔福山藩主〕

老中 阿部伊勢守正弘〔長岡藩主〕

牧野備前守忠雅〔西尾藩主〕

松平和泉守乘全〔上田藩主〕

松平伊賀守忠優〔関宿藩主〕

久世大和守廣周〔飯山藩主〕

本多豊後守助賢〔岩槻藩主〕七月

大岡主膳正忠固〔泉藩主〕

本多越中守忠徳〔三上藩主〕

遠藤但馬守胤統〔高倉藩主〕

本庄伊勢守道貫〔小幡藩主〕

松平玄蕃頭忠恵〔生実藩主〕

森川出羽守俊民〔龜野藩主〕

脇坂淡路守安宅

所司代 京都町奉行

水野下総守重明二月

河野對馬守通訓

淺野中務少輔長祚

伏見奉行

内藤豊後守正繩

国老

○島津石見久浮

○島津豊後久寶

○島津將曹久徳

○末川近江久平

○喜入安房久通

樺山伊織久成

新納駿河久仰

鎌田出雲正純

島津左衛門久徹

島津伯耆久福

島津登久包

以上十一名、前代ヨリ
勅統ノ者ハ〇印ヲ付ス

目録

総覽

参考 江田平藏日記抄

ムトベ
六人部是香建言

参考 諏訪兼武在琉中日記抄(吏員ノ風俗矯正ノ一端)

西郷隆盛カ墓(疑問)

諸国人別改布令

江戸絵図改正諸家邸地調査布告

西丸焼亡諸大名惣登城布告

右大将家定公三十寿齡内大臣勅許

武州大森村ニ大砲射擲場取建

西丸造営省略云々布告

將軍代替朝鮮信使大坂迄來聘布告

新古金銀貨交換期月布令

唐物抜ケ荷取締布令

西丸造営地鎮祭云々布告

無益ノ植物盆栽類高価売買禁令

江戸邸在勤及ヒ定府ノ輩訓誡ノ御親書

参考 鎌田正純日記抄

左近衛權中將ニ御叙任

從四位上ニ昇進シ玉フ

御城下無祿小祿ノ諸士就農法關勇助・山口九十郎等へ取

調ヲ命シ玉フ(調査書前書)

考証 鎌出正純日記抄

常平倉創設ノ御趣意郡奉行訓諭書

高齡ノ士庶ニ祝品ヲ賜フ

御膝辺役員ニ衣服地布ヲ賜フ

府下各方限郷友交際ノ習慣上申

以上二十六条

二二六 総覽

嘉永五年壬子

正月

元日

五社御參詣、尋テ御一門四家及ヒ御家老以下御側向諸

役人年賀、奥御書院ニ於テ受ケ玉フ、先規ノ如シ、

二日

御一門四家及ヒ大身分其他諸士ノ年賀ヲ、御書院又ハ

御対面所ニ於テ受ケラル、先規ノ如シ、

三日

諸組与力諸郷士年寄等同シ、先規ノ如シ、

八日

南泉院及ヒ大雄山及ヒ壽國寺ニ詣シ玉フ、

九日

御放鷹式ヲ挙ケ玉フ、伊敷・原良・草牟田・西田ノ各

村ニ於テ鶴鷹數羽ヲ獲玉フ、

十日

福昌寺及ヒ惠燈院ノ先笠ニ詣シ玉フ、

十五日

若年寄樺山伊織(久成)ヲ御家老ニ親命セラレ、禄高千

石ヲ賜フ、本年七十七歳、○御納戸奉行橋口今彦(兼古)

ヲ御側役トシ、齊興公付トス、○御小納戸藥丸猪右衛

門ヲ同頭取ニ進メ玉フ、

十六日

御城代兼御家老島津豊後及ヒ御家老喜入多門・島津石

見・末川近江・樺山伊織ヲ御休息所ニ召シ、積年ノ勤

勞ヲ賞セラレ、各刀一腰ヲ賜フ、

十七日

御小姓御小納戸見習福崎七之丞ヲ御小納戸トス、

十八日

金五万貳千百両ヲ日光修造費ニ献シ玉フ(献納ノ事実後

卷ニ記ス)

十九日

谷山郷ニ御放鷹鶴二双ヲ獲玉フ、

二十二日

將軍家御使番曾根内匠ヲ以テ鶴一双ヲ賜フ(例規ニ因リ

テナリ)

二十八日

將軍家賜フ処ノ鮭魚ヲ、御一門四家及ヒ諸役人ニ分賜

シ玉フ、

二月

朔日

常平倉設立ノ令ヲ頒布シ玉フ(前卷ニ詳記ス)

二日

高三万石ヲ齊興公御隠居料ニ献シ玉フ、尋テ指宿・谷

山二郷ヲ御料地ニ充ラル(先規ノ概要及ヒ石高御代々多寡

ノ事由後卷ニ記ス)

七日

城内御兵具蔵ノ改造ヲ命シ玉フ(元禄焼亡ノ後扨トス)

二十一日

吉野原ニ御関狩ヲ催シ玉フ、旧式ニ則ラレ豊後從駕ス、

狩立人数惣督 御家老 島津石見(久浮)

監督

大目付

川上矢五大夫

(久運力)

一番組頭

菱刈奎之介

全

新納主税

全

島津藤馬

全

喜入壬

生撰
旧名

此人数千二百八十二名

五番組

末川久馬

全

島津隼人

全

川上右近

全

伊集院亘

此人数千二百四十八名

諸組与力二百八十八名

國分郷士千六百六十八名

阿多郷士七百五十五名

帖佐郷士七百十五名

串木野郷士千四百三十四名

櫻島郷士千六百一十一名

市來郷士千四百三十五名

踊郷士三百八十九名

蒲生郷士八百十八名

入來郷士三百六十三名

薩州吉田郷士五百九十五名

隅州山田郷士二百名

加治木郷士千二百五十二名

合計壹万四千六十三名

此日、公鹿十三頭ヲ銃殺シ玉フ、而シテ葛掛原ニ於テ

旧式ヲ行ハル(此日、公ノ御行装及ヒ関狩ノ源因ハ、御家史

其他旧乘ニ詳カナリ、茲ニ略ス)

晦日

島津周防(忠教、久光公旧名)ノ二男勝山右近久ヲ、島

津圖書中ノ養子トシ、忠治ト改ム(久光公第二子)

閏二月

朔日

御軍賦役田中清右衛門(綱繩)ヲ御納戸奉行、御軍役奉

行ヲ兼ネシム、

六日

島津下総ヲ江戸ニ遣シ、前ニ賜フ所ノ御鷹鶴ノ御礼使

トス(御知政ヲ祝シ賜フ、先規ノ如シ)

七日

磯邸ニ於テ桜花ノ宴ヲ、御一門四家及大身分ノ人々ニ

賜フ、

十二日

同邸ニ於テ国老・若年寄・大目附ニ賞花ノ宴ヲ賜フ、

十四日

史官二年中行事編集ヲ命セラル(御家法ヲ本トシ、幕府ノ

成規ニ折衷セシム)

二十六日

島津安藝(忠剛)ヲ磯邸ニ召シ、観花ノ讌ヲ開カル、尋

テ花瓶一個・金七千匹ヲ賜フ、忠剛ハ懸物(探幽)一對

ヲ献ス、

二十七日

御帰城途ニ祇園砲台ノ演習ヲ覽玉フ(百五十斤ノボムベ

カノン及二十四斤ノ新式カノン砲遠撃ヲ試ミ玉フ)

三月

四日

武技拔群ノ者四十八名ニ、布帛及ヒ金若干ヲ賜フ、

七日

騎シテ、吉野村ニ雉子打ヲ催シ玉フ、藤井綴喜カ別荘

(唐牧近傍)ニ御休息、此日鹿猪四頭ヲ獲玉フ、御帰路

磯邸ニ御一泊(二カ)、翌九日御帰城、途ニ下町砲台ノ演習ヲ

覽玉フ(改築砲台ノ射擲ヲ試玉フ)

十六日

騎シテ、伊集院苗代川ノ陶磁器製造ヲ覽玉ヒ、錦手焼ノ改良、及ヒ今里焼ヲ創ムヘキノ旨ヲ令シ玉フ、

十九日

島津下総江戸ニ到着ス、

同日勉学者十人ニ布帛及ヒ金若干ヲ賜フ、

二十五日

御小納戸早川務(兼照)ヲ御記録所ニ遣ハサレ、旧記実録取調ヲ命セラル、榎本新兵衛(貞啟)之ヲ奉ス(調査數年ニ亘リシ故、御逝去後半途ニ廢シタリト云フ、昨年御下國ノ途次、向田駅御滞在中新田宮御参拜、宮司權執印カ家藏ノ古文書御覽、其後御手許へ御取寄セ、御精覽ノ上複写スベキ旨ヲ命セラル)

二十八日

高齡ノ士庶ニ物ヲ賜フ、各差アリ(其人員男女三百余名ニ及ヒタリ、前記参照)

四月

英國船琉球ニ來リ、國書ヲ提出シタルノ報到ル(此年正月、首里城ニ入りテ提出シタリト、報告書後卷ニ記ス、〇ヘル

リー紀行参照スヘシ)

十四日

吉野村牧場ニ旧式ノ馬追ヲ覽玉フ、此日ノ御行装旧規ノ如シ、葛懸原ニ御棧敷ヲ構へ、騎士三百七十六騎牧馬ヲ馳驅スル等、尤盛況ナリキ(事由後卷ニ記ス)

十七日

御束帶、大雄山及ヒ南泉院ニ詣シ玉フ(將軍家忌辰ニ因テナリ、鹵簿正式御家老島津豊後屬從ス)

二十日

山田壯右衛門(為正)ヲシテ、御手許ニアル和漢書目錄ヲ史官ニ付セラレ、從來史局藏籍補欠ヲ令セラル、其數二万部ニ余レリト云、

二十八日

御勘定奉行新納内藏(久仰)ヲ、御軍役方惣頭取ヲ兼ネシム、

五月

朔日

鹿兒島田上村土上野藤太郎ナル者、出物藏(禄高二課スル米金貯藏ノ名)ヲ破リ、金千四百両(一步銀ノミ)ヲ盜ム、士民一般ニ就テ探索甚嚴ナリ、公之ヲ聞シ召シ、

無辜ノ士民ニ煩累ナカラシムヘキ旨ヲ訓示シ玉フ、僉人感戴ス(當時ノ形況後卷ニ記ス)

七日

磯邸ニ於テ、野村彦兵衛ニ命シテ、公御発明ノ棒火箭(落シ箭ト唱フ)ヲ試シメ玉フ、好結果ヲ奏ス(野村菰野流砲術師範タリ)

十一日

御兵具藏改築ノ上梁式ヲ行ハル、

二十二日

江戸西丸焼失ス(事實後卷ニ記ス)

二十八日

玉里邸御修造竣ル、齊興公御付ノ吏員、此日別局ヲ該邸ニ設立ス(調所広郷履歴ニ詳ナリ)

此日、典姫君(島津珍彦妻)城中ニ生ル、生母伊集院氏(須磨)

六月

二日

御本丸御馬場ニ於テ、洋式砲術師範成田正右衛門(正之)、及ヒ長男彦十郎(正封)、及ヒ門人数名ノ技ヲ覽玉フ、而シテ以來二・七ノ定日ヲ以テ、習練ヲ同所ニ

覽玉フヘキ旨、或洋書講習ヲモ命シ玉フ(事實後卷ニ詳記ス)

此日、琉球在番奉行島津登(久包)、琉球ヨリ還リ復命ス(琉球外国処分ノ部ニ詳記ス)

十日

小銃師範末川久馬(久長)・全郷原轉・種子島次郎右衛門(時習)・和田乗助ヲ磯邸ニ召サレ、其技ヲ覽玉ヒ、尋テ各小銃一個ヲ賜フ、這技近代和洋折衷セラレシ雷管機銃ナリ、尋テ謙ヲ賜フ(事實及ヒ當時ノ人情且ツ御訓諭後卷ニ詳記ス)

十三日

末川近江ヲ召シテ、洋式砲術研究スヘキ旨、或ハ古式ノ實用ニ適セサル旨親諭セラレ、成田正右衛門父子及ヒ門人田原直助・木脇嘉左衛門・岩下新之丞等ニ就テ学フヘシ云々ヲ親諭セラレシト云、

十八日

浄光明寺忠久公ノ神廟ヲ拝シ玉フ、

二十五日

成田正右衛門父子及ヒ田原・木脇等其他四十八名ヲ二ノ丸ニ召サレ、洋式銃隊及ヒ大砲訓練ヲナサシメ、或

ハ山野戦砲挽馬ヲ試シシメ玉ヒ、尚訓示セラレシ旨アリシト(山野戦砲挽馬法是ヨリ創ル)

七月

十八日

磯邸ニ騎行セラレ、後小舟ヲ以テ釣魚シ玉フ、

二十八日

御家老喜入多門、末川近江ニ代リ御軍役方ヲ兼ネシム、

二十九日

六組与頭及ヒ当番頭・詰衆ヲ磯邸ニ召シ、洋式銃陣ヲ習ハシメ玉フ、其人員四十余人、而シテ隊長タルノ任云々親命シ玉ヘリ、

八月

朔日

御帰城佳儀ノ拝賀ヲ受ケ玉フ、先規ノ如シ、

六日

天保山ニ於テ六組人員大操練ヲ覽玉フ、其中九百人ヲ分隊シテ、一隊四十八人トシ、隊長百八人・組頭十八人・掌旗者十八人、大砲十二門、砲手八十四人、大番頭二人之ニ将タリ、之ヲ洋式折衷ハタイロンノ初トス

(事實及ヒ図式後巻ニ詳記ス)

九日

御参府御首途式ヲ諏訪・祇園ノ二社ニ行ヒ玉フ、旧規ノ如シ、末川近江從駕ス、旧例ノ如ク祇園社前ヨリ御乗舟、鉦鼓ヲ鳴ラシ、船謡等旧式ノ如シ、出物蔵海岸ヨリ御上陸、帰城シ玉フ、

十四日

軍賦人形立ノ式ヲ、犬追物場ニ覽玉フ(改正ノ軍賦ニ依レリ)、四十八人ヲ以テ一隊ヲ造リ、各隊色分ケヲナシ、九十六人ヲ以テ一手ト唱フ、地頭又ハ領主之ニ将タリ、大砲ハ六門ヲ以テ一隊トシ、一門八名ノ砲手トス、通計大小砲手人員壹万二千二百八十二人ヲ以テス(人形ハ甲州流ニ用ヒタルヲ僱用ス)

十五日

御厩ニ於テ騎射ヲ覽玉フ、射手十五名(斎宣公ノ遺業、後巻ニ記ス)

十六日

南林寺・福昌寺ニ詣シ玉フ、

二十三日

江戸ニ向ツテ御発駕、從駕人員左ノ如シ、

御家老

末川近江

御側役 豎山 武兵衛

全 名越 彦大夫

御納戸奉行 驚頭才之丞

御小納戸 山田 壮右衛門

全 福崎 七之丞

全 川上 郷兵衛

全見習 早川 務

其他人名略ス、

九月

二十日

大坂邸御着、

二十五日

伏見ニ到リ一日御滞在（御徹行近衛家へ御参殿、事実後巻ニ記ス）

十月

九日

江戸御着、先ツ高輪邸ニ臻リ、齊興公ニ謁セラレ、而シテ後芝本邸ニ入ラセラル、

十日

關老ノ第ヲ訪ヒ、御参府ヲ告玉フ（御知政初テ御参覲）

十三日

將軍家關老松平伊賀守（忠優）ヲ藩邸ニ遣シ、参府ノ勞ヲ慰シ玉フ、先規ノ如シ、

十五日

御登營、將軍ニ謁シ銀五十枚・巻物二十、西丸ニ銀五十枚ヲ呈シ玉フ、御家老末川近江（久平）・御側役名越彦大夫陪謁ス、先規ノ如シ、

二十二日

御小納戸菊地藤助（武清）ヲ頭取トシ、世子虎壽丸公ノ抱守トス、

十一月

朔日

邸員在勤ノ年期ヲ三年ト改定シ玉フ（從來定規アリシカトモ、有名無実ノ弊アリシニ依レリ）

二十三日

明年御帰国ノ途、木曾路御通行ヲ申稟シ玉フ、幕府之ヲ允ス、

二十七日

御兵具蔵及ヒ張番所等ノ改造竣工ヲ告ク（元禄年中焼亡ノ事実後巻ニ記ス）

十二月

五日

世子虎壽丸君、初テ芝神明宮ニ御参拜、御年寄志賀浦
從駕ス、此日大奥ニ於テ祝宴ヲ開カル、

十六日

召ニ依テ御登營、從四位上中將ニ任セラル、初メ少將
ニ任セラレシヨリ凡十九年(辞令及ヒ口宣後葉ニ記ス)

此月、国老川上筑後ニ命シテ、青山内藤紀伊守ノ邸宅、
澁谷村ニアルヲ買ハシメ別邸トス、坪数壹万八千余坪、
之レ近年異国船屢来ルニ依リ、芝藩邸及ヒ高輪別邸ハ
海岸ニ接近、變動アルニ方リテハ、齊興公及ヒ世子或
ハ御廉中・御女姓等ノ避所トセラレンカ為ナリ(地代四
千四百両余ナリシト云フ)

二十日

關老松平和泉守ニ就テ、澁谷村買入地ヲ別邸トセント
稟請シ玉フ、幕府允許セラル、

二十一日

右大将家定公西丸ニ移居シ玉フ(賀式先規ノ如シ)
此月、鹿兒島大門口洲崎新射場ノ前面海ヲ埋メ、砲台
ヲ築カシメ玉フ、大門口砲台ト唱フ(現在ノモノ)

此月、江戸遊学生上原源之丞・堀仲左衛門・重野厚之丞
等三題ヲ賜フテ、即席文章詩作ヲ試ミ玉フ、其成文後
巻ニ記ス、

琉球三司官ヘ特命、該国ノ史類及ヒ外国船渡来、亦ハ
清国交通ノ事実・沿革取調、上申スヘキ旨ヲ命セラル
(月日詳ナラス)

二二七 参考 江田平藏日記抄

嘉永五年子二月十九日、吉野御関狩御張行ニ付、一番・
五番方限二組立ニテ、惣人数支度陣笠・半首・長天(尋
常衣服ノ通唱)半天・野羽織・丸羽織勝手次第、家来半
首・野羽織・股引ト被仰渡候付、国命陣笠・野羽織・
長天・股引、鷹野足袋・草鞋、家来一人鉄砲一挺為持、
下人一人要具為持召列、前晚ヨリ吉野履懸原集リエ出
張、御法例之通相勤候、右ニ付、
太守齊彬公御先規通り之御備ニテ御登リ、鹿七丸被遊
御打留候事、

二二八

六人部是香建言

美濃守行從五位下六人部宿祢是香誠恐誠惶頓首百拜
敬獻書薩摩少將(齊彬)閣下、執事は香聞觀天地、而狹
江河登鍾山、而卑丘陵聽於承雲六瑩、而後知東野巴人
之鄙俚也、觀於我

日出処、天子大統綿連齊穹壤無有窮極、而後知四夷八蠻
之為臣妾圍隸也、故邦國之美莫美、於吾 中国焉、君
王之尊莫尊、於吾

日出処、天子焉、道德之大莫大、於吾古道焉、嗟夫

皇室中微、雖道之不絶、若線然文献有微可概而言也、

是香恭稽神典惟昔天地剖判中国肇立、我

皇祖天神寔經緯綱記之而使授、我

皇孫以惟神之道、已媣流黎庶照臨六合之内、是以自

皇孫恭奉

天神之明命降自高天、而正 天極千高千穗宮、之後至延

喜・天曆歷世数千歳

聖子神孫允武允文繼纂鴻業、德沢匹天地、光明比日月、

凡百臣・連・伴・造等、世皆已 神明之膏財成輔翼、

已贊襄宇之政祭之与政一致、 神之与 皇无別如穆、

在天上之礼、是以不吉之教、無為之化弥漫中国、而四
夷八荒舟楫所通、雨露所霽天地之所轉載、雖歧行蠖飛
輓動之物、无弗陸攝水懷來賓衛服矣、蓋上世未有外国
之教也、其有之自

明宮御寓天皇之時、而始三韓入貢、獻論語及博士王仁、
於是乎有周孔之教焉、尔来三百祀、至

金刺官獻宇天皇之朝、百濟王聖明獻佛像・經論、於是乎
有釋曇之教焉、夫惟 先聖含弘光大之德不忍、以外国
之教遺棄之欲挾其可、而用之是以有遣隋唐之使焉、自
此而後二教沈溶淫鬻汜濫于豊葦原、迺易我古学、以漢
字而後天下之文始變矣、及至

淡海朝廷、而始有大学之設、

寧樂朝廷以還延天之際、于是為盛 聖主・賢臣世作矣、

宗室則有若 尽敬王・万多王・葛原王及諸源公子、前

後中書王等、股肱良佐則有、大織冠淡海公・和氣王・

菅公・貞信公・九條右府等、良史之才則有若、淡海三船・

多安麻呂・齊部廣成・三善清行等、凡斯数公皆玄鑒洞

達、妙執古道、峻德文明、敬服膺天職実配食、諸輔相

皇孫護天蹕排闥蹈倒景馭煙霧降乎、霄霏上者、而无愧

宜乎、其銘勲績于金石、而極千万世頌其靈德之不衰也、

是時也、朝有大學圖書之諸寮有觀學田百度飯以、供生

徒又有淳和辨字分彰觀學々館、弘文諸院実維源・橘・

菅・江・藤原・和氣等、子弟之所講習、而至夫鎮西征

東之府及五畿七道之藩屏无不有學焉、下毛足利実野相

公、所創造遺蹟纔存可以比饋羊也、已若然者、皆所以

張皇古道茂育人變換、風俗雲行而施贊乎、聖皇之化

功也、慎權量疎法令薄、賦稅徵役不屢發、民俗敦龐万

物蕃殖、而天下帰仁、蓋雖不及于太古、無為之治蕩々

乎、郁々乎、可謂至德而已矣、保平以降干戈无止、乾

綱解維 皇室板蕩、既而暴賊窃命群雄哮喘、諸官咸失

其守、而大学等數寮鞫為郊藪麋鹿之場、若夫 神明之

宵八十伴・連氏多離散分処、于荒陬僻遠幽閑、殊俗之

郷、而 皇政殆乎殍矣

建武天子以聰明、英武之性悵然、有志於復古震怒電激義

勇雲聚壹戎衣、而大慈授誠海内、殆致平定無幾中興業

墜南巡之駕不返、可不謂大衰哉、雖南北講和 天統帰

于一然狡奸猶尚、当 朝弄窃大權暴戾貫盈黎民不聊生

者二百又余歲古道庶幾于顛墜矣、於是 天神降靈、篤

生泰巖・豊国二公、襲用皇師恭行天誅戡定禍乱、威稜

震蕩于夷蛮之外、蜻洲始致少康、而未暇攷礼典序度制

修文德也

慶長天子、以夫梵漢之教闢塞海内拳世沈溺、於詭幻惱恠

跛躡之術、而不知覺悟於吾惟神之本教々々、亦靡濫錯

紕无有条貫統紀、而深憂之欲放惱恠闢邪術正古道、以

大承

先聖之德、爰 詔鑄神代記職原鈔等、諸書以公寓内古道

之興実胚胎于此矣、当是時東照公爵興吾婦对揚

聖天子之昭明、大德撥乱反正主崇 皇室興廢繼絶講論文

芸遍募朝野、名山之闕藏、広索玉牒石紀之遺逸莘々惟

恐不及、於是 朝廷文物制度爛然多復旧觀偉哉、而尾

張敬公・常陸義公克纂述先公之志、憲章 先聖編修

朝廷大典而古道復興、元祿中有荷田東麻呂者、嘗主京

南稻荷神社、篤信好古唱嚶自振請創国学校于洛南之東

山、官命許之事未臬而没、有加茂眞淵・本居宣長・

平田篤胤相踵而出、皆振布衣緬覽 皇典以祖述 神皇

恢復古道、為已任著書數千卷、蕩滌儒仏之末弊、猶決

江河、而放之東海也、濯濯 神典之玄妙、猶除雲霧、

而瞰瞰日也、然後天下駭々、始知嚮本教矣、斯四子也、

雖曰真以躬殉道、而有勲勞于蜻洲者也、是非是香之私

言也、是香悵、而無他才能幼受業、篤胤氏奉顯幽、無

敵之道朝多焦思苦心，惟探古紀弘本教之務，猶饑而覓食寒而求裘，惴々焉常不能紹，前修之志是恐是香伏惟方今

天子聖明，俊傑滿朝，德教沛然洋溢，於八荒盡彼夷蠻重訊貢獻府無虛月，万物百族各無弗得其所，實万世一時難遭逢之嘉運也，而堂々

天朝蓋天下所取楷式也，而猶有古學之覺古道之不明，天下職此之由，愚窃惑之愚甚憾之，蓋不通神典則先聖之道不明，先聖之道不則，身不可得而修身不能，修而為教於家國者，未之前聞，而況於天下乎，是古學之覺所以万々，不可已也，或曰異哉子之言，吾聞古有漢學，而未聞有國學也，而子獨齷齪求之，非狂則妄矣，曰嗟是何言，夫古之學者本其本矣，今之學者二其本矣，古之學者雖學紘，彼我識貫梵漢，然先聖必使之講神典編國史撰法令格式神典國史則神皇之事也，法令格式則皇祖之政也，無非神聖之道者，是非一本而何不知，今之學者能如此乎，否曰不能，曰然則國學之不可止，亦明矣，是香側聞

閣下抱曠世奇才賢而好學尤留心我古道，昧且丕顯勵精求治闡域之士庶如狹續焉，是香西望欣然，私慶曰何其

德教之至於斯也，夫惟如此其復本教興學非

閣下則不能，以故欲敢陳一言於執事之前，而未由也，會大藩學生本田恒誠來問道于不當，是香於是倍聞

閣下之盛德，躍然不自禁迺因恒誠拜稽首謹寫，丹衷以布諸下執事伏願執事留心照察之聞，大藩邸宅在洛東，聖護院邸乞賜諸吾党友生子，使是香等与二三全志，議上襲先聖之制，下攷之列藩特設贊舍置皇典子史

以下数万卷，而建學政嚴制令公選善才，任博士輯錄史策立詞文之科第以黜陟，生徒永世無顛覆之憂焉，則古道之郵隆亦不止，此吾安知其不方軌駢跡，于我泰古無為之治哉，又安知神風之激揚溥暢不已，感化彼臣妾園隸之邦哉，若然邪則吾以見

閣下之德，亦与夫寧樂延天之名公鉅卿相頡頏不已也，今夫赫々大藩而加以

閣下之賢經始一贊舍譬如振槁而已，以是香察之是不翅賜諸吾党之友生子，而賜諸吾党之先師也，不翅賜諸吾党之先師，而賜諸天下有志之士也，不翅賜諸天下有志之士，而所以上對厲先聖之盛德鴻業，下為万世毗邦憲贊皇化者，將於是乎在焉故此舉也，豈可不謂之蓋世之偉績哉，如是香也，不肖幸得就其末光，以效涓

滴之報列微名於不朽則亦執事之賜也、此所以欣然私慶
繼以腐談媮々不能自罷也、伏願執事恕其狂妄顛越之罪、
而由察採納焉是香胆望

閣下不勝懇悃眷恋之至、是香誠恐誠惶頓首百拜敬白、

嘉永五年夏六月

此書在京近衛家御裏付針医原田才輔ヲ以テ、上申シタリ
ト云、

二二九 参考 諏訪兼武在琉中日記抄

吏員ノ風俗矯正ノ一端

諸役中祝事之節

一吸物 三

一鉢 一

サシ身

一硯蓋 一面

一井 三ツ

一小井 三ツ計

一輕キ茶付 一通

何ソ付折目外取会之節

一吸物 一ツ二ツノ間時宜次第

一鉢 一

一井 二三之間

一輕キ茶付 時宜次第

一 疏役々詰役中ヨリ招之節ハ、是迄之振合通、夫共折角
手輕之方可然候、

以上

嘉永五年子十月廿日

右ハ式部殿(川上)へ

御直ニ御沙汰被為在候趣、豊後殿(島津)ヨリ式部殿・
源五左衛門(田中)ニモ委曲被仰含、着涯吟味之上、式
部・仲兵衛(郷田)兩人連名ヲ以、一統へ通達相成候、

二三〇 西郷隆盛カ墓(疑問)

鹿兒島旧南林寺ノ墓所西郷カ墓地内ニ、左ノ碑文墓ア
リ、

自覺院祖榮忠道居士、嘉永五年壬子九月廿七日、西郷
吉兵衛平隆盛ト記セリ、五輪ノ小塔ナリ、京都清水寺
ノ僧月照カ水ニ投死シ(安政五戊午九月十六日ナリ、年月
異レリ)、隆盛ハ存ヘタレトモ、幕府ノ嫌疑ヲ憚リテ、

同時ニ死シタル旨ヲ以テ届出、窃ニ諭示シテ、罪人ヲ埋ミ墓ヲ建シタル者ナリ、而シテ隆盛ハ、快氣ノ上大島ニ流シ、養料六石ヲ与ヘタリ、○月照カ墓ハ、同所西ノ方二丁許ニアリ、五輪ノ小塔ナリ、無名ニシテ、諡号ノミアリ、傍ニアル石塔籠ニ、誰人カノ和歌一首ヲ彫刻ス(西郷隆盛投海始末參看、墓碑建設ノ事情ヲ知ルヘシ)

二三一 諸国人別改布令

子二月十六日、為御詰日増山河内守様(正條、長島藩主)・土井大隅守様(利善、利谷藩主)被成御出仕候処、大御目付堀伊豆守様被成御達候御書付写一通、大隅守様衆ヨリ御用廻状ニテ来、

御詰衆

当子年諸国人別改年ニ付、諸事改方認方等は、前々之通候間、人別改帳面当八九月頃迄之内、拙者方江可被遣候、以上、

二月十六日

堀 伊豆守

右寺社奉行江相達之、

二三二 江戸絵図改正諸家邸地調査布告

子四月十七日、為御目見(助順、福島藩主)板倉内膳正様(正弘、老中、備後福山藩主)・松平備中守様被成御出仕候処、阿部伊勢守様被成御渡候由ニテ、池田筑後守様被成御達候御覚書写一通、備中守様衆ヨリ御用廻状ニテ来、

阿部伊勢守殿御渡候御覚書写

ミル 御詰衆

大目付江達之覚

此度江戸絵図御改ニ付、万石以上以下末々迄拝領居屋敷・中屋敷・下屋敷、並御預地・抱屋敷・町並屋敷等所持之分、名前・御役名取附、並兩隣向屋敷名前ヲ記シ、当五月中御作事定小屋迄可差出候、

但組支配之分ハ頭々江取集、御作事奉行江可相達候、一書付ニテ難相分場所江ハ、御作事方役人相越候儀モ可有之候、

一右書付差出候以後、代替・転役・名改、且新規屋敷拜領並相對替有之候ハ、早速御作事奉行江可相達候、右之趣向々江可被達候事、

四月

二三三 西丸焼亡諸大名惣登城布告

子五月廿二日、〔兼全者中 西尾藩主〕火事ニ付為同御機嫌、〔正直、浜松藩主〕井上河内守様被成御出仕候処、松平和泉守様被成御達候由ニテ、池田筑後守様被成御達候左之御書付写二通、河内守様ヨリ御用廻状ヲ以来、

松平和泉守殿御渡候御書付写

御詰衆

大目付江

今日火事ニ付、

公方様〔家慶公〕右大将様〔家定公〕為伺

御機嫌、明廿三日

御本丸江惣出仕有之候間、四時登

城可有之候、

但病氣幼少之面々ハ、〔内藤信親、西丸老中、村上藩主〕月中番之老中紀伊守江、使者ヲ

以御機嫌可被相伺候、且又在国・在邑之面々ハ、

飛札可被差越候、

右之趣可被相触候、

五月廿二日

大目付江

西丸炎上ニ付、

右大将様

御本丸江被為

入候間、御礼事等都テ、是迄

西丸ニテ、紀伊守謁候分於

御本丸同人謁候、

右之通向々江可被達候、

五月廿二日

二三四 右大将家定公三十寿齡内大臣勅許

子七月晦日、為御詰日稻葉長門守様・松平伊豆守様被成御出仕候処、〔忠雅、老中、長岡藩主〕牧野備前守様御渡候由ニテ、大御目付

堀伊豆守様被成御達候御書付写二通、以御廻状来、

牧野備前守殿御渡候御書付写二通

御詰衆

大目付江

右大将様〔家定〕来年三十之

御寿齡ニ付、内大臣

勅許被為在度、文政度(家齊)御佳例之通、目出度御領
掌被遊候様、

御内慮之趣、京都ヨリ被

仰進候得共、文政度之外ハ(家慶公)

御部屋住之御例モ無之、且は彼是之御政務御事多之折

柄ニモ被為在候間、此度ハ堅

御辞退被遊候旨、京都江被

仰進候事ニ候、

右之趣、万石以上以下向々江不洩様可被達置候、

七月

二三五 武州大森村ニ大砲射擲場取建

武州大森村地先江、此度大筒打場御取建有之、貫目以
上以下共年々四月ヨリ七月迄、諸向打込稽古被 仰出
候間、御旗本御家人並陪臣(諸藩士ノ通唱)之向共、免
許以上之者ハ、罷越不苦候ニ付、都テ徳丸原稽古之振
合ヲ以可被相願候、尤御旗本御家人江ハ、御筒(幕府所
有銃砲ヲ云)等拝借被 仰付候筈ニ候、委細ハ戸川中務
少輔・井戸鐵太郎(石見守旧名)江可被承合候、

右之趣向々江可被相達候、

五月

二三六 西丸造營省略云々布告

子六月七日、為御詰日牧野備後守様・土井大隅守様被

成御出仕候処、阿部伊勢守様被成御渡候由ニテ、柳生

播磨守様御達被成候御覚書写一通、備後守様衆ヨリ御

用廻状ヲ以来、

阿部伊勢守殿御渡候御書付写

御詰衆

大目付江

覚

西丸御普請之儀、此度ハ格別御省略可被遊旨、被 仰
出候、就テハ炎上ニ付、御向御道具類諸役所入用之品
々、諸向仮建物之類迄モ、万端御手輕之方ニ相心得、
又ハ差向御用ニモ無之分ハ相省、実々御差支ニ相成候
分計取調申出候様、向々江可被申達置候事、

二二七 將軍代替朝鮮信使大坂迄來聘布告

子十月廿二日、為御詰日板倉伊豫守様(顯明、安中藩主)・大岡兵庫頭様(忠愍、岩槻藩主)

被成御出仕候処、阿部伊勢守様御渡候由ニテ、柳生播磨守様御達被成、左之御書付写二通、伊豫守様ヨリ以御手紙御到來、

阿部伊勢守殿御渡御書付写二通

御詰衆

大目付江

御代替ニ付テ、朝鮮之信使來ル辰年大坂迄來聘候様被仰出候処、近年諸国凶荒モ不少、其上此度西丸炎上ニ付テハ、彼是御事多ニモ有之候ニ付、先御差延年期ハ追テ可被 仰出候、
右之趣向々江可被相觸候、

十月

二二八 新古金銀貨交換期月布令

大目付江

古金銀真字式歩判・古式朱銀並文政度之文字金銀・草

字式歩判・式朱銀・壹朱銀共通用停止之分、当子十月迄引替候様、去亥年(嘉永四年)相觸候処、今以引替殘リ多有之ニ付、引替所之儀、猶又来丑十月迄、是迄之通被差置候条、諸事先達テ相觸候通相心得、右期月ヲ限リ引替候様、御料ハ御代官、私領ハ領主・地頭ヨリ、入念可被申付候、
右之通可被相觸候、

十月

別紙之通從 公儀、被 仰渡候条、不洩様早々可被相觸候、

十一月

御家老座印

二二九 唐物拔ケ荷取締布令

大目付江

唐物拔荷之儀ニ付テハ、先年以來度々被 仰出之趣モ有之候処、兎角不正之売買致シ候者不少、就中唐船出入之時節ヲ考、於海上多分之密売買相觸候者トモ、追々超過イタシ候趣ニ相聞候、依之此度取締方之儀、長崎奉行ヨリ彼地之者共ヲ始、唐商共ニ至迄改テ申渡、

諸事嚴重ニ取計候筈ニ候間、九州・四国・中国路ニ領分有之面々ハ勿論、其外之國々ニテモ領中之者共、不正之品取扱候儀無之様厚心ヲ附、嚴敷取締方可被申付候、長崎最寄之島々ニハ、専ラ密買心懸候者別テ多集リ居、不正之取引致シ候趣、不届至極之事ニ候、向後唐船人津出帆之節々、右浦方江ハ旅船・漁業船等都テ他困之者、猥ニ滞留為致間敷候、船ハ勿論陸地旅人タリトモ、怪敷体之者見受候ハ、早速捕押其所之役人トモ立合、其子細相尋候上、長崎奉行所江差送候様可致候、仮令一旦其筋ニ携リ候者ニテモ、訴出ニ於テハ其罪ヲユルシ、褒美可為取之、若右之趣存等閑ニ致シ置、後日ニ於令露頭ハ急度曲事可申付候、此外都テ前々被仰出候趣、無遺失正路ニ可相守候、右之通可被相觸候、

十月

別紙之通從公義被仰渡候条、不洩様可致通達候、

十二月

御家老座印

二四〇 西丸造營地鎮祭云々布告

子十二月九日、為御詰日〔志明、館林藩主〕秋元但馬守様・大久保佐渡守〔忠美、鳥山藩主〕様・水野大監物様被成御出仕候処、阿部伊勢守様御渡候由ニテ、柳生播磨守様御達被成候御書付写一通、以御手紙来、

阿部伊勢守殿御渡候御書付写

ヒル御詰衆

大目付江

西丸御普請出来栄へ見分モ相濟、御白書院大広間之儀、御地鎮御安鎮相濟候迄ハ、仮引渡イタシ、其外御座敷向諸役所部屋々々等、明九日西丸御目付江引渡候付、追々泊等モ有之候間、火之元其外御取締向、厚心得可申ハ勿論ニ候得共、泊等モ御移徙迄ハ人数少々可有之、又御移徙前ニ至リ候テハ、諸向諸道具等モ持運ヒ候事ニ付、下々之者共迄、多人數之出入可有之儀、別テ混雜モ可致候間、火之元等之儀厚心得、不取締之儀等無之様可被致候、且又御炎上以前ニ候迎、火之元忽セ之取計ハ有之間敷候得共、無程御移徙モ被為在候間、兩丸共火之番之者ハ、是迄之仕来ニ不拘、改テ火之元御取締等之儀、嚴重ニ相心得、聊無油断昼夜共代ルル相廻リ、少モ無遠慮相改、諸向不寢番等迄モ、

無怠様互ニ心附候様可被致候、若等閑ニ心得候者モ有之候ハ、一応ハ申談、夫ニテ不心得之者有之候ハ、無用捨遂穿鑿、早々被申立、厳格之可被及御沙汰候、右之趣、諸向末々之者共迄、精々厚心得候テ、后後不弛様取計可申旨、向々江不洩様早々被達置、可然ト存候事、

二四一 無益ノ植物盆栽類高価売買禁令

大目付江

近年、世上無益之鉢植物ヲ玩ヒ、就中小万年青之儀、格外高価之品(當時上等品一鉢凡三四百両ノ売買ナリシト云、殊ニ吏員ノ賄賂トスルノ弊尤モ甚シ)売買致シ、其上武家・寺院之類植木屋共ニ立交、所々ニテ集會致シ、專損益ヲ競ヒ、身分不相応之及所業候者モ有之候段、廉恥ヲ失ヒ候儀、如何之事ニ候、尤武家・寺院等慰迄ニ鉢植草花之類培養致シ候ハ、不苦事候得共、利徳ヲ争ヒ売買ニ携リ候ハ、卑劣之至不埒之事ニ候、向後右体之儀相聞ルニヨイテハ、夫々及吟味候筈ニ候間、心得違無之様可致候、

右之趣向々江可被相觸候、

十一月

別紙之通從公義被仰渡候条、不洩様可致通達候、

十二月

御家老座印

二四二 江戸邸在勤及ヒ定府ノ輩訓誡ノ御親書

一 奥向ノ儀ハ、表方目当ニ相成事候間、朝夕文武ノ修行專一ニ心掛、身ヲ慎ミ進退律義ニ容貌正敷、追々申渡候法令、急度可相守ハ当然ノ儀ニ候、殊ニ当分諸郷(諸郷土着士ヲ云フ)守衛人数、過分相詰候折柄故、聊カ心得違不作法ノ聞得無之様、取締可申渡時節ニ候間、猶又相慎、万事行届候様申談、專一ノ事ニ候(中古ヨリ幕府ノ政度ニ働ヒ、奥表又ハ御広鋪ノ三区別ヲ立タリ、奥ハ則チ御膝辺、表ハ家老支配則チ藩庁ノ吏、御広鋪ハ御簾中御方ヲ惣唱ス)

一 門出入ノ儀ハ、表方ヘノ響合相成候間、見物遊參等ノ他出ハ勿論、無用ノ集合致間敷候、尤初テ出府ノ向ハ、用向不差支タメ、且ハ物馴等ノ名目ニテ、所々列越候仕来モ可有之、併其内ニハ全ク名目計ニテ、遊山同様

ノ案内モ有之哉ニ相聞得候、適々法令ヲ守リ、其身ヲ
慎ミ、無益ノ遊歩ヲ好マサル者モ、終ニハ仲ケ間附合

小納戸見習平常致見分置、新役ノ者計ニ任セ置申間敷
候、

ノタメ、無抛習俗ニ墜入り候面々、是迄追々及見聞候、
右ノ悪弊不相直候テハ、ヨノツカラ習俗難改、甚以不

右之段、用部屋ハ勿論ノ事候得共、掛離候テ、見聞
及ヒ兼候意味モ可有之候間、小納戸頭・小納戸專一

可然候、第一外出ノ儀ハ、側役無札(門出入ノ鑑札ハ御
側役之ヲ掌ル)ノ面々ヨリ、不取締成立候儀、是迄毎々

ニ心得、急度行届候様可申付事、
四月廿九日

有之候間、右之者共能々可致勤弁候、且又他屋敷住居
(本邸外教多ノ御邸ヲ云フ)ノ者、門出入緩セニ相聞得候

右ニ対シ御側役添書

間、平日出勤ノ外ハ、用向申付外勤ノ者ヲ初、私用ニ

奥向勤方并御門出入風俗等ノ儀、

テ外出イタシ候モノモ勿論、門出入ノ刻限、翌日小納
戸迄届出候様、且亦度々無抛他出相統キ候者ハ、側役
迄届申出候様可取計候、

御別紙御書取ヲ以テ、被 仰出趣承知仕、難有思召ノ
程、奉恐入次第二候、就テハ向後急度悪弊ノ旧染ヲ改
メ、一統正路ニ被 仰出通、文武之修行猶又相励、諸

一平日申付候用向ノ者、不詰合節ハ用弁致兼候間、内用
外ハ同席一統へ次渡、退出イタシ、就中新役ノ者へハ、
猶又信実ニ教示イタシ、勤方ニ付不致疑惑候様可申談

此旨分テ申達候様、御沙汰ニ候、以上、
井上逸作

候、

豎山武兵衛武利

一当番ノ者、俄ニ不快又ハ私用ニテ退出ノ儀、イツレモ

山口直記利

無抛儀ニハ候得共、可成程一日ノ詰合不欠様可申談候、
一年初其外旧式ノ配膳(御家旧来ノ配膳ハ一種ノ式アリ)、
且又客来等ノ給仕々来通、急度致連続候様、小姓頭・

定府ト唱フル江戸邸住居ノ輩ハ、多クハ輕薄ノ風習ニ流
レ、氣節軟弱ナルカ故、在勤ノ人々ヨリ輕視セラル、コ
ト甚シ、又在勤ノ輩ハ遊惰ニ耽リ、金錢ヲ徒費シ、身代

ヲ破ルモノ往々渺カラス、茲ヲ以テ、毎々訓諭嚴誠セラレシコト如斯、

二四三 参考 鎌田正純日記抄

七月廿九日、御小姓組番頭・当番頭・詰衆ノ面々、磯御茶屋へ被召呼、砲術訓練被仰付、相濟候上御庭拝見被仰付候、

八月廿四日、勸業風俗衣服軍役等ノ事件御書取ヲ以、来年御下国之節ハ、屹ト其詮相立候様被仰出前日廿三日御變動御発駕ナリ

右本日御小姓組番頭宅ニテ、小与頭被仰出、小組中人別宅へ呼出、申渡候様被達候事、

十月十九日、役中窮士別段之以思召、御救トシテ一家部へ金壹両、家族ハ壹人へ応人数金貳朱ツ、被成下、

二四四 左近衛權中將ニ御叙任

上卿 三條大納言

嘉永五年十二月十六日

宣旨

左近衛權少將 源齊彬朝臣

宣転任權中將

藏人右中弁兼右衛門權佐〔佐藤〕藤原胤保〔奉〕

口 宣案

二四五 從四位上ニ昇進シ玉フ

上卿 久我大納言

嘉永五年十二月十六日

宣旨

從四位下 源齊彬朝臣

宣叙從四位上

藏人權右中弁兼左衛門權佐〔藤原〕藤原長順〔奉〕

口 宣案

左近衛權少將 源朝臣齊彬

正二位行權大納言藤原朝臣實萬宣、奉

勅、件人宣令転任左近衛權中將者、

嘉永五年十二月十六日

大外記兼掃部頭造酒正中原朝臣師身奉

薩摩中將

從四位上

上卿 久我大納言

同

職事 葉室權右中弁

左近衛權中將

上卿 三條大納言

同

職事 廣橋右中弁

從四位下源朝臣齊彬

右可從四位上

中務、表節兵欄、宣勤羽衛、精誠無懈、夙夜在公、宣申榮級、用旌寵章、可依前件、主者施行、

嘉永五年十二月十六日

(朱印)

二品行中務卿

職 仁親 王宣

正四位下行中務大輔臣卜部朝臣久隆奉

正五位下行中務少輔臣藤原朝臣資生行

正二位行權大納言兼右近衛大將臣

(三條)

實萬

正二位行權大納言臣

(久我)

建通

正二位行權大納言兼左近衛大將臣

(二條)

忠香

正二位行權大納言臣

(九條)

齊敬

正二位行權大納言臣

(德大寺)

幸經

正二位行權大納言臣

(中山)

公純

正二位行權大納言臣

(野宮)

忠能

正二位行權大納言臣

(姉小路)

公遂

正二位行權中納言臣

(野宮)

定祥

正二位行權中納言臣

(万里小路)

正房

正二位行權中納言臣

(水無瀨)

有成

正二位行權中納言臣

(広橋)

忠禮

正二位行權中納言臣

(鳥丸)

光政

正二位行權中納言臣

(正親町)

實愛

正三位行權中納言兼左近衛權中將臣實良等言

(三條)

公睦

制書如右、請奉

制、附外施行、謹言、

嘉永五年十二月十六日

制可

月晨時從四位上行大外記兼掃部頭造酒正

(朱印)

関白(黨司政通)從一位朝臣

大政大臣(九条尚忠)關

從一位行左大臣朝臣

從一位行右大臣朝臣

從一位行内大臣朝臣

三品行兵部卿貞教親王

兵部大輔正五位下紀季

參議正四位上行右大弁資宗

告從四位上源朝臣齊彬奉

制書如右、符到奉行、

正四位下行兵部少輔兼因幡守嘉純

中原朝臣師身
右中弁胤保

嘉永五年十二月十六日



(天皇御璽)

大録
少録
少録

二四六 御城下無禄・小禄ノ諸士就農法、關勇助・

山口九十郎等へ取調ヲ命シ玉フ

(調査書前書)

小番・新番・御小姓組・与力等ノ内無高・少高ニテ、生計困窮ノ者少カラス、無抛諸檢者(諸檢者トハ御作事方・道方・御細工所・寺社方・山方等ノ下目付役ヲ諸檢者ト通唱ス、俸禄ハ一年ニ玄米四石乃至五六石トス、○書役ハ諸局ノ書記又ハ一時雇吏等ヲ云フ、此俸禄モ年中四石位ノモノナリキ)書役勤等輕キ御扶持ヲ以テ、家内養育致シ、夫故子弟ノ教育モ存分ニ不行届、或ハ勤方無之者ハ、手細工等ニテ漸ク飢寒ヲ凌キ居候者モ少カラス、其等ヲ御不便ニ被 思召毎々御救助モ被成下候得共、一時姑息ノ御惠ニテ、往々延立候訳ニアラス、兎角飢寒ノ憂ナキ様被成下、子弟ノ教育モ行届キ候様ニトノ 思召ニ候、就テ 御先代様ノ御遺

法諸郷土着士ノ儀ハ、則チ屯田ノ制ニ相当シ、無事ノ時ハ耕作シテ生計ヲ営ミ、事アルノ日ハ兵トナリ、実ニ治乱兼用ノ良法ナリ、又土着シテ、常ニ耕作ニ身ヲ練ルトキハ、身体モ壮健ニナリ、軍陣ニ臨ミ大ニ益アリ、因テ御遺法ニ基キ、無高・少高ノ者ハ、土着ノ法（諸郷土着士ノ法ニ則リ、不開ノ場所ニ移居セシムルノ法ナリモヲ設ルヲ良法トス、然シテ学校ヲ設ケ、人材ヲ造ルノ道ヲ開キ、或ハ諸郷土ノ格式モ古昔ニ復シ、全ク御先代ノ御遺法ニ則ラルハ、治乱ノ良法ナルヘシ、今通貧窮ノ者城下ニ屯住シテハ、物ノ用ニ立チ兼タルノミナラス、出軍ノ跡ニハ、妻子飢ニ臨ムハ必定ナリ、此ノ世ハ乱トナルハ差見得タレハ、速ク此ノ辺ノ事ヨリシテ、手ヲ付ケ度トノ趣云々關・山口ヘ令セラル、山口ハ諸郷土着場並田畠開墾ノ場所取調、關ニハ往古ノ由緒或ハ学校ノ法ヲ取調上言セリト、是レ嘉永五年壬子五月江戸ヨリ命シ越サレタルコトナリキ、

二四七 考証 鎌田正純日記抄

六月廿五日、於外御庭表方（外御庭トハ御住居外郭馬場ナ

トヲ設ケラレタル御園ヲ云フ）勤ノ面々被仰出、御直ニ御指揮ニテ砲術稽古被仰付、御側向勤之面々ハ先月末ヨリ同断、式日被召立稽古被仰付、

二四八 常平倉創設ノ御趣意郡奉行訓諭書

今度常平之法被 仰出趣有之、御別冊並御家老御添書ヲ以被 仰渡、御趣意之程別テ難有恐入奉承知候間、右之趣在中（在中トハ一村落通唱）一統至末々迄、不洩様申渡、謹テ難有承知為仕、其段御受御届書ヲ以可被申出候、何モ愚昧ノ百姓共、末々ニ至リ候テモ汲受不宜、等閑之向ニモ相聞得候付、心得違無之様分テ申諭、第一勸業方之儀、致出精候様可被申渡候、且郡見廻・庄屋之儀ハ、在中引受ノ役場候間、御趣意相届、聊不束之取計曾テ無之、厳格精勤可被致候、此段申渡候、以上、

子二月三日

近在掛

郡奉行勤

樋口休八

郡奉行見習

東郷吉左衛門

右同

上野善之進

二四九 高齡ノ士庶ニ祝品ヲ賜フ

嘉永五年子三月廿八日、老人御祝被下、八十歳以上諸士男ハ太平布・女金百疋、御役人以上ハ紗綾、且極（贈）救士ヘモ御救被成下候（名別記）

二五〇 御膝辺役員ニ衣服地布ヲ賜フ

来ル寅年十二月限、絹布可相用心得ニテ、以来可致出来候、将又此節龜服ノ儀、分テ申達ニ付テハ、迷惑之面々モ可有之候間、服用之品（西洋金巾）奥向之者ヘ遣候間、趣意厚汲受心得違無之様可申付事、

壬子四月廿八日

二五一 府下各方限郷友交際ノ習慣上申

五月三日、御城下方限（一小区ト云カ如シ）々々、郷中
都て平日之作法取調書差出候様、左候て掟書も有之候
ハ、同様可被差出、尤郷中作法ニ依てハ、他方限江秘
密之事も有之事ニ候由、右類ハ封緘之上可差出旨被
仰渡候、

近年諸士之風俗不宜、聊之事より及争論以竹木打合、
郷中集会等も不行儀之向も有之哉ニ相聞得、甚以不可
然事ニ候、武士道ハ律儀相嗜候得は、此比之様不謂事
より及争論候儀有間敷事ニ候、武士は礼儀を専として
武芸の心掛ハ勿論、学問武道をはげミ、国家之固めニ
相成候こそ、武士之本意にて、城下ニ多人数罷在候も、
下々之無法をいましめ、為可鎮非常ニ候処、却て無法
之及争論候儀、全武士之気性衰候訳となけハ敷事ニ
思召候、其上番頭等申論方も不行届、親兄共申付方等
閑之処より、右様成行たる事と歎しく、
思召候間、急度風俗立直候様可申付、以来無法之争論
等有之候は、当人は勿論、支配頭・親兄弟迄も、急度
思召被為在候段、承知仕候事、

五月

此度

御前江豊後被

召出、近年諸士風俗不宜、無法之及爭論候儀、武士道有間敷事にて、全武士之気性衰候託と歎ケ敷

思召候、其上番頭（大番頭・御小姓組番頭ヲ云フ）等申論方不行届、親共申付方等閑故之事候間、急度風俗立直候様可申付、以来無法之儀共有之候は、

思召被為在候段、別紙之趣

御直ニ承知仕、誠ニ以 御尤之御儀、奉恐人事共ニ候条、一統謹て可奉承知候、 御国恩を以蒙生育候得は、

専忠勤を心掛士道を嗜、御恩を可奉報事候処、其儀も不弁、追々被 仰出候趣を相背、無礼法外を働、其身

ハ素より支配頭・父兄等迄、蒙 御勸気候儀は、不忠不孝之至候条、 御趣意之趣厚奉汲受、向後学問武芸

を相勵、朋友之交互ニ礼儀を尽し、士道興隆御用立候様可相心掛候、年若之者江は、兼々無油断父兄等より

可致教戒候、

五月八日

豊後 島津 久宝

多門 喜入 久通

石見 島津 久浮

近江 末川 久平

伊織 榊山 久成

右武通、嘉永五年壬子五月八日 被仰渡、奥表諸役人江は、即日於 御殿（城中ヲ云フ）拜見被 仰付候、六組諸士之儀は、銘々支配御小姓与番頭宅にて拜見有之、六番与之儀ハ、同十日於末川久馬殿宅、組方書役相弘致拜聞候、

〔表紙〕

齊彬公史料

嘉永五年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料(紙数二十八枚)」の記載あり〕

目録

中濱萬次郎申口

〔頭註〕「此の嘉永五年は、土佐へ帰國の時なるべく、山川へ来りしは嘉永四年七月廿九日なること、安田助左衛門日史(巻七)によりて明らかなり、されは此の史料は、四年の部に入るべきか 長愛(坂田)誌」

二五二 中濱萬次郎申口

天保十一子正月五日漂流、嘉永五子年帰國、全六丑年

八月江戸表へ萬次郎被召出、御吟味有之、

松平土佐守領分宇佐浦漁船都合五人乘ニテ漂流、

松平土佐守領分

宇佐浦漁船

船頭

傳藏

四十九歳

此三人兄弟

重助

年不知

五右衛門

二十七歳

寅右衛門

三十八歳

萬次郎

二十六歳

右五右衛門事当時十六歳、萬次郎十五歳、今度ノ口書ニハ十三四歳ノ時トアリ、

嘉永五子年ヨリ十三ケ年已前、天保十三年子正月五日土佐ノ国南海辺宇佐浦鯉釣漁師五人ノ者共、漁船ヲ仕立、櫓五挺・白米式斗、其外味噌・薪水等用意イタシ、

右宇佐浦ヲ出帆致シ候、

但

萬次郎事、生質活潑ニシテ騒シク、親々ノ手ニモ合ヒカタク不得止事、十五歳ノ時中ノ浦ヨリ宇佐浦へ奉公ニ遣シ置申候、

同月六日、居浦南海ナリ、

同七日、十四五里ハカリ沖中ヨツレトイフ処ニ、舟ヲカケ繩ヲハキケル内、風強クシテ魚ヲ一向ニ不得、ヨツテ帆ヲヒラキ、錨ヲ引キアゲ、マタノ下ノ方八十島ノハナニカケ、ソノ夜ハナンナク夜ヲ明シ申候、同八日、七ツ時過ニナリテ、西寺ノ鼻へ出、辰巳ノカタヲサシテ、十四五里モ出候処、シラナミ吹来リ、マタノ十四五里ハカリ楽字地ノカタへ着、其節少々ヒラキハシリニ相成候ニ付、ホトリ近ニテ繩ヲハキ候処、小鯛・縁魚・鯖類群レヨリ候ニ出合、ヨツテ六桶ハハテ見合セ居候処、昼後ヨリ俄ニ雨風フキヨコリ、三桶ハキアケシガ、魚数多ク食ヒツキ手間トリ候内ニ、風イヨノ強クナリ、三桶ノ繩取ルコトナリカタク、不得止事糸ヲ切り捨、楫ヲカへ八十島ノカタヲ見アテニ、船ヲヨセントスレトモ、雨風ニテフネハウゴカズ、セ

ンカタナク、七ツ半時コロ帆ヲオロシ、櫓ヲ立、萬次郎モトモノ力カキリヲシ立ルトコロ、櫓ノ小ウテ引モキセンカタナク、船ヘリへ索ヲユヒツケラシ候処、最早夜ノ四ツ時比ニモ相成、辰巳ノ風ツヨク、東南ノ海ニ浮ヒ、夫ヨリ乾ノ風益々ツヨク吹流サレ、櫓四挺トモニ折レ、只風ニマカセ漂ヒ、同九日ノ朝ニ相成、船中ヲ見廻シ候ニ、宵ヨリ強ク働キ候ユへ、四丁ノ櫓モ、コトノクナカレテ、ヒトツモ見ヘス、寒氣ハハタニシミワタリ、皆一同ニ力ヲオトシ、トホウニクレ、大柱・小柱ヲトリ、風ニヨフシテ大小ヲ用ユル、柱ヲ舟張ニ結ヒ付、タ、舟ノカヘランヤフニイタシ、唯々風ト汐トニマカセテ流レル中、八十島ノ沖モイツカ過キ行申候、

同十日、風モ益々各氷リテ難渋甚シク、コ、ヘ死ナンモ、アマリサンネンナリトテ、残リスクナノ船道具類焚キ、タ、アタマリ申候、コレマテ用意セシ飯米モタンノトモチヒ、最早残リスクナニ相成、カユニ焚キ湯ニワカシ、飢ヲ養ヒ、只カセト汐トニマカセテ、南ノ方へ流サレ行コト十二三日ニシテ、暮カタニトウクロウトイフ鳥海上ニ浮ヒタルヲ見テ、傳蔵申ケルハ、

鳥海上ニ浮ヲ見レハ、近辺ニカナラス鳥アルヘシトテ見ワタシケレハ、ハルカニ島ノヤウナル所見ヘケルユヘ、舟ヲ寄ケレハ、岩石屏風ノコトク、上ルヘキ様モナク、島ノ廻リ二十四五町モユラレ居ル内、漸クニフネヲヨセ、少シノ手ヨリヲ見ツケアガラントセシカ、コレマテニ食物モ喰ヒツクシ、飢ケルユヘ力ナクソノ尽倒レ、海草ヲツカミ食候、コレニテ漸ク力ヲ得テ、兎角シテ少シノ手カ、リヲ見付上陸シ、浪打キタリテ船ハクタケタリ、

同十三日ノ四ツ時比ト覚ヘタルカ、イツレモ飢ヘ疲レケル故、岩ニ生ヘタル海苔ヲトリ食シ、飢ヲ凌キ、鳥ノ巢ヲ見ツケ、鳥ノ子ヲトリ、日ニ乾カシ潮水ニモミ、食シ難儀イワンカタナシ、カツマタ島ニ水ナク難波ス、漂着ノ節水桶ヒトツ磯ニタ、ヨヒシヲ、ヒロヒヲキ、岩ニシタ、ル水ヲ取ヲキ、吞ンテ渴ヲシノキ申候、日和ツ、キ候節ハ、小便ヲタメヲキ渴ヲシノキ、磯ノ東ニ向ヒタル岩ニ穴ヒトツアリシヲ住居トシ、鳥廻リ半里ハカリ一向ニ草木モ生シ不申、芦萱ノ類ハ処ニヨリテ有之、頂上ノ岩ニ穴アリ、是レニ溜ル水ヲ、チカラニシテシノキ、ソノ側ニ墓ノヤウナル岩ニツ有リ、

四月中旬比トウクロウトイフ鳥巢ヲクヒ、喰物ナク、イタシカタモナク、磯辺ニ出テ海苔ヲ食シケルカ、トウクロウトイフ鳥ノ子ヲ育ツルニ、鰯ヲクワヘ来ルヲ追落シ、魚肉ヲ食スル事ヲ得タリ、五月三日四日トヲホヘ、一日飢テ働クコトナラス、ソノ内重助煩ヒフシタリ、海苔ヲトリアタヘ、兄弟シテ看病ス、萬次郎儀ハ飢ニヲヨフトイヘトモ、氣丈ナルモノユヘ、一向ニ元氣ヲトロヘ不申候、サテ四月末ニハトウクロウトイフ鳥モ親子トモニ飛ハシリ、一羽モヲラス、魚モクヒツクシ、貝ヲ掘リテ食シ、或ハ磯ニヨスル草ハナトヲ給ヘ候テ、漸々露命ヲツナキ申候、アルトキ五右衛門・萬次郎食物ヲ求メント、驗組ヲ、ソレス、茨カヤヲツカミヨチノホリテ、ヤウヤクニ頂上ニ上リ見レハ、地平ニシテ、広ク眼モ届キカタシ、内ニ石ニテ疊ミ上ケタルフルキ井戸アリケレトモ、水少シモナク、石ノフル填有、往古漂流セシモノ死タルヲ吊ヒシモノカト、一同ニ我カ身ノ上カト落涙シテ、物イフモノモナク、扱食物ナク、是ニテ死センカトイフ中ニ、萬次郎先ニ善キ時節モアラントテ、其所ヲイサメ連レカヘリケル、其後ハケンソユヘ不登、重助ハ病発ユヘ、此節モ穴ノ

口ニ平臥シテ居申候、

五月上旬トヲホへ、沖中ニ大船一艘見へ、其内ニ船ハ、乾ノカタヲサシテ行過ギケル、沖中四五里モアルヲ声ヲカキリニ呼フトイヘトモ、中々声届カス、力ヲ落シテトモ、ニ神仏ニ祈担シ、磯ニヨリテ帆桁ヲ柱ニ立テ、衣類ヲク、リツケナトシテ、目印ニセシニ、インゲン豆ノヤウナルテンマ舟ヲヨセ、五右衛門・寅右衛門・萬次郎ヲ移シユク故、アトニ残りアリトシカタシテ見セケレハ、再ヒ小舟ヲヨセ、傳藏・重助ヲモノセ、本船へ連レ帰り、其節食物餅ノ如キモノ一寸位アルヲ一切アテニ食サセ、夫ヨリ次第ニマシテクレ候、此大船ハ大東洋北アメリカ国カレテブレツレウル郡ノ鯨漁舟ニテ、名ヲフイツルベトイフ伝馬船八艘、ウリヨレエイチフチセアルトイフ船頭ナリ、コノ船日本ノフネニシテ、凡六千石ハカリノ舟ナリ、長サ三十間余三十六人ノリトイフ、ソノ処へヨセ来レルハ、鯨漁間ハ鯨ノ類ノ魚ヲトラセ、食用トス、右等ノ魚ハ大洋ニ居ラヌモノニテ、島ヲ見アテニ寄せキタルナリ、洋中ニテ、クシラヲトルニハ、クシラヲ見ツケタルトキハ、船ノテン馬フネヲ、ロシ、モリニテ追突ニシ、肉ト皮トノ

アイタヲ長刀ノコトキモノヲイレ、サテ油ヲトリテ洋中へ捨ケルヲ、サキニシルセシトウクロウトイフ鳥、クシラノ肉ヲクワヘキタル(鯨漁船ノステタルヲ、クワへ来ルモノ也)、クシラノ油ヲトリ、前ニトリタル油カスハ薪ノカワリニ焼キ申候、油ハ樽ニツメテ、蠟燭ニ製シテ、諸国ニ交易ノ品トス、其年霜月中旬比カ、ハフ国ニ着船ス、イツ頃ノ事カ、右ハフ国へ日本人持渡リ候太刀コレアリ、是ヲモツテ罪人ノ首ヲ切ルヨシ、ハフ国ハ武勇ノ国ナルヨシ、

ハフ国ノ大サハ、大体日本ノ四国位モアリ、尤繁昌ノ土地ナリ、コノ国ノ近辺アメリカ国ヨリ人道ヲ、シヘテ、諸国へ交易ヲモツハラトス、遊女トモ多クアリ、右四国ノ島七ツアリ、大凡長三十里モアリ、横十五六里位ツ、アルヘシトヲモハル、無人国ヨリ辰ノカタハ七里位、食物ハサツマイモ・里イモ類ナリ、四季寒暖ハナシ、常ニ単物ヲ着シ居候テ、ヨキ土地ナリ、右ノ鯨船コノ国ニ入津シテ、アメリカ国ヨリ居ヘヨキ候処ノタフタチイト申役人ニ頼ミヨキ、萬次郎一人本国へ乗セ参リ申候、

但是レマテ、洋中ニテ大鯨十五本トトリ申候、

ハフコクヲ出船シテ、セツセイトイフ所ニ着船イタシ申候、コレハアメリカコクノ内ナリ、扱四人ノモノハ一カウニ言語不通、コレニヨツテ、彼ノ者日本ノ二朱金ト寛永通寶ノ錢ヲ出シ、コノ国ナルヤト、シカタスル故、四人ノモノ平伏シテ見セケレハ、頓テ日本人ト悟リタルヤウスナリ右ノ二朱金并ニ日本錢ハ、先達テ振州大阪ノモノ、已前漂流人持渡リタルヨシ、先達テ紀州ノ人三人ハ、フ国ヘナカサレ、土佐国宇佐浦ノモノヨリ少シハヤク、備国シテ、長崎御奉行ヨリ紀州ヘ御渡シニ相成候ヨシ、四人ノモノハタフチイヘニヨル内、渡世セン事ヲタノミケルニヨツテ、タフチイノ世話ニテ、荷物又タハ日雇ヲ勤メ居申候、

ハフ国ノ季候ハ、先ツ日本ノ九月比ノ如シ、羅紗一枚着シテ宜シ、此所ノ祭りハアメリカカノユルシニテ、月ノ七日ノ日本ノ元日ノ如シ、家々戸戸閉テ祭りヲナス、是レハイワ、世界ノ初ナリトテ、ソノ翌日七日ニ神ヲマツルヨシナリ、
食物ハマヘニモ申スコトク、里イモ・唐イモノ定食ナリ、其中麦ハイタツテタツトシ、米ハ諸国ヨリ積来レトモ上品トセス、
魚類小鯛日本ノ通りノ魚ニテ、日本ノ魚類ニ替ルコトナシ、

磯魚ハ日本ニナキ魚多シ、風味至テ宜シ、

已前相州浦賀表へ来ル大船ハ、軍船ニハアラス、測量ナトスル船ニテ、来ル子細ハ船杯漂流ノセツ、薪水ノ憂ヲスクワンコトヲタノミタク、モシ容易ニ不相成トキハ、人質ニテモヲキ可申儀申入候含ノ処、日本人殊ノ外騒キタリトテ、アキレ居申候、一体日本ハ短氣ナリトイフテワラヒ申候、カノ国ハ寛仁ノミナラス、ヨクヒラケ申候国カラニテ、他国ヲ伺ヒトル工ミナトハ、決シテ無之、ハナハタユタカナル富貴ノ国ニテ、何ヒトツ不自由ノコトハシラス、軍戦等ノ儀ハ一向ニ不云候ヘトモ、近年イキリス・魯西亜ノ国ヨリ、ヤ、モスレハ国ヲカスメトラント、軍艦ヲ差越シ着岸致候ニ付、ヨントコロナク軍艦ヲ多クコシラヘ、防戦ノ備ヘヲ設ケシユヘ、右ノ兩國ニイクサヲ習ヒ候ヨシニテ、近コロ蒸氣船ノ軍艦多ク出来候ヨシ、ウケタマワリ及申候、尤モ彼ノクニヨイキリス人少々持ヨリ、交易ノ地トス、家ハムカシハ茅フキナリシカ、五年已前アメリカヨリ此国ヲ開シトキヨシヘテ、イマハ石ニテフキ、板開・板ヤネ多シ、石ハ港口ニ大石アリテ、板ノコトクヘシケタルヲトリテフクトイフ、ネトコロハ皆々戸棚ノコトク

コシラヒタル処へ入テ、寝姿ヲ人ニ見スルコトヲ嫌フ、諸道具ノ類、飯櫃ナトハ錫ニテ、杓子ヲタテワキノ実ヲヌキタルモノヲ用ユ、雨ノ日ハ盃ヲウチムケタル如キ笠ヲ着スルナリ、コノ笠ノ後ニ穴アリ、日和ニハアミノ笠ヲモ着スルナリ、後ノ穴ヨリ髪ヲ打タル髪ヲ出シ垂ルナリ、日本ノ総髪ナルヲタテニ打タル也、女ノカミハ日本ノ天神結ヒノ如キ結ヒヤウナリ、紅白粉ヲ用ユルコトナシ、

上品ノ人ハ、ツネニ鉄砲ヲタツサヘ申候、日本ノタイ刀ノ如シ、

上下トモニ杖ヲツキ申候、紫檀・コクタンノ木ニテ製ス、時ヲ告クルニハ、港口ニコレアル六貫目位ノ大筒ヲスヘヨキコレヲ放チ申候、

國王死スル時ハ、棺ニヨサメ申候、日本ノ土屋ノ如キ台ヲツクリ、コレヘ入レテマツリヨナス、土中へ埋メス、忌中ニ笠ヲカムル事日本ト同シ、家老士格ノモノハ棺ヲ用ユ、下品ハ総シテ火葬ナリ但シ棺ハ日本ノ製ニ似テ、臥棺ナリ、カシラノカタ大キク、足ソカ、サテ重助ハ持病発シ、又々平臥申候ナリ、斯ク大勢ナカク世話ニ相成、且ツマタ病人ハアリ、氣ノ毒ニヨモヒ候ニ付キ、近所ノモノ病人ノ為メユヘ、

シツカナル所へ引ワカレ、病人ノ氣候ニ看病セヨトテ、ワキナル百姓ノ家ヲカリ、医師ヲ頼ミ、色々ト養生セシカ、薬モ不屈、次第ニ病氣重リ、終ニ未ノ正月病死イタシ申候、兄弟泣々埋葬シテ、アト念頃ニトムラヒナトイタシ申候、誠ニアワレトイフモ、ナヲアマリアリ、銘々モナカク居ル内ニハ、風土モチカヒ、ヤカテモカクナルヘシトヨモヒ、トモニ涙ニクレ前後モフカクニナリ申候、

兎カクニ帰朝ノ念、サリカタクアル時、已前タスケラレタル船頭、コノ地へ来リ、五右衛門ヲ見カケ、ソノ方、ワレヲ見知レリヤト尋ケルユヘ、先年已前対面セシ人ナルカト兩人申候、日本ノ弘化四年ニアタル、夫レヨリ已前助ケラレシ礼ヲノヘテ、重助事病発シテ、ツヒニ病死セシコト話シケレハ、甚氣之毒カリ、トモニナミタニ袖ヲヌラシ申候、異国ノ人ニテモ人情ハ同シ事ナリ、

右ノ船頭申ケルハ、今度日本ノ沖へ鯨漁ニユクモノアリ、名ハキヤンカウコシトイフ、已前タスケシ船ノ内ノ水主タルモノ、ヨシ、近年取上リタルモノ、ヨシ、君日本ニ渡リタクハ、願ヒ遣サントイフユヘ、傳藏・

寅右衛門へモハナシケレハ、兩人モヨロコビ、スクサマ右ノタフタチヨチノ家内へモ、コノヤウスヨカタリケレハ、イツレモヨロコビ、名残ヲオシミ、別レ涙ニソテヨヌラシナカラ、手道具ナトヲフネニ積ミテ、三人共ノラントイフ時、寅右衛門イカ、ヲモヒケン、俄ニ約ヲ変シ、渡ルマシキト申シケルユへ、再三進メケレトモ、其意ニカナハズ、不得止事コノ訳ヲ船頭ニ申キケ、舟へツミシ手道具ナト、寅右衛門ノ品々アケテワカレケル、サテ傳藏・五右衛門ハ、右ノフネニ乗り、所々鯨漁ナトシテ、彼所此所ト連レラレテ、蝦夷沖ニイタル、蝦夷人帆カケヲ見テ、篝火ヲ焼キナトシテ、用心ノ体ナリシガ、上陸セシニ悉ク逃去リテ、人カケナシ、船頭モ当惑ノ体ユへ、傳藏兄弟ノモノ申シケルハ、コレヨリ日本へハ地ツ、キノ事ユへ、当所へアケクレヨト申シケルカ、船頭承引セス、ハル／＼ト是迄送り来リシコトユへ、渡シヲキタケレトモ、人ナキ所へサシ置申モ本意ニアラス、マタ時セツモアラント、再ヒ船へノセ、道々鯨漁シテ、同年十月比ウツフウへ婦リ申候、萬次郎ハ船頭ニヤトハレ、鯨漁ニ出シトテ、先達テ中ヨリウツフウへキタリ、滞船セシ折カラ、六

年フリニテ対面シ、種々物カタリナトシテ、只々ナミタニケレ、今度蝦夷マテユキケレトモ、松前へ得渡ラス残念ナリト、嘶合申候ウチ、出帆間モナク別レ申候、傳藏等上陸シテ已前ノ住所へカヘリ、タフタチヨチヘコノ次第ヲハナシ、マタ／＼世話ニ相ナリ面白カラヌ月日ヲオクリ申候、

扱ハフ国ニ残リシモノトモ、寅年比ヨリ言語モ少々ツ、分リ、イツトナク物ノ名トモヲホへ、薪ヲワリ、水ヲ汲ミ、アルヒハ芋ナトヲヒキ、ソウジ等イタシ申候、船ニヲシヘラレ貫候鯨ノ油ヲ払候処、彼地ノ錢六百五十枚ニナリ申候但シ日本ノ錢ニテラシテ六、田作・畑作日用ヲナシ、重助ハ前ニ申セシ如ク、病死ス、イモヲ作ルニハ日本ノ稻ヲ植ルカコトシ、葉ヲ切りテ、植レハ根ヲ生シ、コヤシニヨハス、後ニハ三人トモ家作シテ、百姓ノ業ヲ成セリ、是レヨリ彼ノ国ニ居ル事六年ナリ、萬次郎ハアメリカ國着後ハ、フツルノ世話ニテ、日本ノ寺院ノ如キ家ニイタリ、手習学問イタシ、後々ハ用弁シテ、師匠ノ礼物ナトハ、自身ニ働キ出シ申候、其外横文字、測量等書物採調へ申候、フツルハ食物ノ世話ヲナシ候マテニテ、其内ニ師ニツキ、学シコト六ケ

年ナリシトゾ、アメリカ国ノ政事、日本ト大体同シ十
二ヶ条ノ法令アリテ、余ハワツラハシキ事ナシ、

王ハ七人アリ、北アメリカ国ハ、三十六ヶ国ニ分ル、
時候ハ日本ト大体ヲナシ、四時アリテ、風俗ハハフ国
ノ如シ、

王ハ国中ノ賢人ヲ撰ヒ、四ヶ年持ナリ、至テ賢ナル国
ナリ、諸国ニ評議ノ上、大徳アレハマタ四ヶ年、都合
八ヶ年政事ヲ持ツト云フ、

右王往來スルニ、一僕位ニテ至極輕体ナリ、

アメリカ国王ノ居館ハ、本地ニ屋敷ヲ建テ、大名ノ類
ハ、大城ヲカマヘタルモノ数多アリ、王ノ屋根ノ上ニ
大ナル鐘ヲ台ス、百里之内鏡ニ移候事、掌ニトルカコ
トシ、

一タビ王タル人隱居スレハ、隱居料ヲ得、一生安樂ナ
リ、官物ニテモ往來権柄ヲトルトイフ事ナシ、人品ノ
上下衣服ノ色ヲモツテ分ル、民百姓ナリトモ學問次第
ニテ、拳ケ用ヒラル、學問暗キ人ハ、官人ナリトモ上
品ノ服ヲ、決シテユルサストイフ、

アメリカ国ハ、和蘭陀ヨリ元來ヒラキタル国ニテ、何
事モ和蘭陀ニ類ス、年号開候テヨリ、只一ツノ年号ニ

テイツマテモ通ルヨシ、一ヶ年十二月日本ト同シ、正
月ノ法式ナシ、

往來スルニ、車ニノル一手ニハ、拾六人位ノルナリ、

蒸氣船ノコトク火ヲ以テ車ヲ自在ニス、

蒸氣船ノ大船甚多シ、

空船ハ嚴禁ニテ、當時是ナシ、

文字ハ二十六文字ニテ、万事ニ通ス、

算盤ハ四角ニ製シテ、日本トヨナシ、大数ヲツモルニ

ハ弁利ヨシ、

人物ハ篤実ニテ、アクヲナサス、且又寛仁ナリ、人ヲ
殺シ、盜賊ヲスルハ絶テナシ、是レ金銀ノ下々マテ不
自由ナキユヘナリ、タマノ人ヲ殺シ、盜賊アレハ法
アリテ、タチマチニ召捕ル、

アメリカ国、只今ハ開ケ居申候国ニテ、學術年毎ニ精
クナリ、中々以テ余国ヲウカ、ヒ、手ヲ出タス、未タ
國中ニ開ケサル所数多アルナリ、

婚姻ノ式、縁組ノ法、日本ノ熨斗ヲ遣ルトコロノ如シ、
或ハ則ソノ女ヲ連レテ、物見遊山ニトモニイツル事ナ
リ、常ノ婚礼ハ只神ニ告テ歸リ、夫婦トナル也、人情
男女トモニ甚タ多淫ナリ、シカレトモ男女ノ別甚正シ、

麦ノ粉へ玉子・油・砂糖・牛ノ乳ヲイレ、ムシテ上品トス、コレヲパントイフ、

上品ノ人ハ酒ヲ呑マス、タトへ飲候トテモ、聊薬用ノタメナリ、下品ノ人ハ呑ム事日本ノ人ニ同シ、醉狂人ヲ忌ミ嫌ヒ、賤シムコトハナハタシ、酒ノ品日本ヨリヲトレリ、夫婦ノ情イタツテ厚ク、家睦マシク、余国ニ類ヒナシ、アメリカノ舟中ニハ種々ノ道具アリ、東西南北ハヤク知り、何百里何十里来ルヲ知ル妙器アリ、萬次郎携へ来リシ道具スキノルイハ、船中ニテ損シタル樽ヲ直ス道具ナリ、

居宅ヒイトロ障子ヲイレ申候、シキモノ磯辺ニアルカヤノルイヲホシ、アツサ一寸ホトニシテ、ソノ上へ羅紗ヲ用ユ、

羅紗ヲ織ルハ、車仕カケニテ、人ノチカラヲ費サス、綿羊ノ毛ヲ剃リ、夫ヲ糸ニ引クナリ、

近頃南アメリカカ国辺境ノ民、争ヒヨリ合戦アリ、北アメリカカ勝利ノヨシ、コノ戦ノウチ萬次郎ハ鯨船ニテ近ク見タルヨシ、武ノ稽古盛ナリ、刀鏢ノ遣ヒ方、早馬ノ修行ス、驢馬ノ類モアレトモ、武備ニ用ユル所、日本ニカワラス但シ馬ハ横ニモハシ
リ跡ヘモ行トノヨシ、ウツハ物硝子・錫ヲモ

チユ、医術ハ未タ開ケス、和蘭陀ヨリ出ル医者アリ、日本病トイフ事流行ス、大熱病ナリ、此療治ハ桶ニ水ヲ入レ、病人ヲ其中へ入ラシメ、又土中ニ骸ヲウツメ、冷シテ熱ヲサラストイフ、朝ニ病テタニ死スルモ多シ、西洋ニ種瘡多シ、イツカタニモアリ、アメリカカ国痘出レハ、刃物ニテ痘ヲ掘リノゾク療治アリ、コレニテ人損スルコトナシ、ユヘニ種痘不為トイフ、

鳥獸大体日本ト同シ、虎・象アリ獅子ハナシ、大木多キ国ニテ、日本ハ中々不及、切支丹ハカノ国ニテモ甚タ敵敷制禁ナリ、

萬次郎コウヘルニ従ヒ、マタ一人ニテ鯨船ニ乗リテ、世界ヲ廻ルコト度々ナリ、日本ノ沖ヘモ四度マワリ申候、五度目ハ奥州へ上陸シケレトモ、思トケス、洋中ニテ日本ノ商船ニ逢ヒ、ヒハンニ桶送リタル事アリ、鯨魚六七百本トル時ハ帰国、マタハ余国へ是ヲ売ル、アル時ハ氷海ニイタリ申候、コノ海へ入ルニハ、舟ノ内へ猛キ鋸リヲ仕込、氷ヲ鋸リ割テ通行ス、コノ氷海中鯨寒氣ニ強キ故ニ、イタツテ取り安ク、乍去命カケ也、

萬次郎アメリカニテハ、チョンマントヨブ、メヘンシ

タハ日本ノ殿トイフ事ナリ、彼国ハ総シテ逆ニイフユ
ヘトノトイフヲ上ニツクルナリ、

萬次郎日本ノ強勢ユヘ、異国人トチカヒ、一人ノハタ
ラキ拾人前モ働ラキシテ、疲ル事ナシ、カノ国ニテ調
法致シケルトナリ、

先生トイフヲメリケイトイフヨシ、

天竺ノ中シヤカタラ黒坊国ヘモ上陸イタシ申候、蘭人
常ニノル所ハ、黒坊ニアラス、

コノ国ツネニヤシノ実ヲ食ス、ヤシヲハ日本ニテ

ニ似タルモノナリ、男女トモコノ葉ヲトリテ腰ニマト
フ、

遊女ノ類モアリ、カタハラニ三種ノ裸国アリ、コレモ

ヤシノ実ヲ食候、人死スレハ集リテ食ラフヨシ、

アヘン・煙草ノ類ヲヤリテ交易スレトモ、三人クライ

ニテ上陸スレハ、害ニアフ事アリトテ、数十人一所ニ
上陸スルトイフ、黒ンボフハ鼻・腕ニ環ヲ入ル、

傳藏・五右衛門ハハフコクニテモ、日本ノ名ヲアラタ
メス、然レトモ傳藏ハ、元筆之丞トイフ、カノ国ノ人
筆之丞トイフ事イカニト得云フハスユヘニ、傳藏トア
ラタム、或時諸コクヲ巡リ、ハフ国ヘ上陸ノセツ、寅

右衛門等三人ニ逢ヒ、帰国ノ約ヲナシ、フタ、ヒアメ
リカヘカヘル、是レ漂流ノトシヨリ考フレハ、六年ブ
リナリ、コノ時傳藏・五右衛門ハ蝦夷帰国、〔マ〕港ニ舟
カ、リノ節ナリ、

萬次郎帰国ノ約ヲナスヨリ、金ヲ貯ヘサレハ、コノ儀
調ヒ難シト、工夫シテ南アメリカ国ノ金山ヘユキ、金
ヲ掘リ申候、コノ地温泉アリテ、身ハ自然ト温泉ユヘ
アタルモノナシ、コノタヒ金ヲ掘リカヘリ、家人杯ヘ
コ、ロノ内ニ暇乞シテ、再ヒ金山ヘ行クト号シテ、ハ
フ国ヘノカレキタリ、傳藏等ノ輩ニ会シ、小舟ヲ造リ
申候但シ小船一艘、金銀百マヒニテトノヒ申候、
是レ萬次郎勤キテ、金山ニテモウケシカネナリ

扱コノヨリ北アメリカ国ノ船頭フイツモアトイフモノ
コノ湊ニ来合セシカハ、商売用ニテ清国ヘ渡ルヨシ聞
ヘケルユヘ、渡海ノ義ヲ相談セシニ、渡スヘキヨシ請
合クレ候、ソノ場ニアリアフ手道具ナト、本船ハ積込
ミ、萬次郎金堀リニマイリ候由ニテ、宿ヲ出候事ユヘ、
積ルトシ月ノ礼挨拶トシテ、横文字ニテ書面ヲシタ、
メ、北アメリカ船頭カタヘ申ツカワシ、残シヨキタル
衣服、手道具・金銭等モ、其俣ニ抱置便船シ、戌ノ十
月下旬ハフ国ヲ出帆シ、酉ノカタヘノリ、琉球国四十

里ハカリ(久米島沖合ヨリ脚舟ニ乗り替、糸満村ニ上着シタ
 リト云、此村ハ那覇ヨリ凡ソ三四里程ナリ)沖ニ小舟ヲオロ
 シ、三人トモトリ乗り、琉球コクへ着岸シ、萬次郎ツ
 イツルヲ逃レ、マタハフ国へ渡リ、南アメリカノ舟ヲ
 頼シナリ、

右ノ商船ニ別レ候時、ハフ国ニ残ル寅右衛門へモ、無
 事ニ帰国ナシタルヨシ、マタ何卒寅右衛門ニモ、帰国
 イタシ候様申遣候へトモ、何分ニモ帰国ノ儀ハ難儀ノ
 ヨシニテハフ国ニト、マル、

ハフ国ヲアメリカカ称シテメリケントイフ、

萬次郎アメリカニアリシ時、ツイツルへ殊之外寵愛セ
 ラレ、学問等能ク出来候ニ付、往々家相統ノ心得ニテ、
 ヲノレカ姪ヲ縁組イタサセ居ルヨシ、萬次郎モツイツ
 ルへノ義理、マタ妻トスヘキ女、甚不便ニソソシケレ
 トモ、不得止事帰国ノ心組ナシ、シカレハハフ国ヲ出
 帆ノセツ、細々ト文シタ、メ置キ、恋シノ情ヲ尽シヌ
 ル体ナリ(島津登親話ニ、万次郎此女ノコトヲ云へハ、声ヲ
 アゲテ鳴キタリト)

ハフ国ヨリ携へ来ル品々、ナラヒニ琉球コクニテ貰ヒ
 タル長持等左ニ記ス、

一世界ヲ見ル鏡

一世界ノ図 七枚

但四枚ハ長崎ニテ御取上ケニナル、

一亜墨利加ニテ掘タル金

一横文字之書物十八冊多クハ那蘇宗ノ書ナリ
 シト云フ、島津登親話

一地理道具 品々

一劔ツキ鉄砲

一衣類

一海上測量ノ道具

一金錢

右ノ内ニテ萬次郎へ御渡シ品、

一蒲団 一

一枕 一

一衣類 品々

一世界ノ図 三枚

一鍋釜ノ類

一アヘン煙草少々

右ノ外尚アレトモ略ス、

ハフ国・アメリカカモ味噌・醬油ノルイタツテナシ、何
 レモシホニテ味ヲツケル、

琉球へ上陸セシ処、薩州ノ御支配ニテ、御役人方御シ
ラヘアリ、薩州ヨリ嚴重ニ御番人付ラレ、コ、ニテ和
製ノ服ヲ頂戴シ、毎度御詮儀有之候処、七月十九日相
済、出帆之節三人へ左ノ通給ル、

一 単物 一枚

一 裕 一枚

一 帶 一

一 蚊張 二張

一 焼耐 一斗

同十九日、薩州山川ノ湊ニ着船イタシ、麓村百姓ノ家
ニサシヨカレ、翌日御手船ニテ、鹿兒島西田町下会所
ニサシヨカレ、御侍一人・平役人(斉彬公特命シテ、造船
及ヒ捕鯨ノ方法、其他ノ事情ヲ質問セシメ、スクーネル舟ノ難
形ヲ造ラシメタリ)・御組ノ者共五人ツ、付ケラレ、八月
十八日マテ、日数四十八日滞留イタシ申候、日々ゴテ
イネイノ御トリアツカイニテ、又夕候左ノ品々頂戴、

一 拾 一

一 羽織 一

一 綿入 一

一 単物 一

一 襦バン 一

一 帷子 一

一 帶 一

扱御番ニツケラレシ御役人ヨリ、タバコ或ハ右三人ニ
被下候事、

九月十八日、鹿兒島ノ湊ヨ出帆、御役人一人外ニ御侍

一人、御組之方々都合十一人、九反帆ノ船ニテ、全月

廿九日肥前之国長崎へ着船、十月朔日長崎御奉行牧志

〔藩制〕
摩守様御役所へ被召出、萩原文作於宅テ御吟味アリ、

都合十八ケ度、

長崎ニテ御吟味ニ付、申上候次第、

一 萩原文作殿御掛リニテ、御白洲ニヨヒテ、諸御役人立

会ニテ御尋、

一 萬次郎、ソノ方儀ハアメリカ国ニ住居スル事何ケ年ニ

相成候哉、

凡十ケ年アマリニ相ナリ申候、

一 此度アメリカ国ノ様子委敷言上イタスヘキヨシ、被仰

出候、

一 萬次郎申上候ハ、国家豊ニシテ、金銀ハ勿論米・ムキ・

雑穀汎山ニテ、常ニメシヨ焚キ不申候、粉ニシテ是ヲ

日々ニ用ヒ申候、

一都ヘマイリ不申候得共、承リ及候ニ、私居住イタシ候
 処ヨリ、凡七百里アマリテ、繁花ノ王様(大統領)ハ四ヶ
 年ニ代リ申候、徳アツテ下知スル時ハマタ四年、都合
 八年ヨリ以上ハナシ、

一近頃ハ専ラソクセンウカ、ヒ(不解、蓋誤字ナラム)申候、
 但シ十三ヶ年已前ヨリ所々ニテ合戦イタシ申候、

一海岸ニハ一町間置ニ土手ヲ築キ、大筒ヲシカケ、他国
 ヲ防ンタメ、要害モツハラニ御座候、アル時外国ト戦
 ヒ、船ト陸地トノ戦ニ、大筒ヲ何ケ度モ打ハナストイ
 ヘトモ、勝利ナク、再応ノ戦ヒニ帆ハシラヲ見アテニ、
 ハナチ申候時、勝利ヲ得タリト聞候事、三ヶ年前ナリ、
 ソノ、チハ國中サワカシキコトナク、折々鯨漁ナトシ
 ナカラ国ヲ伺ヒ、サワカシキコトモアリ、

一私モ三百里アマリ、宿次ニテ参候処、或ハ男ハ、タカ
 ニテ、下帯モセス、女ハ木ノ葉杯ヲマヘニアテ、アル
 イハ黒ンホウカシトナキ人、クラヤミノ国モ見申候、
 一大船(軍艦ヲ云フナラム)一組四艘ツ、ニシテ、四十八組
 アルヨシ聞ヲヨヒ申候、近頃ハ別テ外国ヨリ折々伺ヒ
 申候ニ付キ、用心ノ体ナリ、

一山川アレトモ、魚類至テスクナク、犬・ブタ・牛・羊
 ノ類ヲ食シ申候、

一定食ハ麦ヲ粉ニシテ、砂糖・油ヲ入レ、丸シテ焼き、
 其外田芋・サツマイモナトヲ食ヒ申候、

一家住作カタ、先ツ大体日本トヲナシ、石ヲ敷キハシラ
 ヲタテ、専ラ板フキナリ、富家ニハ幾重ニモヘケル石
 アリテ、コレヲカクドリフクヨシ、萱葺モアリ、

一方言アラマシ

- | | |
|-------------|-------------|
| 一天ヲ「ヘフン」 | 一地ヲ「ツホ」 |
| 一月ヲ「ムウン」 | 一星ヲ「シタア」 |
| 一人ヲ「ヒイフル」 | 一男ヲ「メアン」 |
| 一女ヲ「ウンメン」 | 一春ヲ「シフレン」 |
| 一夏ヲ「シヤ、」 | 一秋ヲ「オトン」 |
| 一冬ヲ「ウインタ」 | 一海ヲ「シイ」 |
| 一川ヲ「レハ」 | 一小川ヲ「ホレ」 |
| 一北ヲ「ハヤル」 | 一茶ヲ「チャ」 |
| 一鯨ヲ「ホエル」 | 一船ヲ「セブツ」 |
| 一小舟ヲ「ホチウ」 | 一唐土ヲ「チャンイン」 |
| 一天竺ヲ「チンチャ」 | 一日本ヲ「セハバン」 |
| 一アメリカヲ「イリケ」 | 一王ヲ「フラタシタン」 |

一男「ヘイ」 一女ハ「イペン」「マイ」共

一大ヲ「スウ〜」 一小ヲ「ワシモ」

一キレイナルヲ「ハイタイ」一サツマイモヲ「ウアラ」

一サトイモ「カラヲ」 一朝夕ノアツサヲ「アロハ」

一朝飯ヲ「アイナカ」 一昼飯ヲ「アイナツケヤ」

一夕飯ヲ「アイナアイ〜」一イヌルヲ「へ、」

右アラマシアメリカコトバナリ、

一アメリカ国ハ、日本ノ詩歌ノ類アリ、マタ道中ニテ唱歌ヲ唱フ、其文句ヲ解スレハ、

向フノ山坂ヨリ恋シトイフテ、人ガバンヨリ〜来

ルハ、目ニハ涙ヲハサミテ

以上

当時琉球ニハ、島津登久在番奉行タリ、久包開物ニ熱心ナルカ故、中濱ニ就テ、彼国ノ形勢或ハ地理・人情等ヲ質問筆記シテ、公ノ覽ニ供シタリト、中ニ就テ捕鯨ノ術、或ハ鯨油ノ用ヲモ聞ヒテ、大ニ益スル処アリタリ、

○鹿兒島ニ於テハ、西田町下会所ニ居ラシメ、番卒ヲ置キ護衛セシム、事情質問ノ為メ、田原直助及船大工等三四名ヲ日々居所ニ遣シ、専ラ造船、或ハ航海術、或捕鯨ノコトヲ聞キ筆記シ、或ハ捕鯨船ノ模形ヲ作ラシメタリ、

而シテ此模形ニ拠リテ、小形ノ船ヲ造ラシメ、越通船ト名ツケ湾内運輸船ニ用ヒタリ、帆前或柁ノ製式等、大ニ弁ヲ覚へ、後数艘ヲ作レリ、是レ全ク四十余日間、中濱カ在魔中ノ益ナリキ、
(筆記送ス)

嘉永5年(1852)

〔表紙〕

齊彬公史料

嘉永五年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料(紙数十八枚)」の記載あり〕

目録

- 城北吉野村ノ牧場ニ狩ス
- 砲術号令等ニ用ル蛮語翻訳用ヘキ令
- 寺島宗則自記抄
- 孝明天皇御製
- 水戸公ヨリ大日本史ヲ贈ラル
- 護王神社創建金ヲ寄附ス
- 井伊掃部頭浦賀警衛衛更達書

江戸西丸炎上ノ報

五島築城ノ達

以上九条

二五三 城北吉野村ノ牧場ニ狩ス

御関狩事実左ノ如シ、

御関狩惣人数上下一万三千七百拾三人

内

一番与士千二百八十二人各小銃ヲ携フ

内

上五百三十六人 家来下人七百四十六人

一五番与士千百七拾六人上

内

上五百四十五人 右同六百三十一人

一諸与与力士三百八十八人上全

内

上四百四十四人 右同四百四十四人

一櫻島士千五百二十三人上全

内

郷士三百九十二人 中宿社家百姓千百三十一人

一市來士千四百五十五人^上

内

郷士二百五十七人

一阿多七百五十五人^上

内

郷士百九十九人

一串木野千四百三十四人^上

内

郷士百五十四人

合七千八百八拾三人

右吉野村履掛原集リ

一國分千六百三十人^上

内

郷士四百六十六人

一鹿兒島郡吉田五百九十一人^上

内

郷士

一踊郷三百五十四人^上

内

郷士

右芝之元集リ

一入來三百六十九人^上

内

家来

合二千九百四十二人

右落シノ本集リ

一始羅郡山田二百九人^上

内

郷士

一帖佐七百七人^上

内

郷士

一蒲生七百五十九人^上

内

郷士

一加治木千二百十三人^上

内

家来

合二千八百八十八人

以上

二月二十一日

初メ十九日ト令セラレシニ、十八日ノ晚景ヨリ大雨ナリシ故、予令ノ如ク、二十一日ニ延日ス、這日霽朗、御家老島津豊後扨従ス、先規ノ如ク正式ノ鹵簿、曉天御発城、吉野原牧場内葛掛原ノ御棧敷ニ入ラセラレタリ、関狩ノ準備ハ前日ヨリ、山奉行・山見舞・郡奉行・郡見舞其他庄屋・牧司或ハ当時軍事操練ノ一端ナルカ故、御軍役奉行・御軍賦役等モ出張セリ(御先規ハ山奉行ノミナリキ)、御軍賦役ニハ中野織右衛門・伊地知小十郎等ノ輩ナリ、御関狩総奉行(御家老)島津石見(久浮)・大監川上矢五大夫(久運)・一番組頭菱刈奎之介・新納主税・島津藤馬・喜入壬生(久高)・組士千式百八十二名ヲ率ヒ、五番組頭末川久馬・島津隼人(久芳)・川上右近・伊集院亘(久道)・組士千式百四十八名ヲ率ヒ、諸組与力(御納戸御兵具方付属士ノ通唱)及ヒ國分・阿多・帖佐・串木野・櫻島・市來・踊・蒲生・鹿兒島郡吉田・大隅国山田・加治木等ノ人数合計壹万四千〇六拾三名、諸郷人数ハ前日ヨリ、重富・吉田等ノ山林ニ入り、猪鹿ノ逃遁セサルヲ要シ、吉野牧場内ニ追ヒ

集メタリ、公ハ卯ノ下刻頃ヨリ狩場ニ臨マセラレタリ、扨従ノ輩モ銃ヲ携ヘ、我先ニ獲物セムト、競フテ場ニ臨ミタリ、公ハ五十歩許ニ走セ來ル鹿一頭ヲ、御手初ニ討チ玉ヒ、統ヒテ猪鹿大小十三頭ヲ打チ玉ヘリ、扨従ノ輩モ各多少ヲ撃チタリ、申ノ上刻頃狩場ヲ曳揚ラレ、重テ葛掛原ノ御棧敷ニ於テ、山神祭等ノ旧式ヲ行ハレ、而シテ御帰城ノ途ニ就カレ、御討止メノ猪鹿ハ、鹵簿ノ末ニ担カシメ、尋テ御城下人数ハ各組頭率ヒテ、列ヲ正シテ扨従セリ、御関狩ノ原因、及ヒ御初入府ノ際或ハ文化ノ初ヨリ停止セラレ、年々春季規式ノミ執行セラレシ事由ハ、茲ニ略ス、

二五四 砲術号令等ニ用ル蛮語翻訳用ヘキ令

大砲大船ノ類、近來西洋諸國ニテ致発明、弁利ノ品モ有之由ニ付、船砲製造方等於西洋ノ法ヲ御用ヒ有之候事ハ、元來砲術ノ儀ハ、蛮國伝來ノ品ニ候処、追々研究イタシ、当時夫々流儀ヲモ相立候得共、西洋新規ノ業ニ至リテハ、未タ相關ケサルカ、筒銘・貫數・玉葉其外ノ器械ニ至テ、蛮語其俚ニ相用ヒ候類不少、打方

詳ナルハ言行録ニ記ス、

二五五 寺島宗則自記抄

嘉永五年壬子春、下谷御徒町伊東玄朴ノ塾ニ入り、蘭書ヲ研究ス、織田寛齋今伊東塾ト稱ス其塾長タリ、築城書ヲ訳シ、又兵術・天文・舍密・物理・造船書等ヲ読ム、読ムコト稍多キニ從ヒ、疑義益多シ、故ニ当時博學ト稱セラル、杉田成卿ニ就テ、算術等ヲ問フニ、他ノ學者ニ越ヘタリ、殊ニ天文ノ理由ヲ聞クコト多カリキ、今按スルニ、當時蘭書ノ碩學ト稱セラレシ杉田・川本等ノ如キ、皆医事・化学・物理・天文又ハ砲術、或ハ多少ノ歴史・地理等ヲ知ルノミ、政事・法律ヲ講究スルコト全無キカ如シ、仮令其書アルモ、決シテ解スルコト能ハサルヘシ、宗則十年後始テ歐洲ヘ赴キシ時、議院・会社其他ノ組織ハ、何物ナルカヲ知ラサリシハ、全ク先覺ノ教示ヲ得サリシヲ以テナリ、

二五六 孝明天皇御製

調練等ノ節モ蛮語相図ヲ以、進退駈引イタシ、蛮夷ノ挙動ニ憚ヒ候類モ有之哉ニ相聞得候、此度砲術習練ノ筋被仰出モ有之、追々熟達ノモノモ相増シ、世上広ク行ルヘキ義ニ付、此節ヨリ蛮語ノ分都テ国語ニ訳シ相唱、若難訳儀ハ、別ニ唱呼相立、蛮夷ノ挙動ニ不狎移様心掛修業可致候、且又大船製造ノ儀ハ、猶又新規ノ事ニ候得共、是以唱呼ニ其心得可有之候、畢竟彼方ノ利品要術ヲ取り、此方ノ武備ニ相用ヒ候事ニ付、船砲其外取用ノ器械蛮製相用ヒ候義ハ、聊不苦候ヘ共、万一新規ヲ好ミ、妄リニ蛮語ヲ唱ヘ、夷風ニ憚ヒ候様成行候テハ、御国威ニモ拘ハリ不容易事候条、心得違無之様可被致候、

月 日

齊彬公ハ、這布令ヲ循守シ、操銃練兵ノ号令ヲ洋語、或ハ実事ニ則リ、調査スヘキ旨ヲ令シタリ、調査員ニハ砲師成田正右衛門、洋學者ニハ松木弘安（今寺島宗則）、実業者ニハ田原直助・宇宿彦右衛門・中原猶介・高木孫左衛門・市來正右衛門、和學者ニハ八田喜左衛門（知紀）等調査シ、而シテ、齊彬公尚之ヲ勘査シテ用ヒシメタリ、

すましゑぬ水に我か身を沈むとも

にこしはせしな四方の民草

此御製ハ、何ツ頃ノ御製ナルヲ知ラスト雖、當時有志ノ輩或ハ有志者カモテハヤシ、宸衷ヲ悩シ玉フヲ慨歎シタルモノナリキ、

二五七 水戸公ヨリ大日本史ヲ贈ラル

二月水戸中納言殿ヨリ、大日本史一箱ヲ贈リ玉フ、齊昭君親書ヲ添ヘラレタリト云フ(親書送ス)、○此回新刻成レルニ依リ、幕府ヘ献納セラレタル余残ノ一部ヲ、惠贈セラレタル旨ノ御書翰ナリシト云フ中山利善日記

二五八 護王神社創建金ヲ寄附ス

三月十五日、山城國高尾山 神護寺安置和氣清麿朝臣ヘ被贈正一位、護王大明神可崇旨、

勅許有之タルニ依リ、社殿造営及ヒ洛中ニ地ヲトシ、遙拜殿造建ノ議、公卿方ニ於テ企望セラルニ就テ、近衛殿ヨリ寄附金アルヘキ旨、内示セラレタリ、因テ金

五百兩寄進セラルヘキノ答翰ヲ、陽明殿諸大夫ヘ送ラレタリ中山利善日記

二五九 井伊掃部頭浦賀警衛變更達書

五月二日達井伊掃部頭

相摸國三浦郡西浦賀辺御備場、是迄浦賀持ニテ候処、以來御番所並湊内警衛ハ、奉行持ニ相成、其外ノ分ハ向後其方持場ニ被仰付候、尤異國船渡來之節、応接等之儀ハ、唯今迄之通奉行所ニテ取扱、万一異変ニモ可及場合ニ至候ハ、其段早速奉行ヨリ可及案内候間、手筈等猶又申合置候様可被致候、且持場相増候ニ付テハ、彼是ノ都合モ可有之儀ニ付、最寄ニテ相調候後ハ、増御預所ヲモ可被仰付候、委細ノ儀ハ追テ可相達候、且又在来御備場御預所ノ儀、出格ノ訳ヲ以テ、政事向私領同様被仰付候間、御備向ノ儀、愈厚可被相心得候、一別段今度其方持場ニ被仰付候千代崎御台場辺ノ儀ハ、浦賀表第一ノ要所ニ付、御委任被成候条、御備筋ノ儀ニ付テハ、從意ノ程モ可有之候ヘ共、是迄ノ持場逆モ場広ノ処、猶持場相増候ニ付テハ、別テ手数數モ相掛可

申儀ニ付、篤ト熟考可有之候ハ、在来持場内ニテ、地理ノ形勢ニ応シ、備向人数配賦等之儀ハ、緩急モ可有之哉ニ候間、右様ノ場所、平常迎モ可成丈ハ簡易ニ致シ置候様、專便宜ニ被取計、非常之節ハ御備相立候様厚被相考、浦賀御台場ノ儀モ、模様替致候ハ、可然トノ見込有之候ハ、可被申聞候、其品ニ寄り公儀ヨリ御普請モ可被仰付、且是迄御台場据付置候御筒ノ内ニハ、替筒出来次第引替可相成筈ノ御筒モ有之候ハトモ、追テ引替候迄ハ、先其假拜借可被仰付候間、其心得ヲ以、可成丈無益ノ失費無之、往々不及疲弊候様、永続ノ主法相立候様可被致候、

五月五日

五月二日浦賀奉行へ達

井伊掃部頭へ相達候書付調

右之通り掃部頭へ相達シ候間、可被得其意候、依之其方共義ハ、向後御番所並湊内警衛而已相心得、若異国船渡来ノ節ハ、専ラ応接等ノ儀取扱、万一異変ニモ可及場合ニ至候ハ、其段四家ノ面々ハ及案内候積、手筈等猶又申談置候様可被致候、右ニ付テハ相伺候旨、可然義ニ有之候ハ、取調可被申聞候、尤右様被仰出

候申、万一非常ノ節ノ儀ハ、臨機ノ見計モ可有之事ニ候間、兼テ其旨相心得、組ノ者へモ申諭、平常大小砲稽古ハ勿論、船打訓練等都テ武術之心掛怠無之様、弥厚世話可被致候、

五月

五月二日達松平下総守〔志願、忍藩主〕

相摸国三浦郡西浦賀辺御備場ノ儀、是迄浦賀奉行持ニテ有之候処、以来御番所並湊内警衛ハ、奉行持ニ被成置、其後之分ハ井伊掃部頭持ニ被仰付候、尤異国船渡来之節、応接等之儀ハ唯今迄之通奉行所ニテ取扱、異変ニモ可及場合ニ至リ候ハ、其段早速奉行ヨリ可及案内候間、被得其意手筈等猶又申合置候様可被致候、

五月二日達松平肥後守〔密儀、金津藩主〕

前文ニ同シク各通

五月二日達松平誠丸〔典則、川越藩主〕

前同文、此度井伊掃部頭持場へ被仰付候相州西浦賀辺御備場之儀、追テ引渡相濟候迄ハ、都テ是迄之通相心得、別テ厚心付警衛向不泄様可被致候、

六月廿六日達

相摸国ノ内高六千石、井伊掃部頭へ増御預被仰付、

二六〇 江戸西丸炎上ノ報 留守居役所日帳抜萃

五月廿二日曉七半時頃、西丸御教寄屋辺ヨリ出火、殿中悉皆焼失、

右大將様御本丸へ御立退、其後二丸へ御滞留、翌廿三日伺御機嫌、惣出仕有之、

十一月廿五日、火元御吟味有之、今日裁許御仕置左之通、

西丸御広敷添番石橋伊兵衛・島田又次郎・島田作次郎・泉豎次郎右四人中追放、

同添番並原田藤治郎江戸払、同御医師部屋下男繁之丞御扶持被召放、

同所下男組頭石井惣太郎重追放、此外江戸払十一人、押込七人名前略之、右於池田播磨守御役宅申渡、

十二月廿一日、火消役始其外人數差出候諸家へ、御褒美御褒詞等被下之、

二六一 五島築城ノ達

六月五日達五島左衛門尉

今般新城築立ニ付テハ、彼是用途モ相嵩可申、依之別段之訳ヲ以テ、金二千兩拜借被仰付候留守居役所日帳抜萃、道島正亮家記

〔表紙〕

齊彬公史料

市來四郎編

嘉永五年

〔嘉永五年最初の巻と重複により削除〕

嘉永6年(1853)

〔表紙〕

齊彬公史料

嘉永六年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料(紙数二十枚)」の記載あり〕

目録

藩内事蹟総覧

参考 喜入主水日記抄

多紀樂真院へ賜書

参考 寺島宗則自記抄

以上四条

嘉永六年癸丑

紀元二千五百十三年○清曆咸豐三年
○西曆千八百五十三年

孝明天皇第百廿一世統仁即位八年

將軍家慶公(第十二世)襲職十七年

藩主齊彬公(第廿八世)知政三年

二六二 藩内事蹟総覧

嘉永六年癸丑 公四十五歳

正月

年首御式旧規ノ如シ、略ス、

同月十一日、早川五郎兵衛(兼壽)ヲ御側御用人ニ、山

崎拾ヲ御納戸奉行ニ、得能彦左衛門(通吉)ヲ御側役ニ

有馬次郎右衛門ヲ御納戸奉行ニ転進セシム、

同月二十九日、世子虎壽丸公御着袴式ヲ、御書院ニ於

テ執行シ玉フ、御抱守菊池藤助(武清)夫婦扶持ス(御

家法ノ御式ナリシト)

此日、北御門建替落成ヲ告ク、

二月十六日、旧臘御叙任ノ口宣京都ヨリ達シ、御拝戴

式ヲ御書院ニ於テ行ハル、

三月朔日、島津安藝(忠剛)ノ女(一子)カッ、御実子トセ

ラレ、其式ヲ挙ラル、年十九（御履歴後卷ニ記ス）

同月二日、琉大砲船ヲ造リ、琉球其他諸島ノ運輸ニ供セムコトヲ幕府ニ請フ、此日許可、依テ造船掛ヲ島津豊後（久宝）ニ命セラル（御用人及ヒ御船奉行、其他掛員名後卷ニ記ス）

同月十日、一姫君ヲ篤姫ト改シメ玉フ（天璋院殿旧名）此日、暉姫君（忠義公初ノ御簾中）ヲ、御前様ノ実子トシ、篤姫君ト同ク、幕府ニ届出ラレタリ（届書後卷ニ記ス）

三月十五日、史館構内ニ新建ノ文庫落成ヲ告ク（此庫ハ近衛家ノ古製ニ倣ワレタリト）

同月二十二日、大門口屋久島蔵ヲ、御城下築地御茶屋趾ニ移シ、其趾ニ砲台ヲ築ク、此日、土木ヲ起ス（事実後卷ニ記ス）

同月二十五日、御勘定奉行兼御車役惣頭取新納内蔵（久仰）ヲ若年寄ニ、御小姓組番頭島津登（久包）ヲ御勘定奉行ニ転進セシム、

三月二十九日、今和泉郷ニ砲台ヲ築キ、大砲数門ヲ備へ、島津安藝（忠剛）ヲシテ、之ヲ守ラシム、四月朔日、北御門落成通行許サル（元禄年中焼亡、改造ノ

事歴後卷ニ記ス）

這日、御下国御暇賜リノ式、先規ノ如シ、閣老阿部伊勢守（正弘）・右大将（家定公）様ハ、内藤紀伊守（信親）ヲシテ物ヲ賜フ、先規ノ如シ、

此日、江戸羽根田ニ於テ、洋式砲術操練ヲ催ス、銃兵百六十余人各藩兵ト共ニ演習ス、藩吏大目付其他臨場ス、

同月二十一日、公御登宮御暇賜リノ御礼ヲ述ヘ玉フ、献品先規ノ如シ、

四月 日、江戸邸ニ於テ、遊学生上原源之丞・堀仲左衛門・重野厚之丞等ヲシテ、每一九ノ日ヲ以テ輪講、及ヒ一六撃剣、四九日撃剣・槍術、六九日ヲ以テ弓・鉄砲ヲ習練セシム、輪講ノ聴聞者毎回多数アリ、此月、琉球風旱大饑ノ報至ル、大島其他ノ諸島僉同シ、事実ヲ幕府ニ申稟シ、而シテ救恤ス、故ニ非常ノ節儉ヲ令セラル（令書後卷ニ記ス）

五月二日、公御帰国御発邸（辰刻）、木曾路ヲ取テ御通行、從駕人員左ノ輩ナリ、

国老 川 上 筑 後久
御側御用人 豎 山 武 兵 衛 利
兼御側役 封

御側役	名越彦大夫恒	同	岩山十郎
御納戸奉行	伊集院太郎右衛門徳俊	奥御茶道	重久玄碩
御小納戸	川上郷兵衛	同	仁禮雪庵
同	山田壮右衛門正為	同見習	新納軍悦
同	福崎七之丞	小坊主	三原玄甫
同見習	早川務照兼	奥医師	志々目謙受
同	井上庄太郎正	同	戸塚静海
同	早川黒	同	河野玄仲
御小姓	豎山八郎器利	物頭兼御供目付	東郷左七郎敬美
同	三原藤十郎福藏	御供目付	森川孫大夫
同	伊集院卯十郎	同	迫水孫次郎
同	菊池藤七郎	同	山口彦五郎
同	長崎隼太	同	樺山直八
同	田中七右衛門	御用部屋書役	伊東庄兵衛
同	鷺頭才次郎	同	伊集院新之助
同	中山尚之助	御家老座書役奥掛五代	恕兵衛
同	伊藤才藏	御家老座書役	田畑平左衛門
同	名越彦兵衛	新番	今井平九郎
同	百千代松	同	和田佐一郎
兄御小姓	谷村愛次郎	同	伊藤正八郎

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
篠崎彦十郎	伊集院喜之助	種子田市兵衛	本城直五郎	中島郷左衛門	寺田平一	田代源之丞	野村與四郎	川上金四郎	田中三左衛門	龜山甚左衛門	平吉左衛門	相良壯之丞	川井田一郎左衛門	馬場彦右衛門	横山太郎左衛門	木場増太	安田喜三太	肝付尚太郎	蒲地仲造

中小姓定御供

御用人座書
役兼御先触

御馬乘 和田龍左衛門
家村彦八

右外御中間 (一名御口之考)・御小人・足輕・人足等五十余人、

五月日、福崎七之丞奈良井・依テ井上庄太郎ヲ御小納戸ニ進メ、福崎カ跡役トス、

五月十七日、伏見駅ニ御着 (中三日御滞在、例ノ如ク近衛

家御參殿ノ事実ハ後卷ニ記ス)

六月五日、篤姫君今和泉邸 (領地名ヲ以テ唱フ) ヲ出テ

御入城、

六月十八日、出水郷ニ御着、同十九日、同郷大野原ニ

於テ五ヶ郷 (出水・野田・高尾野・阿久根・長島五ヶ郷)

操練ヲ覽玉ヒ、及ヒ同所新田開発ヲ命シ玉フ (事実雜記

ノ部ニ記ス)

此月三日、北亞米利翰軍艦四隻、相州浦賀ニ渡来ノ飛

報到ル、江戸各邸警衛川上龍衛 (久齡) ハ高輪邸ニ、喜

入王生 (久高) ハ田町邸ニ、各兵ヲ率ヒテ出張ス (事実

後卷米艦入相ノ部ニ詳記ス)

同月二十日、阿久根郷御泊、

同月二十一日、川内隈城御泊ノ積ナリシカ、米艦渡来

ノ報ニ由リ、一駅御踐越シ、同日^{刻午}御着城(事実後卷ニ記ス)

此日、江戸邸警衛ヲ命ス、

御小姓組番頭

島津隼人^久

若年寄

島津右門^久

物頭

四本次郎左衛門

右各兵ヲ率ヒテ江戸ニ趣ク、其員左ノ如シ、

中野織右衛門

橋元千蔵

湯地八左衛門

村田十蔵

山口吉五郎

深見休八

池水荒次郎

比志島彦左衛門

大山彦右衛門

上村直右衛門

三原善兵衛

平岡八郎大夫

有川喜左衛門

今村源右衛門

東郷源左衛門

有馬糺右衛門

橋口權蔵

平田茂八郎

大脇彌五右衛門

皆吉五郎右衛門

野崎次郎

江夏喜太郎

大山壯吉郎

高田十次郎

本田岩次郎

北郷清左衛門

長崎正右衛門

橋口甚九郎

白尾貞齋

伊地知道謙

醫師
同

合計三十人

外ニ与力二人

足輕二十人

總計九十六人

此人員御着城当日、江戸警衛ノ為メ至急出發命セラレ、
三手ニ分レテ二十五日迄ニ出發ス、

同月二十五日、五社及福昌寺・浄光明寺御參詣、

同月二十六日、大雄山南泉院及ヒ南林寺御參詣、

同月二十八日ヨリ政務ヲ聞食サル（御着城当日ヨリ政務

聞食サルト雖モ、御休息所ニ於テ聞食シ、正式御座ノ間ニ御出

座ハ這日ヨリス）

七月十日、小舟ニ召シテ、下町海岸其他新築ノ砲台ヲ

覽玉フ、而テ磯邸へ御越御滞在、同十三日御帰城（御

滞在中、集成館ニ於テ大砲鑄造等ノコトヲ指揮シ玉フ）

此日、篤姫君御參府御首途式ヲ行ハル、

同月十七日、異国船長崎ニ渡來ノ報アリ（事實後卷ニ記

ス）

同月十八日、植村仲藏江戸ヨリ着シ、米國々書ノ訳文

ヲ提へ來ル、是レ幕府ヨリ示サル、処ニシテ、和戰兩

端ノ御意見ヲ問ハル、ニアリト（御意見書及ヒ御提出ノ

手続後卷ニ記ス）

同月二十一日、將軍家慶公薨ス（六十一、慎徳院殿ト諡ス）

先規ニ則リ、國中ニ喪ヲ發ス（後卷薨去ノ部ニ詳記ス）

同月二十七日ヲ以テ、曩キニ幕府ヨリ示サレタル米國

國書ニ對シ、御意見御建言ヲ閣老ニ就テ進達シ玉フ、

國老島津伯耆（久福）使ス（提出ノ手続及ヒ御建言書後卷

ニ記ス）

此日、祇園洲埋地ニ砲台築造ヲ令シ玉フ（築造ノ事實後

卷ニ記ス）

同月二十九日、二ノ丸郭内花園ヲ毀テ、文武講習場創

設スヘキ旨ヲ令セラレ、工事昼夜兼業セシム（文武講習

奨励ノ部ニ詳記ス）

八月五日、東郷左大夫（重敬）ニ御家流ノ弓術射法ヲ、

二丸文武講習所ニ覽玉フ、之ヲ開場式トス（御服裝及ヒ

射士ノ服裝、又ハ式事等後卷射術ノ部ニ記ス）

八月十日、島津下総（久徵、日置郷領主）御軍役總奉行

ノ名ヲ以テ、山川・顯娃・指宿等西目海岸守防ヲ命セ

ラル、島津豊後（久宝）伝命ス、同日島津豊前（久本、

都城領志志布志・内之浦・小根占等東目海岸守禦ヲ命

シ玉フ、伝命者前同人、

同月二十一日（辰刻）、篤姫君御出府御發與、御側御用

人兼御側役向井新兵衛・御広鋪御用人小林新藏（正名）

等、及ヒ老女其他數十名扈從ス（当日今和泉邸実母等ノ形

況後卷ニ記ス)

同月二十九日、軍艦製造及和蘭人へ、大小砲及ヒ書籍等購求ノ許可アラムコトヲ請願シ玉フ(請願書後卷ニ記ス)

此月、吉野村ニ学校ヲ創設セラレ、土着士ノ教育ヲ奨励シ玉フ、教師ハ造士館教員交替在勤スヘキ旨令シ玉フ(校則及組織、後卷郷校設立ノ部ニ記ス)

九月九日、御小姓与番頭頼娃織部(久武)ヲ御勘定奉行ニ、鎌田圖書(正純)ヲ大目附ニ進ム、尋テ御側御用人高田十郎右衛門(利容)ヲ御勘定奉行ニ転進セシム、

同月十二日、幕府慎徳院殿ノ遺物ヲ賜フ(兼則在銘ノ短刀)

此日、寺社奉行島津藏人(久武)ヲ大番頭ニ、御勘定奉行北郷男吏(久春)ヲ寺社奉行ニ遷シ、御小姓組番頭兼御用人宮原主計(通哲)及ヒ伊勢雅樂(貞長)ヲ御勘定奉行ニ進ム、

九月十八日、造士館ニ於テ積菜ヲ行ヒ玉フ、公御束帯、御参拜、太刀一腰・馬代黄金一枚ヲ供ヘ玉フ(積菜ノ由来・聖廟設立ノ来歴、後卷学制改正ノ部ニ詳記ス)

同月二十三日、磯邸ニ臨マセラレ、東郷左大夫及ヒ門

人等ヲ召シテ射術ヲ覽玉フ、御家老・若年寄・大目付ヲシテ陪覽セシム(這日、弓組操練隊伍編成運動式等ヲ令シ玉フ)

十月朔日、磯邸ヨリ御帰城、此日、先規ノ如ク英彦山政所坊登城、御知政ノ賀ヲ受ケ玉フ(同山来賀ノ来歴後卷ニ記ス)

此日、亦磯邸ニ臨マレ、同十四日御帰城、

同月十九日、国老島津豊後(久宝)ニ命セラレ、城下貧困士ニ各金一両、家族一名毎ニ金式朱ヲ賜フ(当時一般ノ感情後卷ニ記ス)

同月二十四日、祇園洲及ヒ下町新波戸、両砲台ヲ巡視シ玉ヒ、構造ノ精粗親覽セラレ、尋テ砲発試験セシム(事実後卷ニ記ス)

十月二十九日、篤姫君江戸芝邸ニ着シ玉フ(這日、御近親ノ来訪、或ハ幕府内信等ノ事実後卷ニ記ス)

同月晦日、芝邸ニ寧^{ヤス}姫君生ル、生母伊集院氏(須磨子)

此日、上下町市街各所ニ関門創設ヲ命セラル、其構造江戸市街ノ制ニ模擬ス(創設ノ事由後卷ニ記ス)

閏十月二十四日、公小舟ニ架シテ、各砲台ヲ洋中ヨリ覽玉ヒ、後祇園洲及ヒ新波戸ニ莅マレ、発砲試験ヲ覽

玉フ（此時御指揮後卷ニ記ス）

十一月三日、稻何社祭礼御親拝、鎗流馬ヲ覽玉フ（例式等後卷ニ記ス）

十一月六日、城北小野・原良・伊敷ノ諸村ニ御放鷹、

鶴鷹數羽ヲ獲玉フ、這日、御微行諸村ノ農家ニ臨マレ、
勞働辛苦ノ形情ヲ親視セラレ、或ハ農家ノ食物ヲ取テ、
試嘗セラレタリ、農人等後ニ公ナルヲ聞知シ、恐懼感

泣セリト、這日、草牟田村山口不及カ宅ニモ微行シ玉
ヒタリト（前編ニ記シタルハ則チ此日ナリ）

同月十二日、快齋、此日大隅・日向各郡御巡視ノ為

メ御発城、櫻島郷士藤野莊右衛門カ宅ニ御一泊、同十
三日、古里村善四郎カ宅ニ御休憩、尋テ有村・瀬戸村

ノ大砲船製造ヲ覽玉ヒ、而シテ垂水郷島津讚岐（貴敦）
カ邸ニ御一泊、此日、同郷及ヒ肝付郡諸郷（垂水・新城・

花岡・牛根・高隈・百引等ノ六ヶ郷）ノ操練ヲ、同所海浜
ニ覽玉フ、御巡視扈從ニハ左ノ人々ナリ、

御家老 島津石見久

御側役 豎山武兵衛

全 名越彦大夫

御軍役総頭取兼御御用人御趣方掛 三原藤五郎

御小納戸 山田莊右衛門正

全 川上郷右衛門

御供目付 森川孫大夫

奥御茶道 仁禮雪庵

御用部屋書役 伊集院新之丞

兵道者 有馬衛守

其他新番・御馬廻・中小姓等數十名ナリ、

同月十四日、垂水郷ヲ発セラレ、新城ヲ經、花岡郷島
津若狭（久敬）カ邸ニ御一泊、

同月十五日、大始良郷ヲ經テ、鹿屋・小根占・大根占

各郷ノ海岸及ヒ各所砲台ヲ巡視セラレ、大根占地頭飯
屋ニ御一泊、

十一月十六日、小根占郷小濱ノ砲台ニ於テ、砲發演習
ヲ見玉ヒ、尋テ田代郷花瀬ノ名勝ヲ見玉フ、同郷地頭

飯屋ニ御一泊（花瀬ノ勝景ヲ覽玉ヒ、御詠歌或ハ御棧敷地ニ
松・桜各二根ヲ親ラ植ヘ玉ヒシ事実後卷ニ記ス）

同月十七日、佐多郷片野坂ノ嶮道ヲ經、同郷地頭飯屋

ニ御一泊（嶮道御徒歩ノ事実後卷ニ記ス）

此日、魔府ニ於テ、東西海岸守備兵及ヒ長崎援兵、御
旗本備等大小砲隊人数賦ヲ定メ、操練等ノコトヲ、國

老島津豊後(久宝)伝達ス、

同月十八日、佐多郷島泊村及ヒ大泊浦土岡村吉兵衛カ
家ニ御一泊、十九日、御崎社御参拜(大洋御眺望御詠歌
及ヒ蘇鉄樹ヲ探リ玉ヒシ事後後卷ニ記ス)

十一月十九日、大泊浦ニ御一泊(前日ノ岡村カ宅ナリ)

同月二十日、佐多郷地頭飯屋ニ御一泊、

同月二十一日、佐多郷ヲ発セラレ、小根占郷地頭飯屋

ニ御一泊、

同月二十二日、大根占ヲ過キ同郷島濱ニ於テ、各郷(大
小根占・佐多・田代・大始良ノ五ヶ郷)操練ヲ覽玉フ、

同郷士松崎彦左衛門カ家ニ憩ヒ、大始良郷ニ入り、地

頭飯屋ニ御一泊、

同月朔日、御樓門ニ匿名ノ上書アリ(言路洞開セラレ、

貴賤ノ別ナカリシハ、衆人知ルカ如シ、然ルニ公然開カレサリ
シハ、斉與公ニ對セラレ、深キ御情美アリシニ由リト云フ、

然ルニ如斯匿名ノ上書ヨリシテ、公然開カレタリ、其事情ハ言
路御洞開ノ部ニ詳記ス)、其書意知ルニ由ナシ、公之ヲ御

旅中ニ覽玉ヒ、而テ茲ニ於テ言路洞開ノ令ヲ発シ玉フ、
其文旨要姓名ヲ記シテ、公然御側役ニ就テ上申スヘシ、

匿名ノモノハ燔棄ツヘシ云々、国老川上筑後(久封)・

樺山伊織(久寛)伝令ス(事後後卷言路洞開ノ条ニ記ス)

二十三日、始良郷南村(鎌田出雲正純カ領村)邸ニ御休
憩、而シテ同郷鞆戸神社ヲ拝セラレ、尋テ高山郷ニ御

一泊、二十四日同所御滞在、士踊及ヒ馬術ヲ覽玉フ(事
実後卷ニ記ス)

此月二十三日、將軍家定公將軍職宣下、先規ノ如シ、

使ヲ以テ賀シ玉フ、先例ノ如シ、○公明春御参府ノ途

ニ、伏見駅ニ御滞留中、近衛家ニ参殿セラレムト請願

シ玉フ、這日、許可ノ報到(請願ノ手続及幕府ノ内規後卷
ニ記ス)

十一月二十五日、波見浦ヲ経テ、國見峠ヲ越へ、内之

浦郷ニ入ラセラレ、地頭飯屋ニ御泊リ、

同月二十六日、風雨、御逗留、

十一月二十七日、高屋陵ヲ拜セラレ、尋テ柏原ニ出ラ

レ同所商賈田邊泰蔵カ家ニ御一泊、

同日、当番頭桂太郎兵衛ヲ、一番組御小姓組番頭ニ、同
肝付左門(兼西)ヲ三番組御小姓与番頭ニ転進セシム、

同月二十八日、大崎郷御休憩(都城島津久本領地)、尋テ
志布志郷ニ入り、操練ヲ海浜ニ覽玉ヒ、尋テ大慈寺及

ヒ即心院ニ詣セラレ、同所地頭飯屋ニ御一泊、

同月二十九日、同郷夏井村関外ニ臻り、尋テ寶満寺ニ詣セラレ、同所地頭飯屋ニ御帰舎、

十二月朔日、志布志郷ヨリ松山ヲ経テ、末吉郷ニ入り、地頭飯屋ニ御一泊（関外夏井村御巡行ノ事実後巻ニ記ス）

十二月二日、末吉郷アワキ楳神社ヲ拜セラレ、尋テ都城ニ入り、北郷（久本）カ別邸ニ御一泊、

同月三日、葛浦原及ヒ郡元村祝吉ノ旧御邸跡（忠久公御入国、此地御居城ノ概略後巻ニ記ス）、或ハ稻荷神社ヲ拜

セラレ、尋テ古戦場野々美谷及ヒ森田御陣跡（伊集院忠真討伐ノ際、御陣營ヲ置レタル事跡概略後巻ニ記ス）ヲ覽玉

ヒ、高城ニ入り地頭飯屋ニ御一泊（古戦場ノ御詠歌御歌集ニ記ス）

同日、高岡郷御滞留、同郷田尻村及ヒ宇都野善哉坊、或ハ法華嶽寺身投乃嶽等ヲ御覽、深年村ニ到り、同郷

士長野九郎左衛門カ勸農社ヲ覽玉ヒ、地頭飯屋ニ御一泊（同村社倉ヲモ覽玉フ）

十二月四日、同所御発途、國見峠ヲ踰へ、去川山中ニ狩シ、猪・鹿致頭ヲ打止メ玉ヒ、尋テ去川関守ニ見休

右衛門カ家ニ御休憩、尋テ高岡郷ニ入り地頭飯屋ニ御一泊（去川樹木御仕立場ヲ覽玉ヒ、繁殖ノ方法ヲ奨励シ玉フ、

後巻山林ノ部ニ記ス）

同月五日、綾郷ニ臻り、香積寺ノ月知梅ヲ覽玉ヒ、尋テ穆佐郷悟性寺ニ詣シ、尋テ同郷川原ニ於テ関外四ヶ郷（高岡・倉岡・綾・穆佐）ノ操練ヲ覽玉フ、尋テ粟野社

ニ詣シ、高岡郷ニ還り、地頭飯屋ニ御一泊、

同月六日、再〔兼別カ〕ヒ法嶽寺身投嶽ニ到り、山中諸所ニ狩リシ、高岡郷ニ還り舍シ玉フ、前日ノ如シ、

同月七日、高岡郷御逗留、武芸ヲ覽玉フ、同所ハ一般影乃流ヲ修メル有名ナル地ナレハナリ、

同月八日、高岡郷ヲ発セラレ、赤谷村本永寺ニ詣シ玉ヒ、尋テ野尻郷ニ入り、紙屋村ニ御休憩、地頭飯屋ニ御一泊、

同日、高岡郷ヲ發セラレ高原郷ニ入り、神徳院ニ詣シ玉ヒ、尋テ錫杖院ニ臻り、小林郷ニ入り同所地頭飯屋ニ御一泊（錫杖院及ヒ狹野社ノ杉樹保護ヲ令シ玉ヒシ事実

後巻山林ノ部ニ記ス）

十二月十日、同所ヲ發シ、小林郷西ヶ原ニ於テ操練ヲ覽玉ヒ、尋テ飯野郷大河平村大河平孫八郎（隆芳）カ家

ニ御休憩（家宝ノ書類・武器及ヒ孟宗竹林ヲ覽玉ヒシ事実後巻ニ記ス、同人家記世々乃守ト云ヘル書ニモ又詳ナリ）

此夜、加久藤郷地頭仮屋ニ御泊、御逗留三日、

同月十一日、加久藤・飯野両郷ニ御放鷹、

同月十二日、白鳥神社御参拜、満足寺ニ御休憩、

同月十三日、加久藤ヲ発セラレ、途ニ御放鷹、馬關田・

吉田郷ヲ経テ、吉松郷ヲ経テ、栗野郷ニ抵リ、同郷地

頭仮屋ニ御泊、

十二月十五日、同所若宮八幡ニ詣セラレ、土踊(文禄元

壬辰年義弘公御父子、朝鮮御渡海御首途式ノ遺風ヲ模ス)御

覽、尋テ横川郷ニ抵リ、地頭仮屋ニ御休憩、尋テ山箇

野村金鉢山ニ御泊、

同月十六日、同所御逗留、各鉢御巡覽、採鉢ノ法御指

揮アリ(御指揮ノ事実、鉢山御奨励ノ部ニ詳記ス)

同月十七日、同所ヲ発シ、踊郷霧島神社御参拜、花林寺

ニ御泊(神庫ノ文書及ヒ古器物御覽等ノ事実、後巻ニ記ス)

十二月十八日、榮乃尾温泉及大飼滝御覽、此夜又花林

寺ニ還駕御泊、

同月十九日、花林寺ヲ発シ、田口村椎原八郎次カ宅ニ御

休憩、清水郷姫木村ノ城趾御覽、尋テ國分郷地頭仮屋

ニ入ラセラレ、御逗留二日(旧城跡御覽、此時御移城御目

論見ノ言ヲ発セラル、後巻又ハ文久三年癸亥英艦ト戦争ノ部

ニ記ス)

同月二十日、同郷小村濱ノ市等ノ新田ヲ見玉ヒ、途ニ

御放鷹、尋テ同郷士ノ武術・馬術ヲ地頭仮屋ニ覽玉フ、

同月二十三日、同郷ヲ発シ、清水郷ヲ経テ郡田村ノ農

嘉右衛門カ家ニ御休憩、日吉山王社御拜、尋テ臺明寺

(古文書類御覽ノ事実、後巻ニ記ス)ニ御休憩、尋テ鹿兒

島神社御参拜、彌勒院ニ御休憩、尋テ加治木郷ニ到リ、

領主島津兵庫カ邸ニ御泊(神庫ノ宝器及ヒ古文書類御覽ノ

事実、後巻史館ノ部ニ記ス)

十二月二十四日、帖佐郷^{モウ}掠乃瀬川原ニ於テ、十八箇外

城ノ大操練ヲ覽玉フ(後巻操練及ヒ大河平隆芳カ家記ニ詳

記ス)、此時御軍賦役坂元彦五郎・福島半次郎・相良彌

兵衛等出役シテ所弁ス、畢テ帖佐郷鍋倉村製鉄所ヲ覽

玉フ、尋テ同郷ニ在ル朝鮮国ニ於テ戰場ニ死シタル狐

神社ニ抵リ、尋テ蒲生郷地頭仮屋ニ御泊、

十二月二十五日、蒲生郷ヲ発シ、途ニ狩シ、吉野村ニ

入り、庄屋役所ニ御休憩、御菓園地ヲ覽玉ヒ、本日七

ツ時御帰城(御菓園ニ於テ和漢洋草木栽培繁殖御指揮ノ事実

ハ、後巻産物ノ部ニ記ス)

此回ノ御巡見ハ日隅二州二十二ヶ郷ニ及ヘリ、昨嘉永

六年十一月十二日御発駕、同年十二月廿五日ニ至テ、日数凡四十余日間ニ及ヘリ、

此月六日、若年寄新納駿河（久仰）ヲ御家老ニ、御勘定奉行島津登（久包）ヲ若年寄ニ進メ、御軍役奉行故ノ如シ、十日御小姓組番頭小松相馬（清猷）御軍役惣頭取ニ転進ス、

此日、上・下二町市街新開門ノ竣功ヲ告ク、

二六三 参考 喜入主水日記抄

正月十五日府宅発シ、同二月江戸芝御邸へ着、三月主水ト改名、

此春

齊彬公御下国被遊、国老川上筑後（久封）御供ニテ候事、今年 公方様（家慶公）御卒去ニ付、御礼使御流レ被仰付候旨、末川近江久平ヨリ御用人ヲ以テ承知、六月アメリカ船^{三艘} 浦賀へ渡来候処、江戸海へ乗込候段相達、川上龍衛儀ハ高輪御厩馬場へ人数引連差越、拙者儀ハ御兵具方へ人数相纏居候処、当時八ツ時頃ニモ候半、右異船浦賀ノ様引取候旨相達、一統御長屋へ引取候、

右異船十日計浦賀へ滞艦ニ付、府内不穩模様ニテ、濱御殿へモ大砲等据付有之、今ニモ兵端開クヘキ形勢ニ候、其節ハ宰相（斉興公）様御儀高輪へ被遊御住居高輪御邸下ニ俄ニ竹籠へ土ヲ入レ、台場（洋式ニ則ル）築立有之候、右ニ付御国許ヨリ島津隼人守衛トシテ致出府候、

二六四 多紀樂真院へ賜書

一翰致拜呈候、暑中愈御安康奉賀候、然ハ十九日大膳（長州侯ナラム乎）差支無之トノ事ニ御座候、良元老・宗安老御掛合被成御差支無之候ハ、九ツ半過迄ニ御来駕可被下候、若同日御差合ニ候ハ、廿日後而日程伺度存候、且此品龜末（何品ナリシヤ、今知ルニ由ナシ）ニ候得共、呈書ノ印迄致呈上候、取込乱筆御免可被下候、以上、

水無月十四日

薩州拜

樂真院様

猶々御自愛專一奉存候、以上、

二六五 参考 寺島宗則自記抄

嘉永六年癸丑

三位宰相齊興公藩政ヲ其男齊彬公ニ譲リテ、江戸高輪邸ニ住セラル、宗則ヲ以テ広敷医トナシ、五人賦即チ一月二兩二歩ト米七斗半ヲ賜ヒ、仍ホ伊東(玄朴)ノ塾ニ在テ修学スヘシト命セラル(公御知政ハ嘉永四年辛亥二月ナリ、茲ニ記シタルハ年月誤レリ、数十年ノ後ニ記サレタル故、誤レタルモ無理ナラス)

此歳齊彬公新太守トナリ、初テ入国ノ時中仙道ヨリス、宗則遊学已ニ七年ニシテ、養母病ニ臥ス、因テ帰省ヲ乞ヒシニ旅費ヲ賜ハリ、公ノ侍医志々目謙受ト同行スヘシト命セラル、公発駕ノ日、宗則ハ伊東ノ塾ヨリ発シテ公ノ列ニ従フ、薩摩ノ出水郷ニ着セシ時、実父長野増右衛門(松木宗保カ実兄ナリ)余カ旅宿ニ来過セラレ、相見テ互ニ久別再会ノ欲アリ、此出水府本^{早水ト号セシヨ}郷士ノ住ム所ヨリ、距離四里アル脇元ニ同行シ、養母君ニ謁ス、君中風ヲ病ミ、四支麻痺シ目視ヘス、僅ニ手ヲ延ハシ、余カ面ヲ撫シテ成長ヲ賀セラル、此夜一泊シ、翌朝次ノ駅阿久根ニ抵リ、志々目ノ宿ニ投ス、

志々目謙受ハ先考宗保君(松木雲徳後宗保ト改ム、実ハ叔父ナリ)ノ同僚ニシテ、齊興公ノ侍医ナリ、先考ト莫逆ノ交アリ、先考没後常ニ其美質ナルコトヲ賞シ、尋テ宗則モ亦志々目氏ノ眷顧ヲ辱フセリ、宗則遊学中洋書ヲ購求スルノ資金ヲ、志々目氏ニ依リ碓山(将曹久徳)大夫ニ請フテ之ヲ得、且本年広敷医トナリ、又帰省ヲ命セラル、モ、皆其尽力ニ依ル、

脇元ナル養母君ノ住居セラル、宅ハ、先考長崎ニ在ル時、建築セシ所ニシテ、長島ト境界セル黒ノ瀬戸ト称シ、幅狭クシテ、長サ壹里余ナル河流ノ如キ一条ノ海水在テ、脇元ノ方ニ番所岬ナルモノ突出シ、此方ヨリ東方ニ灣アリ、其深サ半里余、北ニ入り灣底ニ一孤島アリ、寺島ト云フ、此ヨリ更ニ東ニ屈曲セル所ノ岸辺ニ三四段ノ地ヲ開墾シテ、南ニ向ヒ堤防ヲ築キ、西北ハ地高フシテ樹木アリ、其陰ニ茅屋ヲ作ル、座シテ南洋ヲ望メハ遙ニ甌島アリ、山水ノ景ハ備レリ、宗則ノ末弟長野武右衛門ヲ養フテ、松木ノ姓ヲ分チ宗令ト称ス、今此家ニ在リ、故ニ松木宗貫ノ妻ハ、考松木武右衛門ノ末女ナリ、宗貫没後寡婦ニシテ此家ノ主タリ、幾計ノ田園アリ、一家ノ生計ニ足レリ、宗則鹿兒島不

在中ハ養母君脇元ニ至リ、病ヲ養ヒ、安政三年丙辰十二月二十日此家ニ没セリ、

阿久根ヨリ鹿兒島山ノ口馬場自宅ニ着ス、宗則遊学中留守ナキヲ以テ、先考ノ門生上村良徹ナル者ヲ任セシム、又脇元郷士柏木十太郎ナル者ハ、童子タル時ヨリ、貧窶ニシテ先考ニ養ハレ、此時四十余才、尚自活スルコト能ハス、宗則ノ家ニ在テ僕役タリ、

宗則在鹿中勤務ナキヲ以テ、中原猶介・高木孫左衛門・宇宿彦右衛門・市來正右衛門等ト交リ、化学ノ実験ヲ為シ、又君命ニヨリ田原尚助・成田正右衛門（八田喜左衛門・高木孫左衛門二名ヲ脱ス、数年ノコトナリシ故亡失セシナラム）等ト共ニ、練兵号令ノ語ヲ改メ、旧來ノ洋語ヲ變シテ和語トナセリ（公命及ヒ洋語翻譯ノ事実ハ、公史第一卷ニ記ス）、又加治木私領ニ於テ練兵アリ、高木孫左衛門ト同行シ、実地ノ練兵ヲ觀テ、号令ノ用ヲ識レリ、此等ノ事跡ヲ以テ此年ヲ經過セリ、

嘉永6年(1853)

〔表紙〕

齊彬公史料

嘉永六年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料（紙数三十五枚）」の記載あり〕

目録

従四位上中将御叙任及ヒ布告

諸士年若ノ者喧嘩争論ヲ誠訓シ玉フ

相州浦賀ヘ亞米利加船渡来警衛兵出発ノ事実

質素節儉令

大船製造解禁令

銃砲伝授ノ解禁

羽倉用九川路左衛門尉ヘ贈レル尺牘

江戸府下諸家邸内砲台建設ヲ允ス

高輪・田町両邸ニ砲台建築ノ請願

洋式火技習練スベシ云々布告

隊伍操練及騎戦奨励布令

鎌田出雲（正純）領分家来帯刀調練允サレタル事実

幕府本藩へ軍艦製造ヲ依頼ス及製造数届書

鷹司政通公書牘

道中御行列ニ鉄砲備ラレムトノ伺書

御付札

参観往来道中銃器ヲ備ム云々内伺

以上十七条

二六六 従四位上中将御叙任及ヒ布告

太守様御事、旧臘十六日御城へ被為召、従四位上中将

ニ御任官被為蒙仰候旨、昨八日御到来候、依之今日登

城御祝儀可申上云々、

正月廿

二六七 諸士年若ノ者喧嘩争論ヲ誠訓シ玉フ

矢五大夫（川上久運）殿ヨリ被相渡候御口達書

近年諸士若年ノ者共ノ内、於途中ニ行摺等ヨリ事起リ、及争論法外ノイタシ方毎々有之由相聞得、士道ニ有間敷卑劣ノ仕形ニテ、甚以不可然事ニ候、兼テ取締ノ者有之事候得共、兎角届兼候処ヨリ、右様之儀致到来候間、大番頭・御小姓与番頭ニハ請持ノ事候付、以来屹ト取締ノ詮相立、右習俗致一変候様手厚被遂吟味、評議ノ形行我々共方へ可被申出旨達置候折柄、御沙汰ノ趣承知仕候付、其段モ訳テ達置候処、尚又此度御前へ豊後（島津久宝）被召出、諸士風俗等ノ儀ニ付、細々被仰出趣有之、御沙汰書一統謹テ奉承知候、付テハ此旨取違ノ者ハ有之間敷候得共、若哉心得違不守ノ者有之候テハ、屹ト不相成時節ニ候間、別紙細ニ被申出、吟味ノ趣尤ノ事候得共、猶又当座ニオヒテ得ト致吟味候処、年若之者共喧嘩口論稠敷御制禁ノ段ハ、先年来追々分テ被仰出趣有之、面々承知ノ通ニテ、尤支配以下役席又ハ於宅、容貌見聞ノ節ニモ、何篇叮嚀ニ被致教示、幾重ニモ手厚申渡者有之候得共、取締不行届候哉、人々汲受薄ク、何レニモ其詮不相見候得は、當時口論ノ基、大形ハ年若之面々身持ノ慎薄、途中又ハ

何ソニモ付、他ノ方限入交リ候場所ニテ、猥リニ無礼ヲ言掛仕掛候儀ヲ、手柄ノ様心得違候習俗相成候処ヨリ、繁々事ヲ引起シ及争論、平日意趣ヲ含、終ニハ致^{〔巻〕}輕我候儀度々有之候間、此節ハ屹ト心底ヲ改、風俗立直候様無之候テハ不相成事候付、此以後ハ仮初ニモ人ニ無礼ヲ仕掛、又ハ無礼ノ過言ヲ言掛候儀、一切無之様、組下ノ者共十五歳ヨリ二十五歳迄、支配頭宅へ一方限ツ、召呼、得ト致納得候様手厚被申論、面々承知ノ印判為致可被申出候事、

三月 日

川上矢五大夫久運

川上ハ当時大目付職ニ在リテ、斯書ノ如ク風俗匡正ヲ専ラ努メタリ、

二六八 相州浦賀へ亜米利加船渡来警衛出発ノ事

実

同年六月廿二日、御下国御暇ニテ御着城、然処去三日、亜米利加軍艦四艘、浦賀へ渡来ノ旨申来リ、御着城直ニ御小姓組番頭御用人勤島津隼人ヲ、江戸へ被差出、翌廿三日若年寄島津右門、同廿五日四本次郎左衛門初

騎馬組三十人餘、与力三人、足輕廿八人出立被仰付候云々、

二百余年昇平ノ化ニ浴シ、一般干戈ヲ目ニセサルノ世態ナリシニ、亞米利加軍艦數艘相州浦賀港外ニ來船シタルヲ聞ヒテ、江戸ハ勿論全国挙テ動揺シ、目前炮烟ヲ見ルノ思ヲナシ、其狼狽言詞ニ尽シ難シ、我公ハ御帰国ノ御途中、其報ヲ聞セ玉ヒ、予テ斯クアルヘシト期セラレシ故、江戸邸ニハ相応ノ警備令セラレ、少シモ動揺シ玉ハス、静ニ御帰国アリテ、即日前記ノ如ク警衛ノ為メ、江戸へ出軍命セラレタリ、隣藩熊本ノ如キハ、江戸近海ノ警衛奉命、国老其他數百ノ兵、昼夜兼行江戸ニ向テ出発シ、道中宿駅ハ人馬ノ継立、甚雜沓ヲ極メタリト云フ、本藩ハ兼テ準備アリシ故、僅ニ二百余名ノ人員応援ノ為メ、徐々トシテ出発シタルハ、御先見アリシト皆人感賞セリ、○此時江戸及關八州ノ動揺実ニ甚シク、市街ノ人民ハ家財ヲ片付ケ、老幼ヲ携へ、近村隣国ニ避乱スル、其雜沓言詞ニ尽シ得ザルノ形況ナリシト、或ハ一笑スベキハ小藩又ハ旗下士ノ如キハ、太平ノ化ニ浴シ、武器ノ手當甚タ疎ナリシ故、遽ニ銃槍甲冑ヲ購求セント駭キタルニ依リ、其価非常ニ騰貴シ、稍十倍ニ上レリ、投機者輩ハ種々點

手段ヲ施シ、大利ヲ得タリト云、此一事實ヲ以テ武備廢弛、士氣不振ノ形況ヲ知ルベキナリ、

二六九 質素節儉令

〔風統、若年寄、三上藩主〕
遠藤但馬守殿御渡

質素節儉ノ儀、前々ヨリ數度被 仰出有之候処、万石以上以下共、都テ驕奢ノ旧習不立直向モ有之、且近来異国船度々渡來、彼是御備筋等ノ御入用モ有之、諸家ノ失費不少、依テハ此度於 公儀、五ケ年ノ間際立候御儉約可被遊 思召候間、右年限中ハ何モ格別ニ諸事雜費ヲ省キ、防禦武備之筋一匁ニ力ヲ用ヒ可被申候、万石以下ノ面々ハ、登 城ニモ木綿ノ服取交着用不苦候、其外兼々被仰出候音信・贈答・供連・家作向等ノ廉々、惣テ右ノ振合ニ準シ、格別ノ節儉相用ヒ、此度御沙汰之趣能々行届候様、一同厚ク可被心得候、就テハ追々御取調之儀モ有之候間、此上共等閑ノ輩有之候ハ、夫々御沙汰ノ品モ可有之候、
右之通可被相觸候、

別紙写之通、從公義被仰渡候条、不洩様可被相觸候、

八月 御家老座印

此布令ニ対シテ、質素儉朴ヲ守リ、武備專一ナル旨布達セラレタリ、

二七〇 大船製造解禁令

遠藤但馬守殿御渡

荷船ノ外大船停止ノ御法令ニ候処、方今ノ時勢大船必要ノ儀ニ付、自今諸大名大船製造致候義、御免被成候間、作用方並船致共委細相伺可受差図ノ旨、被仰出候、尤右様御制度御変通被遊候モ、畢竟御祖宗ノ御遺志御継述ノ思召ヨリ、被仰出候事ニ候間、邪宗門御制禁等ノ儀ハ、弥以如先規相守、取締向別テ嚴重可被相心得候、

右之通、万石以上ノ面々へ被仰出候間、万石以下ノ向へモ為心得可被達候、

九月十七日

二七一 銃砲伝授ノ解禁

同月御目付衆御達

井上左大夫（幕府御鉄砲方）御預リ、御鉄砲ノ内御秘事御筒（城中竹橋藏ニアリト）ノ儀ハ、前々他向伝授等モ無之候得共、此節柄ノ儀ニ付、御旗本其外執心ノ者へハ伝授仕度旨、同人へ申聞候間、伝授イタシ不苦段申渡候、此段向々へ可被達置候事、

右之趣伊勢守殿被仰渡候、依之御達申上候、以上、

九月十七日

〔長崎目付〕
鶴殿甚右衛門

斯ノ布令、今ニシテ見レハ、甚タ迂拙ナルヤ論ナシ、當時武備ノ一般知ルニ足ル、中古以來幕府ヲ初各藩ニ於テモ、武備ノ一切刀槍弓馬ノ術ニ至ル迄、一派一流ヲ立、秘伝蘊法或ハ一子相伝ナト、唱へ、門人徒弟ニ伝授スルニ、幾多ノ階級ヲ設ケ、之ヲ授クルニ鄭重ナル式アリ、畢竟一種ノ売方トモ云フヘキナリ、如此ノ弊風、心アルモノ、言ニ、秘伝奥義ヲ授リタル人ニ非ラサレハ、軍陣ニ臨ムコト能ハサル乎ト唱フモノモアリタリ、斯ノ如キノ弊ヲ生シタルモ、其源因幕府殊更ニ秘蘊秘伝ヲ唱へタリ、其一例ハ、天保十三年高島四郎大夫カ洋式ノ大小砲術ヲ、徳丸原ニ於テ閣老ノ覽ニ供へ、其妙ニ感シ、後高島ニ達スルニ、御直參ノ者一兩人ニ伝授シ、其他ニ伝授

スルコト勿レ、其砲器ハ公義ヘ献呈スヘシ云々ノ旨、令シタルニ依リ、高島ハ已ムヲ得ス、井上左大夫・下曾根金三郎ノ兩名ニ伝授シタリ、然シテ兩氏ハ伝授ノ階級旧ニ依リテ設ケ、授クル所トナレリ、斯ル迂拙ノコトナリシカ、内外漸ク多事、外患目前ニ迫リ、本書ノ如ク秘事御筒云々ナト、解禁ヲ令シタル者ナリ、今ヨリ之ヲ論スレハ、笑ニ外ナシ、当時ノ形情思フベシ、○秘事御筒ト唱フル者ハ、如何ナル製式ナルヤ知ルベカラズト雖トモ、迂拙ニシテ兒戲弄物ニ等シキ者ナルハ、言ヲ俟タサルナリ、廣貫曰ク、日本ニ大砲ノ嚆矢大友氏ナルハ、歴史上衆人知ルカ如シ、同氏ト日州耳川之戦ニ、我カ藩ニ分捕シ、尔来藩庫ニ納メアリシヲ、廢藩後朝廷ニ献セラレ、現今靖國神社ノ境内遊就館陳列品中ニ在ルハ即チ是ナリ、

二七二 羽倉用九川路左衛門尉へ贈レル尺牘

贈川路聖謨 癸丑八月十六日

客月御帰府後ノ様子、追々人ノ申ヲ承リ候ニ、(千葉県)富津三里ノ暗砂ノ上ニ、台場御築立ノ儀建白有之、工費都テ

四百万両モ掛リ可申由、用九按ニ暗砂ノ上ハ捨置候テモ、異船通不申、船ハ暗砂ノ鼻ヨリ(横須賀市)猿島辺ノ間、一里余ノ所ヲ通ル事ニテ、其鼻ニ台場出来タリ共、異船ノ通ルヲ遠望スルノミ、四百万両金ハ幕府ノ事故厭ヒモ有間敷候得共、徒ニ金銀ヲ海中ニ擲チ、無益ノ至ナリ、今ケ様成不緊要事ノミ御建白有之ハ、吾兄ニモ不似合ノ事ト存候、因テ左ニ貴慮ヲ伺候、其意和戦ノ二ツ何レニ成リテモ、大造ナル日本ノ痛ミ、就中戦ト成リテハ、眼前ノ死傷夥敷、夫ヨリハ一寸遁レニ、先方年限交易ノ言ニ随ヒ候ハ、自然国禁ノ大体ヲ失ヒ、且往々ノ禍ハ戦ヨリ大ナルニ付、只逆モ防禦ノ術無之ヲ、上ニテ御悟有之、

上ヨリ和義ノ命下リ候様、仕成サル、御仕掛ニテハ無之哉、夫ニテハ誤ヲ君ニ負ハセ、自ラハ千歳ノ罪人ト成ルヲ避ケタル不忠ノ至リ也、然レトモ吾兄ニ於テハ、右様ノ負心事有ベキ共思ハレス、別ニ深意アルカト、此節迄黙止居タルニ、今以和戦ノ二儀一決ヲ不承、或人ノ申ニモ、老公(水戸公)及福山(阿部侯)・(久世侯)關宿二侯ハ、戦ト御決シ、其他ノ閣老ハシブ〜御同意、参政・監察モ一兩人戦ヲ主張シ、其他ハシブ〜同意ノ由、然

ルニ會計府ハ拳テ和ヲ唱ヘ、就中吾兄主張ニテ、夫故決定ナラサル由、然レハ前ニ察シタル処ニ不遠カト思ヒ申候、五十余年ノ旧誼故、御真衷伺度候、○或ハ先年和蘭王ヨリ書翰ニ、前三十年五大洲和平互ニ交易ヲ成スニ、貴國ノミ獨立シテハ、同盟諸國拳テ攻来ルベシト申文言ニ恐レ、戰テハ万々敗滅ト思フ成ベシ、案ニ和蘭ノ書翰、固ヨリ虚喝ニハ無之、肺腑ヨリ出タル事ナルヘシ、乍然聖人ノ道行ハレス、別ニ一教アル地ハ不殘、尚利風俗ニテ、毎年利ノ多少ヲ考ヘ、得不償失之拳ハ不致、仮令諸國申合攻来リタリ共、人種ノ尽ル迄ハ、其意ニ不從様子ヲ見セ候ハ、渠等モ無益ヲ知り、必ス捨去リ可申候、

神國ノ難有事ハ、一丁字ヲ不弁農夫迄モ異國人ト聞ケハ、歛犁モテ打殺サント欲スル根情甚頼母數、先年長崎ニテ、蘭人共我國ノ小兒ノ柱ニテ頭ヲ打、泣出セシニ、側ナル人惡キ奴ト柱ヲ叩キ候得ハ、夫ニテ泣キ止タルヲ見テ、日本ノ勇氣ヲ恐レタル由、今彼カ恐喝ニ恐レ、墨國其外ヘ互市ヲ開キタラハ、右等ノ風氣忽チ尚利ノ夷俗ニ變シ可申候、夫ハ下々ノ事、第一ハ喫喝テ互市ヲ始ル上ハ、四方ノ諸藩是ヨリ

幕府ヲ輕ンシテ、參勤ヲ怠ルハ必定ト存ル也、此節英異ト清國瀕海ノ諸地ヲ侵奪スルヲ見テモ、洋異ノ所望ニ、我邦ニテハ誠ニ危急ノ至リ也、吾兄老公ノ羽翼トナリテ、何卒懦弱ノ積弊挽回有之、士氣一新有タラバ、決シテ防禦難為成ト申ニモ有之間敷、國ハ少ナレドモ人口ノ夥敷ハ余リ他ニ不劣、此姿ニテハ全ク七子ヲ擲ニモ及申間敷、或人ノ申所ハ用九八信シ不申候、或人ハ老公御登城モ不遠相止、又々内豎宮人弄權ノ世ト可相成、菊園ノ羽翼タルモノ尽ク貶黜、又ハ流謫セラレタルニ懲リ、何事モ身ニシミ、建白無之ハ其故ナルベシ、乍然是ハ余リ吾兄ヲ、患失ノ小人ト見タルカト存候、只々と義ヲ主張シテハ、百世ノ謗リ遁レ難ク、何レ必ス勝難キ戰故、一人和ヲ主張シテハ、大体ニ於テ万々不可然ト、老公初被思召候テモ、押テ戰トハナサレ難ク、上下ノ所決往々大害有事故、後世ノ名ヲ恐レ、老公ハ退職ヲ願ハレ可申、タトヘ老公不被願トモ、水府藩中諸臣必ス御退職ヲ勸メ可申、當時ノ景状老公無之候テモ、將威挫ケ申間敷哉、邦内諸侯叛キ申間敷哉、墨・英・佛諸國素直ニ交易致シ、他ノ望ヲ越シ申間敷

哉、内豎宮人弄權政事ノ弊生シ申間敷哉、愚按二百患
蜂起、天下大乱ト存シ申候、畢竟ノ処和戰皆害アリ、
然レトモ戰ノ害ハ一時ニテ人心不離、和ノ害ハ天下乖
離、終ニ至

皇國徧滅不可不懼哉、我邦千古不易ノ

皇國、六七百年來將家執權往々出暗將有モ、然レ共未
タ曾テ一寸ノ地ヲモ夷狄ニ失ハズ、是誠ニ可称也、堂
々タル 徳川氏ニシテ、或石敬瑭ノ譏ヲ負フ事アラハ、
其臣タル者何ノ面目有テ衆人中ニ立ンヤ、諾和ノ事ハ
關係至テ重シ、仰キ望ラクハ吾兄忠ヲ尽シ、國ニ報シ
身家ヲ顧ミス、職掌謬ル事ナカレ、

川路左衛門尉(襲)ハ、當時幕吏中屈指ノ名望家ナリ、職
御勘定奉行ノ枢機ニ在リ、我公ハ殊ニ御懇交、時事談ノ
友タリシト云、曾テ或日一小冊ヲ懷ニシ來邸、之ヲ公ニ
呈シテ、羽倉カ所論時勢適否ヲ請ヒタリト、而シテ公ハ
他日御意見書ヲ送ラレシト云フ、惜ヒ哉、今其御書送ス、
故ニ、斯書ニ對セラレタル如何ノ御意見ナリシヤ、知ル
ニ由ナシ、○羽倉用九モ折節參邸拜晤ノ人ナリ、斯ノ書
意ノ御談モ果シテアラセラレシナラム、今之ヲ知ルニ途
ナシ、惜ヒ哉、

二七三 江戸府下諸家邸内砲台建設ヲ允ス

九月廿八日備前守殿御渡御書付

近来異國船度々近海へ渡來致、内海へ乘入候儀ニモ有
之候ニ付テハ、海岸通り屋敷有之面々、地理ニ応シ防
禦手当之儀、銘々心一杯ニ被申付、場所ニ依砲台等取
建候儀モ、勝手次第可被取計候、尤委細繪図面等ヲ以
テ被相伺、得差図候上取計可被申候、

右之趣海岸通り屋敷有之面々江可被達候、

九月廿八日

二七四 高輪・田町両邸ニ砲台建築ノ請願

当夏浦賀表へ致渡來候亞米利加船、又々來年可致渡來、
左候ハ、当夏細川(熊本侯)初俄ニ御固被仰付候通、在府
の同席(大広間)御固可被 仰付儀も可有御座哉、在府
少人数にては手当行届不申候間、以來異國船渡來之節
之 御固被 仰付候儀御座候ハ、兼て請持之場所等
承知仕置度、左候得は不行届なからも、右場所兼て見

分も仕、様子次第台場様之ものにてても取立置度御座候、
俄ニ被 仰付候進、違背可仕様ニハ無之候へ共、折角
被 仰付候ても、御手当詮立候儀無覚束奉存候間、此
段申上候、且又自由ケ間敷儀申上、恐入候へ共、遠方
之場所被 仰付候ては、在府の少人数にては、万事行
届申間敷奉存候、幸高輪・田町ニケ所、海岸之屋敷も
御座候間、右近所之固被 仰付候へは、少ハ行届手当
向相調可申哉と奉存候、此段も奉願候、乍然御吟味を
以被 仰付候得は、兎も角も奉畏候得共、領内多分之
海岸、殊ニ琉球島々迄も手広く手当も仕、長崎御手当
向も心得罷在候得は、多端之持場ニ御座候間、兼て伺
置候ても、十分之手当行届候儀無覚束奉存候間、何卒
屋敷二個所近辺之固被 仰付置候得は、別て難有仕合
奉存候、此段申上置候、以上、

丑九月十五日

松平薩摩守

此布達ニ対シ、田町二丁目ノ別邸ハ海岸ニ沿ヒタル故、
砲台建築ノ為メ、東面ノ埋築請願セラレ、不日シテ許可、
直ニ着手セラレ、落成ノ後六門ノ砲台建設、藩兵ヲシテ
警衛セシメタリ、○砲台建設ハ江川太郎左衛門・下曾根
金三郎等ニ計画セシメ、和蘭新式ニ則ラレタリ(埋地ノ凶

形等末川久平カ家ニ存ス)、是ヨリ先キ、浦賀港ニ米国船来
泊ノ際、高輪・田町ノ二邸ハ、自兵ヲ以テ警衛セムト請
願セラレ、幕府之ヲ允シタル故、他所ノ警衛ハ全ク免カ
レタリ、之カ為メ兵卒モ自邸ニ在リテ、弁ナリシノミナ
ラス、経費ニ於テモ大ニ減シタリ、国人其明ニ感シタル
コトナリキ、如此深慮遠図アラセラレシ故、埋地ノ請願
モ直ニ出願セラレタリ、其ヨリ尔後他所ノ警衛命セラレ
タルコトナシ、

二七五 洋式火技習練スベシ云々布告

武術修行之儀ハ兼々相達置候通、弥出精可致候、就中
砲術ノ義ハ、異国船防禦ノ要術ニ付、四芸(弓馬槍砲)^(刀カ)
四ヲ云フ) 同様修業可有之候、諸流ノ内西洋打方ノ義
ハ、近来開ケ候事ニテ、未タ致習熟候者モ少ク候処、
今般内海御警衛ノ為メ、西洋法ニ寄り、御台場御取建
相成候ニ付テハ、法術ヲモ手広ニ可被成置御趣意ニ候
間、其心得ヲ以西洋打方習熟ノ者江相談、諸流同様稽
古可致候、修業ノ道ハ銘々心付ケ方ニ寄り、及熟達候
事ニモ可相成儀ニ付、致稽古候上ハ、何レモ無惰怠相

勵候様可被致候、

右之通万石以下ノ面々へ、寄々可被達候、

九月廿八日

洋式砲術奨励ト共ニ、内海ニ(品川・田町・隅田川尻)砲台
築造ノ令ヲ発セラレタルハ、近年外国船浦賀以內ニ侵入
シ、時トシテハ内海本牧・品川近クニ乘込ミ、測量或ハ
砲發威嚇シタルコトモアリシニ依リ、斯ク一大事業ヲ起
サレタリ、其計畫タルハ、品川・田町・隅田川尻佃島辺
迄十ヶ所ニ、海中孤立砲塔建築セムトスルニ在リ、第一
着手ニハ品川沖ヨリ田町沖合トス、石材ハ伊豆地方ヨリ
運ヒ、土砂ハ御殿山ヲ崩シテ其用ニ充タリ、砲台ノ繩張
図式ハ、江川太郎左衛門・下曾根金三郎之ヲ掌レリ、実
ニ未曾有ノ大工事ナルカ故、其費用モ莫大ノ予算ナリ、
装置ノ砲ハ、本郷御茶水ニ在ル製造所ニ於テ鑄製セリ、
如此幕府ニ於テ、洋式ノ砲台或ハ砲術奨励シタルハ、之
ヲ嚆矢トス、○砲術モ稍ク公然奨励スルコト、ハナレリ、
是迄一家私業ノ如キ勸奨ナリシヲ、高島四郎大夫江川
太郎左衛門ヲシテ建論セシメ、国家ノ武備トセント、痛
論シタルニ因レリト云フ(高島カ建論ニアリ)

二七六 隊伍操練及騎戰奨励布令

遠藤但馬守殿御度

諸向隊伍調練之儀、近来追々被

仰出モ有之候ニ付テハ、御番方は勿論惣テ騎馬役之者
ハ、騎戰ノ駈引別テ專要ニ可有之、享保度ニハ騎馬・
勢子並騎射等之儀、厚キ御世話モ有之、前

御代々ハ犬追物御張行モ被為、在候事ニ付、夫々御趣
意之本意取失不申、習熟有之候様、向々へ可被達候、

十月九日

右通從 公義被 仰渡候条、不洩様可被相達候、

十一月

御家老座印

二七七 考証 鎌田出雲(正純)領分家来帶刀調練

允サレタル事實

嘉永六年癸丑冬、肝付諸所 太守齊彬公御巡見ニ付、
十一月廿三日領分仮屋御立場相成候、左候テ家来共調
練之儀モ、同月二十八日於志布志諸郷一所ニ被遊御視
候、尤私領之義ハ、是迄無刀ニテ御目通へ罷出来候得

共、此節ヨリ大小御免被仰付、領分ノ儀モ同様之旨、
前以御軍賦役ヨリ違有之候、

治世尔来門闕ノ家臣ヲ陪臣ト唱へ、取扱モ甚輕シ、君公
ノ御前ニハ、脇指ヲモ帶フコト能ハザルノ成規ナリ、同
シク士職ノ分トシテ、斯ク輕ンシタルハ、幕府カ諸侯ノ
家来ヲ陪臣ト唱ヘタルヲ、因由シタル者ナリ、公ハ此時
ヨリ帶刀ヲ允サレ、実用ノ演習專一ナル旨達セラレタリ、
陪臣等大ニ喜ヒ、資格ヲ進メラレタルノ思ヲナセリ、

二七八 幕府本藩へ軍艦製造ヲ依頼ス及製造数届

書

〔正弘、老中、福山藩主〕
阿部伊勢守殿ヨリ留守居呼出達書

此度大船並蒸氣船製造之儀、伺之通相達候、然処公義
ニ於テモ、追々製造被仰付候積ニ候得共、其筋ノ役々
迎モ、製造方不案内ノ儀ニ付、既ニ蒸氣船ハ薩摩守家
来へ製造御用被仰付候程ニテ、急速御製造難行届、薩
摩守ニテハ琉球船ト大砲船、其外大船製造方心得、今
度伺之員数早速出来致候都合ニモ候ハ、右之内差繰
両三艘、公義ヨリ入用等御下ケニテ、出来次第上納候

様ニハ相成間敷哉、強テ差支ノ儀モ無之候ハ、右之
通取計有之度旨、内々相達候事、

十二月廿三日

大船十二艘 当時軍艦ヲ大船ト通稱ス、以下尙同シ

内

三艘 長サ三十三間 横七間一尺六寸

三艘 砲 三十八挺 深五間五尺五寸

三艘 長サ二十七間 横六間一尺六寸

三艘 砲 三十四挺 深四間五尺五寸

三艘 長サ二十四間 横五間五尺三寸

三艘 砲 二十四挺 深四間一尺六寸

三艘 長サ二十間 横四間一尺五寸

三艘 砲 十二挺 深三間三尺三寸

蒸氣船三艘

内

一艘 長サ二十五間 横四間三尺

一艘 砲 十二挺 深二間一尺五寸車添

一艘 長サ二十間 横三間四尺四寸

一艘 砲 八挺 深二間一尺五寸車添

一艘 長サ 十八間 横三間一尺五寸

砲 六挺 深二間一尺 車 添

右之通追々致製造度、尤異船に不相紛為め、白帆に朱の日之丸の御印、小旗・吹拔、別紙図(図送え)之通造方を以て、異国通りに取捨仕度、如図左右欄板に取立、伺之通製造被仰付候は、日本海岸乘廻り、深淺等兼て相測り不申候ては、非常の場合難致弁別、仍之平常は運送船に相用、人数要用の分為乗付、致習熟置度、此段御差函奉伺候、以上、

十二月 松平薩摩守

^{〔付札〕}可為伺之通候、尤帆印等は、御国之惣印取極、追て可被仰出候間、可被得其意候、

大船十二艘

内三艘

長サ三十間 横七間一尺八寸

深サ五間二尺 砲数三十八挺

砲門三十八、二段

内三艘

長サ二十七間 横六間三尺六寸

深サ四間五尺五寸 砲数三十四挺
砲門三十四、二段

内三艘

長サ二十四間 横五間五尺三寸六分

深サ四間一尺六寸二分五厘 砲数十四挺

砲門十四、一段

内三艘

長サ二十間 横四間五尺五寸五分

深サ三間三尺五寸四分五厘 砲数十二挺

砲門十二、一段

蒸氣船三艘

内一艘

長サ二十五間 横四間三尺九寸

深サ二間五尺二寸 砲数十二挺

砲門十二 車

内一艘

長サ二十間 横三間四尺四寸二分

深サ二間一尺五寸六分 砲数八挺

砲門八 車

内一艘

長サ十八間 横三間二尺五寸二分

深サ二間一尺 砲数六挺

砲門六 車

右之通追々致製造度、尤異国船ニ不相粉ため、白帆毎ニ朱にて日之丸相印、小旗・吹貫等別紙絵図面之通、造法は異船之趣ニ取仕立、如凶白木にて左右ニ欄板取立申度、伺之通製造被仰出候は、日本海岸乘筋浅深等兼て相測置不申候ては、非常之場合難致弁別、依之平常運送船ニ相用、人数要用之分乗せ付、為致習熟置度此段得御差函候、以上、

十一月六日

松平薩摩守

此時水戸侯ノ言ニ、薩摩カ大船ヲ造リ、島津斉彬文書にて補正一走浦賀ニ乗リ

入り、然シテ品海ニ出没シ、關ヶ原ノ旧憤ヲ発スルニ至

ラハ、徳川家ハ奈何セム云々ト戯レラレシトナム、

公ノ洋式大船ヲ製造セラレムトノ御念慮ハ、一朝一夕ノ

コトニアラス、其御志念ノ厚リシハ、第一御領国ハ東南

西ノ沿海、多クハ大洋ニ臨ミ、或ハ琉球国ヲ始メ洋中孤

立ノ大小島数多ナルカ故、不虞ノ變ニ備フルハ、船舶ノ

弁ニ外ナク、或ハ運輸ノ弁否、経済上ノ要点、或ハ風早

蝗ノ災民命救恤モ、船舶ノ弁ニ頼ラサルヲ得サルカ故、

積年心志ヲ勞シ玉ヒシト雖トモ、幕府ハ大船製造ノ制度ヲ設ケ、三櫓桅ヲ禁シ、遠冲航海ヲ停メ、僅ニ日本沿海ノ航道ヲ定メ、不幸ニシテ清国・朝鮮・台湾島ニ漂流セシ者ハ所刑シ、或ハ漂流ノ始末ヲ糺彈スル等、犯罪人ニ等シキ処置ナリシ故、已ヲ得ス禁令ニ屈從シタルハ、一般悉知スル所ナリ、然ルニ近年外艦屢各処ニ出没シ、通信・貿易ヲ請フニ至リ、船艦ノ弁ヲ謀ルハ、一日モ忽ニスヘカラサルヲ感シ玉ヒ、嘉永四年ノ春御家督御帰国ノ際ヨリ、洋式ニ模シタル三櫓ノ大船ヲ試造セシメ、外飾ハ從來ノ形式粧ヒ、内部ノ構造ハ洋製ニ倣ヒ、伊呂波丸ト名ケラレ、琉球各島運輸ニ充テ、航海ヲ修練セシメ玉ヘリ、之ヲ初メトシテ、大小船舶ノ試製数艘ニ及ヘリ、然リト雖トモ幕府ノ嚴禁ナルヲ以テ、陽ニ其製造ヲ研究スル能ハス、然ルニ世態日ハ日ニ切迫、防守ノ必要ナルニ到リシ故、嘉永五年ノ夏頃、水戸・越前・佐賀・宇和島ノ諸侯ト謀リ玉ヒ、閣老阿部侯ニ建言シ玉フコト数回ナリシモ、幕府ハ旧法ヲ墨守シテ破ルコト能ハサリシカ、公ハ尚国家護衛ノ要器ナルヲ、大小幕吏ニ説キ解キ玉ヒ、遂ニ解禁ノ令ヲ発セシムルニ到レリト、茲ニ於テ積年ノ御志望瓶メテ達シ、差向大船十二船ヲ製造セムコトヲ届ケ

出ラレタリ、是ヨリシテ、幕府ハ前書ノ如ク迷夢ヲ覺シ、依頼懇請スルニ至レリ、此時ハ速クモ三四艘ノ製造ニ着手セラレシカ故、其懇誂ニ応シ玉ヘリ、当時憂國ノ人士ハ公ノ卓慮ヲ感賞シタリ、双ンテ蒸氣船ノ試製モ、洋書ニ則リ試造シ玉ヘリ、江戸ニ於テハ洋学者川本幸民・杉田成卿ニ洋書ヲ翻訳セシメ、実業ハ肥後七左衛門・梅田市藏ニ命セラレ、鹿兒島ニ於テハ宇宿彦右衛門・中原猶助及廣貫等奉命、磯邸ノ近傍海浜ニ製造場ヲ設ケ(現今紡績機場ノ海浜砲台ノ辺ナリ)、許多ノ職工ヲ集メテ試造シ、遂ニ機関ノ運動ヲ見ルニ至レリ、然レトモ固ヨリ不完全、實用ニ充ツルニ足ラス、一小雛形ニシテ機関ノ活動ニ過キサリシ故、廣貫ハ安政元甲寅ノ夏長崎ニ出テ、伝習ノ命ヲ奉シ、数名ノ職工ヲ従ヘ、和蘭人ニ就テ、其概要ヲ聞知スルニ至レリ、此亦稍見聞ヲ広フシタリトモ云フヘクシテ、大ニ製造ヲ開クニ至ラサリシハ言ヲ俟タス、然リト雖トモ、公カ日本ニ於テ大船及汽船ノ創製者タリシハ、歴史上記スベキノ一大美事ナルハ無論、憂國ノ至情ト卓見ノ非凡ナルハ、大小三百諸侯ニ於テ、先魁ノ榮名千載不朽ト謂テ不可ナカラム、○是ヨリ先、齊興公モ洋式ノ舟船ヲ製セラレムト、深見休ハナル者ニ命セラレ、

大脚舟及ヒ大船試造セラレタリ、素ヨリ製式完全ナラスト雖トモ、内海運輸ノ用ニ足レリ、○大脚舟ハ内海ノ遊舟ニ供ヘラレ、播龍丸ト名ツケ、屢試乗セラレタリ、之レ弘化二年ノコトナリキ、如斯尙公積年ノ御志望ヨリシテ、遂ニ全国貴賤舟船ノ弁ヲ得、頑固ノ陋習ヲ破リタルハ、全ク本藩ノ嚆矢タルハ、悉ナ人ノ知ルカ如シ(製造ノ歴史ハ旧邦秘録ニ詳記ス)

因ニ記ス、本藩ハ全国第一ノ海國ニシテ、船舶ノ製必
要ナルカ故、往々其議ヲ起スモノアリシト雖トモ、識
見ニ乏シク或ハ口ニ唱フルモ、奮然業ヲ起スノ氣力ア
ル者絶テナカリシニ、廣貫カ実父寺師次右衛門正ナル
モノ多年研究尽心シテ、文政七八年ノ頃藩庁ニ請ヒ、
府下大口ノ海浜ニ於テ洋式ノ大船ヲ製造シ、琉球諸
島ノ運用ヲ試ミタリ、其製式ハ洋船ニ擬ヒ、龍骨ノ構
造ニ三橋繩梯ヲ設ケ、舵ノ如キモ洋式ニ似ヒ、從來ノ
製ニ比スレハ堅固弁利ナリシト、名ツケテ伊呂波丸ト
唱ヘ(或ハ渙象丸ト唱ヘタリ)、琉球諸島ノ運用ニ供シタ
ルニ、僅々三年有余ニシテ、遂ニ七島沖ニ於テ難風ノ
為メ破壊シタリト、是ヲ本藩ニ於テ洋製模造船ノ嚆矢
トス、其間正容ハ和漢洋古今造船ノ法ヲ研究シ、製式

航海ノ術ヲ蒐集シ、考案ヲ附シタル書數十卷ヲ著セリ、名ツケテ渙象論ト云フ、附スルニ図形数十葉、則チ伊呂波丸ノ縮図モアリ、当時之ニ力ヲ添ヘタルハ、皆吉鳳徳・兒玉守蔵及御船手船大工頭福崎某、或水引郷船間島宅間喜三左衛門（船間島ノ船人宅間喜三左衛門ト云、外国漂流ノ事実記アリ、茲ニ略ス）等ノ数名ナリシト、○伊呂波丸製造ノ費途ハ、皆吉ナル者及ヒ上町ノ商賈西村作次郎ナル者負担シ、製造ハ正容担当シタリトナム、製造ノ費用及航海ニ至ル迄ノ入費、凡ソ二千兩ニ垂タリト、從來ノ大船乃チ二十三反帆ト唱フルモノハ、製造費凡一千兩ヲ以テ足レリトセシモノナリシカ、伊呂波丸ハ凡二千兩ニ垂タリシハ、構造異状ニシテ堅牢ナリシ故、費用多カリシト云フ、然ルニ公カ洋式造船ノ御志念ヲ起サレシ時、何人ノ上言セシヤ、正容カ著書アルヲ聞シ召シ、奉呈スヘキ旨実兄寺師宗道及廣貫へ、御側役三原藤五郎ヲ以テ諭達セラレ、亡父カ心カヲ竭シタル事蹟ノ湮滅セサルト、公カ国家ノ為メ大業思召立チ玉ヒシハ、実ニ感激流涕措ク所ヲ知ラス、著ス所ノ数十卷及ヒ図画数十葉ヲ奉呈セリ、然テ後賞詞金若干・反布四端ヲ下シ玉ヒタリ、是レ正容カ積年

ノ勞苦世ニ顕ハレタリト謂フベシ、実ニ宗道・廣貫カ榮ト云フベシ（寺師正容カ造船事実、及ヒ宅間カ外国ニ於テ、船舶製造ニ心ヲ用ヒタル事実ハ、別ニ詳記ス）

二七九 考証 鷹司政通公書牘 齊昭（水戸公）へ嘉永六癸丑九月廿四日

薩摩中將（斉彬公）ヨリ、右府（近衛忠熙公）へ書翰到来候、軍船御免ノ事從京都関東へ被仰進候様、内々大名申合被願候得共、兼テ申入候通、節鉞ノ事大樹へ御マカセ、愚老是非ヲ知ラス候間、何分御為メニ相成候義ニ候ハ、関東ニ被申立可然存候、尚又相合候テ、貴卿マテ御咄ハ可申入答置候、以武伝所司代へモ話ハ申サセ候、仍内々答候旨申入候事、

記ノ如ク、近衛公へ贈リ玉ヒシ御書送ス、御書旨知ルニ由ナシト雖トモ、内勅ヲ幕府ニ下シ玉ハムコトヲ冀ハレシモノナリシト云フ、

二八〇 道中御行列ニ鉄砲備ラレムトノ伺書

近来異国船度々近海江渡来ニ付、御警衛向段々手厚被

仰渡、其上先達て万石以上之面々、其御地江鉄砲差廻候儀、苦ケ間敷哉之旨御噂有之候段、無急度致承知候、然は此節柄、何方江欽異国船渡来も不相知、遙々無双之遠国、若哉於道中何様急変之御用も難計候付、以来道中筋鉄砲拾挺為持候様致度、此段相伺候、以上、

九月十五日

松平薩摩守

二八一 御付札

〔付札〕
「可為伺之通候」

御書付一通御付札有

但近来異国船度々近海江渡来ニ付、御警衛向手厚被仰渡候付、以来 御道中筋鉄砲拾挺為御持被遊度、御伺之儀ニ付、

去月

御用番

〔兼全、老中、西尾藩主〕
松平和泉守様

御用人

田中鐵兵衛

右より被成御達候儀御座候間、今日中言人罷出候様、

御用人中より之切紙致到来、罷出候処、

御書付ニ被成御附札、右御用人を以被成御渡候間、御国元江可申上旨申述置候、

御書附差上申候、

右之通今晚私相勤、此段申上候、以上、

丑十二月十日

〔兼辨、江戸留守番〕
早川五郎兵衛

近江赤平様

追て申上候、被遊 御承知候上、表方以御使者 御請可被 仰達儀と奉存候、且又大御目付衆江御届之

儀は、毎之通御留守居附役名前之書附を以、御用御

〔兼辨、大目付、海防様〕
頼深谷遠江守殿江申出為置候、此段も申上候、以上、

二八二 参覲往来道中銃器ヲ備ム云々内伺

近来異国船度々近海江渡来ニ付、

御警衛向手厚被仰渡、其上万石以上之面々、御当地江

鉄砲差廻候儀、苦ケ間敷哉之旨御噂御座候趣、無急度

於国許致承知候付、此節柄道中筋如何様急変之儀も難

計御座候間、以来道中筋行列之内江、鉄砲為持候様仕度

旨、先達て奉願置候処、未御差図無御座、然処薩摩守

儀、来年（安政元年甲寅）参勤時節之儀相伺候付、定例之通四月中可致参府旨可被仰出哉、左候得は、来寅二月中旬国元発足仕心組之由、此節申越候、依之前条此涯御差図不被成下候ては、手当向ニも可相拘候間、何卒速ニ奉伺候通被成御下知被下度、此段乍恐御内意を以申上候、以上、

御名内

十二月五日

早川五郎兵衛

書付一通

但御道中筋、以来鉄砲為御持被遊度御願被置候処、今以御差図無之候付、御追願之儀付私名前、

先月

御用番

松平和泉守様

御用人

西八右衛門

右江持参仕、右御用人江致出会、先達て中御願被置候御道中筋鉄砲為御持被遊度御願之儀、今以御差図無御座候付、あまり御催促ケ間敷奉恐入儀ニ御座候得共、実々別紙書付を以奉追願候通ニ御座候間、何卒急速御

差図被成下候様仕度旨、相応申述差出候処、和泉守様被成御承知、書付御預被置、追て御挨拶可被成旨、右同人を以被仰聞候、

右之通今朝私相勤、此段申上候、以上、

丑十二月五日

早川五郎兵衛

近江様

追て申上候、本文ニ付ては、最初御書附も阿部様入御内見置候末之儀ニ付、猶又右江持参仕、御用人渡邊総兵衛江致出会、演説之上、書付入御内見、且は兼て御内用御頼之儀ニも御座候間、前条之趣厚御令、早目御差図御座候様、私より御内意を以猶又申上候旨、申述差出候処、伊勢守様右御内意之趣は被成御承知、書面何之思召寄も不被為在候間、和泉守様御方江可被差出旨、右同人を以被仰聞候付、本文之通相勤為申儀ニ御座候、此段も申上候、以上、

近来異国船度々近海江渡来ニ付、

御警衛向段々御手厚被仰渡候間、於道中何様急変之儀も難計候付、以来薩摩守道中筋鉄砲拾挺為持候様仕度旨、今般伺之通被仰渡候、依之参勤・御暇之節、道中

行列之内江為持申候付、右之趣箱根・今切・碓氷・福
嶋御關所江兼て御達被置被下候様仕度奉願候、此段申
上候、以上、

御名内

(神奈川縣) 靜岡縣 (愛知縣) 同七
(畿内) 江戸留守處
半田嘉藤次

十二月十四日

書附一通

但近来異国船度々近海江渡来ニ付、御警衛向段々手
厚被仰渡候間、御道中筋御鉄砲為御持被遊度、
御伺之通被仰渡候付、箱根其外御關所江、右之趣
御達被置被下候様と之儀ニ付、私名前、

御用番

松平伊賀守様

御取次

飯塚勝之助

右江持参仕、演説之上差出候処、被成御落手候旨、右
御取次を以被仰聞候、

右之通今朝私相勤、此段申上候、以上、

丑十二月十四日

半田嘉藤次

近江様

御書付一通

御用番

松平和泉守様

右は近来異国船度々近海江渡来ニ付、御警衛向手厚被
仰渡、其上万石以上之面々、御当地江鉄砲被取寄候儀
不苦哉ニ御触達有之、以来、御上下之節、御鉄砲拾挺
為御持可被遊、右付御願書爰元調被仰付候付、御都合
能御願濟相成候様可取計旨被、仰付越、御留守居・御
右筆江致吟味、去方(去方トハ御右筆ノ内ニ御内用頼ト云
ヘルアリ、之レノ通稱)聞合之上、九月十五日御日附被仰
付、先月朔日阿部伊勢守様并御用番松平和泉守様江も
御内見之上、和泉守様江表向被差出候段は、先月二日
式日中急便(飛脚大急キ・中急キノ別アリ、大急キハ江戸ヨ
リ鹿児島迄八日八時、中急キハ十四日六時トス)申上越候通
ニ候、然処
公辺御大札等ニて、涯々運兼候御模様ニ付、尚又御留
守居江致吟味、別紙案文之通、御追願書為差出候処、
去ル十日和泉守様より御留守居御呼出ニて、早川五郎
兵衛罷出候処、御願書江可為伺之通旨被成御付札、御
取次を以被成御渡候付、御国許江可申上旨申述置候段、
別紙首尾書之通申出候付、

宰相(齊興公)様達

御聴、向々江申渡候、就ては

御上下之節、

御道中御行列之内江為御持被遊候ニ付、右之趣箱根・
今切・碓氷・福嶋御関所江、兼て御達被置被下候様、
是亦別紙案文通

御名内書面取仕立、去ル十四日御用番松平伊賀守様江
為差出候処、被成御落手候段御取次を以被仰聞候旨申
出候付、御留守居首尾書等六通相添、此段申越候条、
被達

貴聞、其許申渡之儀は何分も可被取計候、以上、

但御願濟ニ付ては、

御承知之上、表方御使者を以御請可被仰達儀故、
往返日積を以、其通取計可仕候、

丑十二月十七日

島津右門頼久

末川近江平久

島津豊後頼久殿

川上筑後頼久殿

島津石見頼久殿

樺山伊織頼久殿

治世以來徳川家ノ政略ハ、各藩ノ氣力ヲ脱キ、柔弱ノ風
ニ変セシメ、無事太平ナラシメ、榮利ヲ保ムトスルニ外
ナシ、茲ヲ以テ百事任抑ヲ事トシタルカ故、人心知ラス
識ラス委靡衰弱、剩ヘ諸侯カ參觀交代途中、鹵簿ノ如キ
モ制限ヲ立、虚飾ニ流レ、弓槍雉刀ノ類ハ外飾ヲ事トスル
ノ令ヲ布キ、銃砲ヲ鹵簿ニ備フル等ノコトヲ禁シタリ、
本藩ニハ參觀ノ路次、大坂迄ハ小銃五六挺ヲ備ヘ、東海道
ハ之ヲ禁シタリ、元禄ノ頃荒井駅ノ関門ニ於テ、備ヘ銃
ヲ取押ヘタルニ依リ、預ケ置トナリ、維新前マテ依然預
ケアリシト、関守ハ預リ品ナル故、折節手入レトモ為サ
、ルヲ得ス、厄害物ナリシト云フ、一笑スヘキコト、モ
ナリ、斯ル政略ナリシ故、実ニ囊弓函鏃ノ世ナリシニ、
米艦渡來示威嚇脅ノ挙動ニ驚怖シ、城下ノ盟ニ等シキ条
約ヲ結ヒ、人心激動、遂ニ二百年來ノ政權ヲ失ヒシノミ
ナラス、家名ヲ穢スニ至レリ、氣運ノ然ラシムルトハ云
ヒナカラ、畢竟任抑權略ノ余殃トモ云フヘキナリ、如斯
ノ事実ナルモ、世態物騒ナルカ故、公ハ時勢ヲ申述セラ
レ、鹵簿ニ銃砲ヲ備ラレムト請願セラレシニ、幕議決セ
サルコト数旬、何等ノ指令モナキカ故、前記ノ如ク様々
ノ手段ヲ尽サレ、遂ニ許可ヲ得ラレタリ、其備フル数ハ

嘉永6年(1853)

僅ニ拾挺ニ過キサリシト雖トモ、其実数ハ予備ノ名ヲ以テ四拾八挺ヲ函ニ納メ、荷物ノ形ニ装ヒ、臨機ノ用ニ備ヘラレ、野戰砲三門荷作リシテ前後ニ備ヘラレタリ、○小銃ハゲベルノ新式ニ則リ製造セラレ、鹵簿ニ備フル者ハ從來ノ虚飾ニ習ヒ、赤毛布(猩々緋袋ト通称ス)ノ囊ニ納メ、卒ヲシテ之ヲ肩担セシメタリ、從テ彈藥ノ如キモ応分ニ備ヘ、或ハ三貫目ノ輕臼砲二門モ前後ノ荷物ニ粧ヒ備ラレタリ、如此抑庄ノ政策ヲ施シ、一家ノ榮福ヲ保タムトスル、一笑ニ付スヘキコトナリキ、

〔表紙〕

齊彬公史料

市來四郎編

嘉永六年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料（紙數百二十七枚）」の記載あり〕

目録

- 齊彬公国老新納駿河へ与ル書牘一・二
- 齊彬公国老末川近江へ与ル書牘一〜五
- 天璋院殿將軍家定公ニ結婚ノ発端
- 齊彬公軍艦製造御願書
- 参考 田原陶翁家記
- 琉球国ニ米国軍艦渡来ノ事実具申
- 国老新納内藏駿河旧名海防意見

海防施設ノ件軍役方並大目付等へノ論書
調練論書

参考 鎌田正純家記抄

参考 江田平蔵日記抄

浦賀与力合原綱蔵ヨリ聞書

琉球船御造立ノ儀ニ付御書附一通

琉大砲船ト名ケタル軍艦創造ノ始末

琉球船新規御取建ニ付書附

琉大砲船創造届書ニ付キ末川近江申達

琉球国へ異国船渡来ノ事実具申照会

薩州之風聞一本琉球風説書

節儉布令

国老新納駿河意見新納家記

宮古島ニ於テ英国船破壊ノ届書

亜米利加軍艦那覇港ニ来ル

久米島ニ米国船渡来届書

琉球国那覇沖へ火輪船二艘来ル届書

薩摩下甕島へ異国船通航届

琉球国へ亜米利加船渡来届書

琉球那覇ニ米国軍艦四艘渡来之急報

琉球那覇ニ垂船渡来提督上陸好友ノ申込事実届

琉球那覇へ十月六日異国船三艘着来ノ向届

琉球国内大島へ六月五日火輪船三艘卸碇上陸届書

琉球那覇へ六月七日異国船二艘卸碇品々申出候届

安田助左衛門日記鈔

二八三 齊彬公国老新納駿河へ与ル書牘一・二

御直書 一封

右之通被遣候間、私ヨリ御内々御廻シ申上候様被

仰付候、尤モ細々被仰遣度被思召候得共、色々ト御用

多ニテ何分御認取被遊兼候間、御用透之節々御認置被

遊候テ、追テ可被遣候間、其段私ヨリ申上越候様被仰

付候、且亦御内々之御事故、仙波市左衛門迄、御内用

封ニテ差上候間、左様御承知可被下候、以上、

四月四日 山田壮右衛門

〔朱〕
〔原書写〕 駿河新様

嘉永七年寅四月四日之御書、同月二十五日中急キ到

着、山田添書を以仙波氏より受取、尤当務被仰付、

初て頂戴候なり」

一筆申達候、愈無事珍重存候、扨壮右衛門迄申越候条

々之心得申遣候トヨリ、調練等之儀事イソキ、跡モ

トリニ相成候テハ不宜候間、能々勘考ノ上可取計候、

一下町出火下町名山堀辺
出火ヲ云フニ付テハ、新役之上一人ニテ、別テ

心配之事ト存候、万事無手抜可取計候、

一産物之義、菓種類多分之焼失、人命ニモ掛リ歎ケシキ

事ニ存候、少シモ早ク疏地在合之品取寄備置候様可致

候、産物方焼失貨物損失之義、歎ケ敷事ハ勿論ニ候得

共、反布類余リ過分ニテ抜荷之憂有之処、此節之処ニ

テ、先其憂ハ無之、以後疏地ヨリ渡来候トモ、新規ニ

相成候姿ユヘ、此節反布等之取扱、万端尽吟味改正有

之度時節到来ト存候間、以後罪人不出来様、趣法立直

候様可致候、

一産物方場所之儀モ、以町便申遣候トヨリ、築地名名山堀ニア
築地御蔵内ニ移サレテ
現今ノ新地島居町辺ナリ

第一取締ニ宜敷、火災之憂モ少ク候間、此度ハ仕来リ

ニ不泥、従来公私宜敷候様趣法相立候様可致候、

一一体長崎商法之儀ハ、琉国救助之為ニテ候間、利益之

分は不殘遣候テ、可然道理之処ニ、旧来ノ仕来リニテ、

産物利潤莫大之事ニテ、琉球之救ハ表通り計リ之姿ニテ、実ハ

公辺ヘノ願立トハ相違之事ニテ、近年ノ仕来トハ乍申、自分ニハ歎ケ敷存居候処、此節之到来モ全ク天災之事ト存候、以後之処ハ追々吟味之上、利潤不残ニモ不及候得共、三分ノ一ツ、ハ、琉国ヘ遣候様琉球城方ハ利純三分一ヲ賜フニモ致候ハ、加様之天災モ有間敷道理ニ候間、此節吟味為致度候得共、高輪齊興其外急々申談モ難調意味御座候、時節見合申出ト存候間、極内考之程申入置候、其方存付モ候ハ、考之程申遣候様存シ申候、

一 此節産物方用向多クト申処ニテ、東郷勇助鷹澤ノ名ア増掛申付候間、篤ト為致吟味宜敷可取計候、

一 産物方是之勘定不宜候間、初発ヨリ致候様、市助野友ヘ相達置候、追々出来可申ト存候、此度焼失ニ付テハ、初発ヨリノ勘定ハ前文通ニテ、当年ヨリ改正ノ上、以来年々外向同様勘定座嚴重ニ有之方、取締ニ可宜ト存候間、今日便申遣候様申付候条、是又吟味ノ上、宜敷可取計候、

一 木綿織屋ノ儀モ此節引取申付候、右ハ不用之反物押付申請為致、其外末々及迷惑候ヨシ、且鳥目錢ノ一唱ノ儀モ

有之、引取申付候間、町人共之内ヘ道具類等申請サセ、国用不差支様可申付候、且未納之分表ヨリ及掛合候通り、大粧之分ハ上納トノ吟味ニ候得共、実ハ不得心ニ候間、成丈ケハ被下下与通語ノ切ニテ上納為致、可然分ヲ上納為致候処ニテ、趣法方ヘモ可申達候、趣法ハ道理ヨリ利益ヲ先ト當時藩吏ノ習風、調所カ致候習風ユヘ、其心得第一ニ存候、尤被下切ニテハ、多分之損失ト存候得共、士商ノ格式士商ノ分判別云々ノ御書ニ明ナリ相立候様ニトノ趣意ニ候間、能々心得取計候様可致候、

右之外申入候義ハ、野元一郎藩序便ヨリ可申越候、以上、

(安政元年)
寅四月四日

二八三二
御直書 一封

右之通御内内被成下候間差上越候、此段申上越候、以上、

(安政元年)
四月廿九日

山田壮右衛門

駿河様

一筆申入候、愈無事珍重ニ存候、然ハ異船之儀ハ重富

久光公へ細事申遣候間、同方ヨリ見セ可申候、誠ニ可歎
ヲ指ス久光公へ細事申遣候間、同方ヨリ見セ可申候、誠ニ可歎
光景ニ御座候、

一 虎壽丸公世子 抱守左衛門島津 交代モ有之候間、今一人見
立申度、此方ニテ吟味モ可為致候得共、意味モ御座候
間、先内分其方ニテ篤ト取調、両三人名前申遣候様可
致、

一 軍賦役ノ儀ニモ、内々両三人取調申遣候様可致候、
一 其外豊後島津・武兵衛山ヨリ及掛合候、
一 其外追テ可申入候、以上、

(安政元年)
四月廿九日

二八四 齊彬公国老末川近江へ与ル書牘一々五

二八四ノ一
一 屋敷中取締第一の事、
一 無用之他出・集会等可取締事、
一 文武之諸芸時々可致見分事、
一 お篤天璋 参府之節は、追々国元より可申遣候、
一 異船内海へ乗込候節見計、新御殿英艦君御部 初子供・女
中之面々、澁谷澁谷村へ追々可遣候、尤其節之様子次第、
辰之口阿部 へ可致内達候、

一同断之節は田町第一と心得、兼て用意可心掛候、此程
辰之口へ田町屋敷を目当ニ致手当置候間、被仰付候ハ
、何時ニても人数可差出申置候、
一 異船参候ハ、早々以町使申越し、時々委細可申遣候、
万事之儀ハ差掛無掛念可取計候事、

丑五月朔日

近江へ

二八四ノ二
用事

近江へ

一 筆申入候、愈無事珍重存候、道中無滞藤井駅へ致止
宿候、追々大暑にて難儀いたし候、昨夜も申遣候異国
船の儀、今日表向届申越候間、直に差し通し候、滞留
英人の方は、可掃光景にて宜しく候へ共、又々此節の
儀、疏の方は先つ無事にて仕合に候へとも、浦賀の儀
如何とはなはた掛念に存候、異船渡来も候へは、無手
抜聞き合せ、追々可申越候、其方はしめ心配察申候、
立前申候通り、万一異船内海へ可乗込様子に候へは、
都合能芝女中の儀は、澁谷へ遣はすべく候、若し多人
数にてきはけ兼候節は、櫻田も然るべきなり、何分都
合次第掛念なく可取計、万一田町等の固め被仰出候も

計りかたく、其節も時宜次第掛念なく十分に可取計候、たとへ打ち合候様成事候とも、此方より手初不宜、差
 凶丈夫に承候上の事と存候、夫れ迄の事なく、大分御
 聞濟の方か、又は帰帆とは存候へとも、必ず油断無之
 様專一に存候、島津者真高輪へ御伺、万事可取計は当然に候へ
 とも、非常の事、其時臨機応変第一の事故、其心得に
 て少しも掛念なく可取計候、何分にも不容易時節と存
 候、

一 於篤参府等の事も、直之進江武兵衛より申越し候とは
 り、東海道通行むつかしく候ハ、木曾といたし候、
 夫れ迄には可相濟候へとも、念の為め申入候、其地の
 様子次第可取計候、何分にも弥渡来の上は、度々様子
 申遣候儀專一に存候、六月初旬には可参やと存申候間、
 浦賀へも手も廻はし、様子万々承り候様いたすべく候、
備後 参府 西丸 留守 居
 下首根事、浦賀へ参り居候間、夫れへ向け人を遣はし
 候へは、通路むつかしき事は有るましくと存申候、中
 山様子も追々可申遣候へとも、其地の様子も万々可申
 越候、取込要用迄申入候、以上、

五月廿九日

藤井 藤井 馱ヨリ

一 筆申入候、残暑之節愈平安珍重存候、此方相変事も
 無之静謐御座候、扱異船の儀に付ては品々心配の儀と
 察申候、手当都合も宜しく候よし、差凶行届候故と大
 悦候、又々疏地へも参候よし、其後の左右いまた不相
 分候、八九月には必定可参事と存申候条、折角無手抜
 兼て申談し專一に存申候、

一 公義御大變家慶公 義去儀、不容易時節、別して当惑至極に存
 候、彼是之心配察入申候、

一 右に付き、お篤大瑞 院殿参府の儀、如何と存候へとも、此

節延引候ては、世上の間へも如何、其上此起り右大將
聚定 公様・廣大院家齊將軍 御台所様の御血筋御好と申儀より起り候

事故、却て彼是なく相調候も難計存候間、矢張定め通
 参府為致候心得に御座候間、其処にて直之進勝手方用人 平直之進

へも申達手当可致候、然ながら七月中御発に相成候得
 は、八月の発駕はむつかしくと存候、將軍 義去 後 五十五日ヲ云五十日

さへ相立候へは、発駕有之差支も有るましく、以嘉藤
留守 居 次 田 嘉藤 次次 荒井へ内々聞合候様いたし、早々可申越候、

將軍宣下手續等之儀も聞糺し、追々可申越候、当年中
 の儀と存申候、

一 書翰和解頭米利 幹書も出来、追々諸大名へ御渡にて考の程御

尋之よし、右書翰御渡に相成候は、早々可遣候、何

分軍船造立第一の事と存申候、右門鳥津・隼人鳥津・四

本四本次郎左衛門久福・詰之儀も、此節豊後鳥津より可掛合候間、高

輪高輪齊興公御聞濟と相成候様可取計候、此節は非常之儀、

物入厭候時節には無之と存候、田町屋敷海岸も其俣に

いたし置、万々一の節は石垣下へ乱杭打立、端舟不近

寄様手当可然候、作事方無用の材木取集置可然、又当座

台場と申候て、竹にて図の如く、



高サ六尺か

五尺位、差渡一尺五六寸に駕籠拵にて、中に土を入れ

候仕方も御座候、左候て杭にて堅め候て宜敷、右様の

品もそろ／＼拵置候ても可然、是は竹下竹下清承知可有

之、又木にて取立候台場も御座候、能々吟味可致置候、

水戸老公へ御委任に相成候へは、無相違打払と存候間、

右様の儀も無相違手当第一に存候、竹下不分明に候は

、真田家来佐久間修理へ竹下遣し聞合候様可致候、

未夕琉球の一左右無之候間、相分兼候へとも、大かた

八九月頃可参、其節迄御返事御治定無之候は、色々

可申立と存候間、手当第一の事と存候、

一唐国の儀も追々承知と存候、来年よりの渡唐船琉球王年

州唱へ前船福へ出ス 如何可有之や、甚々心配至極に存申候、唐之

通路無之候ては、琉球の立行心配なる事に存候、猶ほ

追々可申遣候へとも、要用迄早々申入候、乱筆推見可

致候、以上、

七月十日

近江へ

猶ほ以て、当秋末より東目日岡二州ヲ海岸巡見の心得

に候、然るに此の度の御大變目上連祿スにては如何と存候

へとも、海岸第一の時節にて候間、構ひなく巡見然

るへくや、是又甚之丞御役龜山へ承候て可申遣候、若

し届候方宜敷候は、御時節柄に候へ共、海岸第一

の御時節故、巡見いたし候段届候事御届書前と存候、

何分宜敷取計可申遣候、此節柄の事故、屋しき中に

も、弥遊行・酒興不致様相違候て可然事と存候、先

は早々申入候、以上、

二八四ノ四

〔ウハ書〕
「末川へ」

一筆申入候、愈無事珍重存候、此方無異静謐ニ候、扱

此度魯西亜書翰も見申候、少々存寄も候間、近便ニ上

書道ノ御上書送ス事柄知ニ由ナシ、可致候、相違候へ、直ニ辰ノ口阿部へ可

差出候、

一諸家海岸の屋敷手当の事も致承知候、先便申遣候田町の事、浪除ケ迄にては十八間に御座候、此度の被仰出も有之、台場拵候ニハ少々手狭に候間、又と申候ても面働ニ候条、浪除共ニ廿五間ニ築出田町別邸築地願度候間、其処にて願替の儀可取計候、尤委細の画図其外は近便申遣候得共、大頭の処申遣候、画図等届候ハ、早速取計候様手当專一ニ存候、豊後島津より申遣候得共、猶又申遣候、築出方之事も委敷可申遣候間、其上取計可申候、

一嘉藤次田平申出候筒井肥前之申口、高輪にて国へは先づ

控候様ニとの事心得申候、此度は夫にて宜敷候か、以来の処は、田町邸ニ於テ、佐久間修理ニ依頼シ、八十斤ノ暴母砲一門ヲ鑄造シタカ説ヲ主張シ、平田ニ迫リテ鑄ランメタリ、惜哉砲身ニ疵アリテ大森ニ於テ試験セシニ破綻シ不用ニ屬シタリ、是レ佐久間カ説ニアラス、鑄工ノ誤ナリ、砲兒高ニ於テ鑄造シタルモノ、精好ノモノナリ、○佐久間カ田町邸ニ於テ鑄造ノ形況ヲ記シタ函アリ、末川氏ニ所成ス、其実況ノ一端ヲ知ルニ足ル若々

右様之事御座候ハ、其段内々直言にて、か様之訳ニ候間、内々遣候段、豊後・安房喜入迄申遣候様、無左候ては書役共も及見聞、何も訳なき事ながら、取違へ色々申候ては不宜候間、極内心得にて申遣候、

一八十ポンドボムカも誠ニ大造成事、平田の致し過と存候、此方にて一挺拵遣候、此方ニ候得は一挺台共五百両少

し余にて出来申候、此節二挺出来、跡一挺製造最中ニ御座候、其他跡一挺分の銅ハ取入可有之と存候、夫ハ吟味次第取入之濟候事故、タラーイパス自在と申筒六七挺も拵置候ハ、可然と存候、此儀は別段不申遣候間、早速其通可申付候、夫とも製造方余り高料ニ候ハ、地金にて大廻り砲兒島ヨリ江戸へ米穀共より当地へ可遣候、左候へは当地にて鑄立候ても宜敷候事、当地にては地金手間共二十兩位ニ候也、

一田中仁右衛門へも細事申遣候通ニ、万事穩便ニ無手拔様、手当第一ニ存申候、来年之処段々之被仰渡考候得共、何分不容易事ニ可成と被存候間、折角無油断手当勘考可致候、臨機応変之処置第一ニ存候、

一是は極内々心得迄申遣候、高輪青真の御都合妙成儀六かしく、先日の様なる御沙汰御座候得共、夫れは夫れにいたし、申様にては何事なく相濟候間、其処相心得、老中等江申出候儀も、品ニより候ては跡にて申上候とも、決して夫れをやかましく御沙汰は無之と存候間、其処ハ其方の心底にて宜敷可取計候、来年参府の上の心得伺も、町便にて申遣候通、早く可差出候、嘉藤次考ハ尤に候へとも、眼前の考と自分ハ存候、被仰付候

へハ非常の事故御断申上、是非との事ニ候ハ、近方

にて二三万石の領地天章一島ノ御望ナリシト云可願と存候事ニ御座候得共、とても被仰付候事ハ無之と存申候、早く御差図無之

候てハ万事手支も候間、早々差出し、御差図早々御座候様可申込候、琉人参府之事ハ先不急様ニ存候、参府

の上にて可然と存申候、少々考も有之事ニ候、右用事早々申入候也、

十月十九日

(別紙)

「書添」

書添心得迄申入候、お篤之一条天璋殿内々申参候処、辰

辰辰ハ阿初ハ先つ宜敷様子ニ候、しかし水老公へ辰より申

出候処、掛念有之候由にて当時内々水之方水野土佐守を拵居

候事にて、夫れさへ宜敷候得は相調可申と存候、尤も

表向ハ自分参府の上ならてハ知間敷候、先つ右之段心

得申遣置候、極内ニ可致、直之進初申候とも、此節之

御時節故、何分不相知、大かた三田之方三田云々難ナリ之ヤ知ルニ由ナシ

考之段申置候方宜敷候間、此段内々申遣候、例之事ハ

やめに相成、三田に相成候と人存候方宜敷との事、右

極内々申遣候、休之丞水江休之丞齊興公御側役へも内々ニ御座候、

以上、

二八四ノ五

用事

近江へ

(島津齊彬文書にて校訂)

一筆申入候、弥無事珍重ニ存候、此方相変事無之候、

今日巡見発足、飛脚差立候間、用事申入候、今日便田

町の儀、并ニ大船造立之図大徳遣候、此儀ハ是非都合

能取計可申、極内ニ候へとも、着之上は早く早川五郎兵衛

西衛門両人の内へ申付候て、去る方間合候て、少しも

早く差出之方宜敷と申処を承候て、其上高輪へ申上候

て、差出候様無之、先見合と御沙汰有之候と不宜候間、

右之心得にて可取計候、夫れとも跡にて申上候ても宜

敷都合に候ハ、其通何卒早々差出様、其方考にて都

合可取計、此方より大船の事願候事故、早々出候方

公義も宜敷と存候間、其心得にて可取計候、大取込用

事迄申入候、以上、

十一月十二日

右居国老時、自嘉永六年丑五月迄同十一月、齊彬公手

親揮毫所賜久平凡六通、令命祿匠叙其前後、特為一軸恭

加裝飾、為吾後者諷戒他見宜深宝蔵、以伝永世是為跋矣、

安政五年八月

末川近江久平謹記

二八五 天璋院殿將軍家定公ニ結婚ノ発端

篤姫様御事、御国許ニ於テ御出生ニ候処、此度御産母之儀、以 思召 御前様高杉公御前中ヲ御生母ト被遊

御定候様被仰出候旨、御老中阿部伊勢守様ヨリ、被遊御承知候、此旨奉承知候様、向々々可致通達候、

八月

伯耆島津久福

二八六 齊彬公軍艦製造御願書

此節質素節儉之儀被仰出、於 公辺も敵敷御儉約被遊候間、海防一筋ニ心を用ひ、弥敵重ニ手当仕候様被仰出、難有奉承知候、右ニ付左之通奉願候、

一 此度被 仰出候ニ付、段々勘考仕候処、台場敵重ニ相構へ候て、異船打払調候ても、冲中江退去之節追打之手段無之、小船ニテ無法ニ追掛候ても、必勝之儀無覚束、打捨置候得は、彼方ニは船取繕、亦々襲来可仕、左候得は、頭上之繩を追も同前ニ奉存候間、御制禁之儀は恐入奉存候得共、堅牢之軍艦并蒸氣船は急速之弁

利も宜敷、軍事要用之品ニ御座候間、何卒製造御免被仰付候様奉願候、蒸氣船之儀は、一昨年来家来江申付、工夫之上、可也ニ製造可相調奉存候処、此夏家来被召呼、本望之至難有奉存候間、何卒軍艦・蒸氣船両様共御免之儀奉願度、左候得は

皇国之御為は勿論、琉球国迄も 御威光相響き候様仕度心底ニ御座候、琉球大砲船は製造最中ニ御座候得共、皇国之軍艦製造 御免奉願度、且又乗習之為、平日運送船ニ相用申度、左候得は異船海防之儀共差支有間敷奉存候間、何卒願達候様御評議奉願候、

一 以来蘭船江、軍事必要之書并大小炮、其外奉行江相達シ、注文被仰付候儀、相叶候様奉願度、彼を知り己を知る之後ならては、必勝之計策も難調奉存候間、何卒願之通相叶候様仕度奉存候、左候得は乍不及彼之国之書中利器之分相撰ミ、御手当之一筋ニ仕度奉存候、申上候も恐入候得共二百年來泰平之 御代ニ御座候間、戰場実地を踏候者は絶て無御座、彼之国之者は今時戦争も有之、実地髓ニ試ミ之上、追々利器新法相考候事故、便利之儀多ク可有御座奉存候、既ニ蒸氣船之儀も蘭書ニ依り工夫仕候事ニ御座候間、何卒注文之品御免

被仰付度、左候得は愈嚴重之手当をも申付、御国恩を
報度心底ニ御座候間、此段奉申上候、以上、

丑八月廿九日

松平薩摩守

右九月十六日提出すと種子島時
訪日記

「十二月廿六日御差函、

軍船並蒸氣船製造致候ても不苦候間、船形並間数等巨
細絵図面ニ相認、船数共取調、猶可被相伺候、其外之
儀ハ、追て相達候事可有之候、」〔丙は大日本古史書幕末外國
係文書之ニにて補正〕

二八七 参考 田原陶猗家記

軍艦製造旧幕府、此御方へ詔へノ軍艦三艘、載付ノ大
砲ハ二十四磅・十八磅・十二磅・八磅以上數十挺、装
菓弾丸其他要具一式御引渡有之、尤請取ノ折ニハ私ニ
モ出府仕候、幕役ハ川路左衛門尉・松平河内守・井上
井石見守〔長崎、目付〕
〔長崎、勘定奉行〕
〔大目付〕
為彌・鶴殿民部少輔、大砲方ニハ笹倉桐太郎・濱興新
右衛門・鈴藤雄次郎其外与力之輩数人、何モ無異儀引
渡相濟、薩役早川五郎兵衛・私ニテ御座候、右御詔代
金請取ノ手続混雜ノ事有之、私登城、弁解ノ上弥引渡
相究リ申候、

二八八 琉球国ニ米国軍艦渡来ノ事実具申

私領琉球国之内那覇沖江、当四月十九日、異国船三艘
見得来、二艘は火輪船ニて、追々卸碇候ニ付、役々差
越、本国・来着之次第等相尋候処、北亞米喇幹船ニて、
唐人乗合、二艘は乗組三百人宛、一艘は式百五拾人乗
ニて、同月十日三艘共上海より出帆致来着、肝要之用
向ニては無之段申出、同廿日逗留喚人伯德右船江差越、
無程参将老人・通事唐人老人・喚人一同上陸、役々江
致面会度申出、応其意候処、右唐人を以、北亞米利幹
国欽差水師提督より可及相談儀候間、元船江参呉候様
申出、本船江乘帰候ニ付、同廿一日役々右船江差越候
処、提督并外式艘之舟主・通事唐人・逗留喚人ニも差
越致列席、提督より喚人を以、当地江沓ケ月程可致滞
船、朋友ニ致可呉旨申出候ニ付、何様之訳ニて長々可
及滞船哉相尋候処、琉球は金山江渡海之中道ニ相当、
都合拾壹艘追々可致渡来、為待合致滞船候旨申出候ニ
付、当地疲労至て不自由之小国、薪水等は成丈可差送
候得共、大国と詔を結候儀、逆も難成段相断候、且又

食料等追々致所望、右謝礼於王城可申述旨申出候ニ付、
微少之品差送候迎、態々謝礼ニは不及、殊ニ当時國王
病氣ニて、其儀難計段相断候処、夫形罷在候、同日異
国船壹艘同所江致渡来、亜米利幹船之様見請候ニ付、
右役々差越候処、船中より異人共出迎罷帰候様、手様
を以申通候ニ付、何も不相分候得共、乗組は五拾人位
見及候、同廿三日異国船壹艘同所江致来着候ニ付、役
々差越候処、通弁之もの無之、分兼候得共、旗印等外
船同様ニて、大概式拾人余之乗組見及候、右船壹艘は
如上海差越候由ニて、同廿六日致出帆、同晦日提督其
外上陸、逗留英人ニも同列可申述儀有之、致入城度段
申出候ニ付、種々故障申聞、再応及断候得共、聞濟無
之、何も不及心配、却て行列音楽等慰ニも可相成と申
述、奏楽ニて律儀ニ罷通、小官四拾人召列、其外は城
外江相扣候ニ付、冊封使礼式同所江招入、役々致面会
候処、滞船中所望物用弁相達呉、別て忝段申述、左候
て互ニ朋友相成度旨申出候ニ付、以前ニ申聞候通、小
国大國と之交迎も難相成、此儀は致用捨呉候様及返答
候処、夫形聞濟、其外何之申立も不致、至て律儀ニ会
釈致、無間も元船江乘帰候、尤待合之船相揃候上ハ直

ニ可致出帆由ニて、五月朔日迄は致滞船、異人共間々
上陸、近辺致歩行、其外何も異変之義無之、別て平和
罷在候、乍併取締向之儀、一涯嚴重申付置候旨、琉球
より以飛船届来候ニ付、長崎奉行江委細申達候由、国
元家来とも申越候、此段及御届候、以上、

六月朔日

松平薩摩守

(島津高彬文書にて校訂)

右届書副申

此度琉球へ北亜墨利加船五艘致来着候段ハ、別紙御届
申上候通ニ御座候、然ル処異人共間々上陸致シ、歩行
致候ニ付、琉人共内々致手筈、此地へ数日致滞船、金
山へ差越候段、提督ヨリ申聞候得共難致落着、決シテ
子細モ不有之ト申入候処、亜人申スニ、日本へ和好交
易ノタメ上海並廈門・澳門等ヨリ追々出帆、都合十一
艘可致渡来、勿論日本人モ乗組居、当地へハ船々待合
ノ為メ三十日程致滞船候旨申聞候ニ付、日本へ罷越、
自然相談聞濟無之候ハ、戦争ニモ可及哉ト相尋候処、
致相談候ハ、何レ聞取可有之、合戦ハ不宜儀ニテ、左
様ニハ不致旨為申聞由、且又通事唐人ヨリ申スニハ、
此地へ船々多艘可致来着、其儀ハ世話ニ存間敷、逐々
江戸へ可罷渡旨申聞、逗留英人ニモ前条同様為承及候

由、琉人共申聞候、右船々ハ北亜墨利加ノ内合衆国ニ
テ、提督モ兵船二十艘程構之者ニテ、此以前江戸表へ
モ為致渡海候者ノ由、後船皆着之上ハ一同出帆之向ニ
相見候趣、差渡置候役々極内申越候、右ニ付テハ輕輩
之琉人へ咄候儀ニテ、実否難取究儀ニ御座候得共、何
分不容易儀故、申来候形行極内早々各様迄申上候様申
付候事、

齊彬自筆届書原案

「嘉永六道中より

届差出候アメリカ一条」

私領琉球国之内那覇沖江、去月十九日異国船三艘、同
廿一日壹艘、廿三日壹艘致着船候付、早速役々相越、
渡来之形行相尋候処、あめりか船之由、此地江差て用
事は無之候得共、跡船待合之為致渡来候趣申出候間、
追々薪水等相与、訳合相尋候処、日本江戸江商法相談
之為參候心得之由、外六艘着船之上可致出帆、一ヶ月
程は滞留可罷在段申出候由、尤至極律儀ニテ、掛念之
様子は無之候得共、長々滞留不致様折角申諭候趣、且
取締向嚴重ニ申付候段、委細は追々可申越趣、琉球在
番より申越候旨、国元より申越し、今日相達候付、不

取致御届申達候、猶様子申越次第、追々可申上候、以
上、

五月廿八日

松平薩摩守

(島津齊彬文書にて補正)

二八九 国老新納内藏駿河名海防意見

私事乍無調法者当務被仰付、殊更琉球逗留嘆人方掛被
仰付、不容易御用筋ト奉存、当惑仕罷在候、然処右嘆
人引払方ノ儀ニ付、存寄有之候ハ、可申上旨承知仕、
当務昨今ニテ可申上様モ御座ナク候得共、嘆人所行ハ
勿論、御取扱振り承知仕候処、是迄ノ通嘆人申掛候難
題程能申断、落着安心ニテ平穩ニ引払候様不罷候様テ
ハ、以来何様ノ時宜モ難計、万一騒敷事共成立候テハ、
吃ト不自然儀ニ奉存候、外ニ申上候程ノ存寄無御座候、
此段申上候、以上、

六月

新納内藏久

右ハ拙者御軍役方総頭取兼務ノ節、嘉永五年子六月
存分申上候様、豊後島津殿御取次ヲ以承知イタシ申
上候趣也、

二九〇 海防施設ノ件軍役方並大目付等ノ論書

今度 公辺より被 仰出候海岸手当向、折角入念れ及
吟味、考付之儀は不差置可申出候、且又此節造立申付
候二ヶ所台場（大門口・祇園洲）其外海防之万端は国家
肝要之大事、万人之生命ニ掛り候条、入目を厭ひ利益
を考へ、製作愈略ニ有之候ては不宜、兼て之節候も非
常之為ニ候間、平日入価を厭ひ、万事致省略候儀と不
致心得違、申付候法之通（西洋ノ築法ヲ云フ）、堅固ニ製
作候様、軍役方は勿論、大目附・横目其外掛奉行を始、
末々迄可申渡候事、

右之通被 仰出、誠ニ以難有次第ニ候条、御趣意之
程奉厚汲受、聊大形之儀共無之様可取計候、此旨向
々江可致通達候、

丑九月

〔島津久宝、城代兼家老〕
豊後
〔川上久封、家老〕
筑後
〔喜入久通、家老〕
多門
〔島津久浮、家老〕
石見
〔織山久成、家老〕
伊織
〔島津奇彬文書にて校訂〕

二九一 訓練論書

城下六組之内、二組宛（御小姓組ヲ六組ニ分チ、又別ニ小
番・新番ノ一組アリ、寛永ノ中頃織セラレタリ、諸郷モ土族多
キ所ハ御城下ニ同シ）毎年六ヶ月以交代、東目・西目手
当申付、備組小頭并迦農小頭・目付・玉卒・口菓之儀
申付有之、殊ニ小頭は進退急徐之次第不相弁候ては、
実功之勝負ニ至り誠以大切之役目、目付役も同様専要
之重役ニ候処、是迄砂揚場訓練はペロトン（和蘭語一小
隊ノ名）之進退而已之事にて、試も無之候得共、当年も
江戸・長崎江度々異国船渡来、從公辺海岸軍事手当嚴
重被 仰出、大船迄も造立被仰付候時節にて、誠ニ以
不容易事ニ候、右ニ付及勘考候処、兼て軍役方より夫
々役掛等申付置、手当届候筈とは存候得共、一度も
其備にて行軍訓練無之候間、万々一不心得之者有之候
ても不宜候間、兼て砂揚場にて訓練可致見聞申出置候
得共、右之儀相止、此度は先來正月より当番之二組之
分、家老組〔寄合・寄合並
ヲ斯ク稱フ〕・番頭組〔小番・新番・御小姓組
ヲ三ヲ番頭組ト稱フ〕 其外城下
之分は、定通之行軍にて吉野江参り、於彼所訓練下知
可致見聞と存候間、來正月十五日後は、急度相調候様

可申付候、尤兼て役目申付心得候者二ても、万一不快
にて候ハ、早々断申出候様、左候ハ、人撰にて跡代
申付候様可取計、此段急度申達候、

右之通被仰出候条、難有御趣意之程、一統深可奉汝
受候、此旨向々江不洩様可申渡候、

嘉永六年癸丑十一月

豊後

〔島津斉彬文書にて校訂〕

二九二 参考 鎌田正純家記抄

嘉永六年七月廿六日御前へ差上候扣

此節浦賀表へ北亞墨利加合衆国船渡来、彼国主ヨリ公
辺江差上候書簡等之和解拜見被仰付、存慮可申上旨承
知仕候、右ハ不容易

御国体ニ相掛、御一大事差扣罷居候テハ、身構仕場ニ
可相当旨奉存、難黙止余計之儀迄モ書加奉呈上候間、
御覽察被遊可被下候、此節彼ヨリ差上候書翰之趣ニテ
ハ、専和親通商等之事ヲ申立、右今時変之訳且ハ年限
迄モ相立、

日本御不益之儀ハ、追テ御取止之筋種々理解之旨趣相
得、右ヨ即時ニ御打払有之候ハ、其不礼ヲ西洋諸州ニ

申触、兵船差向候時ハ、却テ彼ハ兵ヲ出スノ名有之、
本朝ニハ只防禦一筋ニ可罷成、乍然

本朝拳テ及奮撃ニ候ハ、幾艘引受候テモ容易陸卸等ハ
為致間敷候得共、於洋中諸国之通船ヲ妨、就中

御領国之儀琉球諸島通船之難題差見得、其外国々之費
人馬奔走、何トナク疲弊ニ及、終ニ内外ノ患手ヲ下ス

ニ所ナク、別テ御一大事到来、右等之透ヲ計リ、種々
方便ヲ企、自在ヲ為スニ於テハ、果ハ御再興之期六ケ

敷、誠ニ危窮存亡之御時節ニ相及候半、此度外国ヨリ
頓首懇願仕候儀、却テ

本朝之御威光欵ト奉存候間、願ニ被応候共、格別

御武威衰候節ニモ相当申間敷候付、先為御試通親

御許容有之、交易之儀ハ御用余之程不案御座候ニ付、

何共難申上候得共、御用余無之品ハ、外邦へ可被遊御

渡道理無之候付、右は御理解有之候ハ、異人モ承服可

仕欵、尤一国

御許容有之候ハ、国々ヨリ願出候儀、案中御座候得
共、是以通親迄御免被仰付、交易ハ被応時機候ハ、御

差支有御座間敷欵、左候テ国々御手当之儀ハ弥嚴重、
武道練熟為致置、若及戰爭連船致渡来候共、国々少モ

不致動搖、士農工商職業ヲ不失様、万事手配御行届之

御使番

江田平藏

上、万一彼ヨリ不法之挙動於有之ハ、最早彼ニ非義有之儀ヲ以不義ヲ打之天討ニ候得ハ、更ニ御猶予ニ不被為及、速ニ御打払御当然之儀欵ト奉存候、因テ一日モ早ク外国ニ応候永続之御手当十分御行届、依時機ハ是ヨリ義兵ヲ御起不法之外国ヲ御征伐有之程之御勢、誠ニ

右ハ此節長崎表へ異国船渡来ニ付、時宜次第ニハ急速御人数可被差出儀致到来候ハ、当御役場ニテ(御使番)可被差出心得ニテ可罷居旨、豊後(島津久宝)殿ヨリ、御軍役奉行島津登(島津久包)殿御取次、御達ヲ以テ於台子之間被仰付候事、

御威外邦へ相響候ハ、自ラ不法等申掛候儀ハ相止候半、百戦百勝モ未得止事ヲノ時宜欵ト奉存候間、不戦テ屈ル之

但此節々不限已来共、長崎表之儀ハ、此節通ニ可相心得居段モ致承知候事、

御神策、万全之御長久ト乍恐奉祈上候、百拜謹上、

二九四 浦賀与力合原綱藏ヨリ聞書

七月

鎌田圖書
純正

二九三 参考 江田平藏日記抄

嘉永六年丑七月十八日、甌島沖へ白帆大小四艘、長崎表へ向キ致通船候旨、御届有之候処、長崎表ヨリモ拾里余リ沖中ニ、彼表ニ向へ入来ル様子ニ相見得候旨、在勤奥四郎ヨリ御届相成、時宜次第ニハ御人数急速可被差出、御吟味有之由ニテ、左之通致承知候、

六月三日未中刻、蒸氣船式艘・軍船式艘迅速ニ乗込、千代崎ヲ乗越へ、観音崎近クマテ駈付、蒸氣船二艘ニテ軍船ヲ引来ル、其迅キコト飛カ如ク、諸方注進舟通ニ乗越、不図入津ニ付、浦賀中ノ騒動大方ナラス、浦賀与力中島三郎助・合原伊三郎当番ニ付乗出シ、異船へ近付候処、異船ハ乗込過候逆船ヲクリ戻シ候手際其神速自在ノ妙、目ヲ驚シ候由、決シテ上船スルコトヲ免サス、稍ク通辞一人・応接所与力一人上船致シ、浦

賀ハ異国船ノ入津国禁ナリ、用アラハ肥前長崎へ参ル
 へク旨申聞ケシニ、彼レ云ク、国禁ノ儀ハ元ヨリ知ル
 所ナリ、去ナカラ浦賀へ罷り越シ、用弁イタシ候様国
 王ノ命ナリ、ヨマリ方モ国命ナレハ、禁制ノ場へモ行
 キ可申候、臣下ノ身ハ国命ヨリ重キモノ無シ、此方曰
 フ、何用アリテ来舶スルヤ、彼曰、此度出帆ノ儀ハ、
 我国王ヨリ日本国王へ呈シ候書翰ヲ持来ルナリ、此趣
 江戸へ通達致呉候様、若亦爰ニテ扱出来不申候ハ、
 直ニ江戸ニ乗込直呈可致候、此方答テ、爰ニテ裁決致
 候事不相成、何レ伺ヒ出テ、江戸ノ命令次第ニテ取扱
 可申候、彼云ク、江戸へハ僅カ半日程ノ往来ト聞ク、
 右ノ返答速ニ分リ候様致度候、本国出帆ヨリ日数ワリ
 詰ニテ罷越候間、爰ニテ空シク日ヲ費シ候ハ、指支申
 候、早速返答承り度、此方答ニケ様ノ儀ハ、夫々役方
 ノ手ヲ経テ伺ヒニ相成候儀故、手数モカ、リ候事ナリ、
 何程急キテモ五日位ハカ、リ可申候、其内爰ニ拒居候
 様申諭候処、彼云ク、江戸ノ命令次第ニテ深キ存慮ア
 ルコトナリ、五日位ハ待居候ト云、滞船中薪水乏シク
 候ハ、送リ可申候処、彼云、万端本国ニテ用意シ何
 レモ不足ナシ、右様ノ無心ハ不致ト云、○船ノ大小・

兵器ノ員数・乗組ノ人数等承り候処、彼云、其方ニテ
 右様ノ事御承知ニ相成候テモ、何ノ益ナシ、此方ニテ
 申モ亦益ナシ、且又商船ト違ヒ、是レハ軍船ナリ、右
 様ノ事申スヘキ筈ナシト云テ、一切云ハス、○大蒸氣
 船將官ノ居船ニテ、総テ掛合向ヲ致ス、外三艘へハ人
 ヲ近ケ寄セス、蘭人一人乗組、日本語ヲ遣ヒ候者一人
是ハアメリカ人ニ無相違見ヘル、此二人ニテ万事通弁致候、右船ニハ二十
 貫目位真丸筒筒長アリ、十八貫目ノボンベン筒アリ、何
 レモ勝レタル上品ノ筒ノ由、○四艘共ハツテラ八艘
 位アリ、五日ニハハツテラニテ所々漕アルキ、江戸
 近クマテ測量ヲ究メ、川越持場觀音崎台場ノ凶ヲトリ、
 其上上陸ナサントス、役人立出稍クサシ押へ、是マテ
 入津ノ異船ト異ナリ、此方ヨリ彼は申候事ハ、更ニ取
 合不申落付キハラフテ居候由、尽ク法ニアカルク策定
 リ居候ト相見ヘル、○彼申ス、我船近辺へ人近付候事、
 堅ク無用ナリ、此事能々制シ呉候様、若制禁不行届候
 者アラハ、此方ニテ直ニ成敗致候トス、
 是迄ノ異船ハ此方へ掛合ノ上、発砲致候処、此度ノハ
 掛合ナシニ晝一発、四ツ時ニ一発、暮一発、夜四ツ時
 比一発宛号砲アリ、六日朝ニハ大砲連発アリ、

江戸ノ兼テノ御内意ハ、彼カ氣ニ中ル様ノ事アリテハ、益事ヲ招クノ道理故、兎角穩便專要ニ可致事、仮令ヒ異人上陸致、民家へ立ヨリ候トモ、格別ノ乱妨セサレハ、其俛見捨ヲクベシ、番船沢山指出シ、彼船取捨ハ却テ怒氣ヲ起シ宜シカラス、陸ヲ專用ニ守リ可申事、○江戸ノ御内存ハ、浦賀ニテ万一手強キコトアリテハ、大事ヲ引出シ、甚不容易儀ナリト御患被成候事ナリ、故ニ浦賀ニテモ悉ク用心、腫レ物ニサハル様ニ致候、此度四艘入津ノ儀ハ、兼テ蘭人ヲ以テ通達アルコトニテ、元ヨリ御承知ニ相成居申候ナリ、当奉行戸田伊豆守ハ老練ニテ候間、トコマテモ穩便ニ取計方行届可申トノ江戸御了簡ノ由、○此度番舟一艘モ不指出、浦賀ヨリ品川マテノ海上自在ニ漕アルキ、四家ノ人数ハ岸ニテ見物スルノミ、夜中ハハツテイヲ船ノ前後へ指出シ警固ス、火攻等ヲ制スル為ナル歟、是迄異船ノ儀ニ付、御上へ御心配ヲカケ候ヲ患へ候トテ、十分ノ者ナレハ、御心配ニ相成不申ケ条六七分申上、アト大事ノコトハ不申上姿ニナリ居候間、自然上下トトノ了簡喰ヒ違居候コト、此条大ニ嘆息ナリ、右当自六日微行ニテ、合原氏被聞候処、尚今度同氏へ

聞キ合校正ス、

六日九ツ時蒸氣船一艘江戸ノ方北へ馳出ス、先へハツテ一ラ四艘ニテ海ノ深淺ヲ測量シ行ク、川越ノ一手ニテ指トメ候処、剣ヲ抜キオトカシ馳通ル、川越人数怒ニ堪ヘス、番船ヲ馳テ浦賀へ問合セ候へハ、只今乗組候異船輕侮致候振舞難忍儀ナリ、斬捨可申候、浦賀ニテ答御尤ニ候得共、御内意ハドコ迄モ穩便トノ儀ニ有之、尚又彼之一艘斬捨候トモ、事濟候ト云ニモ無之、諸家申合不行届、疎忽ニ手出シ致シ、却テ兵端ヲ開キ候テハ恐入候間、ドコマテモ御勸忍ト申候由、四家モ怒ニ堪ヘス手出シ致シ、大事ヲ引出候テハ不相濟候間、浦賀ヨリモ役船二艘ヲ差出シ、異船ノ跡へ付キ警固致候、右ノ役船ハ陸上ノ見物人ヲ指押へ、諸家ニテ疎忽ニ手出シ無之様、制禁スル為メニ指出候コト、異船ヲ取押ヘル為ニ非ス、

浦賀ヨリ役船ヲ指出シ、上官ノ居船へ参り、蒸氣船一艘江戸海へ乗込トハ、如何ノ趣意ニ候哉相尋候処、異人答テ、此度持参ノ書翰御請取ニ不相成候時、存意通取計候也、其時ノ用意ニ江戸内海測量致置度、態々指遣シ候処也、尤晚景ニハ返り来リ可申ナリト云、右船

富津ノ前へ、暫クカ、リ居、七ツ半時頃元ノカケ場へ
漕戻ス、

九日月六久里浜ニテ書翰受取りノ儀、前日異人へ申通シ
置、当日直ニ参候様、早速蒸気船二艘波ヲ分ケ、迅速ニ
馳来リ、岸ヲ隔ルコト十町計ニシテ止マル此処海ノ深サ、二
九等位ノ届、二
艘ヨリバツテ一ラ十五艘ヲ卸シ、人数着岸ス、二艘岸
ノ方ヘ向テ、左右ヨリ空砲十余発放ツ是ハ人数着岸ノ節発砲
致儀定例ノ由、其発砲
ノ手キワウマ、
キモノナリ、請取渡シ場所、仮リニ小屋ヲ出来、小屋ノ
脇ヲ浦賀人数ニテ固ル、小屋ノ左右ヲ彦根・川越ノ人
数ニテ固ル、異人上陸畢テ、太鼓等ヲ、貝笛ヲ吹鳴シ、
彦根・川越ノ備ノ前ヲカケテ、人数ヲネリアルキ、組
頭様ノ者剣ヲ抜テヒラ／＼ト振マワシ指揮致由、ゲヘ
ール鉄砲ニテ備ヲ固メ、幕ノ内ヘクリ込ム、前日掛合
ニハ、異人上官共廿人程ニテ上陸ノ筈之処、案ニ相違
シ大人数上陸ス、浦賀人数小屋脇ヲ固メ候処、異人ト
モ耳コスリ、指ヲサシ尽ク嘲弄致候様子ニ相見得、イ
マイマシキコト限リナシ、訓練ノヨク整候事、奇妙驚
入候事、○小屋ノ内上段ノ間へ、上官・副将・通辞・
奉行兩人相對シテ座ヲトリ、下タンノ間へハ組頭辻茂
右衛門・応接掛五人連座、其外一切人ヲ不入受取ル積

リノ処、右上官等上段ノ間へ通ルト、直様六十人程押
込、上官ト奉行ノ脇へ立塞リ、上官ト奉行ノ方ヲ見張
リ居ル、此方何レトモ仰天シ、彼是制シ候ハ、直ニ
奉行虜ニセラル、モ難計、其候ニ致候由、右六十人ノ
者何レモ剣ヲ佩シ、六挺仕掛ノヒストルヲ持チ、何レ
モ玉ヲ込ドンドロ仕掛ニテ打ツバカリニ致シ扣居ル、
此方ニテハ込筒ハ一挺モ無之、奉行ノ近キニハ五六人
着座スルノミニテ、如何トモスルコトヲ得ス、畢竟穩
便々々カ主トナル故、右様ノ振舞ヲサレ、太タ胆ヲ奪
ハレ候事、残念云ワンカタナシ、異人上陸ノ節ハ勿論、
船中ノ砲ニモ玉ヲ込置候由、右受取渡シノ前日相済ミ
テ、早々出帆可致哉、書簡ノ儀ハ追テ長崎表ヨリ、蘭
人ヲ以テ申通ベキ旨申聞候処、彼云、左様ヲツコノ事
ニハ不及、来年又候渡来返詞承リ可申候、何レ出帆ハ
致シ可申ト云、右様一同出帆ノ儀ト心得候処、蒸気船
二艘軍船ヲ引キ、真シクラニ内海へ乗、本牧ノ前ヘカ
ル、如何ナレハ出船モ致サス、却テ内海へ乗込候哉
ト掛合候処、彼云、此後返簡請取ニ参リ候節ハ、数艘
引連レ、大軍船モ二艘参リ候コトナリ、浦賀ハ船掛リ
場宜シカラス、此辺ヘカケ可申ト存スル也、右故此辺

測量致度乗込候也ト云、同日大師川原へ一艘乗込、十日ニハ野島へバツテ一ラ二艘ニテ漕寄セ上陸、水ヲ求メントス、役人取押へ水ヲ汲テ与フ、此時ニ劍ヲ抜キ、ピストウルヲ放チ、見物人ヲ驚カシ候由、右滞船中出帆可致掛合候処、測量未行届故滞留致シ候由答、御勘定奉行ヨリ内海へ滞船ニテハ甚不穩、兎モ角モ引キ戻シ候様御達ニ、浦賀迄返リクレ候様、精々掛合候ニ付十日朝大津迄引返シ、猿島近辺金澤迄尽ク測量ス、十二日朝四ツ時比蒸氣船二艘ニテ綱二本ニテ繋キ、烟筒ヨリ火焰ヲ吹キ飛カ如クニ出帆、三崎沖ヨリハ、火災殊ニ甚シク、迅速又倍セリト云、見ル者驚カサルハナシ、彼申ニ、急ケハ本国ヨリ八九日ニテ此地ニ着ス、此度ハ十四日目ニ当方へ着ニ相成候由、○諸家番船少シ異船へ近寄候ハ、劍付鉄砲ニテ真丸ヲ込メ、番船ノ二三間前海中へ玉落候由、

通辞申ニ、彼カ来年正月ハ、此方ノ当年十月十一日ノ比ニ当ル、左スレハ寒中ハ来リ不申、来年二月・三月頃ニモ可有之歟、合原伊三郎云、彼カ云フ処来コト一ツモナシ、彼レ此地ヨリ本国へ、廿日内ニテ往来致候由ナレハ、来月ニモ渡来難計候、且又此後ハ數艘ニテ

参リ候由申候処、是亦何レ數十艘参候儀難計、廟堂ノ御了簡如何ニ候哉、トコ迄モ彼カ申所ニ御シタカへ成ル儀ナレハ、是迄ノ御手当ニテ沢山ニ候得共、御国威ヲ大切ニ被成候御了簡ニ候ハ、是迄ノ姿ニテハ、トテモ参ラサル様ニ候、此上台場ノ一二ヶ所御増シニ相成候位ニテハ、失費ノミニテ何ニモ成不申、江戸内海ハ勿論、何ニモ嚴重ノ御備被仰付度儀也、大軍艦製造モ中々間ニ合ヒ不申、又出来候トモ、一艘ヤ二艘ニテハ頼ニモ成リ不申、又日蒸氣船程手厚ニテモ、三貫目ノ筒先比ニ、引受相放候へハ、必打貫ケ可申候、又異船チヤンヌリ此節ノ炎火ニテハトロケ居候、右ハ火ノ付易キモノナレハ、焼キ打カ宜キ様ニ被思候、焼打ノ手段工風致度候先日町打ノ節、三百目ニテモミノ木一尺二寸角ヲ立并へ、五町ニテ打候ニ手モナニ貫キ申候、砲声ハ意外ニ強キ者ナリ、○異船ノ船フチ厚、大図一尺六寸ニ見ユル、ハツテ一ラハ四五十間ヨリ十間位マテ、栗浜へ上リ候節ハ大振ノバツテ一ラニハ七八十人乗り候、

一會津家ニテ申スニハ、ドコマテモ穩便ノ御趣意ニ付、異人種々輕侮乱暴ヲ働キ候由、此方持場へ乗込、右様ノ儀有之候得ハ、士分ノ者ハ必ズ勘忍致兼可申候、左スレバ穩便ノ御趣意ニ背キ恐入候間、百姓ヲ差出シ取

押候様ニ可致ト云フ、

一昨十二日江戸ノ御沙汰ニ、江戸近海迄乗込ヤ、測量致サセ候儀、宜シカラストノコトニ候処、今更右様ノ御沙汰ニテハ、当今何レモ間ニ合ヒ不申候、

一細川家ハ本牧ニ御備ノ時、陣隊能ク整ヒ、万事行届候様相見ルトノ評判ナリ、

右戸田様御届書ニ通、其外聞取書等ハ、浦賀表井外方へ聞合方トシテ差出置候、向々ヨリ追々相達越候間、

早速急飛脚ヲ以テ御届申上候、右聞合書ノ中ニ、琉球国へ借船ノ趣ニモ相見得候間、定テ御国元ニハ疾ニ彼

方御届モ為有之善ト奉存候、就テ 公辺ヨリモ、琉球表ヨリノ御届ハ無之哉トノ旨、御内々御尋相成候間、

何分成行早々被仰遣度、中ニモ水戸様・越前様ヨリハ、度々飛脚着之有無御問合モ被為在、御念遣ノ御様子ニ

モ被伺候、此段早々申上候、以上、

六月十日

江戸御留守居

御国許

御家老座

二九五 琉球船御造立ノ儀ニ付御書附一通

右ハ先達テ阿部伊勢守様へ御逢之節、被為遊

御持參、御直ニ御内慮御伺被成置候処、去ル十二月九日御勝手へ御呼出ニ付、私罷出候得ハ、御書面之趣不

苦候間、表向御届書御差出被成候様ト之御書取被相添、右 御書付并先達テ御差出相成居候雛形三通リ、御用

人山岡衛士ヲ以被成御渡、右ハ表向海岸御掛御用番様へ被差出候節、右雛形被相添被差出、其節阿部様御方

へモ、同様之雛形被相添、御書面被差出候様ニト之趣被仰聞候間、可申上旨相応申述置罷帰、其段申上候処、

右ハ御届書被差出候節、阿部様御方へモ同様雛形被差出候儀、何分御当地ニテ、右雛形御取仕建被成兼候間、

海岸御掛御用番様へハ、絵図面被相添、阿部様御方へヒナガタ被相添被差出候テハ、如何有御座哉之趣、阿

部様御用人迄及示談候様被仰渡、翌十日御勝手へ罷出、御用人渡邊三太平へ出会、得ト示談仕候処、伊勢守様

御承知其通御取計被成、宜御座候旨御挨拶申上候様、被仰聞候段、同人ヨリ承リ申候間、猶又其段申上置候

処、表向御届書被差出候段被仰渡、雛形等御下ケ相成候間、同廿七日、海岸御掛御用番牧野備前守様へ御届

書一通并ニ琉球船絵図二枚、異国船大凡之絵図一枚持
参イタシ、御用人倉澤仁輔へ出会、演説之上差出候処、
備前守様被成御落手候段、右御用人ヲ以被仰聞候、夫
ヨリ阿部伊勢守様へ、右御同案一通并琉球船雛形二、
異国船大凡之雛形一枚致持参、於御勝手御用人渡邊三
太平へ出会、委細演説仕差出候処、伊勢守様御落手被
成候旨、右御用人ヲ以テ被仰聞候、右ニ付テハ最初不
苦候間、表向御届書被差出候様、御書取被相渡候事故、
最早改テ御聞届被成候趣之御挨拶ハ無之、御落手限ニ
テ相濟候儀トハ存候得共、其通相心得可然哉之旨、海
岸掛奥御右筆組頭竹村七左衛門殿へ、先達テ罷越承申
候処、右通之儀ニテ、別段承置候杯ト之御挨拶ハ無之、
弥御落手限リニテ相濟候段承知仕候、琉球船御造立一
件相動候形行、右之通御座候間、此段申上候、以上、

二月八日

西 筑右衛門

筑後川様

一右之通、別段御聞届之挨拶ハ無之段申出候処、其後御
書取并御付札ヲ以テ被仰渡趣有之、右ハ前条御届書ニ
銘々仕付置候、左候テ首尾書之儀ハ、左ニ留置候事、

二九六 琉大砲船ト名ケタル軍艦創造ノ始末

琉球へ英国人滞在ニ付、大島迄警衛人数被差渡置、万
一琉地ニテ難捨置争乱之節ハ、大島ヨリ追々渡海被仰
付候御手筈ニ候得ハ、何レ大砲相用、海上安心ニテ乘
渡候船無之候テハ、不相叶候ニ付、於御国許軍船打立
之儀、御願被遊度候得共、夫ニテハ御制禁之儀、外之
響ニモ相成候テ、御免之儀不容易事ト被 思召候ニ付、
琉船ハ元来門之姿、唐船同様彩色ニテ仕調有之候ニ付、
右之処ヲ誠之砲門ニ仕立、且手薄之造作ヲ、マツラヲ
艦體通称ノ沢山ニイタシ、丈夫之木材ニテ取仕立候様被成
度、左候テ大島へ船カ、リ場拵置候テ、万々一之節ハ
大砲御乗付、琉球并諸島へ被差渡致防禦、尤平常ハ島
々ヨリ之運送船ニ被成置、御領分外へハ一切御差出被
成間敷ト之趣共、別紙御案文通之御届書ニ、琉球船等
之雛形三通^{通形}被相添、阿部伊勢守様へ御達之節、
御直ニ御内慮御伺被遊置候処、御親談ニ依テ阿部侯モ異論ナカリシ
モ、阿部侯ハ旧法ヲ論破セラル、等
ノコトニ數十日ヲ
耗シタリト云フ、其後御勝手へ御留守居御呼出ニテ、表
向御届書御差出被成候様トノ御書取、御差出被成候、
御書取被相添、雛形迄モ被成御渡候ニ付、旧臘廿七日、

公儀之場ニ有之候事、

二九七 琉球船新規御取建ニ付書附

一御書附一通

但琉球船新規御取建之儀ニ付、

一御書取一通

御老中

阿部伊勢守様

御用人

山岡衛士

但船造立等之儀ニ付テハ、先達テ 御手元ヨリ、豊
後^{島津}_{久宝} 殿方へ、委細被仰付候旨、御側役ヲ以承知
仕候、尤御内慮御伺之節、被相渡候御書取之儀ハ、
御側役方ヨリ、豊後殿方へ相廻候段モ申出候、此
段為御心得候、

二月十日

川上筑後

島津豊後殿

喜入多門殿

島津石見殿

樺山伊織殿

一御書附一通御付札有リ

但書同断

右同

右付御届書并御留守居首尾書等帳内

牧野備前守様

御用人

長谷川權輔

右ヨリ被成御達候儀御座候間、今日中一人罷出候様、御用人中ヨリ之切紙到来イタシ、罷出候処、御書付へ被成御付札、右御用人ヲ以被成御渡候間、可申上旨相応申述置候、御書付差上申候、

右之通、今夕私相勤、此段申上候、以上、

四月廿一日

西 筑右衛門

近江味様

追テ申上候、本文御書取并御付札之趣被遊

御承知候上、御請可被仰達儀ニ御座候得共、今晚ハ

夜陰ニモ可相及候付、明早朝可被差出旨、御両所様

共出会之御用人へ談置候ニ付、明朝私共申談、相勤

可申候、此段モ申上候、以上、

一右之趣御国元へ申越候得共、帳内案文之場ニ有リ、

二九八 琉大砲船創造届書ニ付キ末川近江申達

御老中

(正弘、權山藩主)
阿部伊勢守様

右ハ琉球并島々為運送、琉大砲船御造立之儀ニ付、御届書被差出置候処、去ル廿一日御留守居御呼出ニテ、書面申立之趣、此節柄無余儀相聞候間承置候、委細備前守ヨリ相達ニテ可有之旨、別紙之通御書取被相添、御用人ヲ以被成御渡候、

御老中

(忠雅、長岡藩主)
牧野備前守様

右前条同断御届書被差出置候処、右同日御留守居御呼出ニテ、書面申立候趣、此節柄無余儀相聞候間、承置候、才領一体之運送ニ用候儀ハ、難相成筋ニ付、其心得ヲ以取締向厚ク可被成、御付札御用人ヲ以被成御渡候、

右ハ琉大砲船御造立付、旧臘廿七日、右御両所へ御届書被差出、右ニ付テハ最初御内慮御伺之上、表向御届書被差出候様、御書取相渡候事故、別段御聞届之御挨拶ハ無之ト之趣、先達テ申越置候得共、此節尚又御銘々様ヨリ、右之通御達有之候付、達

貴聞、御届書二通并御留守居首尾書相添、此段申越候、以上、

四月廿九日

末川近江

島津豊後殿

喜入多門殿

島津石見殿

樺山伊織殿

御聽置候処、未被相下候ニ付、追テ可及御返答候得共、其内大頭迄、此段申越候条可被達貴聞候、以上、

六月十三日

末川近江

島津豊後殿

川上筑後殿

喜入多門殿

島津石見殿

樺山伊織殿

二九九 琉球国へ異国船渡来ノ事实具申照会

琉球異国船渡来付、先月十七日其許被差立候急飛脚二人、

御中途御用済、同廿九日藤井駅ヨリ被差通、去ル九日

到着致シ、右ニ付御届書并御添書之儀、御封物ニテ可

被差出哉、御口演書ニテ可被差出哉、何レニテモ宜方

致吟味、都合能可被取計旨被仰付越候ニ付、御留守居

御右筆へ為致吟味候処、御口演書ニテ被差出可然旨申

出候付、猶亦吟味致シ、其通ニテ日積之上鹿児島ヨリ江戸へ到達ノ日割ヲ

云、一昨十一日、海防御掛御用番牧野備前守様へ御留

守居持参差出候処、被成御落手候旨、首尾書ヲ以申出

候ニ付、問合書等相添、

宰相齊様達

三〇〇 薩州之風聞一本琉球風説書

一 当四月十九日ヨリ二十三日迄、琉球那覇へ北亜米利加

舟五艘来着、内一艘ハ定海へ出帆、残り四艘滞船ス、

一 五月三日提督乗船、其外一艘東北之方無人島へ、石炭

積入ノタメノ出帆イタシ、同十七日右六艘トモ、又々

那覇へ来着ス届書及ベルリ日記参照

一 五月七日、異国船一艘来着致候ニ付役々罷出、本国ト

来着ノ次第相尋候処、唐人乗合、北アメリカ船ニテ、

提督ノ下知ヲ受、定海ヨリ来着ノヨシ、人数二百人、

内唐人廿二人乗組居ルヨシ申出、且外ニ式艘近々来着ノ筈ノヨシ申出候、

一同廿二日、異国船二艘来着ニ付相尋候処、二艘トモ唐人乗合、是又同国アメリカ船ニテ、一艘ハ四月廿六日定海ヨリ石炭並ニ粮食積入来リ、一艘ハ数百人ノ内唐人二人乗組候テ、其唐人二人ハ荷物ヲ持テ、英人(伯徳令)滞在之寺へ差越、可致止宿模樣ニ付、嘆人共子細相尋候処、近々英船来着之筈ニ付、其節為通事唐国ニ滞在之英人ヨリ差出候段申候付、英人並ニ提督ヘモ種々及理解、再応止宿之儀相断候ヘトモ、於唐国モ吟味事故、其通難取計ト、何様申聞候テモ不致承引候ニ付、無是非英人ト一所ニ差置候、

一 扱又右之内火輪船等四艘ハ軍船ニテ、国書ヲ持、近々江戸へ行ヨシ、二艘ハ定海へ行キ、一艘ハ船々為待合相残り滞船イタシ候間、所望物無差支相達シ呉候様申候、船中之者無礼之仕形無之様、堅ク申付置候、若無礼之儀有之候ハ、書留又々提督来着之節、不隱可申出候様ニ申、然ルニ一同ニ出帆致シ呉候様申入候ヘトモ、何分船々都テ来着迄ハ可致滞船トノ事故、跡舟ハ何艘程可参哉ト相尋候処、凡十艘計リニテモ可有之哉、

未決定之由申、追々食料等所望ニ付相与へ置候、

一 五月廿五日、一艘定海へ罷越ト申出帆致候、同廿六日、四艘ハ江戸へ可罷越ト申出帆、東方へ乘行候、一艘ハ定海へ罷越ト申、同日出帆イタシ、尤滞舟中異人トモ別テ平和罷在、滞留之英人互ニ往来、浜辺へ歩行共イタシ、橋舟ヨリ乘廻リ、海中浅深杯相測リ、其外何モ異変之儀無之候ヘトモ、取締向之儀嚴重申付置候、此節琉球ヨリ申来リ候、

六月

三〇一 節儉布令

大目附江

諸事簡易之御制度ニ被為復候御旨意ニ有之、殊ニ地震ニ付ては、諸向一同難渋ニ及ヒ、格外之省略可致候ニ付ては、殿中ヲ初メ着服当分省略方之儀、去卯年十月被仰出候処、右之内式定候節、熨斗目、長袴并熨斗目、白帷子、花色小袖等、着用之廉々は、来巳年ヨリ、都て前々之通可相心得候、尤質素節儉可守旨、度々被仰出之趣は、弥以違失無之、常々愈服着用可致儀、勿論之

儀ニ候間、木綿紋付・単物・肩衣・袴等用候儀は、先般被仰出候通可相心得候、右之通向々へ不洩様可被相觸候、

十二月

別紙之通従公義被仰渡候条、此旨組中支配中諸郷へモ、不洩様可被申渡候、

十二月廿九日

御家老座印

三〇二 国老新納駿河久意見新納家記

此節浦賀へ渡来ノ異国船ヨリ差上候書簡ノ和解拜見被仰付、何様御取扱相成可宜哉存寄有之候ハ、可申上旨承知仕候、

公辺ノ御大事ニテ、私式誠ニ以奉恐入候得共、適承知仕候ニ付、不願恐左ニ申上候、

外国通商ノ儀、中古迄ハ自由ニ致シ来候処、異国人共悪心ヲ含、邪宗門勧入候所行有之、

権現様御代御糺明ニテ御制禁相成、其段御奉書ヲ以、諸国一統へ被仰渡置、其時分異国人共心底白状書等モ

有之候由、老人ヨリ及承居候、右通夷賊共悪行無之候

ハ、和蘭同様于今通商有之歟モ難計、左候得ハ外国往来不新事候得共、中古以来急度

御大禁被成置、弘化三年阿蘭陀本国船へ御返簡ノ由ニテ、真偽モ不存候得共、通商ハ貴国ト支那トニ限り、

其外ハ一切不許、新ニ為交通ト有之、文末ニハ祖法一定、嗣孫不可不遵ト申詞為有之哉ニ取寛居候、右ニ付

テハ此節願出候和親交易・石炭・食料・難民撫恤ノ願別テノ懇願ニ相見得候共、一ケ条ニテモ 御許容ノ儀

如何可有御座哉、前文外ニモ決テ御訳合可有之候得共、畢竟彼等悪意ヲ挾候故ヲ、御殿制為被成置筈ト奉存候

間、右等ノ廉々精々及理解、可成平和ニ退帆仕候様、御取扱有御座度、其上ニモ承伏不仕、度々渡来不敬ノ

所作モ有之、御国威ニモ拘リ難捨置候ハ、早速御打払、勿論ノ御儀ト奉存候、乍然其場ニ至候テハ、申上迄モ御座無ク、

皇国ノ御大事治乱ノ境ニ付、猶更奉恐入御儀ニ奉存候、右ハ誠ニ以不容易、別テ恐多候得共、存付候大意奉

申上候、以上、

七月廿七日

新納駿河

右ハ拙者若年寄御役中存分可申上旨承知仕、右ノ
通申上候事、

三〇三 宮古島ニ於テ英国船破壊ノ届書

去年六月十七日游キ揚リ候嘆人並唐人、嘆咭喇国人
火輪船へ乗セ、致出帆候儀ニ付届

私領琉球国之内、宮古島へ去年六月十七日、唐人廿四
人内女二人、英国人六人、追々游揚候ニ付、加介抱置
候、形行逗留英人へ申聞候処、幸北亜米利幹船参居候
付、帰帆之砌唐国へ送越候様可取計トノ事ニテ、嘆人
ヨリ乗頭へ致相談候処聞濟、其段ハ先達て御届申上達
候処、右船宮古島へハ不差越由、然ル処同八月廿一日、
右同島へ異国船一艘卸錠候付、役々差越、本國・来着ノ
次第相尋候処、唐人乗合、嘆咭喇国火輪船人数百三十
人乗組、去年五月同国ノ船一艘類船ニテ、廣東省ヨリ
金山へ渡海ノ洋中、逢大風乗分候処、右船着場不相知、
為探問致来着候旨申出候付、前文之趣申聞為致対面候
処、類船ノ者ノ由ニテ、嘆人並唐人都テ本船へ乗セ、
同廿三日致出帆候、尤滞船中取締向等嚴重申付置、外

違変之儀無之旨、長崎奉行へ委曲申達候由、国元家来
共申越候、此段及御届候也、

(安政元年)
三月五日

松平薩摩守

三〇四 亜米利加軍艦那覇港ニ来ル

先達て届申聞候通、去年十月廿六日亜船へ役々差
越、来着之次第相尋候儀ニ付届、

私領琉球国之内那覇江、去年十月六日、北亜墨利加船
三艘来着、式艘は出帆、壹艘は滞船致居候処、十二月
十四日より同廿六日迄、異国船七艘追々致来着候段は、
先達て御届申達候通ニテ、同廿六日、式艘来着之亜船
江役々差越、来着之次第相尋候処、都て唐人乗合、壹
艘は人数五拾人乗組、壹艘は人数貳百人乗組、同月十
七日、廣東省之内香港出帆、致来着候旨申出、右八艘
外ニ壹艘可致渡来段申出候得共、無其儀、左候て是迄
致滞留巫人并唐人は都て不帰、外ニ病人有之候ニ付、
巫人十一人可卸置段申出候ニ付、右之通多人数長々致
止宿候ては、小国及難儀候間、一同列帰候様申聞候処、
日本国へ相渡筈ニテ、病人は難列越、日本より帰帆之

節、一同可列帰段申暮り、残置候ニ付、無是非近方寺中明渡差置、取締嚴重申付置候処、忝人は致病死候、然処右八艘之内四艘は、当正月三日、江戸へ可相渡段申出致出帆候、同六日、提督年頭為祝儀、於城内国王江致対面度旨申出候に付、幼年にて対面不相叶段申聞候処、致納得、入城之儀種々理解ニ及相断候得共、聞濟無之、応其意候処、提督并外両艘之船主・翻譯官・副將・參將・提督之嫡子其外小官等都て三拾式人、冊封使礼式之処江招入、役々致面会候処、国王を始各官江年首祝詞并安否等相尋、左候て亜国金銀銅差出、度佳喇嶋金銀ニ繰替候様申出候ニ付、金銀融通ハ勿論持合居候者無之、繰替不相調段申聞候得とも、不致納得、右金銀銅夫形差置、本船江乗帰、同十日、三艘江戸江差越候由にて、致出帆候に付、金銀等ハ已後來着之節、程能申断差返候様可致候、忝艘ハ上海江可相渡、是迄逗留喚人之妻并子供三人・唐人貳人都合六人は、引取候様申来候由にて、船江乗せ、喚人一人残置、伝馬忝艘残置、同十一日、致出帆候、同日右同処江異国船式艘卸碇候ニ付、役々差越、前条同様相尋候処、魯西亜国之船四艘、一同長崎より出帆、忝艘ハ人数百五拾人

乗組、忝艘ハ三十人乗組、今式艘ハ近々可致来着、用事は無之旨申出候、同十三日、右同所江異国船忝艘卸碇候に付、役々指越、同様相尋候処、魯西亜国之船人数四百式拾人乗組、長崎より出帆、来着之旨申出候、同廿日、右同所へ異国船忝艘卸碇候ニ付、役々差越、是又同様相尋候処、魯西亜国火輪船人数三十人乗組、上海より出帆致来着候旨申出候ニ付、取締向嚴重申付置候処、同廿三日、四艘共致出帆候、同月十七日、右同所江異国船忝艘卸碇候ニ付、役々差越、同断相尋候処、唐人乗合、喚咭利国之商船、喚人二十九人、内女貳人、子供三人、唐人四百九拾五人、内女九拾五人乗組、廣東省香港より、金山江差越候洋中不順にて致来着候旨申出候、左候て喚人忝人右之妻并男子忝人上陸、荷物等卸置、是迄逗留之喚人差置候寺江一緒ニ罷在候ニ付、役々差越、子細相尋、逗留不致様断之書付差出候得共、何分不申出ニ付、無是非本船江差越、乗頭江疲勞之小国追々西洋之船々等數艘来着有、余多之所望物等有之、困窮相及、且喚国医師多年滞留有之候ても、詮立候儀無之、是非列帰候様、精々申聞候得共、不致承引、同廿三日、致出帆候、取締向尚又嚴重申付置、

追て嘆国船来着之節、為列婦候様可取計候、且又亜船前以卸置候石炭外ニ又々積越差卸、都合九十二万三千五百斤程に相及、右之内本船江積入、凡八十二万式千式百斤程相残候段、此節從琉球以飛船申越候旨、長崎奉行江委細申達候由、国許家来共より申越候、此段及御届候、以上、

(安政元年)

三月五日

松平薩摩守

三〇五 久米島ニ米国船渡来届書

私領琉球国之内久米島江、去年十一月廿六日、異国船二艘漂来、橋船二艘より異国人拾四人浜辺江漕来、役々差越、本国・漂来之次第相尋候処、異国人共言語・文字不相通、何欵所望之体手様等ヲ以相通候ニ付、食料相与へ、右乗組之内日本人体之者ニて式人罷在、三河国之者ニて、逢難風、亜米利幹船江被相助候旨、漸相通し、本船江乗帰り候処、無程夜ニ入、翌朝相成、帆影不相見候、当五月十日、同国之内鬼界嶋江異国船壹艘漂来、橋船より異国人九人浜辺江漕来、役々差越相尋候処、頭取之ものと相見え、あめりかと申辞漸相分

り、其外鯨取之手様いたし、牛所望之体ニ付、手様ヲ以相断候処、其但本船江乗帰り、東之方江乘行、無程帆影不相見候、六月九日、同国之内那覇沖江異国船壹艘致打乗、陸江勤番申付置候処、逗留嘆人小船より差越候折、異国船橋船より異国人五人漕来候ニ付、嘆人右橋船江乗移、同所江滞船之北亜米利幹船江一同差越、無間も引取、嘆人滞在之寺江差越候ニ付、役々共より嘆人江形行相尋候処、嘆国之商船ニて、人数三十人、内女壹人罷在、一ヶ月前廣東省香港出帆、呂宋国江罷渡、同所より如金山出帆、十一日目、洋中逆風ニて此表致通船、尤生子有之、乳少、且船中病人多候ニ付、乳有之羊并葉相求候ため、致寄船候趣申出候ニ付、羊相渡シ、菓種は嘆人差送候処、本船江乗移、暮時分致出帆、無程帆影不相見候、右ニ付取締向敵重申付候旨、此節琉球より申越候、委細長崎奉行江申達候、此段及御届候、以上、

七月九日

松平薩摩守

三〇六 琉球国那覇沖へ火輪船二艘来ル届書

私領琉球国之内那覇沖江、六月廿日、火輪船二艘相見え、先達てより致滞船居候北亞米利幹船着場江進寄御碇候ニ付、役々差越来着之次第相尋候処、五月廿六日此地出帆致し候四艘之内、二艘は火輪船にて、四艘共

六月二日江戸江着船、国書致持参、和好相願候得共、

即答無之候ニ付、同十三日同所出帆、又々此地江致参

着、外二艘之内一艘は、中国江南省如上海出帆、壹艘

は明ヶ方此地可致来着段申出候、翌廿一日、異国船壹

艘同所江来着御碇候ニ付、同断相尋候処、昨日来着之

火輪船一同江戸より出帆、来着致候段申出、四艘共六

月廿三日迄は致滞船、異人とも間々上陸、逗留嘆人互

ニ致往来、其外何も異変之儀無之候得とも、取締向之

儀猶又嚴重申付置候旨、此節琉球より申越候ニ付、委

細長崎奉行江申達候、此段及御届候、以上、

七月九日

松平薩摩守

三〇七 薩摩下甑島へ異国船通航届

私領薩摩国下甑島下甑村之内手打村沖江、去十七日異国船四艘、辰巳之方より相見得、西戌之方江乘行、無

程帆影不相見候、依之領内浦々猶又取締向嚴重申付置候旨、長崎奉行江申達候、此段及御届候、以上、

七月廿二日

松平薩摩守

三〇八 琉球国へ亞米利加船渡来届書

私領琉球国之内宮古嶋江、当六月十七日、唐人式拾四

人内女式人・異国人六人、追々游揚候ニ付、湯粥等相

与へ、本国其外之事共相尋候所、嘆国船乗組三十人、

外唐国廣東省廣州府南海県之者共男女式百四拾三人、

五月廿三日廣東出帆、華旗国金山江渡海之折、洋中ニ

て逢大風及破船候段申出候ニ付、人家迦江小屋相調入

置、昼夜勤番申付、衣食等相与へ置候、左候て唐人三

人死骸流寄候ニ付、唐人見届之上、土葬申付、其余は

死骸不相知候、尤右旁之次第逗留嘆人江申聞候所、幸北

亞墨利幹船参居候ニ付、火輪船帰帆之節、宮古嶋江差

越異国人ハ勿論、唐人迄も唐国江可送越様、嘆人より

乘頭江致相談候処、其通り聞濟候由、其後火輪船二艘

致帰帆候旨、琉球より申越候ニ付、委細長崎奉行江申

達候、此段及御届候、以上、

七月廿八日

松平薩摩守

三〇九 琉球那覇ニ米国軍艦四艘渡来之急報

領分琉球国之内那覇江、北亜米喇幹船四艘致滞船候処、三艘は出帆、残一艘は致滞船候儀ニ付届

私領琉球国之内那覇江、北亜米喇幹船四艘七月八日迄致滞船候段ハ、先達テ申達置候通、其後亜人共より、伝馬ニテ諸所江乗通、山岳絵図取、又は海中浅深等相量、且又以前ニ積越候石炭追々差卸候処、凡三拾壹万式千二百斤程ニ相及候、然る処、同十三日より十九日迄之間、三艘は致出帆、残一艘同廿日迄は致滞船、逗留喚人互ニ参会、間々致歩行候、其外異変之儀無之候得共、取締向一涯嚴重申付置候旨、此節琉球より申越候、委細長崎奉行江申達候、此段及御届候、以上、

八月廿八日

松平薩摩守

右之通、今朝牧野備前守殿へ及御届候、

九月廿八日

松平薩摩守内

(江戸留守居附役)
仙波市十郎

三一〇 琉球那覇ニ亜船渡来提督上陸好友ノ申込
事实届

私領琉球国之内那覇江、北亜米利幹船四艘渡来致滞船候段は、先達テ申達候通ニテ、六月廿一日、副將并通事官江役々致面会候処、此以後亜人共毎年渡来、一ケ年余も可致滞船候ニ付、風雨為凌海辺最寄宜所之寺院借入度、且又近辺江石炭貯之小屋壱軒相調度候ニ付、地料等何程相及候哉相尋候ニ付、此儀ハ迎も難慮、強テ相断候得共、不聞入候ニ付、諸官共江相達、其上何分可申聞旨相達置候、同廿三日提督并副將・参將・通事官・四艘之船主、其外小官拾人致上陸、逗留喚人召列来候ニ付、役々致面会候処、通事官ヲ以、一昨日出置候儀早々可致返答、亜国と好友致度と之事ニテ、不礼之仕形は不致、提督日本江罷渡候処、如朋友何之嫌も無之、彼地官人式人江致対面、互ニ品物等贈答、交通之儀及相談候処、来年返答可申聞と之事ニテ、警衛之官兵凡四五千余人も有之、何も不相阻至テ丁寧之由申聞、最前申懸之返答致催促候ニ付、小邦彼是難慮廉々申立、都テ相断候処、中国さへ交通・逗留等差免、

且日本も不相嫌、小国として何廉相阻、殊更石炭は火輪船第一之入用ニ候処、右置候処迄も相断、甚不承知之旨申聞、提督ニも明後日は可致出帆候ニ付、明日二百人余之兵を率、於城元太子江可致直談と、頻ニ怒立威勢を示し、何様及理解候ても不致承引、既ニ乱妨ニも可及勢故、無仕方其場為凌一往其意ニ任せ、寺院料等之儀は程能相断候処聞濟、本船江相帰り候、同廿七日提督等乗船、火輪船二艘は出帆、午未之方江走行、船て帆影も不相見候、然処七月朔日、那霸江異国船一艘卸碇候ニ付、役々差越本国并渡来之次第相尋候処、北アメリカ船にて、石炭積入、六月十一日上海より出帆致来着候趣共漸相分、左候て凡石炭壹万五千斤程差卸候、同六日同所江火輪船壹艘渡来、異国人拾四人致上陸候ニ付、形行相尋候処、右同国船にて、人数三百五拾人乗組、同三日中国香港より出帆、提督江逢候ため渡来致候得共、提督帰帆ニ付ては、八九日程滞船之旨申出、同八日迄は四艘共致滞船候段申出候、猶又取締向等一涯嚴重申付置候旨、此節琉球より申越候ニ付、委細長崎奉行江申達候、此段及御届候、以上、

七月廿八日

松平薩摩守

三二一 琉球那覇へ十月六日異国船三艘着来ノ向
届

私領琉球国之内那覇へ、当十月六日異国船三隻来着卸碇候付、役々差越候処、異国人二人橋船ヨリ致上陸候付、本国・来着之次第相尋候処、三隻共亜美喇幹船ニテ、一隻ハ以前ヨリ琉球へ致滞船、八月二十九日出帆、無人島へ相渡り候船ニテ、外二隻之内一隻ハ人数二百人、一隻六十人乗組ニテ、九月二十六日廣東省之内香港出帆致来着候、尤モ二百人乗組之船ハ琉球へ滞船、六十人乗組ハ石炭積ミ来り候ニ付、卸次第無人島ヨリ渡来、船一緒ニ中国の方へ可致出帆段、手招等ヲ以テ漸ク相通シ、尤モ逗留英人互ニ取会歩行等致シ候ニ付、取締向嚴重申付置候、左候テ右二隻之船出帆之節ハ、最前卸置候亞人並唐人惣テ列帰候様可取計旨、從琉球以飛船申越候付、委曲長崎奉行へ申達候、且又拙者儀領内海岸諸所此度致巡見、砲術調練ハ勿論、追々築立候台場備置候大砲打試迄モ為致、猶又防禦手当向怠慢無之様屹卜申付置候、此段及御届候、以上、

十二月廿八日

松平薩摩守

三二二 琉球国之内大島へ六月五日火輪船三艘卸碇、
碇上陸届書

私領琉球国之内大島へ、当六月五日火輪船三艘卸碇、
橋船二隻ヨリ異国人二十三人致上陸候付、役々出會、
本国・來着之次第相尋候処、言語・文字不相通、亜米利
幹船ニテ江戸出帆致來着、野菜類払底之様子手様ヲ以
テ漸相分、右品類相与候処厚致謝礼、左候テ橋船ヨリ
湊口致測量等体ニテ、無間モ本船へ乗帰、午ノ方へ乘
行無程帆影不相見得候、猶又取締向嚴重申付置候旨、
此節琉球ヨリ申越候付、委曲長崎奉行へ申達候由、国
元家來共申越候、此段及御届候、以上、

八月廿日

松平薩摩守

三二三 琉球那覇へ六月七日異国船二艘卸碇品々
申出候届

私領琉球国之内那覇へ、当四月二十二日、北亞米理幹
船一隻來着、水主之内給醉候者一人致溺死候段ハ、先
達テ御届申達候通候、然処六月七日右同所へ異国船二
隻卸碇候付、役々差越相尋候処、唐人乗合二隻共、当
四月江戸へ差越候亜美理幹火輪船ニテ、一隻ハ提督乘
船、六月三日伊豆国出帆致來着候旨申出、先達テ致溺
死候者、諸所へ疵付有之、相手致糺方候様色々難波申
立候付、及糺方候処、前条給醉候水主人家へ押入、剩
不法之仕形等イタシ候ニ付、在合候者共磔投当候由申
達候処、水主ハ大罪之者候へ共、相果候ニ付不及是非、
相手之琉球人ハ、国法通刑法可相行ニテ可有之承候付、
其通可申付段相達候処致納得候、左候テ亜国日本ト和
好交易之約条、別冊之通相濟候付、於琉球モ其通可致
和好等、約条之草稿差出候付、品々申断候へ共更ニ不
聞入、屹ト右通取計、総理官等印形押調候様申立、国
王幼少ニテ政事向旁決着難成、国家之大事官人共迄ニ
テハ取扱難致、清国之藩邸ニテ、彼国へ差込ヲ不得候
テハ、難相成訳合等ヲ以テ、幼君国政向致指揮、年輩
相成候迄之間相待具候様、精々及理解候得共、右於日
本交通相開、下田ニテ互ニ急度約定取替候付テハ、此

上於琉球異議申立候訳合無之卜、銳氣ニ募兵卒等引來
此上強テ申断候テハ、既可及異變ニモ勢ニテ、別紙簡
条書之通り彼方ヨリ認來、総理官・布政官印為押調、

三通ハ此方へ相渡、彼方へモ三通相請取候、左候テ先
達テ渡來之節、申立置候彼国金銀銅蕃銭、度佳良島金
銀繰替方之儀、程能申断差返候処相請取候、昨年來御
置候石炭、並ニ当月致上陸居候巫人十人本船へ乗セ
付、是迄召置候寺敷銀、並石炭木屋修補用銀、可相渡
旨申出候ニ付、是迄佛・英人共召置候寺敷銀等相請取
候儀無之、不及其儀段強テ相断候へ共、押テ残置候、
且去ル午年ヨリ致逗留居候英国医師一人、巫船ヨリ可
致帰国旨申出、荷物等都テ致乗船候付、当月ヨリ逗
留之英人妻子三人共、一同列帰吳候様提督へ頼入候処、
此儀ハ於清国英官へ致相談候上、引取候様可取計旨申
聞、医師並ニ巫人ニハ惣テ巫船へ召乘、一隻ハ六月二
十一日、二隻ハ同二十三日致出帆候旨、此節從琉球以
飛船申越候付、委曲長崎奉行へ申達候由、国元家來共
申越候、此段及御届候、以上、

八月廿日

松平薩摩守

三二四 安田助左衛門日記鈔(嘉永六年)

五月二日留

一辰之刻御免駕之御賦ニテ、四ツ時御先駕被遊、將監橋
ヨリ通町昌平橋筋加州侯前通二里余ニテ、巢鴨御小休
植木屋長太郎所、是迄惣御供是ヨリ拙ハ非番ニテ、板
橋迄差越居、板橋ヨリ御供、植木屋ヨリ板橋迄一里之
内也、板橋御本亭右側也、板橋ヨリ二里十町ニテ蕨御
小休、御本亭左側也、夫ヨリ一里十四町ニテ浦和御道
御本亭左側、御本宅ハ御本亭ヨリ江戸ノ方左側、内田
屋藤助トイフ方也、

三日晴雨、朝御供候、浦和御立、熊谷御泊、

一当所五時御供揃ニテ御立、一里十町大宮御小休、御本
亭左側山崎喜左衛門所、一里四町ニテ天神橋御立場島
屋金治所、一里四町ニテ上尾御立場、御本亭右側林八
郎左衛門所、三十町ニテ桶川御小休、府川甚右衛門右
側ノ一里三十町ニテ鴻巣御小休、是ヨリ非番ニテ御先へ
差越、七ツ半過キ着私宅、御用亭ヨリ先キ左側、

四日晴、夕御供熊ヶ谷御立、

一 当所五ツ時御供揃ニテ御立、拙夕御供故御先ニ差越、乍併一里二十五町篠原御立場へ御先番相勤、外ニ黒江愛次郎殿也、公は御駕籠ニテ被為濟、

一 牧西村御立場ニテメシ御上候、

一本庄御休足ヨリ御供御勤、二里四町ヨリ新町御小休、小林甚左衛門所左側也、是ヨリ一里半、倉ヶ野御泊、七ツ半前御光着被為在候事、

一 今晩は迫水孫殿へ咄ニ参候、尤伊東氏同道、岩山喜平次殿モ入来、

一 私宅左側、

一 御本亭左側、

五日朝御供、

一 当所五ツ半時御供揃ニテ倉ヶ野御立、一里半高崎御小休大黒屋九兵衛、一里三十町板鼻御小休、三十町ニテ安中御休、一里八町八本森御馬場、一里八町松井田御小休、二里十五町坂元御泊、安中ヨリ非番ニテ御先ニ差越、一里計歩行、中島氏・立花氏・蒲地伸蔵殿同道ニテ歩行イタス、坂元へ七時前着イタス、御本亭左側、私宅ハ右側、中山五大夫ト云所也、

六日夕御供、晴曇、

一 坂元宿御定刻御供揃ニテ御立、追分御休、御泊望月也、七半過キ御光着、御本亭左側、私宅ハ右側也、

一 今晩ハ鷲頭氏同宿、奉行尤当駅宿小ナル故足田迄非番之各位差越候様被仰付候付、皆々彼ノ方へ差越、夫故ニ鷲頭同宿ナリ、宿アマリヨロシクコレナク候事、

一 今晩江戸へ飛脚被差立候付、書状差上ル、

七日晴、朝御供望月御立、

一 当所六半時御供揃ニテ御立、御休和田、御泊下諏訪、一諸所峯々雪甚シ、マタ正二月之模様ニテ、中々五月頃ノスカタハコレナク、先々面白カルヘキ場所ナリ、和田崎歩行、重久氏・伊東氏・平氏外同宿イタス、一里八町芦田御立場、一里半長久保御小休、一里六町加々澤御立場、一里十六町和田御小休、三十町諏訪餅屋御立場、二十四町御立場、一里半下之諏訪御光着、

八日晴、下之諏訪御立、

一 当所五ツ時御供揃ニテ御立、奈良井御光着、一里半塩尻峠御立場、一里半之内塩尻御小休、一里三十町洗馬御休、三十町本山御立場、一里半櫻澤御立場、一里余寶川御小休、一里二十四町奈良井御光着、

一 塩尻峠御先番相務ル、頼朝公ヨリ頂戴ノ感状、本亭元

來關左衛門太郎ト云人感狀頂戴也、浅間狩リノ時功ア

ルニ寄リト有、当分上條ト名乗ヨシ申、御前へ奉御上

覽候処、頼朝公御書判ニハ相違有ヘク、写置候様被仰

付、直ニ写方仕候事、尤右大将頼朝ト有テ、下ニ御書

判有之ハ、逆テモ正物ニテハ有マシク、イツレ給之ト

ノ感狀ナラハ、御書判計有ソフナ物ト御沙汰ニテ、ナ

ニ分ニモ写方イタス様被仰付、写方仕候事、御休ヨリ

御供、

九日晴、朝御供ナラビ井御立、

一当所五ツ半時御供揃ニテ御立、一里半藪原御小休、鳥

居崎上ヨリ御奉行被遊、二里宮之腰御休、一里二十八

町福島御小休、二里余新茶屋、半道上松御泊、

一名越氏踏通シ被致被相勤、

一福島御関所新納軍悅殿同道ニテ罷通候、差引人迫水孫

次郎殿也、福島宿ハヅレニテ、メシ井酒ヤル、尤新納

氏同道也、今晚御本亭左側、本宅ハ右側、松屋茂助ト

云所也、ヤド悪シ、

十日晴、上松御立、

一当所五時御供揃、半道寢覺御先番相勤候、一人ハ八郎

殿也、右ハ頂キ有難ゾ頂戴、

十一日晴、三富野御立、

一当所五ツ半時、御供揃ニテ御立、

十二日

一当所、

十三日

十四日

十五日晴雨、柏原御立、

一当所五ツ半時御供揃ニテ御出、一里半醒井へ御立場、

臣御先番相勤、一人ハ才次郎殿也、清水被召上御茶御

手カラ御立被召上、醒井餅沢山御取入ニ相成ル、臣モ

取入、尤段々薬用之由、御前被召上候御下り戴ク、一

里ニテバンハ御立場之中ニイソキ步行ニテ、鷲頭氏一

緒ニテ望湖堂迄差越、餅ドモヤル、至テウマシ、湖水

誠ニ々々面難成、御休鳥居并元、是ヨリ御供、今日葛

水頂キ方有之、御休ニテ永平寺ニ参上、御目見被仰付

候、一里半高宮御小休、半道計前ヨリ頻リニ雲カキコ

モリ、已ニ高宮宿多賀大社ノ御鳥居并前辺ヨリ、大風

雨降出シ、大ニ御イソキニテ、御本亭へ御光着、併大

ニ暑氣ヲシノキ候事、是ヨリ二里八町愛知川御泊、御

本亭右側、私宅左側、

十六日朝御供、

一当所五時御供揃ニテ御立、鳥居元御休御本亭左側、是御供ハ才藏殿ニ次渡シ、拙ハ非番ニ相成、草津へ七ツ時分着候事、

十七日雨踏通シ、大津ヨリ紙桐油掛ル、

一当所御定刻早目御供揃御立、御休大津御本亭右側御小休(マ、マ)、惣御供伏見御先着之時分ハ雨モハレ、御小休ヨリ御道具其外桐油取レ、晴々數ク誠ニヨキ都合ニテ候事、私宅ハ丹波橋通り丹波屋久兵衛之処也、

御屋敷ヨリ御暇ハ七ツ過ナリ、今晚ハ田中氏ハ当番候、拙ナリ三原氏ヨリ参候様申来候ニ付、拙ハ参候事、十八日雨、非番、

一御滞在中九ツ半時分御暇、

一谷先生参上被致、御座へ被罷通、拙ハ先生宅へ差越合ニ候処、今日ニ被上ニ付被止ニ候、先生扣被居候所へ参リ、段々御礼ドモ申、暫コ、ニ咄イタス、

一團扇五柄被送候、ワザト扣所故、何モ持参不致候得共、右通被送候処、御国元着ノ上直ニ御礼可申事、

一今晚大山氏へ参リ、暫咄ドモイタス、谷村氏・三原氏へモ同村被送之候由、是モ同様ノ事、

十九日雨

一御滞在中当番ニテ出殿、御屋敷下辺通、舟中々混雑也、昨日ヨリ日頃伊東氏少々不快ニテ、早目退出、拙ハ八過キ帰宅、御暇申上奉ル、今晚三原氏・鷲頭氏・岩山氏・百氏被参、岩次郎ハ早目被罷帰、京辺ヨリ段々参リ、漸々帰候事、

廿日晴

一川下リ不相成候付御滞在被召重、川明次第ト被仰出、昨日夕方ヨリ晴ル、ナリ、

一今日ハ非番故、伊東氏・名越氏長詰ニテ、早目御暇イタスヨウ、三人トモニ取入、天氣ハ誠ニヨロシク候事、一和田氏入来、大山氏モ見舞被與候事、

廿一日

一九ツ半時御供揃ニテ、伏見御屋敷御立御乗船、川御下リ、七ツ半時分御光着、大坂詰中出入、其外御門外へ罷出奉拜、拜見人数沢山、

一拙ハ田中氏同船ニテ、伏見私宅五ツ前乗船、大坂へ九ツ半時分着之事、御光着前ヨリ出殿、今晚泊イタシ置候事、

廿二日快晴、雨少々降ル、

一四時御書院へ御出座、高野山蓮金院其外大坂詰中御拜見、御銀師其外御拜見、畢テ御引入、

一今日ハ荷明方イタシ、マタ占候事、駕籠其外色々羽織ナド仕立方タノミ遣、

六月廿二日

一苗代川曉七ツ半時御出立御乗船、御水茶屋御小休、御先番相勤、夫ヨリ横井御休、是ヨリ当番御供、水上御茶屋へ御小休、是ヨリ(ママ)千石馬場午ノ上刻御光着、御機嫌能被為入諸御式等被為濟、

六月廿三日晴

一出殿掛四本次郎左衛門殿、急キ今日出立ニ付、為暇乞差越、非番前故四ツ過キ帰ル、
一島津右門殿其外今日出立人有之、
一出殿、

〔表紙〕

齊彬公史料

嘉永六年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料（紙数二十枚）」の記載あり〕

目録

齊彬公外国処分尾州公へ通信

齊彬公新納駿河へ中濱萬次郎帰朝ノ始末及ヒ琉球事件届

書等ノコトヲ指揮シ玉フ

勝麟太郎上書

以上三条

三一五 齊彬公外国処分尾州公へ通信（徳川義礼家記抄）

書添奉申上候、〔米國艦隊〕扱此節異国船之一条、委細達 御聴候

義と奉存候、今度は老中も大仰天之様子、誠ニ恐入義

ニ奉存候、此後又々渡来は無疑、此節は琉球江罷在候

事、四艘之内一艘、唐国香湊江参候趣ニ御座候、其後

委敷左右は未タ無御座候、日々相待罷在候、扱江都之

御評議、如何可相成哉不奉存候へ共、此節以前之様成

事ニては、実ニ一大事之御事と奉存候、閣老中ニも何

分異国之事情心得候人無御座候、〔阿部正弘、老中〕辰も此節は不評判之

様子、〔金雅、老中、長岡藩主〕先は牧野之方は少々は異国之義も心得罷在候得

共、辰を差置十分之所置は難仕と奉存候、当时之処ニ

ては、乍恐 水老公江御委任之外は有間敷と奉存候、

誠ニ恐入候事ながら、外ニ右之儀申立候ても詮立候様

ニは無之候間、

尊前様より此儀急度被 仰立候て、 水老公御登 嘗

ニて、海防之義万事御委任相成候様奉願度、内海江乘

込候とて、其度ニ夜中登 城等ニて、混雜いたし候て

は、別て一統之動乱ニも相成候儀、一体去年より篤と

御治定ニ相成候得は、此程之如きさわきニは不相成儀、

如何ニも残念至極ニ奉存候、此後交易御免之有無ニか

ゝわらず、軍船御造立不相成候ては、とても全備之御

手当はむつかしくと奉存候、此節こそ御十分ニ被仰

上候様呉々も奉願候、又極内承候へは、亜国は新国ニ

て御制禁後之國ニ候間、邪宗さへ御制禁ニて商法

は御免ニても、御国法は相立候との評議も御座候よ

し承候、虚実ハ難計伝承之俣申上候、琉球ニて滞留英

人申候ニは、此度亜人之手当是非願達之心得ニて、軍

船迄も数艘手当御座候間、日本も大方承知ニ可相成、

左候得は英・佛・魯之三国は、兼て望候事故、同様ニ

不相成しては承知不致訳ゆへ、追々渡来ニも可相成と

存候、左候得は琉球江も船々可参候間、繁華之土地ニ

可相成と為申よしニ御座候、右之通故、新国ニて御免

ニ相成候とも、佛・英・魯之三国江は、何と御所置ニ

可相成哉、只今之姿ニて四國之商法御免ニては、日本

は立行申間敷、何分不容易御時節故、御返答之趣は成

丈ケ年を延候様ニ被為在、其内十分ニ御手当御座候外

は有間敷、御手当さへ十分ニ相成候得は、たとへ御免

ニ相成候ても、定額を定め、嚴重ニ御取計之儀相調候

得共、只今之通ニては何分恐入奉存候間、水老公御

委任之儀被仰上候て、其上御前ニも老公と御相談

ニて、十分之御所置被為在候様奉願上候、以上、

(七月十日)

三二六 齊彬公新納駿河へ中濱萬次郎帰朝ノ始末

及ヒ琉球事件届書等ノコトヲ指揮シ玉フ

表向届之添書ニ、海岸之儀モ入念候様、出立前致承知

候間、当秋冬之内海岸巡檢可仕心得ニ候間、此段申達

候段、届置候方手当ニ宜敷ト存候事、

一土佐漂流人之儀、別紙通内意差出、差図之上取計候テ

ハ如何可有之哉、長崎奉行へモ内分相達置候得ハ、例

へ風聞有之候テモ不苦儀ニ存候、当地着船之上相糺候

テ、其上ハ依時宜、早ク届差出候テモ可然事ニ候得共、

実ニ帰度(歸度ニ違シ、或ハ詳請ニ通シタル故)引比ラレムトク御座候アリシト云、存候哉、真錠難分候

条、別紙通差出可然哉ト存候、且土佐人口書之事モ誠

之大意ニ書直シ差出可然、尤不差出候テモ可然事候へ

共、事情相知候為、老中衆評議之一助ニモ可相成候間、

不差障要用之ケ条書拔可然哉之事、

一表向御届之書面案ハ、至極可宜ト存候条、毎之通之振

合ニ可取計事、

一人数差渡(警備人数置テ)出サレ云、表向届一同ニ差出可然、文

言之儀立前(御下)モ分テ、御内話モ御座候間、人数差渡、

其外尚又手当申付候間、先大凡迄申違候、委細ハ追テ届可申達趣ニテ、表向届之添書ニテ差出可然哉之事、一兩三年中ニハ日本へ通商可申掛トノ事、別紙各中吟味尤之文言、外ニ存寄無之候得共、名内ニテ可差出品ニハ有間數、名内ニテ差出候テハ、公用人手ニ渡リ、世上風聞高ク人氣動乱之基ト存候間、老中へハ以封書申達候方可然哉ニ存候、

一唐国へ掛合之一条モ立前令、阿闍阿闍 正弘ニテ内話之通、琉球ニテ取計致符合候間、御内話之通可取計段、琉球へ可申達之処、彼地ニ於テ疾ニ同様取計候旨申來候間、御聞置ニ申達候趣書取差出可然哉之事、

右五カ条届之内去年英船渡來之届、并ニ人数之届ニケ条ハ、例之通之手數ニテ江戸へ掛合届ニ相成可然、跡三ヶ条ハ書面取仕立、我等手元へ差出候ハ、内分辰之口へ差出候様可取計哉ニ存候、

一右之条々存寄之俣申達候、乍併何モ国家之為メニ候条入念各中初申談シ、此度申達候趣意不弁事、又ハ不承知之趣モ候ハ、何篇モ及尋問候趣、何分上下一和得心之上可然事ニ候間、無腹藏万々可及評議事、其外野本一郎へ相達、中山球申越候儀モ所存候へ共、

先差掛公辺届之儀迄、大意書付遣候、

一別紙△印之二通ハ、南部遠州領公領へ可掛合存候文案ニ御座候事、

一表通内分届書面文書ハ、評議之上其方ニテ取立、為見候様存候事、
(月日不明)

三二七 勝麟太郎義邦 旧名 上書

愚衷申上候書付

此度米利翰之使節船渡來仕、滞船中内海深ク乘入測量、浅深等探リ候儀、誠以テ案外之事ニ候、其上若手違等御座候テハ、万々一不測之變モ御座候ハ、兼々厚ク御世話被遊置候房・相之御固等モ、右様之節ニ至リ候テハ、何ノ御要害ニモ不相成、警衛ノ勇卒空敷切齒仕候テ、海岸ヲ守居候ヨリ、外致シ方無御座候哉ト奉存候、甚奉恐入候得共、元ハ本邦之兵制・銃法共ニ古轍ニ泥ミ、其上追々安キニ狎候ヒテ、武備自ラ廢弛仕、实用ヲ失ヒ候ヨリ生シ候事ニテモ可有御座哉、故ニ彼其恐少キヲ覬覦仕、輕蔑之情体ヲ相顯ハシ候事ト奉存候、此上猖獗之諸蛮夷共承リ伝へ、右様之儀年々御座

候様相成候テハ、御国威是ヨリ衰弱仕、其上大小名共モ奔命ニ勞レ、万民勞役ヲ憚リ、果ハ怨声道路ニ載セ候様相成候テハ、終ニハ天下之御大事共相成可申哉モ難計、甚以奉恐入候儀ニ御座候、凡當時之御急務肝要之御処置ハ、先軍政之御變通并扱ワ、調練等之三大要ニ止リ可申哉ト奉存候、其上江戸海江堅固之御台場御建造并御旗本御世話被遊候御事、尤御急事ト奉存候、彼邦之軍艦ハ堅牢金城之如ク、其上廻旋自由ヲ得候由ニ候間、富津・觀音崎・猿島等如何程御世話被遊候共、場広之処中々以テ此御台場ニテ防留、江戸海江乗入候ヲ止メ候事ハ、難事之上之難事ト奉存候、若又右之場所ニテ敵敷打合候ハ、之ニ応シ候程ノ軍艦一二艘モ止メ置、火輪船杯ヲ以テ暫時ニ内海江乗入、江戸市中ニ向ヒ、焼玉等打掛候ハ、緩急之御備相立難ク、事機ニ後レ臍ヲ嚙候トモ、難及候儀モ可有御座候哉ト奉存候、故ニ江戸之御固敵重ニ御備被遊候御事、当今之御急務此上モ無御座候御義ト奉存候、彼邦ニテ専ラ海岸ニ設置候銃台ニハ、十八斤以上之大銃并暴母・加農ト唱候大銃ヲ採用仕候由、乍去唯々銃種多而已ニテ、其製作法度ニ不叶、其上銃台之位置宜敷ヲ得不申候テ

ハ、実地ニ臨ミ候テ寸功モ無御座、却テ味方ニ損害ヲ生シ候由及承候、江戸海ノ地勢ニテ申上候ヘハ、先大森村羽田之出洲・品川之洲先并佃島之出洲等築出シ、此処ヘ七拾挺備御台場、其外深川地先下総守屋敷先・芝因州之下屋敷并濱御庭先等江ハ、十挺或ハ二十挺備之御台場、御建造被遊、是ヨリ彼是相応シ、十字射等放発仕候ハ、可ナリ江戸ハ敵重ニ可有御座哉ト奉存候、其他ハ場所ニ応シ候テ、敵重之御台場ハ無御座候共、暴母、避牀并胸壁杯設置候ハ、不調練之多人数ヨリハ、遙ニ相勝レ可申ト奉存候、一体海寇防禦ニハ軍艦無御座候テハ、全備不仕候儀ニハ御座候ヘトモ、只今之処ニテハ軍艦御座候共、不熟練故急之御用ニ立申間敷ト奉存候、先差当江戸之御固敵重ニ御世話被遊置、其上追々軍艦其他之御世話被遊候共、敢テ遅カル間敷候儀ト奉存候、譬万々一戦争ニ及候テ、内海ヲ離レ、孤島杯而三所奪取レ候共、軍艦御製作ニ相成、兵制御變通之御趣意相立候ハ、暫時ニ取戻シ、其上彼力巢穴ヲ攻伐仕リ候モ相成難キ儀トモ不奉存候、凡百般之事物、一時二十全仕候様ナル儀ハ、決テ有御座間敷候間、緩急ニ応シ御世話被遊候ハ、難有御儀ニ奉存候、

私体若輩ヲモ不顧、国家御大切之御儀共奉申上候ハ、誠ニ以テ、死罪之至ニ御座候得共、教代莫大之御国恩ニ浴シ居候身分、誠ニ深ク憂懼仕候儀ニ付、不願恐愚衷之趣、謹テ奉申上候、以上、

小普請組

松平美作守支配

丑七月

勝 麟太郎議

前条申上候愚存ハ、当今之御急務ト存込候件々而已申上候儀ニ御座候、兼テ脱稿仕置候向三ヶ条、左ニ奉申上候、

参政ヘノ意見書

第一 御人選之儀厚御世話被遊下情上達候様可被遊事、

凡外寇ニ備フル要ハ、本ヲ固ク為スヲ以テ専務ト仕候、是ヲ為スノ要、人ヲ選ヒ候ヲ以テ第一ト仕候、当時厚御世話被遊候ニ付、御役人方悉ク賢明良質之者而已被仰付候様ニト奉存候得共、尚又此上共最モ厚ク被遊御世話候様仕度奉存候、就中御政事向ニ携候御役人ハ、別テ嚴重ニ被遊御人選、廉直ニシテ、其志正大雄偉之者ヲ以テ被任候様仕度奉存候、且又右御役人共、時々

御前江被召出、天下之御政事外寇之御処置等闊論考究被仰付候ハ、自然ト良策善籌湧出仕、依之自ラ言語モ開ケ可申ト奉存候、泰平之通弊ハ尊卑隔絶仕、下情上ニ達セス、自然ト言語塞リ候ニ御座候、故ニ何程之良將賢相ニ御座候テモ、下情ニ通達不致候テハ、万民悦服致候様ナル御所置ハ、相成難ク候儀ト奉存候、故ニ右之処ヘ御注意被遊、言語益々相開ケ候様仕度奉存候、

第二 海備之要軍艦無御座候テハ難叶候事、

海国兵備之要ハ、軍艦製造不仕候テハ、難叶ト申儀ハ天下ノ通論ニ御座候、然レトモ右ヲ製作仕候ハ不容易、其上航海并駈引進退仕候事モ、安ク被得候術トモ不奉存候、其上右等之雜費モ積算仕候ヘハ、必莫大之儀ニ相成ベクト奉存候、然ト雖トモ堅船無御座候テハ、何程御世話御座候共、外寇防禦ハ十全不仕候事ニ御座候、一体外寇ニ設クル兵備ハ、外国ヨリ得ル品ノ余得ヲ以テ、是ニ当不申候テハ、全備難仕ト奉存候、如何トナレハ何程富饒之國ニ候共、大艦大銃之造費莫大ニテ、其上右ニ従事仕候者ニモ、格別厚キ手当遣不申候テハ難叶事故、右等之費用、国内ノ力ヲ以テ充テ候テハ、

果テハ万民之課役嚴酷ニ相成、賤民反戾仕可申候、依
 之外寇ニ充ル兵備ハ、交易之利得ヲ以テ、是ニ当不申
 候テハ、全備ハ不仕候儀ニ御座候、右ニ申上候交易之
 儀ハ甚謂レ無キ様ニ奉存候得共、万々一船之製作御改
 革相成候ハ、年々相統候難破船モ少ク相成リ、凶歳
 之運送モ自由ニ相成可申候間、右之米穀御困ニ相成候
 外ハ、外国江御廻相成候様仕度奉存候、是ハ堅船御製
 造御座候テ、右ニテ諸運送仕候ハ、何程御法令嚴重
 ニ被遊候共、終ニハ必ス奸民トモ相計ヒ、抜荷物交易
 相企候ハ、必然之儀ト奉存候、依之堅船出来仕候ヘハ、
 直ニ御法ヲ被定、先清国・魯西亜之境辺并朝鮮ヘ此方
 ヲリ雜穀雜貨ヲ以テ、有益之品々ト交易盛ニ仕候儀ニ
 御座候、如斯此方ヨリ出張仕、彼方ヨリ參候儀ヲ止メ
 候ハ、国財ヲ失ヒ候事ハ少ク、尤有益之儀ト奉存候、
 初ノ程ハ航海不熟練之内ハ、洋中ニテ海賊并外夷之船
 之為メニ相追ハレ、又ハ時宜ニ寄候テ被打沈モ可仕候
 得共、元来勇智万邦ニ勝レ候日本ニ御座候間、右ニテ
 却テ進退驅引并船軍等モ、実地ヲ以テ暫時ニ自得発明
 可仕ト奉存候、

此条之儀ハ実ニ不容易事ニハ御座候得共、数十年之

後ハ、勢ヒ必ス右様相成可申哉ト奉存候間、書加ヘ
 奉申上候、

第三 天下之都府ニハ嚴重之御備有御座度事、

此条前文ニモ申上候得共、猶又反覆奉申上候、

総テ繁榮殷富之地、海岸ニ沿候場所ハ、不時之変モ難
 計、或ハ海賊杯之乱入仕候儀モ御座候間、必銃台之備
 嚴重ニ無御座候テハ、不測之变ニ応シ候事難仕候、況
 ヤ江戸ノ如キ天下咽喉之地、別テ嚴重ニ御備御座候様
 仕度奉存候、前文ニ奉申上候如ク、大銃数門備置不時
 之变御座候共、機ニ応シ防禦仕候様、訓練仕置度奉存
 候、凡外国之輩ハ、船中之働別テ練熟仕居候哉ニ御座
 候間、繁華之地杯乱妨仕候ニモ、ムザト上陸ハ不仕、
 先船中ヨリ柘榴彈・暴母杯唱候破烈玉、千発或ハ七八
 百発モ打掛候テ後、上陸仕候哉ニモ及承候、右様之儀
 ニモ候ヘハ、此方之勇卒何程在候共、唯々道具責ニ相掛
 リ、空敷打死仕候様外無御座候故、是ヲ拒ミ候程之御
 手当御座候ハ、後上陸接戦ニ相成候節ハ、兼テ鍛練
 仕居候刀鎗ヲ以テ、攻伐致候儀ト奉存候、

第四 御旗本之面々厚ク御世話被遊、兵制御改正并

教練学校御建立之事、

近來別テ御旗本ノ面々大ニ困窮仕居、三百石以下小祿之輩ハ、諸品高直ニ御座候テ、差當御用度引足不申、武備心掛候者モ、ハキト仕候事ハ無御座候、次第ニ廉恥之志薄ク相成申候、其他諸組之同心杯ニ至リ候テハ、手職仕候テ暮シ方仕居候間、武術等稽古仕候暇ハ絶テ無御座候、勿論御譜代・外様之大小名ニハ、武備嚴重ニ世話致シ候家モ不少候得共、天下御武備之根元ハ、御旗本之兵備ニ御座候哉ト奉存候、當時兵学者流之規則ト仕候ハ、泰平以後定リ候法ニテ、中々以テ天下之兵法トハ難申儀ニ御座候、其上古今兵制モ變遷仕居、武器モ追々致発明候品少カラズ、就中大統ノ如キハ実ニ神妙ニ達シ候様、改正ニモ相成居候間、右等之処御着眼被遊、世界一般ニ取用候西洋風之兵制ニ御改正、御變通之御趣意一途ニ御決心被遊、他ヨリ異説故障等申出シ候共、更ニ少シモ御頓着不被遊、御勇決ヲ以テ御改革相成候ハ、不日ニ盛大之御武備相立可申ト奉存候、教練学校ハ江戸ヨリ三四里隔リ候場所ニ被遊御建、御文庫ハ和漢蘭之兵書、銃学書、何ニ寄ラス御収集メ、其内廉立候科ハ、天文学・地理学・究理学・兵学・銃学・築城学・器械学杯先研究被仰付、若御家人

之内人数不足之分ハ、諸藩ヨリ被召出、御人撰之上教授被仰付候ハ、暫時之内ニ上達、出藍之者出ルコト可有之候、且又近來翻譯書夥敷流布仕候ヘトモ、甚杜撰多ク候趣承居リ候得トモ、若天下之裨益ニ相成候事御座候書ハ、学士ニ被命翻譯被仰付、官板ニテ世上ニ布告仕候ハ、右等之杜撰、惑説ニ心酔仕候様ナル事有之間敷奉存候、訓練場ハ方六町モ御座候ハ、如何ナル隊列モ整可申候、惣周囲ハ土堤ヲ以テ築立、稽古ニ罷越候者ハ、成丈ケ小人数ニテ、無益之物持下人ヲ省キ、馬上之者モ馬秣杵鞍後ニ付置、自身打替候様仕、召連候者トモハ、多クハ二男・三男或ハ弟・厄介杯ニテ、死ヲ共ニ致シ候者ナラデハ、召連不申様仕候ヘハ、自ラ実用ニ近ク相成可申候、只今之形勢ニテハ、千石之祿之者モ、侍三四人ナラテハ召連不申、是モ一季・半季之渡人ニテ、譜代ト申ス者ハ甚稀ニ御座候故、右等之者多人数召連候共、実用ニハ相成申間敷奉存候、且又出精仕候者ハ二男・厄介ニテモ無差別、御扶持或ハ銀子杯品ニ寄被下置、同心杯モ罷出候度毎ニ、玉薬料トシテ鳥目被下置、訓練ニ罷出候ヘハ、宅ニテ手職仕候ヨリ被下物ノ方、相増候様相成候ハ、相勵候テ

奢侈之風止ミ、其上不絶砲声耳ヲ轟シ、草野江奔走仕居候故、筋骨モ堅ク相成可申候、一ト通相聞候ヘハ、上之御物入莫大之如クニハ候得共、多分ハ二三万石・五六万石程ノ見込ニテ相足り可申候、左候ヘハ御物入ハ僅ニテ、御武威盛ニ相成候儀ハ、御国体ニ於テ無此上候事ト奉存候、

第五 人工硝石御世話并武具製作之事、

兵制盛ニ御取立、銃法御改正被遊候ハ、火薬之御入用夥敷相成候故、天造之硝石計ニテハ不足仕可申候、其上奸民等利ヲ貪リ、俄ニ直段引上杯仕可申候間、江戸近在ニテ土質宜敷、塵芥運送便利之場所見立候テ、作硝場六七ヶ所モ御造り遊ハサレ候様仕度奉存候、左候テ両三年モ経候ハ、作硝夥敷出来永世之御国益ニ相成可申奉存候、総テ右ニ奉申上候如ク教練学校御取建ニ相成、武備盛ニ御世話御座候ハ、御銃砲方職人其外武器職人・玉薬同心杯計ニテハ、人数引足申間敷其上銃法御改正杯ニモ相成候ハ、筒ノ張方杯モ違ヒ可申候間、右等ハ器械学・銃学仕候モノ江指揮被仰付改正仕、不足人数之処ハ、諸組同心又ハ少給之隠居・厄介杯、又ハ病身者杯、日々御細工所へ罷出、細工相

覚候様被仰渡、或ハ鑄立・筒磨亦ハ玉鑄杯、其人々之得手不得手ニ応シ細工等致サセ、内々御手当諸細工ニ応シ、何程ト相定メ被下置候ハ、町人共手ヲ置候テ下職仕、或ハ諸世話杯仕、纒之利ヲ得候トハ、莫大之相違ニテ、御為筋ニモ宜敷、若シ万々一之儀御座候共、武器之分ハ何程モ作り出シ候様相成可申候、且又右之者共造り出シ候御武器等御不用之分ハ、相願候向へ廉価ヲ以テ御払被下置候ハ、御費愈減少仕可申ト奉存候、

右ハ愚存申上候様被仰渡候ニ付、奉申上候儀ニ御座候、以上、

丑七月

勝 麟太郎

〔表紙〕

齊彬公史料

嘉永六年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料（紙数二十枚）」の記載あり〕

目録

軍賦

封内警備布令

以上二条

三一八 軍賦三月五日布令

大砲組一組

野戦砲六挺

一 七百目野戦砲 三挺 車台付

右要具并打手ノ人数運送方等左之通

一 押捧 六本 砲挺ニ付式本宛

一 火縄挾 三本 砲挺ニ付式本宛

一 玉竿 六本 砲挺ニ付式本宛

一 水桶 三ツ 砲挺ニ付式本宛

一 急火縄挾 三本 砲挺ニ付式本宛

一 差縄 三口 砲挺ニ付式本宛

一 桐油 三枚 砲挺ニ付式本宛

一 火薬箱 三荷 砲挺ニ付式本宛

一 打葉 拾八貫七百五拾目

但紙袋入付砲発ニ付百式拾五匁宛、砲挺ニ付五拾発宛

宛百五拾発分

一 鉄玉百五拾発、 砲挺ニ付五拾発宛

一 急火管 式百

砲挺ニ付五拾発外ニ五拾浮

一 急火縄 三拾本 砲挺ニ付拾本宛

一 火縄 六曲 砲挺ニ付式曲宛

一 小頭 三人 卒三人

一 大砲手拾八人 相中夫六人

但壹挺ニ付六人宛

但三人間ニ壹人宛

一五百目野戰砲 三挺

車台付

内玉竿役 壹人

打役 壹人

右ノ要具并打手ノ人数運送方等左之通

口薬役 壹人

玉薬役 壹人

一押棒 六本

壹挺ニ付式本宛

目付 壹人

一火繩挾 三本

壹挺ニ付壹本宛

火薬箱預玉薬役兼務 壹人

一玉竿 六本

壹挺ニ付式本宛

但代玉竿役ノ儀ハ打役ト線替勤之

一水桶 三ツ

壹挺ニ付壹ツ宛

右小頭等從卒応高前召列管候得共、右賦ノ外ハ召列

一差繩 三口

壹挺ニ付壹口宛

候儀不相成候、尤持高過上ノ面々ハ、追テ軍役可相

一急火繩挾 三本

壹挺ニ付壹本宛

掛候、且小頭之儀少高等ニテ卒召列サル面々ハ、夫

一桐油 三枚

壹挺ニ付壹枚宛

一人宛可被相渡候、

一火薬箱 三荷

壹挺ニ付壹荷宛

一押夫式拾四人

壹挺ニ付八人宛

一打薬 拾式貫目

但紙袋入付壹発ニ付八拾目ツ、壹挺ニ付五拾発宛

一上牛 三疋

中途運送用

但紙袋入付壹発ニ付八拾目ツ、

壹挺ニ付五拾発宛

壹挺ニ付壹疋宛

、百五拾発分、

壹挺ニ付五拾発宛

一持夫 六人

火薬箱三荷

一鉄玉 百五拾発

壹挺ニ付五拾発宛

一持夫 六人

壹荷ニ付式人宛

一急火管 式百

壹挺ニ付五拾発外ニ五拾浮

一铁玉百式拾発分

一急火繩 三十本

壹挺ニ付拾本宛

貫目四拾九貫九百式拾目

一火繩 六曲

壹挺ニ付式曲宛

壹ツニ付式斤六合ツ、

一小頭 三人

卒三人

外二三拾発分、火薬箱三荷入付

一大砲手 拾八人

相中夫六人
三八間ニ壹人宛

但沓挺ニ付六人ツ、

内玉竿役沓人

打役沓人

口菓役沓人

玉菓役沓人

目付沓人

火薬箱預玉菓役兼務沓人

但代玉竿役ノ儀ハ打役卜繰替勤之、

右小頭等從卒応高前召列管候得共、右賦ノ外召列候儀不相成候、尤持高過上ノ面々ハ、追テ軍役可相掛候、且小頭之儀少高等ニテ、卒召列サル面々ハ、夫沓人宛可被相渡候、

一押夫 拾八人

沓挺ニ付六人宛

一上牛 三疋

中途運送用

沓挺ニ付沓疋宛

一持夫 六人

火薬箱三荷

沓荷ニ付式人宛

一小荷駄 沓疋

鉄玉百貳拾発分

貫目三拾沓貫七百九拾五匁余

沓ツニ付沓斤六合五勺六才ツ、

外二三拾発、火薬箱三荷入付

一大砲頭

沓騎

從卒拾五人

但大番頭・御小姓与番頭ノ間勤之、

一旗・馬駿ノ間

沓本

持夫式人

一手槍

沓本

右同沓人

一具足箱

沓荷

右同沓人

一要具箱

沓荷

右同沓人

一沓籠

沓荷

右同沓人

一玉薬箱

沓荷

右同沓人

一陣丹荷

沓荷

右同沓人

一家来

五人

一小者

沓人

一乘馬

沓疋

一口引

沓人

一御目付

沓騎

從卒三人
内沓人口引

但乘馬不立置人ハ御厩、又ハ寄り馬ヨリ出之、

一使番

沓騎

從卒式人
内沓人口引

但書同断

右御目付・使番從卒応高前召列管候得共、右賦之外召列候儀不相成候、尤持高過上ノ面々ハ追テ軍役可相掛候、少高等ニテ卒召列サル面々ハ、夫沓

人ツ、可被相渡候、

一旗 壹本 持足輕式人

一旗預 壹人

一醫師 式人 夫式人

一書役 壹人 夫壹人

一貝役与力 壹人

一貝 壹ツ 貝役持之

御目付付

一足輕 壹人

一夫 壹人

旗預・貝役兩人ノ夫

但三人間ニ夫壹人ノ割、

外ニ

一兵糧玉葉方 四人 卒壹人ツ、

右從卒応高前召列管候へ共、右賦ノ外召列候儀不相成

候、尤少高等ニテ卒不召列面々ニテモ下仕多ク候付、

外ニ夫不被成下、其外

前条同断

一兵糧方足輕 式人

一火葉箱取締足輕 式人

一兵糧玉葉方主取夫 六人

一鑄物師 壹人

一鍛冶 式人

右壹組人数小荷駄賦

一小荷駄 壹疋

貫目拾九貫五百目

内拾貳貫目

七貫五百目

一小荷駄 六疋

貫目百六拾四貫目

内六貫目

六貫目

百五拾貫目

大砲頭壹荷物

右同從卒十五人

壹人ニ付五百目宛

御目付壹騎荷物

使番壹騎荷物

醫師式人 書役壹人

旗預壹人 小頭六人

大砲手三拾六人 兵糧

玉葉方四人

合五拾人

壹人ニ付三貫目宛

貝役与力壹人

一小荷駄 壹疋

貳貫目

貳貫目

貫目三拾貳貫三百目

内五貫目

足輕七人、鍛冶・鑄物師三人

合拾人

壹人ニ付五百目ツ、

貳拾七貫三百目

押夫并夫卒九拾壹人

外ニ拾五人大砲頭方

右同兵糧賦

一米貳拾四石五斗七升八合三勺壹才

俵數七拾三俵五升三勺壹才

白米ニシテ貳拾石四斗

上下惣人數百七拾人

但一日壹人ニ付、六合宛二十日分

貳俵負ニシテ

小荷駄 三拾七疋

一味嚮壹石七斗

右人數一日壹人ニ付、五勺宛二十日分

六斗負ニシテ

小荷駄 三疋

一塩六斗八升

右人數一日壹人ニ付、貳勺宛二十日分

小荷駄 壹疋

一薪壹万貳百束

長廻三尺ツ、

右人數一日壹人ニ付、^{〆マシ}三合宛二十日分

一大豆四斗八升

乘馬 三疋

但一日壹疋ニ付、八合ツ、二十日分

一切銅葉三拾六貫目

右同断壹疋ニ付、六百目ツ、二十日分

一小糠貳石四斗

右同断壹疋ニ付、四升ツ、二十日分

一塩三升

右同断壹疋ニ付、五勺ツ、二十日分

一切藁三拾六貫目

右同断壹疋ニ付、六百目宛二十日分

一薪三十束

長廻三尺ツ、

右同断壹疋ニ付、半束ツ、二十日分

右小荷駄 五疋

右同兵糧方諸道具賦

一陣丹荷 四荷

一大半釜 二ツ

一ザル

一大飯貝〔匙〕 大小

一柄杓 大小

一蒸桶 壹ツ

一水桶 貳ツ

一鍋大小 八枚

一口切桶 三ツ

一梅干

一細引類

右小荷駄

持夫拾人

右挑灯蠟燭之賦

一高張挑灯 七張

但壹張大砲頭自物

六張大砲一挺ニ付壹張ツ、

一弓張挑灯 三拾四張

但五張大砲頭自物

拾貳張大砲火藥箱等ノ間ヘ式張ツ、

拾三張〔御目付・使番・医師・書役・旗預・小頭・具役〕 壹人ニ壹張ツ、

四張兵糧玉藥方

一袖摺挑灯 壹張

大砲頭自物

一中蠟 貳百八拾挺

一高張一夜ニ貳挺ツ、二十日分

一中小蠟 千四百挺

弓張挑灯袖摺挑灯、一夜ニ貳挺宛二十日分

右小荷駄壹疋

右同幕并雜具類

一幕 壹張 串相添

一小荷駄印

但員數・疋數ニ応シ、

一鎗・ナタ〔斧ノ方書〕・ヨキ類

一鍬・山鍬・藁切ノ類

右品々兵糧方預ノ賦

右小荷駄 壹疋

一鑄物師鍛冶諸道具

右小荷駄 壹疋

右同小屋割

一小屋四敷四拾三間

坪ニシテ八拾六坪

内四坪

敷ニシテ百七拾式枚

大砲頭一騎

一壹丈三四尺物壹尺廻同式拾式本
一三四尺物壹尺廻同式拾壹本

中柱用
小柱

貳坪

御目付・使番貳騎

一八尺物壹尺廻同八拾八本

登り用

三坪

小頭六人壹坪式人宛

一壹丈四五尺物壹尺廻同百拾五本

桁用

拾八坪

旗預一人・大砲手三十六人・書役一人・
醫師二人・兵糧玉藥方四人・具役一人・

一壹丈四五尺物壹尺余廻同四拾四本

梁用
九用本明カ
ナラズ

三拾九坪

足輕七人・鎧物師殿拾
三人・夫卒百六人

合四拾五人 貳坪五人宛

一壹丈四五尺物七八寸廻同四拾本

加勢用

三坪

合百拾六人 貳坪六人宛

一小唐竹 八拾六束

垂木
エツシ竹用

六坪

乘馬三疋 壹坪壹疋宛

右一行桐油葺ニ付入用相成賦

六坪

食座

合上下人数百七拾人

壹坪

釜屋兵糧玉葉置所

内士以上五拾四人、内与力壹人

四坪

玄喚

夫卒六拾四人

外ニ雪隠拾ヶ所

大砲諸道具置所

足輕七人
鑄物師・鍛冶 三人

一桐油 八拾六枚

八尺四方、壹枚ニ
付、四百目ツ、

合大砲 六挺

一細引 八十六口

拾六番、一口ニ
付、八拾目ツ、

合押捧 拾式本

七百目野戰砲三挺
五百目野戰砲三挺

一細引 八十六口

拾六番、一口ニ
付、八拾目ツ、

合火繩挾 六本

貫目六貫八百八拾目

拾六番、一口ニ
付、八拾目ツ、

合玉竿 拾式本

右小荷駄 貳疋

柱用

合水桶 六ツ

一壹丈物壹尺廻木竹 八拾八本

柱用

合水桶 六ツ

嘉永 6 年 (1853)

合急火繩挾 六本

合差繩 六口

合桐油 九拾貳枚

内六枚大砲用

八拾六枚、小屋用八尺四方

合火藥箱 六荷

合打藥 三拾貫七百五拾目

合鉄玉 三百発分

合急火管 四百

合急火繩 六拾本

合火繩 拾貳曲

合小荷駄 六拾貳疋

合上牛 六疋

合旗 壹本

合貝 壹ッ

合乘馬 三疋

合米 貳拾四石五斗七升八合三勺壹才

合味噌 壹石七斗

合塩 七斗壹升

合薪 壹万貳百三拾束

合大豆 四斗八升

合切飼葉 三拾六貫目

合小糠 貳石四斗

合切藁 三拾六貫目

合陣丹荷 四荷

合持夫 拾人

合大半釜 貳ッ

合ザル

合大飯貝 大小

合柄杓 大小

合蒸桶 壹ッ

合水桶 貳ッ

合鍋 大小八枚

合口切桶 三ッ

合梅干

合高張挑灯 七張

合弓張挑灯 三拾四張

合袖摺挑灯 壹張

合中蠟 貳百八十挺

合中小蠟 千四百挺

合幕 老張 串八本

合鉦・鎌・山鉞類、兵糧方預道具一通

合細引 八拾六口

合陣小屋道具一通

右ハ御城下大砲備一組ノ賦

右之通被相定候条、臨時之節無遲滯様、何篇堅固可致
手当置候、至後年聊緩疎有之間敷者也、

御軍役方

嘉永六年丑三月

御家老座印

三一九 封内警備布令三月五日

一 御領内沖江異国船相見得候ハ、注進之様子次第為差引、
御軍役奉行其外御役々等早速其地へ可被差越候、

一 異国船様子次第第二ハ、御城下御備一組二手ノ人数百三
拾一人、右物主御小姓与番頭二人、外ニ諸郷ヨリ二組
四手ノ人数二百六拾人一番駈付ニテ、在外大砲六挺一
組五拾四人、大砲頭大番頭・御小姓与番頭之内一人、
右六手之御備組并大砲一組之人数、士以上四百四拾五
人其外從卒相加、上下八百四拾人被差越賦候、

一 異国船可及打払時宜候ハ、御家老一人前条御備之惣大
将ニテ被差越賦候、尤一番駈付等ノ人数、右通被究置
候得共、様子次第御城下又ハ諸郷ヨリ被定置候御備組
ノ人数、追々可被差出候、

一 馬五疋 鞍皆具供

右御備一組二手之御備三組六手ツ、西目・東目へ被
差出候得共、御城下ヨリノ御備二組四手ノ乘馬拾疋ニ
相及候間、其心得ニテ手当可有之候、尤飼料之大豆、
雜葉等之儀ハ、別段御手当相成候間差掛不及手当候、
一 御城下小番・新番・御小姓与御備組拾貳組二拾四手之
賦ニテ、乘馬之儀六拾疋ニ相及候間、御備馬之儀六拾
疋ニ相及候間、面々乘馬ニテ不致出役者共、立置候乘
馬寄馬差出、騎馬役之者小高ニテ乘馬不持合面々へ可
相渡候付、兼テハ其取調可有之候、

一 御旗本

御出馬之節ハ、御側廻其外乘馬之儀モ別段可申渡候、
右之通御作法被相定候条、臨時之節無遲滯様、兼テ可
致手当置候、至後年聊緩疎有之間敷者也、

御軍役方

嘉永六年丑三月

御家老座印

〔表紙〕

齊彬公史料

嘉永六年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料(紙数二十五枚)」の記載あり〕

目録

齊彬公国老新納駿河へ与ル書牘

齊彬公水戸中納言殿へ独ヲ謹ムト云フ文字ノ額面ヲ乞ヒシ返シニ

水戸前中納言殿松平慶永公へ書牘

参考 昨夢紀事抄

礮台築造ノ始末田原覚書

米艦浦賀港ニ渡来之形況

以上六条

三三〇 齊彬公国老新納駿河へ与ル書牘

御直書

右被成下候トノ御事ニ御座候間、御内々差上越候、御請差上相成候ハ、御廻シ可被成候、此段申上越候、

以上、

五月二十九日

(安政元年)
山田(為正、小納言)壮右衛門

駿河様

三三一 齊彬公水戸中納言殿へ独ヲ謹ムト云フ文字ノ額面ヲ乞ヒシ返シニ

その身より国民までもおよぶへし

誠をものゝハしめとはしる

又其文箱ヲ見ルニ、アラキ破竹モテツクリ、裏ニカキシルサレントソ、すななるそのおりたちの水戸文箱

心の竹を開きても見よ

三三二 水戸前中納言殿松平慶永公へ書牘

過日ハ始テ御出之処、紛冗中何ノ風情モ無之、失敬之事ニ候、扱ハ其節御持参之ケ条書、尚又致熟覽、乍不及御好ミニ任セ、愚意相認メ候得共、乍憚御養子ノ御身ト申、且初テ御入国之事ニ候得ハ、急ニ御改ニテ、万一御手違ヒ等出来、御触事カハリ候様ニテハ、以ノ外不宜候、御先代ヨリノ法令等ハ、タトヒ旧弊ナカラモ、人々安シ居候得ハ、御改正ノ上ニテ御不当出来候テハ、御濟不被成候故、諸事能々御見留ノ上御発シ、扱御発シニ相成候カラハ、始終御押通シ被成候様有之度、当時ノ御年齢ニテ、右之如ク御国政ニ御心ヲ被用候段ハ、実以感心イタシ候、此上無御間断候ハ、如何程ノ御事業モ容易ノ御事ト、乍憚御頼母敷奉存候、御発途モ近々ノ由承リ居候処、今日又々承候へハ、明朝之由故認メ可申奉存候処、登城等用向多、夜ニ入認カ、リ、前後ノ儀モ可有之、落字等モ不少ト奉存候、宜敷御推覽可給候、扱又不順ノ時候御旅中折角御自愛專一二奉存候也、

五月十八日 燈下認

二白、拙子事モ一昨十六日登城、如先例御暇相濟候処、昨日又々

上使ニテ、今日登城ノ処、於御座之間御対顔、御懇ノ御意ヲ蒙リ、御手自ラ御伝来ノ御大刀等品々拝受、不肖ノ身不堪慚愧奉存候、序故御吹聴申候、早々、

水戸

松平越前守殿

御報

三三三 参考 昨夢紀事抄

薩州候松平廣輝ハ御大身トイヒ、謀慮深遠英邁ニシテ、奸雄ノ才逞シキ御方ナリケレバ、列侯ヲ始閣老衆迄モ畏憚セスト云フ事ナシ、
(松平慶永)
公ヨリハ二十計ノ御長者ナレハ、
公ニモ棄カタク、頼モシク思召テ、御若年ノ比ヨリ、殊ニ親シクセサセ玉ヒ候ニモ、大方ナラス
公ヲ依頼シ玉ヒテ、天下ノ事モ国家ノ事モ互ニ謀リモ

ノシ給ヘリ、易簡ニシテ明断ニ座セシ事ハ、御書通ノ上ニテモ推テ知ラル、ナリ、又宇和島侯伊達遠江守松城モ蚤クヨリ御念比ニテ、薩州侯ト同シ様ニ何事モ申カハサセ玉フ、此侯ハ宇和島老侯ノ目鑑ニテ、小身ヨリ出テ御養子トナリ玉ヘル故、能々下情ニモ通シ、文学ノ筋モ心得玉ヒ、特ニ弁才アル御方ニテ忠良英敏、幕府ノ御為ヲ思召入タル事ハ、薩州侯ト等シク、公二次テモノシ玉ヘリ、御年比モ公二十足ラスノ御年増ナレハ、御兄弟トモイヘラン様ニ、トリ別テ御入魂ナリキ、御互ニ御在国ノ節ニハ、關東ノ形勢杯ハ御見聞ノ次第ヲ御申カハサセ玉フ、サレト薩州・宇和島両侯トモニ、御参勤ノ御年並違ヒテ、御交替ニナラセ玉ヘハ、春夏ノ交際御双方暫シノ御在府ノ程ニ行キ通ヒ玉ヒテ、御在國中ニ御書翰ニハ及ヒカタキ至リ、深キ事共杯ヲ被仰合タルハ、例ノ御事ナリ、此外ニ土州侯松平土佐守豊信是モ前ノ両侯ト同シク、御参暇ノ御年次違ヒタレハ、是迄ハ御疎遠ナリシカ、去ル丁巳安政四年ハ、此侯御滞府ニテ、公ト御相詰江戸御在府トナラセ玉フニ、兼テ学才アリテ、卓犖英発ノ聞アル御方ナリケレハ、

公事ヲ御会談ニ託セラレ、友誼ヲ結ハセ玉フニ、忠直ニシテ義ニ勇ミ玉フ事、類ヒナシ、御齡モ公ト御同年ニ座セハ、公モ一良友ヲ得タリト喜ハセ玉ヒ、彼侯モ公ノ御高誼ニ感服シ玉ヒ、刎頸ノ思ヒヲナシ玉ヒテ、御敬重浅カラズ、彼殿人モ公ニ交ラセ玉フ、已来ハ内々ノ御行状ヲ慎マセ玉ヘル由ニテ、全ク公之御薰陶ニヨレルナリト師質中根雪江杯ニモ語り出テ敏ヒアヘリ、已上ノ諸侯ハ御交リ、特ニ深クシテ共ニ天下ノ事ヲモ謀議シ玉ヒ、幕府ヘ忠貞ヲ竭シ、公ト休戚ヲ同フシ玉フ御方々ニテ、公ノ御事蹟ニ就テ關係最モ多キ故ニ、其御交誼ノ荒増ヲ記シ侍ルナリ、此余侯伯諸有司ノ中ニモ、御同志ノ方々モ多カレト、夫ハ其処々ニ記シ出セリ、凡當時ノ列侯ヲ初御旗本ノ衆中御家人ノ輩、諸藩臣并草莽ノ士ニ至ルマテ、少シ志アルト見ユル限りハ、皆彼方ヨリ服従セシ事ナレハ、御親敷御心易キハイト多ケレト、要ナキハ記シ侍ラス、

三三四 礮台築造ノ始末田原
覚書

近年日本近海へ西洋軍船出沒致シ、佐多郷・山川郷・前ノ濱へモ時々乘り來り、後世念遣モ可有之ト深被思召、非常ノ為メ御城下海岸へ砲台御造築被仰、専ラ成田正右衛門へ被仰付、次ニ私ニモ同断被仰付、諸所造築仕、其為メ先年文久三癸七月英國ノ軍艦内海へ乗入、慶長以來之大戦争之時節モ、其為メ格別ノ御勝利御座候、小銃ニ小弾ヲ数丸装シテ、禽獸ヲ獵スルノ一銃西洋ニ有之ト、私長崎滯留之砌、井上庄太郎ヨリ問越ニ相成、御附人大迫源七江申談、和蘭人持合之両眼鏡ヲ、通詞岩瀬彌七郎江計ラレ、諸道具相揃へ一箱御取入相成、私帰國之節才領持帰、庄太郎方へ差出、御都合宜ク候由承得候、其折迄ハ小銃ヨリ数弾ヲ放発スルコト、未人々合点不仕ニ、早御着目被遊感心仕候、私へモ磯御射場ニテ打方被仰付候、今ニ御格護相成候哉、其架ダイニ紅葉ニ鹿ノ彫刻御座候、

三三五 米艦浦賀港ニ渡來之形況

寺師宗道日記ニ曰、嘉永六年癸丑相州浦賀へ北米ノ軍艦渡來、通信貿易ヲ乞フ、其時警衛各藩ニ令セラレ、數百年昇平ノ後ナルカ故、一般狼狽甚シ、江戸中ニハ遽ニ武器ノ用意忙シク、具足屋ナト大利ヲ得タリ、是迄一領七八両ノモノモ、候チ三四拾兩以上ニ騰貴セリ、米価モ直ニ騰リ、尅兩ニ凡五斗内外ナリ云々、

嘉永6年(1853)

〔表紙〕

齊彬公史料

嘉永六年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執掌史料（紙数四十枚）」の記載あり〕

目録

金銀価格異動布令

参考 開国始末抄

参考 勝義邦外交余談 明治二十年ノ著

以上三条

三三六 金銀価格異動布令

大目付江

慶長銀百貫目ニ付、代銀式百拾四貫六拾五匁三分ニテ候処、去ル卯年銀之双替へ相替候ニ付、以来式百五拾八貫五百五匁三分之積、仕来之通六拾目替ヲ以、金ニテ四千三百八兩壹歩、永百七拾壹文六分六厘ノ割ヲ以、被差出候様、從 公儀被仰渡候条、不洩様可致通達候、

三月十四日

御家老座印

右ニ付別紙ニ添

銀式百五拾八貫五百五匁三分

六拾替ニテ割レハ

永錢四千三百八貫四百二十壹文六分六厘六毛

但永錢壹貫文ハ金壹兩

此ノ金四千三百八兩ト四百二拾壹文六厘六毛六糸

永壹貫文ヲ四ヲ以割レハ、二百五拾文ニナル、是

則金壹歩ナリ、右之四百二十壹文余之内、二百五

十文ヲ引キ、金ト為セハ則チ、

金四千三百八兩壹歩ト永錢百七十壹文六厘六毛

トナル、

是ヲ現金銀ニテ払フニハ、永百七十壹文余ニ六拾匁

ヲ乘シ、則チ銀拾匁三分トナル、

右為心得、

三二七 参考 開国始末抄

直弼又藩士を督励して文武を講習せしめ、大に意を辺防に用ゐ、幕府砲台を品川に築くを見て、窃に其実用に適せざるを察し、又内治肅ならず、人心和せずは区々防禦の術頼むに足らずとなし、意見を草して之を上つる、其文に曰、

〔頭註〕品川砲台の頼むに足らずして、人心を調ふるの要を論ず

砲台御造営は、引請に被仰付候趣伝承仕候、惣じて引請之習ひ、出来目之功を第一と仕、手数を省き候儀は申までも無御座、殊に短日火急之御造営にては、自然と嚴重精密の方には参り兼可申哉、其上沖合八町斜の砲台東西相連り候ては、自ら水理に指障り、洪水或は暴風逆浪之節に破壊之憂、今日にも無之とは難取極奉存候、万一左様之災害出来候ては、莫大之御国財・人力を被費候、内海第一之要害無其詮、御威光にも拘り、且於物前守兵自然と心臆し、剛強の防禦無心許奉存候事、

内海干潟遠浅之場所は、自然之天險にて軍艦難近寄、害は彼にあり、味方之利と奉存候、人力にて可成は猶

此上にも水底渡来之妨を成し度程に奉存候処、右之遠浅へ孤島之連砲台を築、敵を待候必勝之御籌策、私共には何とも会得仕兼候儀に御座候、外夷常に海軍を業と成し、激砲を以て敵之大軍艦、或は砲台を打破る之術に練熟し、然も活動自在之軍艦を近付、孤島之連砲台を的と成して可打破、彼に十分之利相見へ、味方には連台より前左右へ連発して、敵船を可打挫之利は可有之候得共、元来不鍛練之術を以て、彼か練磨之術に敵するの損失相見へ、又激砲争発之中に在て敵対し、或は大風波の時に当りて、可凌之軍艦も未だ無之、砲台之後詰援兵等之術計も無之、万一砲台二三ヶ所も打破らるゝ欵、又は被乗取、味方敗軍に相及候とも、眼前に守兵犬死可為致之外無御座欵に奉存候、勝敗之期に相臨み死を決し候儀は、武門之習ひに候得共、初より死地に入て敵を待は、勇士之不本意、物前に恐怖を生じ候如きにては、防禦之所詮無之様奉存候事、連砲台之利害得失御研究之上、建築被仰付、御威光を以て右之防禦被命候ハ、違背之者可有之とも不奉存候得共、天下之御為め、忠奮必死之防禦を心掛罷在候者共、其利害得失主将之覚悟に不応、御旗下之衆心一

致信服仕兼候ては、たとへ金城湯池の要害たりとも、一円御頼には難相成哉、若敗軍之基と相成候ては、不容易御大事と奉存候、就ては疾く内海岸御府内之御軍配被仰付、委任之主将銘々へ要害之得失篤と御詮議有之、兎角上下和合、衆心一致之忠戦防禦を心掛候御処置、即今之御急務欵と奉存候事、

連砲台之御造営皆備之上は、不容易御用度に可有御座哉、人和要害堅実之御備に相成、永統不易之御処置にも候ハゞ、たとへ御国財・人力を被費候共、御安心之御儀に候得共、自然前件々之憂害難避筋も御座候ハゞ、右之御入面を以て、先づ内海岸要害之御実備を被立置、有余りにて長崎表従来之警衛此節出張之面々を初め、江戸近海防禦之疲弊等御隣察被為在、自今共相成之御手当被仰出候ハゞ、

御代初別して御仁徳を感戴仕、末々之人氣迄一倍に振起、格別之御要害に可相成哉と奉存候事、

外国之御処置追々被遂御詮議候上、何れに御決策有之候とも、防戦の術ハ速に被決、上下之人心を一途に御取締可有之事、至極之御急務欵と奉存候処、其辺之御処置号令、自然御遲滞之筋御座候ては、天下武家之人

心平信半疑にして、種々之浮説も生じ易く、且只今にも不慮之急変に相臨候ては、必勝之防戦諸事無心許、不容易御大事欵と奉存、難安寝食候、勿論前書外国御処置之御決策被為在候に付ては、御当家御創業以来未曾有之御大事、

皇国之安危に拘り、殊に

上様御代初御壮年之御折柄、猶以御三家・御三卿・御一門之歴々、一同御評議可被為在候御儀欵と奉存候事、此は嘉永六年冬の事なりき、此の年代に在りては、品海の砲台を以て天下の要害となし、防禦の策は築台に過るなしと思へる者、滔々たる天下皆然り、此間其実用に適せざるを覺りて、徒らに財帛を糜するの惜むべきを公言せしは、予の知る所を以てするに佐久間修理一人なり、

三二八 参考 勝義邦外交余談 明治二十二年 明治二十二年 著

外交政略ノ困難ナル、殆ント三十余年間猶如一日、就中仮条約の談判ヨリ、邦内紛擾亦無虚日、外人我方固情ヲ了察シ、我ニ対スルニ彼方所謂半主国ヲ以テ对接ス、此事豈今人恥テ、古人之レヲ恥サラム哉、我政官

其同属ニ対シテ雄視スル者、外人ニ对接スレハ、彼ニ小児視セラレ、一言ナキヲ如何、是等ヲ釐革セムトシ、維新ノ初政侯伯ヲ廢シ、封建ノ制度ヲ解キ、士大夫皆其食禄ヲ剝小セラル、然レトモ此挙行ヲ、邦内公然不平ヲ唱ヘス、謹テ其禄地ヲ納入シ、甘シテ貧ニ処スルモノハ、一ニ

朝廷ニ奉対、違反スヘカラサルニ因リト雖モ、賢不肖ヲ論セス、外交政略ノ我邦内一大重事ナルヲ思ヒ、今日ニ及ヒシモノ、其原因ヲ為セシナリトセス、我對海外条約談判其初メ、安政五年六月、米國ニ仮条約調印セシヲ以テ其初度トス、從是陸続各國ニ及ヒ、此際ヨリ邦内一大紛擾ノ源トナリ、傍議百出其形勢數變、終ニ大老井伊直弼斃サレ、其激勢積重益甚シ、是一回、維新ノ政、条約ノ談判ヲ開キシハ、一昨年井上氏其主任ニ當リ、方略尽力心思ヲ勞セサルニ非スト雖モ、再ヒ古轍ニ陥リ、傍議ニ制セラレ、終ニ中止ニ及フ、是二回、

今歳大隈氏出テ其事ニ當リ、猶傍議百出如昔日苦慮尽力、其結果ヲトスヘカラス、是三回、外交政略ノ困難ナル如斯、往時ヲ回想シ、今日ヲ顧ル

ニ、此談判已上三回、今回はヲ誤ラハ、何レノ日欤其良結果ヲ得ム欤、邦人上下ヲ論セス、熟思深考尤忽ニスヘカラサルナリ、

爰ニ嘉永年間米艦入津ヨリ、國運ノ變遷・人民ノ向背目撃セシモノ、或ハ秘密ニ涉リ湮没、伝ハラサルモノヲ略記ス、如左、

○嘉永六癸丑年六月（明治二十二年前三十七年）、米國ノ軍艦浦賀ニ入り、其國書ヲ呈シ、世界ノ形勢ヲ説キ貿易ヲ乞フ、是時ヨリ都下鼎沸人心恟々、上下一定ノ方向名状スヘカラス、彼來年ヲ期シ、其決ヲ乞ハント云テ去ル、是ヨリ邦家囂然、建議堆積、其決極和戰二途ニ分レ、孰レカ是孰レカ非ナルヲ知ラス、米艦再渡ニ及ヒ幕議和平ヲ主トシ、仮条約十二款ヲ議定シ、施行十八ヶ月後ヲ約ス、然リト雖モ邦内ノ侯伯士夫、議論建言陸続絶ヘス、胸中不滿意クモノ全國十二シテ八九、

是一段

○白駒歩ヲ不止転瞬、安政三丙辰七月、米國ノ領事ハルリス氏下田ニ入り、直ニ江戸ニ到リ、其國書ヲ以テ將軍ニ直上セムト云、官吏是ヲ拒ミ、百万弁論終ニ不能

止、遂ニ決議其乞ヲ免ルシ、京師ニ奏上列藩ニ告ク、然レ共皆其不可ヲ唱テ止マス、邦内人心激昂殺伐ノ氣勃然發生ス、十月米使入江戸、

是一段

○同三年十月、家定將軍沈思決斷、鎖國ノ古法維持スヘカラサルヲ看破シ、開國貿易ノ是ナルヲ思ヒ、閣老堀田正睦ニ命令、貿易ノ方法ヲ調査セシム、正睦銳意時要枢官吏ニ密命、大ニ処分スル処アラムトス、

此大令ハ島津齊彬、閣老ノ首座阿部正弘ニ密告シ、直ニ將軍ノ聴ニ入ル、家定將軍ノ室ハ島津齊彬ノ女ナリ、故ニ献壽機微其ノ翼賛ノ世ニ顯ハレサレ共、独リ將軍其意ニ適スルヲ悦ヒ、終ニ断然令シテ正睦ニ命シ、確トシテ不動ニ至リシ也、

此際ヤ、外欧州諸国軍艦ヲ率ヒ到リ、通商和親ヲ求ム、殆ント無虚日、内不平ノ輩、親藩ヨリ大侯伯及ヒ邦内ノ士夫、其不是ヲ鳴ラシ紛雜尤甚敷故ヲ以テ、其着手ニ苦ム、終ニ正睦ヲ以テ、其趣旨ヲ奏上セムトシテ京師ニ使ス、不被聴、正睦空敷東帰ス、後終ニ其職ヲ止ラル、

是一段

○開國ノ令邦内ニ布カサルニ先タチ、一説興リ人心愛遷

説ヲナシテ云、今ノ將軍ハ不明暗愚大任ニ不堪ナリ、一橋殿ハ賢明英智、是ヲ挙ケテ儲副ニ立テ、諸政ニ臨マシメサレハ、大事ナル期ナカラムト、此説邦内ニ普ク雷同シテ一時ヲ傾倒ス、此説ヤ親藩大侯伯ニ出テ、諸官有志大抵是ニ傾ク、窃ニ其党ヲ結ヒ、終ニ頻リニ將軍ニ逼ル、或ハ京師ニ遊説シ、

勅命ヲ以テ強圧セムトス、此際將軍ノ苦慮困迫名状スヘカラス、然リト雖モ將軍、其建言議論ノ忠愛赤心ニ不出、殆ント強訴ニ類スルヲ憤リ、断然拒テ不容、又其左右ノ侍臣中、其党不詳ヲ以テ意旨ヲ達スヘキナリ、苦心ノ余リ重症ニ罹リ、其起クヘカラサルヲ悟リ、誠実撲直ノ近臣平岡丹波ニ密命シ、井伊直弼ニ遺囑スル所アリ、直弼ヲ挙ケ大老トナス、無幾許將軍薨逝セラ、此時微臣肥前長崎ニ在テ軍艦ニ従事ス、後窃ニ此時ノ事情ヲ聞テ、口云フヘカラサルモノアリ、形勢ノ愛ニ到リシヲ思ヘハ、愁涙ノ潛々タルヲ不覚ナリ、是安政三四五三ヶ年周ノ形勢

是一段

○初メ家定將軍、其疾病危篤旦夕ニ在リ、安政五戊午年四月、直弼命ヲ奉シ決死ヲ期シ、其衝ニ当レリ、此時

米使仮条約調印ノ儀、其督責甚タ急ナリ、内外ノ大事一時二輻輳、其形勢如何トモ不可成、同年六月紀伊宰相ヲ迎へ、是ヲ養君ト定ム、是家定將軍ノ遺命ニ因ル、然リト雖モ親藩一門諸官大ニ心中不快ヲ抱キ、亦危懼ノ念慮固クシテ、既ニ内破ノ形勢挽回スヘカラス、難危累卵手ヲ措ク処ナシ、同年七月家定將軍薨逝ヲ公布ス、

同年十二月家茂將軍宣下アリ、

是一段

○同五年七月、直弼井伊家事蹟參考ス
附録トス 從來繼續ノ傍議、鬱然トシテ今日ニ及ヒ、或ハ教唆或ハ謀略、終ニ邦内ノ錯乱ニ到リシヲ以テ、其議ヲ固執セシ親藩一門大藩主ヲシテ幽閉ス、是ヲ以テ下士激怒シ、人心危懼益甚シク、官吏大ニ萎靡シ、人々唯目送口ヲ開クモノナキニ到ル、是其初其謀ヲ破リ、微ヲ探ルニ細素隱密ナルヲ以テ、各員其心中危懼ノ心、胸中ニ凝固彼我相疑相猜シ、活発円滑ナラサルニ因ル、從是後京師及ヒ江戶ノ士人・官吏罪ヲ得ル者益多ク、此間殆ント一年有余、安政六年己未十二月ニ到リ、其獄終局ス、

同七庚申年正月、米公使勸告ニ寄り、欧米諸國へ使節

ヲ派遣ス、送迎同國ノ軍艦ヲ用ユ、

此際ヤ、世間ノ傍議繼續ノ遊説止ミ、仮条約ノ非ヲ誘導教唆シ、大老ヲ目スニ売國違勅ノ奸臣ヲ以テシ、下士ノ氣焰激怒シ、終ニ万延元庚申年三月三日、直弼水戸藩士ノ為メニ櫻田門外ニ斃サル、當時ノ形勢如斯実ニ徳川幕府重任ニ不堪、其職滔々、濤瀾不可回、既ニ瓦解ノ時ナリ、從是後其全國ノ保護治安ヲ得ムト欲スト雖モ、豈可能哉、然リト雖モ猶後十有余年ヲ經過セシ者、我徳川氏ノ臣僕才ト不才ヲ不論、胸中忠愛ノ情自ラ厚ク、弇弱ト雖モ徳氣其性質ヲナシ、涕血シテ不言中能ク身ヲ不顧、其主家ヲ不忘、唯一片誠意ノ存スルニ因レハナリ、

是一段

○仮条約ナリシヨリ、外人ノ談判大ニ昨ニ異ナリ、英國率先シテ品川御殿山へ公使館建築ヲ議ス、此時邦内ノ影響士人ニ及ヒ、其氣焰激怒トナリ、扼腕切齒官吏ヲ憎ミ、攘夷説再ヒ盛ニ、横濱港進撃ヲ企テ、或ハ其外國ニ関スル吏ヲ暗殺セムト云、殺氣大ニ滿邦内、

○同元年五月、終ニ英國公使館建築ノ事決定ス、同八月水戸齊昭公死、同九月直弼大老タリシ時、幽閉セシ親

藩一門ヲ免ス、

同年十一月、和宮御下降ノ事ヲ布達ス、

○文久元年辛酉年二月、魯艦對馬淺海浦ニ入り、上陸地勢ヲ視察ス、同三月、同軍艦同國益ヶ浦ニ入り上陸、土民大ニ恐怖ス、地勢ヲ測定、仮家ヲ建築ス、宗藩ノ小吏其無狀ヲ談ス、不聞、

同年五月、水戸藩及ヒ浮浪十四名、高輪東禪寺英公使ノ旅館ヲ襲フ、守衛者はヲ防禦、英人二人ヲ傷ケ互ニ殺傷アリ、

同七月御殿山公使館落成ス、

同十月長門侯江戸ニ參府、是邦内ノ形勢日々危殆ニ到ルヲ憂慮、建言スル処アラムトス、

同月、和宮江戸御着輿、

○文久二壬戌年正月、浮浪安藤閣老ノ登城ヲ覘ヒ、坂下門外ニ擊、不中、唯微疵ヲ受ルノミ、

同年二月長門侯登城、邦内ノ形状ヲ具陳シ、公武ノ御中、合体外ニ当ラサレハ、大事ナラサルヲ演説アリ、其臣永井雅樂ヲシテ、要路ニ懇談ス、幕府大ニ其説ヲ容レ託スル処アリ、

此議長門ノ士民不是ヲ唱ヘテ不止、可惜其説終ニ不

被用、

○同年六月、從京師、勅使三位大原殿東下、幕府内政被

視察御下問ノ事アリ、亦將軍上洛ノ事并大老ヲ置キ国政諮詢ノ事、一橋刑部卿補佐ノ事、松平慶永政事ニ參與等其他件々、大抵幕府之ヲ奉シ着手スト雖モ、隱然不服ノ姿アリ、其衷ハ如良政ト雖モ、殆ニ迂遠尋常ノ策タルヲ不免、此時幕府大ニ海陸軍擴張ニ執心シ、軍制改革ヲ議セシメ、内政釐革スル処アリ、

同十二月、幕士・諸藩士及ヒ浮浪ノ徒密ニ集合、御殿山公使館ヲ焼ク、是等ノ徒忽トシテ起リ、忽トシテ遁ル、幕府モ亦其激變外人ニ及フヲ慮リ、敵ニ之ヲ捕索セス、

○濤瀾滔々紛糾錯雜ノ愛ニ及ヒシ、井伊大老・安藤閣老遭難ヨリ、邦内ノ士夫大ニ激昂シ、切齒扼腕何レノ侯伯ヲ不論、自ラ脱藩浮浪トナリ、或ハ其國ノ大夫ヲ暗殺シ、脱走潜伏スルモノ、或ハ慷慨家又擊劍者流且浮浪ノ輩、時ヲ得タリトシ、京師並ニ江戸ニ徘徊スルモノ、其大數四五千名ニ下ラス、幕士モ又此風ヲ是トシ、攘夷暗殺ヲ試ミムトナス輩五六百名、此輩内外相応シ、其勢力ヲ逞フス、此党ノ私約賢愚ヲ不論、一名ノ外国

人ヲ殺スモノハ、其私会ニ上席シ、衆士ニ尊敬セラル、其次ハ官吏、其次ハ洋品商等皆目スルニ、売国ノ奸俱ニ世上ニ不可立ノ徒トシ、一ノ聞ク処アレハ暗殺ヲ試ム、壮士ノ氣焰如斯、元來此党ノ教唆誘導セラレシ源ハ、高位一門ニ発シ、官吏中又窃ニ是ヲ以テ、志ヲ達セムトナス者ナシトセス、故ニ閣老ヨリ以下要枢ニ当ル者ハ、窃ニ是カ備ヲナサ、ル能ハス、江戸市中ノ壮年者、或ハ不平ヲ懷キ慷慨スルモノハ、隠然是ヲ快トス、故ヲ以テ潜伏容易、探索甚タ苦ム、爰ヲ以テ外国公使ノ滞在館、同書記官・下等輩ト雖モ、其階級ニ応シ、其出入共ニ幾許名ノ護衛士ヲ附シ、保護セサルヲ得ス、東禪寺並生麥ノ件アリシヨリ、英国ノ如キハ軍艦ヲ繋キ、兵卒ヲ呼、居館往來又自カラ衛護ヲ増加ス、仮条約ヨリ生セシ錯雜、殆ント其極ニ達スト云ヘキナリ、幕府ノ最後慶應四戊辰年官軍東下、横濱戸邊ニ屯營スト雖モ、居留地ノ如キハ英ノ番兵街上ニ立テ、其公使館発布ノ鑑札ヲ持セサレハ、出入ヲ免サス、官兵モ又無勢力、如何トモ能ハサリシナリ、今ヤ邦俗其氣風ヲ一変シ、其憎ミ厭ヒシ者、隱密彼カ財利ヲ依頼シ、以テ商業ノ資本トシ、或ハ己カ名目ヲ借与シ、良地讓ル

モノ其数少ナシトセス、是皆邦俗貧困トナリ、良心ヲ失ヒシモノ其原因ヲナスニ依レハナリ、

以上猥雜ノ風俗小節記スニ堪ヘスト雖モ、終ニ又積微國財ノ欠乏、人心ノ輕佻ヲ促カシ、其融通正路ノ壅塞スル原因トナリ、或ハ激シテ同胞不和ヲ生シ、其実勢流転種々ノ岐路ニ奔リ、其窮極今ニシテ断言スヘカラサルナリ、

○文久三癸亥年二月、家茂將軍奉

勅入朝ス、二百有余年廢絶ノ大典ヲ施行ス、同三月其職元ノ如ク、政事委任ノ旨、

勅命アリ、當此時再ヒ外國拒絶ノ說盛ニシテ、同五月其手始期限ノ

勅命アリ、

四月、一橋刑部卿將軍ニ先立東下、諸有司ニ説キテ鎖港談判ノ議ヲナサシム、然レ共有司之ニ応シ確答スルモノナシ、猶強テ公使ニ談ス、彼冷笑敢テ不奉、同六月將軍東歸、同年八月將軍諸有司ヲ呼テ、鎖港ノ応接力ヲ可尽旨直令ス、同月末於京師幕府ノ示命ヲ待ス、速ニ攘夷スヘキノ

勅命ヲ下タス、此事長州下ノ關ニ蘭船ヲ砲撃シ、又薩

摩ニ於テ英艦ト戦フ、後談判困難、政府ヨリ償金幾許万ヲ与フ、同十月將軍ヲ京師ニ召ス、十一月江戸城炎上、同十二月將軍海路ヨリ再ヒ上洛ス、

○文久四甲子年正月二月改元則元治元年 入京ス、初メ參内ノ前日、

大侯伯參集シ、密ニ鎖港ノ不是ヲ議シ、御下問ニ奉答スル、其不是ヲ以テ上奏セムトシ、既ニ下議決ス、然ルニ參内衆議ニ臨テ、衆議密約ニ反シ、約ノ如ク口ヲ開キシハ唯島津久光侯、又是ニ繼テ一言ヲ発セシハ、

松平春嶽侯ノミ、他ハ時ニ臨ミ賛成セス、沈黙一言ナシ、唯空シク臨席スルノミ、故ニ攘夷鎖港ノ説不破シテ退朝ス、是ヨリ衆士滯京ノ無益ニシテ費用ノ不統、且其勞スルモ不決ニシテ功ナキヲ顧ミ、漸次其国ニ帰ル、獨リ將軍滯京、朝議如旧鎖港ノ命降ルニ及ヘリ、徳川幕府ノ重任ニ当リシ以來、如斯ノ大難題ニ遭逢セシハ、実ニ未曾有ノ件ト云ハサルヘケン哉、然リト雖モ將軍 朝家ニ対シ不滴ヲ懷カス、唯々トシテ其命ヲ謹承ス、元治元甲子五月、江戸ニ帰城ス、

元治元甲子年三月、欧米ノ軍艦長崎・横濱ニ会シ、下ノ關砲撃ノ無狀ヲ問ハムトス、此事幕府ニ告ク、微臣ニ命シテ此挙ヲ止シム、即日京師ヲ発シ、長崎

ニ到、蘭・英軍將ニ応接、辛フシテ六ヶ月ヲ猶予セシム、又横濱ニ於テ英公使ニ談ス、此後六ヶ月経過スレトモ、幕府萩藩ヲ所置スル能ハス、終ニ同年八月、英・佛・米・蘭四ヶ国ノ軍艦十八艘、下ノ關砲撃ノ挙起ル、又微臣ニ命シ其挙ヲ止メシム、豊後姫島ニ到ルニ及テ、長藩和議ナル、各艦ニ到ラスシテ大坂ニ帰ル、

○外交政略ノ議論殆ト十有余年、今ヤ東洋諸国ノ覆轍ヲ踏ムトス、当時ノ国勢、侯伯士大夫且民心紛糾其極ニ及フ、如此ト雖モ、未タ国主輩其自国ヲ守テ壘ヲ固クシ、濠ヲ深クシ、幕府ニ抗スル無ク、其中長門侯獨リ其内部ノ議論、勢ノ迫リ及フニ到テ、幕府ニ向ヒ大ニ叛旗ヲ翻ス、然レトモ是其国中分裂ノ余勢ニ出ルナリ、從今此実形ヲ考察スレハ、此藩邦内ノ犠牲トナリテ、攘夷鎖港説ノ大反対、大変化ノ基ヲナセシト云ハサルヘケンヤ、

此二三ヶ年京師集会ノ余、国家ノ大事ニ至テハ不決シテ唯空議盛、其說朝夕ニ変シ、何レニ是非ヲ不知、或ハ薩藩被遂カ長藩換リ、或ハ守護職松平容保並後見一橋公ノ列藩中間ニ処シ、区画宜キヲ得サルヲ憤リ、

且ハ不可言ノ不平心彼我ニ生シ、蛤御門ノ變・伏見ノ拳同属憤争是ヲ腕力ニ訴へ、其終局長門侯失敗シテ朝敵ノ名ヲ得、幕府征長將軍進伐ニ及ヒ、兵ヲ暴路スル一ケ年、其策略蹉跌シ、事究リ引クモ能ハス、進ム又能ハス、後解兵ニ到ルト雖モ、内外不革面猶不断如前日、人々只五里霧中ニ彷徨ス、

慶應二丙寅年五月、閣老ヨリ卒然命ヲ微臣ニ達ス、其前元治元年五月、微臣建言忌機ニ触ル、ヲ以テ、禰職家ニ謹ム、此命アル、何ノ故タルヲ解セス、出テ閣老ニ問フ、答テ曰ク、是從大坂來ル、將軍ノ直命ナリ、一日モ猶予スヘカラスト、此際顯官密ニ告テ云、邦家ノ形勢挽回途ヲ絶ス、唯一事アリ、是必死ノ議ナリ、江戸今既ニ決ス、佛朗西国ヨリ金幣幾許、軍艦數艘ヲ借リントス、既ニ公使ニ談ス、公使本国ニ告ク、其本国ヨリ一使ノ來ルヲ待ナリ、今征長兵結テ解ス、其進退ノ如キ内政用途欠乏、如何トモスベカラス、唯此議ノ成ルヲ待、誠ニ危険ノ策、唯此機會ニ乘シ其運ヲ試ミトスルニ在リ、万一此密議ナラハ、勢ニ乘シ、強藩一二ヲ討チ、勝ニ乘シ他ノ大藩ヲタシナメ、封建ノ制ヲ破ラム、是絶体絶命ノ時ナリ、邦内ノ形勢ハ君カ

了悉スル処ナラム、君上坂密ニ胸中ニ藏シ、尽力スル処アレヨト、微臣甚タ其策ニ不服、当此時議論モ無益ト思ヒ、只唯々タルノミ、其後窃ニ聞ク、此時佛郎察ノ本国、隣国ニ事アラムトス、是モ亦三世那氏絶代^保絶命ノ策ナリ、故ヲ以テ豈ニ我カ需ニ応スルノ暇アラム、彼公使、同年暮ニ及ヒ其国ノ危急ヲ密話シ、其依頼ヲ謝ス、是ヨリ我顯要別ニ策ナク、狼狽失望名状スヘカラサルノ形勢トナレリ、

○慶應二丙寅年八月、家茂將軍大坂城ニ薨ス、

嗚呼吾カ徳川、其末路ニ当テ家定・家茂ノ二將軍、邦内紛擾瓦解セムトシ、其統御道ヲ不得、治安蹉跌スト雖モ、要スルニ外交政略ノ為メニ鞠躬尽力、終ニ其艱難ノ源ヲ為テ薨逝セララル、其志操ヲ追想スレハ、上

天子ニ対シ、下衆民ニ向テ恥無カルヘク、且ハ其祖宗靈魂ニ答フル処ハ、有道ト云ハサルヘケンヤ、恨ラクハ補弼ノ一門、且臣僚其人無キヲ、

朝廷寛容、其子孫ニ賜フニ高爵ヲ以テシ、聖世ト共ニ血食ス、精靈知ルアラハ、是ヲ何トカ云ハム、

○邦内上下憂国ノ念慮變遷シテ、終ニ不平ヲ生シ、再ヒ

變シテ憤争起リ、同属相喰ム、其究極測ルヘカラス、

之カ為メニ国財空費ス、其費用ニ供スルモノハ、細民

ノ膏血之ヲ絞リ猶不足、家破レ上下困弊ス、終ニ外国

ノ財ヲ仰クニ到リ、後財政其途ヲ失シテ止ム、爰ニ幕

府末路ノ費用其大ナルモノ一二ノ惣數ヲ挙ク、是豈ニ

無用ノ弁ナラム哉、希クハ後鑑ニ備ヘムカ為ナリ、

文久三癸亥年初度上洛ノ入費

一大判百六十枚

一金六十三万五千七百五十七兩余

一銀四千二百九十貫九百九十九匁余

外

諸家拝借

一金拾壹万三千二十八兩

進献米

一拾五万俵

宗對馬被下米三万石

再度上洛入費

一大判四百拾枚

一金四拾四万四百三十九兩

一銀二千五百十八貫七百四十匁

他ノ小分略之

合大判五百七拾枚

合金百七万六千六百九十六兩余

合銀六千八百九貫七百九十匁余

慶應元乙丑年進発入用凡積一ヶ月分

一金五万三千七百九十九兩余

供方手当雜用並職人手当

一金二万八千七百七十兩余

高四百俵以下ノ者旅扶持並石代

一米二千八百四十八石六斗余

一金三万七千八百五十九兩余

供方精米秣其外品々渡

一金壹万三千八百七兩余

軍器其外道具類新規修復其余品々

一米千五百十九石余

一金四万兩

藝州地精米用意金分

小以ノ米四千三百六十八石余

一金三百十五万七千四百四十六兩余

進発々途并大坂滞留中、丑五月ヨリ寅五月中迄諸
入用

一金百二十卷万九千六百五十両余

寅六月ヨリ同十二月迄諸入用

臣文久三年上坂セシ時、勘定奉行立田主水正二逢ヒ
シ際、隱密其入費如何ヲ問フ、答テ曰、前ニ上落費
ノ時、天守台富士見宝蔵ノ古金銀ヲ以テ其用ニ充ラ
レ、征長軍費其出ル処ヲ知ラス、今既ニ七十余万兩
ヲ費ス、若シ如斯ニシテ数ケ月ヲ経ハ、家ヲ傾ケ尽
スモ猶不足ヲ生セム、慨歎ニ堪ヘサルナリト、此時
臣再ヒ云テ曰、外国交通以來既ニ十余年、士民不平
国内大ニ衰弊シ、猶不察内ハ相猜疑シ、相剝食ス、
独リ幕府其衝ニ当ルカ如シト雖モ、数年ヲ出スシテ
全国疲弊シ、終ニ憐ヲ他國ニ需メムトスル欤、人々
淺識ニシテ遠大ヲ期セス、是鎖國ノ陋習欤、將タ時
運ノ衰兆欤、長大息シ以テ止マム欤、

文久三年記之、

○同年九月、輔佐一橋刑部卿征長ノ諸軍ニ令シテ、國ニ
帰セシム、続キテ尾張徳川以下二十藩ヲ呼、後事ヲ公
議セシメムトス、大抵其命ニ応セス、

十二月、一橋刑部卿幕府ノ職ヲ襲フ、

○慶應三丁卯年十月、將軍幕府ノ邦家ヲ統禦ナスヘカラ
サルヲ以テ、薩藩・土藩・備前藩・宇和島藩ノ衆士ヲ
呼、其趣旨ヲ内議セシメ、意ヲ決シテ上表シ、終ニ其
職ヲ止ム、後大坂ニ退去ス、

○同丁卯辰年、藩主徳川慶喜兵ヲ引卒シ上京ス、是徳川
ノ臣僚藩主ノ趣旨ニ不服、其他譜代ノ侯伯大ニ憤怒シ、
決死恢復ヲ図ラムトシ、敢テ藩主ノ命ヲ用サルヤ、終
ニ伏見・鳥羽ニ戦ヒ、一敗シテ大坂城ニ帰ル、
帰城ノ後号令誰人ノ手ニ出ルヲ知ラス、空議決セス、
藩主意ヲ決シ、海路ヲ以テ東歸ス、

正月十日、着艦藩主入城、

此時江戸藩士並住民ノ混雜、唯蜂巣ヲ破壊セシ如ク、
一朝一夕ニ述フヘカラス、唯爰ニ一事ヲ述、十二日
ヨリ參集、衆士議論教岐ニ流レ、其勢名状スヘカラ
ス、二月初旬ニ及ヘトモ、猶一定セス、事ニ当ルモ
ノ斯ク寝ニ就カサル事、凡三十晝夜、

○二月藩主意ヲ決シ、東叡山塔中大樹院ニ謹慎ス、
衆議紛々ト雖モ、其極唯二途、曰恭順、曰一戦、
○海軍英国教師並陸軍佛國教師ヲ解雇ス、其旅費給料ノ

如キ、其国公使ニ談シ承諾ヲ得タリ、海軍教師ハ別ニ説ナク、館ヲ出テ横濱ニ去ル、陸軍教師ハ大ニ説アリ、云、我輩政府ノ為メニ力ヲ尽シ、国語ノ不通ヲ厭ハス、耐忍勉勵、今日ニ到テハ熟練ノ兵卒數大隊、精練ノ士官數名ヲ成立テシナリ、此利器ヲ擲棄、敵ノ来襲ヲ見テ循々帰降スルハ何ノ趣意ソ、我等ノ尤モ疑念不解処ナリ、且君等カ説ク恭順云々ノ如キ、其結果ハタシテ如何、是一戰勝敗ノ機ニ及テ、可成ノ策君等ニ念ヲ懷カス、先一戰ヲ試ミヨ、如此ナラハ我等ノ輩、君カ士官トナリ幾隊ヲ率ヒ力戰、彈丸中ニ立タムトス云々、談判甚タ困苦、終ニ又横濱ニ去ラシム、然レトモ猶不平教師・士官・下士卒共ニハ、各密ニ我カ開陽艦ニ乘組、我カ士官ヲ説キ、共ニ箱館ニ去ル、此事當時官軍ノ知サル処ナリ、

○同年三月、官軍入江戸、品川ニ屯營ス、窃ニ聞ク、十六日ヲ以テ江戸城ヲ進撃スト、十五日品川^(マヤ)ニ到リ、参謀西郷ニ逢フ、此時口上書ヲ懷ニシテ、同氏ニ附ス、昨年以來、上下公平一致ノ旨アレトモ、各其中ニ小私アリ、終ニ当日ノ變ニ及フモノハ、皇国人物乏敷ニ因ル、就中伏見ノ一挙、一二ノ藩士

ヲ目シテ失錯アルハ、我カ尤恥ル処、堂々タル天下終ニ同胞相喰、何ソ其陋錯ナル哉、我輩忠諫一死ヲ以テ報スヘキモ、既ニ其失前日ニアリ、今日何ノ面目アリテ口ヲ開カム、然リト雖モ不日ニシテ一戰、數万ノ生靈ヲ損セムトス、其戰名節条理ノ正敷ニアラス、各私憤ヲ抱懷シテ、丈夫ノ為スヘキ処ニアラス、吾人はヲ知レトモ、官軍猛勢白刃飛彈ヲ以テ、漫ニ征弱ノ士民ヲ劫サハ、我モ又一兵ヲ以テ是ニ応セスンハ、無辜ノ死益々多ク、生靈ノ塗炭益々長カラム歎、軍門実ニ

皇国ニ忠スル志アラハ、宜シク其条理ト情実ヲ詳ニシ、後一戰ヲ試ミ、我輩モ又能ク其正不正ヲ顧ミ、敢テ漫ニ輕拳スヘカラス、嗚呼我カ王家滅亡ニ当テ、一ノ名節大条理ヲ持シ、從容死ニ就クモノ無キハ、千載ノ遺憾ニシテ、海外ノ一笑ヲ引クノミ、我輩之ヲ知レトモ、力支ユル能ワス、俱ニ魚肉セラル、者ハ、深怨銘肝、日夜焦思始ト憤死セムトス、憐レ其心裡ヲ詳察アラハ、軍門ニ臨テ一言ヲ談セム、幸ニ熟考セラレハ、公私ノ大幸死後猶生ケルカ如クナラシ、

辰三月

參謀軍門

嗚呼彼敵之一言ヲ信シテ疑ハス、從容トシテ進撃ヲ止メ、大総督ニ言上セムトス、其大度可驚ト雖モ、其胸中愛國ノ念慮深ク、此大事ニ臨ミテ、彼我ノ見ナク、唯

朝家ノ為メニ尽スノミ、宜哉、当今ニ卓絶シテ他ノ及ハサル処ナリ、顧ミテ思フ、徳川氏モマタ此城地ヲ致シ、百万ノ衆ヲシテ不傷、

朝家ニ還附シ、以テコレニ答ヘスンハ有ヘカラサルナリ、

○明治維新ノ政、其処置寛猛宜敷ヲ得、未曾有ノ大業成ル、諸官銳意更治ニ務メ不怠、浮華輕佻ニ流レス、其十年以後ニ到テハ、上ハ輕佻ヲ悦ビ、下ハ激昂、終ニ一種ノ性質ヲナシ、質樸儉素ノ風弘地、是ヨリ冗費增多重税興リ、細民棲息ニ苦ム、然レトモ不急ノ土木浮華ヲ事トシ、国力如何ヲ不深考、漸次人民離心ノ基ヲ作り、政府ヲ信セス、傍議歎息其悲声廟廊ニ不達、是其細則ニ汲々トシテ、根底不立ノ致処歟、

○凡邦家ノ事一事拳レハ、一弊是ニ随フ、遁レサルノ勢

ナリ、今ヨリ後邦家益々多事、就中外交政略ノ如キ、容易ナラサルヘキナリ、唯歩ヲ進ムルモノハ財用ノ欠ノミ、財用欠乏スレハ、實際ノ挙行手ヲ下タス不能、益尾大不掉、高議崇論起ルト雖モ、又如何セム哉、臣頑愚、今世ニ暗ク、然レトモ窃ニ感慨ニ堪サルモノアリ、過去三十余年間、外交興リテ以來、其失敗ト實際ノ困難ヲ略記シ、後鑑ニ備ヘムトス、是レ獻芹ノ微衷ナリ、

明治二十二年八月

臣勝 安房